未生
花の哲理

和田高甫

序

江戸時代に記された未生流の伝書には、『本朝挿花百練』を第一として、華術『三才之巻』『草木養之巻』『体用相応之巻』『規矩之巻』『原一旋転之巻』『明空紫雲之巻』『未生自然句之巻』の七軸が存在します。この古い伝書を深く理解できるようなものとして一冊の本にしたいと思い、この『未生』という本を出版するに至った次第です。

東洋哲学で捉えた物の見方は、改めて現代の私たちに新鮮な感覚をもたらしてくれます。東洋の美は自然と共存し、同化するところより生まれたものです。また、花を愛でるこころは日本人の原点であると言っても過言ではないでしょう。

花を美しいと感じる直感性、そしてこの本で述べていく花の概念。挿花において、両者は対立するものでなく一如のようなものです。自然の草木と深く接し、その働きに通じることで、ほんとうに大切なものに近づいていく。

未生の理は、自然という現象、その成り立ちを、花を通して純粋に感じとったものです。そこに潜在するものは一体どのようなものであるのか、自分自身いつか真に観じることができればと。そして、この未生というものが、その在るべきところへ還っていけばと願っています。

社団法人 華道未生流
未生流 総家
家元 和田髙甫

1 未生大意
2 天円地方和合
3 陰陽和合
4 虚実
5 五行五色
6 草木人畜出生
7 挿花全体の指南
8 禁忌三十六カ条
9 二季の通い
10 三才の事
11 体用相応の事
12 原一旋転の事
13 草木養いの事
a 四季陸物草木養い
b 庭中並びに鉢植え草木養い
c 梅花年中囲方
d 竹真行草養い
e 竹青葉附き自在にて船釜釣り養い
f 竹青葉附き花器に伐る養い
g 竹即挿け養い
h 河骨真行草養い
i 蓮真行草養い
j 蓮即挿け養い
k 雨中の景色柳養い
14 一花一葉　一花三葉の事
15 徳相　貧相　閑静

1 未生花形
2 天地人三才
3 三体九姿
4 立姿横姿　主位客位
5 七曲
6 七曲によらない変化挿け
7 円相体
8 方形体
9 分性体
10 株分け
11 三方正面
12 抜け生け　打ち抜き

1 山吹　玉川の景色　挿け方
2 杜若　八ツ橋の景色　挿け方
3 遠山霞花の景色　挿け方
4 銀柳　米柳　数挿け　挿け方
5 糸柳　三景　挿け方
6 猫柳　玉取り　水潜り　挿け方
7 臥竜梅　挿け方
8 南性　北性の梅　挿け方
9 紅葉　真俊の景色　挿け方
10 紅葉　龍田川へ散る景色　挿け方
11 桜　散り景色　挿け方
12 桜　散り残りたる景色　挿け方
13 根遣い三種　挿け方
14 白蓮一輪　挿け方
15 芦一式　挿け方
16 段取物　挿け方
17 薗物　挿け方
18 木賊　刈込み　挿け方
19 伐竹に筍応合　挿け方
20 芒　三種　挿け方
21 萩　猪の座　挿け方
22 牡丹　挿け方
23 紫陽花　挿け方
24 枇杷　挿け方
25 河骨　挿け方
26 藤　河骨　杜若　三種　挿け方
27 蓮　河骨　杜若　芦　水葵　五種　挿け方
28 杜若　四季咲き　挿け方
29 椿　四季咲き　挿け方
30 軸付葉物　挿け方　十二カ条
31 葉物　組み方　九カ条
32 長葉物　挿け方　九カ条
33 実物　挿け方
34 木物　揉め方
35 花首　揉め方

1 五節句
a 元旦の花
b 上巳の花
c 端午の花
d 七夕の花
e 重陽の花
2 四季祝日の花
a 正月二日の花
b 正月三日の花
c 人日の花
d 上元の花
e 節分の花
f 中元の花
g 八朔の花
h 乙朔旦の花
i 事始の花
j 下元の花
k 冬至の花
3 祝事の花
a 誕生の花
b 七五三の花
c 元服　髪上の花
d 婚礼の花
e 家名続目　入院の花
f 厄年の花
4 諸事　諸席の花
a 綰柳の花
b 新宅移徙の花
c 追善の花
d 陣中　和睦の花
e 奉納　献花　供花の花
f 茶席　香席の花
g 会日役席　免許披露会席の花
5 諸々心得の事
a 花手前の心得
b 花所望の心得
c 花見様の心得
d 寄合　廻り花の心得
e 庭前の草木挿花に用捨すべき心得
f 夜陰挿花の心得

1 花と道具
2 床
3 花台　敷板
4 花器
5 花留
6 七種竹花器
7 三菅筒
8 五管筒
9 二重　三重　五重切　花器
10 船
11 月
12 卓
13 釣瓶
14 飾り石
15 その他道具
16 花衣桁
17 飾付
a 床　真行草飾付
b 押板　真行草諸飾
c 書院　真行草飾付
d 違棚　真行草飾付
e 茶の湯棚　飾付
f 納戸　飾付
g 常之御座処の棚　飾付
h 広縁　飾付
i 泉殿の棚　飾付

Lecture Ⅰ　未生の理

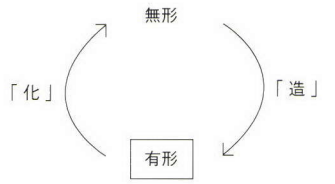
1 未生大意

自然の草木は、性があっても情や心はなく非情無心のものとされている。しかし、風や雨、雪や霜などの自然の影響を人よりも素直に受ける。山谷水陸と至るところに生じ、太陽と月の両光の恵みをふんだんに受けて、草木は四季それぞれの相を放つ。我々は、草花が早く咲かないかと待ちこがれ、花が散っていくのを惜しむ。そして、風雅ある花の姿に心をとらえられる。

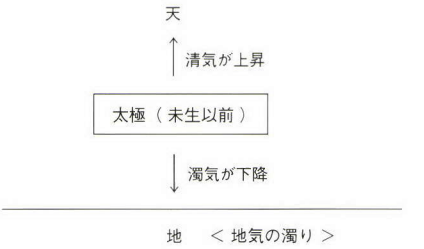
草木は、造化自然の働きを敏感に受け入れる。無形より有形に変化することを「造」といい、有形より無形に変化することを「化」というが、この「造化」という自然の大きな働きは常に変化して止むことはない。そして、その自然の働きに、我々は美という感動を覚えるのであろう。

では、この自然の姿を未生挿花として、花形という一瓶の姿に置き換える意義はどこにあるのだろうか。自然にある姿こそが正しい姿で、そこにこそ本来の美があるのではないのか。

我々は自然に在る草木のみを、「実」なるものと捉えがちである。しかし、人が草木と接し、その視覚のもとに捕らえた瞬間に、草木は「素よりの本性」から離れて、現象としての「出生」に変化する。草木の本来の「実」は、その本質であるところの「素よりの本性」に在るのであって、「出生」はその現象としての「実」の相を見せているものである。



造化



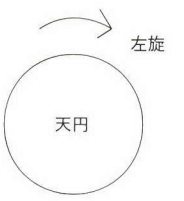
暖長じて、未だ寒含まない	春（陽中陽 ― 陽が表面に出で、陰が内在する）
暖極まりて、寒の兆しを含む	夏（陽中陰 ― 陽の中に、陰の兆しを含む）
寒長じて、未だ暖含まない	秋（陰中陰 ― 陰が表面に出で、陽が内在する）
寒極まりて、暖の兆しを含む	冬（陰中陽 ― 陰の中に、陽の兆しを含む）

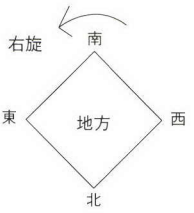
草木の出生という視覚にあるものだけが真ではない。その内奥に在る「素よりの本性」を知ろうとすること、それを感じることこそが大切なのである。そして、後に詳細を述べるが、草木に天地人という「三才の位」を備え、「陰陽の通い」をもって、「虚実の理」に基づき「和合」を整える。これが未生自然の花である。

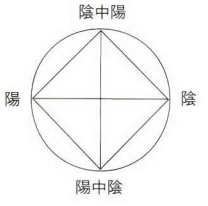
また、草木には「地気の濁り」が内在しているという。天と地という概念が生じたとき、清い気は上昇して「天」となったが、濁った気は「地」に下降したという。よって、この地上には「地気の濁り」があるといわれている。草木は塵芥清濁の区別なく地上に生じ、本来あるべきではないもの、美とはいえないもの、つまり禁忌に触れる姿をもつものがある。ゆえに、この禁忌を取り去って、その本体を清いものとして昇華させるのである。

人をはじめ鳥獣虫魚に至るまで、「情」をもつ有情の動物は胎内でひとたび形を成したならば、生気が充ちて魂が内に宿る。よって、これを断ってしまえば「気」は絶え、魂は去って再び生気を戻すことはない。しかし、草木は一面的には非情無心のものとされ、その「気」は動物と違って内に留まることなく、外皮と中の木部との間を通い、挿花としてこれを伐ったとしても、生気が尽きることはない。つまり、草木の魂は、その内なるところを自在に動き回っているものと解釈できよう。この草木の生気を養うには、「水」と「火」でもって行なう。

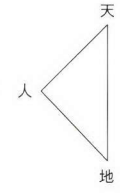
天地にある二つの対極する大きな働きである「陰と陽」「動と静」また「盛と衰」というようなものは、「水火寒暖」の往来によって生じる。性気の盛んなときは暖となって動く。これを「陽／陽中陽」という。また性気の静かなるときは寒となって動かない。これが「陰／陰中陰」である。また、暖が極まると寒の兆しを含んで動かず、すなわち陰を含んだ陽の状態「陽中陰」となる。







天円地方合形



三角形鱗形ー未生花矩

そして一方で、寒が極まると暖の兆しを含んで動く、すなわち陽を含んだ陰の状態である「陰中陽」となる。

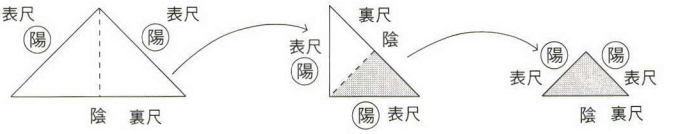
万物はすべて「陰陽寒暖」という、二元対立する理に応じて常に変化する。この働きを感じとり、草木のそれぞれがもつ本性に従って「水」と「火」の両極でもってこれを養う。草木の生まれてきた造化自然の生態を深く見極め、「陰陽消長の理」に従って、未生自然の花矩（はなかね）として移すのである。

天と地という概念が未だ分かれず（天地未分以前）、人間や草木をはじめとする万物が未だ形となって現れる前（父母未生以前）は、根源的・一元的なものであった。その一元的なものから「陰陽」という二元対立の概念が生じるに至って、「造化」というさまざまな変化が繰り返され、地上にあるもの万物すべてのものが生じていった。未生自然の花は、未だ生じざる真理「未生」という「体」、そして「自然」がもつ働きである「用」、この体と用が相応した姿を追求するものである。

2 天円地方和合

未生挿花における、真の形というものはどのようなものであるか。その花矩（はなかね）、つまり花姿を構成する基となる形は、「天円地方の和合」という一つの観念に集約される。

「天」は一元的なものとして、始まりもなく終わりもなく万古運行して、一時も休息することはない。回転運動を為す天の特性は「動」であり、その姿を形で現すと「円」となる。また一方で、



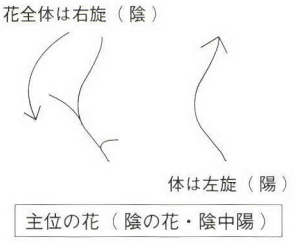
天　円	陽　表　動　体　実　質　本　質
天円地方和合	陰陽和合　表裏一体　動静不二　体用相応　虚実文質彬々　本質現象不可分
地　方	陰　裏　静　用　虚　文　現　象

「地」つまり地球は天中にあって、ひとつの位置を定め、地上の万物万象はこの地によって生じ、そして育まれる。その特性は「静」であり、その姿を形で現すと「方」となる。地に在る物は上昇・下降という二つの直線運動を成して平衡を保つ。その特性は「直」である。そして、「地」は東西南北・上下左右という四方をもつ。そのため「地」を形に求めると「方」になる。

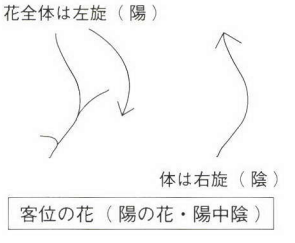
「地」に生じる有形有限の現象と、「天円」という無形無限の本質。この本質である「円」と現象である「方」という、相対的な関係を持つ「天円地方の和合」の姿が未生花矩の基盤となっている。

円の中心から上下左右へと十字の経緯線を引き、縦に引く経線の上下が円線と交わった点を南北とし、横に引く緯線の左右が円線と交わった点を東西とする。そして、東西南北の四隅をもつ方形を南北の線で、東西の二点を合して二つ折りにし二等辺三角形を作りだす。この三角形は、「天」と「地」の間にある形あるものすべての源であるといえる。すなわち、三角形が転化し変移していくことによって、人をはじめとするさまざまな形・物質が生み出されるのである。未生流の花矩は、この天・地・人で構成される三角形の鱗形（うろこがた）でもって形づくられている。花の姿としては、上部の高い枝を天の位として「体」、下部の低い枝を地の位として「留」、この体と留との中間の枝を人の位として「用」と定める。

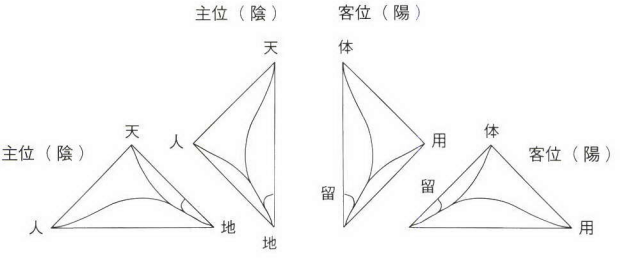
なお、この二等辺三角形の花矩は、表裏が備わったものである（表裏花矩）。未生花矩の基本である三角形の鱗形は、その中心で二つに分け二分すると、小さな三角形が二つできる。もともとの大三角形の表尺（おもてじゃく）（陽）が、二分した小三角形の裏尺（うらじゃく）（陰）となり、一方、大三角形の裏尺（陰）は小三角形の表尺（陽）となる。さらに二分すると同様の変化が生じる。このように尽き



主位の花（陰の花・陰中陽）



客位の花（陽の花・陽中陰）



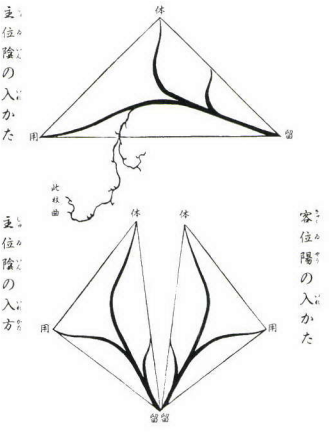
ることなく二分し続けていくと、表裏陰陽は際限なく変化していく。陰と陽が止むことなく旋転し、陰陽消長し続ける。ここに、未生無限の理念が現わされている。

さらに、この三角形は主位（陰）・客位（陽）という陰・陽の両極を備え、表矩・裏矩と同様、大中小に絶えることなく変化し続ける。主位の花は、陽より陰を指して出る「陰中陽」の花である。花全体の姿は体より留へと右旋する「陰」であるが、その中心となる体は「陽」である。したがって、体の枝は「陽」に基づいて、足許より左旋に揉める。一方、客位の花は、陰より陽を指して出る「陽中陰」の花である。花全体の姿は体より留へと左旋する「陽」であるが、その中心となる体は「陰」である。よって、体の枝は陰に基づいて、足許より右旋に揉める。左旋・右旋は天地にあるものすべてが持つ性質であり、陰陽寒暖が旋回することで生じる現象である。

天は陽であって、そのために左旋する。一方、地は陰であって右旋する。この働きは心眼でしかわからないものであるが、この「左旋」と「右旋」の働きを感じとることも大切である。

古の中国で、黄河から大きな竜馬が現れ、その竜馬の背にあった図を「河図」といい、洛水から大きな神亀が現れ、その亀の甲羅にあった図を「洛書」という。円を現す「河図」は相生をもって序となす故に左旋であり、一方、方を現す「洛書」は相剋をもって序となす故に右旋であると捉えられている。また『古事記』『日本書紀』でも、「陽の神は左旋し、陰の神は右旋する」とされている。なお、ここでいう左旋は現在の右回り（時計回り）、右旋は現在の左回り（反時計回り）である。

地中に陽の気があるときに生じる草木は左旋し、地中に陰の気があるときに生じる草木は右旋



『本朝挿花百練』　主位　客位

する。すなわち「天円・陽」の影響を地の中で受けたときは左旋し、「地方・陰」の影響を地の中で受けたときは右旋するのである。地中に陽気を含むときは「冬至」の季節であり、この陽気が地上に発生するときは「春分」である。よって、冬至より春分にかけて生じる草木は左旋するものとされている。また一方、地中に陰気を含むときは「夏至」であり、この陰気が地上に発生するときは「秋分」である。よって、夏至より秋分にかけて生じる草木は右旋するものとされている。さらに、春分より秋分に種を蒔いて生じるものは右旋する。これは地中に陰気があるためである。そして、秋分より春分に種を蒔いて生じるものは左旋する。これは地中に陽気があるためである。このように草木は、天と地という陰陽の両気を、素直にかつ敏感に受けて生じていく。

3　陰陽和合

「天円」と「地方」が合形し結びつくことで生じる陰陽の働きを知り、その両極なるものの和合するところ、すなわち「陰陽和合」に未生本質に在る一つの理を感じとる。花葉に「大」「小」、枝に「長」「短」、「内」「外」、「表」「裏」と両極なるところを用いて、さらに丸葉・黄葉・枯葉・紅葉のものを挿ける。つまり、ひとつの花矩に陰陽という両極の概念を同時に備え、その和合するところの姿を追求する。

花の莟は「陰」、開は「陽」、そして半開は「和合」の姿である。よって「陰」である莟を一輪挿けるときには、ここに陰陽和合を備えるために、陰の中に陽の兆しを含んでいる「陰中陽」の状態とする。また「陽」である開のものを一輪挿けるときには、同様の考えより、陽の中に陰の

つぼみ	陰　（陰中陰・陰中陽）
開花	陽　（陽中陽・陽中陰）
半開	陰陽和合

花の姿と陰陽

兆しを含む「陽中陰」とする。

なお、右にさし出た枝は「陰」、左にさし出た枝は「陽」、下に出た枝は「陰」、上に出た枝は「陽」である。葉が程よく左右・上下に分かれ、調和している様にこそ「和合」の姿があるといえる。いずれにしても、草木の出生に従って陰陽和合を備えることが肝要である。

「暖」が充ちるときには「寒」がこれを涼しめ、一方「寒」が充ちるときには「暖」がこれを暖める。この「寒」「暖」というものは、総じて「陰」「陽」とされている。また、天は地を養い、地は万物を養う。草木は四季寒暖の移り変わりに従って、天と地の恵みが和合することで生じていく。

陰性と陽性、遠心性と求心性、積極性と消極性、拡大と凝縮、緊張と弛緩、膨張と収縮、吸収と還元、否定と従順、連続と断絶、秩序とカオス、明晰と不分明。我々が認識する、あらゆる対立概念も、すべては一つの理から生じる一如（いちにょ）のようなものである。すべては本質に在る、一つの理に帰っていく。陰陽和合という概念は陰と陽が単に和合するものではなく、一つの源に通じる不二一体のものと考えるべきである。

4 虚実

未生の花には、「虚実」「虚実等分」という理が埋め込まれている。「虚実」の「虚」とは生命の空虚であって、人工的に創られた花矩を現す。また「実」は生命の充実であり、草木自然の出生を意味する。この虚実が等分にあることを示す「虚実等分」とはどのような状態を現すのだろ

うか。

それは、草木の出生である「実」に従う一方で、不要の花・葉を取り、枝を揉め姿を整え、花矩という「虚」を備えて花瓶に移す。こうして、花の姿に「虚」と「実」の両極を備える。これが未生挿花の「虚実等分」である。虚実文質彬々（ぶんしつひんぴん）たるところに万物の源があり、虚実と文質（外見の美と実質）が調和しているところに美の本質を求めるのである。

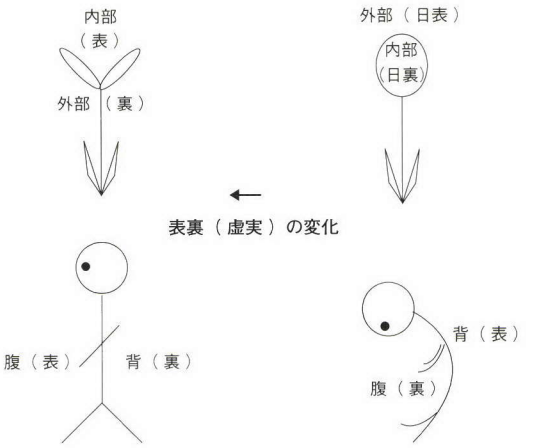
なお、草木の本質的な「実」は「素よりの本性」に在り、草木の「出生」はその現象として現れた「実」の相である。よって草木の「出生」のみが正しいと考えるのは誤りである。「素よりの本性」という本質的な「実」に想いを通わしてこそ、ようやく「実」として、草木の「出生」を知ることができよう。

花矩は「虚」であるが、天地人の三才を備えた花矩は万物の根源に通じるものであり、すなわち「実」であるということもできる。伐った草木は、地より引き出した時点で「虚」となり、その草木を「実」である花矩に挿けたときには、天地人三才の霊妙を備えて「実」に帰るのである。虚のものが実になる。これを「虚実（きょじつ）」という。そしてまた、草木が挿花として生気充実した「実」となったところで、この草木は花矩として、構図という「虚」に再び変化する。実のものが虚となる。これを「実虚（じっきょ）」という。

この「虚実」「実虚」の変化は、天地自然の万物流転の流れでもある。自然の下でも一枝、一葉、一花に「虚実」があるといえる。自然そのままの姿「実」にある草木も、環境の変化に伴って「虚」に変化する。同じ姿で数百瓶の花を挿けたとしても同じ形とならないのは、この「虚実」の二つをもって未生花矩としているからである。

	草木（素よりの本性）	一 実	（本質）
	草木（出生）	一 実	（現象）
実虚 ↓	挿花として手を加える	一 虚	
虚実 ↓	天地人三才の花矩に収める	一 実	
実虚 ↓	再び構図として変化する	一 虚	

虚実等分



挿花の姿一体に「虚実」を備える。すなわち、自然にある「実」の草木を伐って、縦横の三角形の鱗形の法格を備え、花葉の不用なところをさばき、真っ直ぐなるを揉め曲げ、根元を一本に収めて挿けたものは「虚」である。そして、そこに天地人三才の霊妙を注入し、考慮の才があるとされる人が花の美を感じ、それらさまざまな想いが密接に通いあったときに、また「実」に帰るのである。

無形より有形に変化することを「造」といい、有形より無形に変化することを「化」という。この「造化」の働きによって物事が変化しても、その本質は不変である。「虚実」も、この「造化」と同じである。すなわち、虚々実々変化していったとしても、未生自然の真理・本質から離れることはない。春に花や草木が生じる様は「造」、また冬に至って落花落葉する様は「化」である。万物は「造」があって「化」があるもので、また逆も然りである。

人体は頭を上にもって成長し、鳥類獣類は頭を横にして成長する。そして草木は頭を下にして上に成長していく。まず人において述べると、腹が表で背中が裏と一般的に考えがちであるが、本来はその逆である。「用」を成すところ、つまり機能を司るところは裏であって虚となる。人間は生まれる前は、胎内で腹（裏）を内として、背中（表）を外としている。しかし生まれてからは腹（表）を正面に、背中（裏）を後ろとする。すなわち人間は裏を表とし、表を裏として生きている。これは「虚実」の働きが作用するところのものである。

鳥類獣類は生まれたままの姿、つまり腹（裏）を内にしたまま生きていく。鳥類獣類は表裏の変化がなく、表は表であって、裏は裏としている。「虚実」の変化が少なく、「実」である本能に従っている。この様は「実虚」、つまり「実」である本能が前面にくる状態であるといえる。

五行	木	火	土	金	水
五方	東	南	中央	西	北
五季	春	夏	土用	秋	冬
五色	青	赤	黄	白	黒
五常	仁	礼	信	義	智
五神	青龍	朱雀	黄龍	白虎	玄武
五味	酸	苦	甘	辛	鹹
五臓	肝臓	心臓	脾臓	肺臓	腎臓
五気	魂	神	意	魄	志
五数	三・八	二・七	五・十	四・九	一・六
五音	角	徴	宮	商	羽

五行説

	陽	陰
木	甲（活の木）	乙（死の木）
火	丙（活の火）	丁（死の火）
土	戊（活の土）	己（死の土）
金	庚（活の金）	辛（死の金）
水	壬（活の水）	癸（死の水）

十干

花は日裏（裏）を内にして、日表（表）を外にして成長する。「花中（かちゅう）は陰なり」という言葉がある。開いた花の表としているところは、莟のときは日の当たらない内側、つまり日裏である。一方、開いた花の裏としているところは、莟のときは日に当たる外側、つまり日表である。花が開けば日裏（表）が表となり、日表（裏）が裏となるのである。巻いて生じる葉も日裏（裏）を内、日表（表）を外としている。これが開けば、日裏（表）が葉表となり、日表（裏）が葉裏となる。このように草木も人間と同じく、自然と「虚実の通い」を備えている。草木の葉裏に陽気を備えているのが自然にして和合である。葉裏はもともと日表であり、その葉裏の中に陽気を感じてこそ「陰陽和合」がある。

5 五行五色

宇宙の活力となるものを「気」というが、この気は「陰」と「陽」の両気によって形成されているという。これが陰陽説である。一方、この地上にあるものはすべて、五行という「木火土金水」の五元素の働きの影響を受けているとする五行説がある。

この五行を色でとらえた五色を備えて、草木を一瓶に挿けるものと伝書に記されている。五色とは、三原色の赤・青・黄と、黒・白を合わせた五つの色をいい、四方と中央でもって五行の色である五色が生じる。そして、この五色が互いに作用することで、万物にあるさまざまな色が生じたものとされている。逆説的に考えれば、自然の草木には自ずと五色が備わっていると考えることができる。すなわち、草木を挿けた姿の内に、その色彩的な本質である五色を感じとること

1 甲子	2 乙丑	3 丙寅	4 丁卯	5 戊辰	6 己巳
7 庚午	8 辛未	9 壬申	10 癸酉	11 甲戌	12 乙亥
13 丙子	14 丁丑	15 戊寅	16 己卯	17 庚辰	18 辛巳
19 壬午	20 癸未	21 甲申	22 乙酉	23 丙戌	24 丁亥
25 戊子	26 己丑	27 庚寅	28 辛卯	29 壬辰	30 癸巳
31 甲午	32 乙未	33 丙申	34 丁酉	35 戊戌	36 己亥
37 庚子	38 辛丑	39 壬寅	40 癸卯	41 甲辰	42 乙巳
43 丙午	44 丁未	45 戊申	46 己酉	47 庚戌	48 辛亥
49 壬子	50 癸丑	51 甲寅	52 乙卯	53 丙辰	54 丁巳
55 戊午	56 己未	57 庚申	58 辛酉	59 壬戌	60 癸亥

六十干支

が大切である。

五色とは「木・火・土・金・水」の五行の色をいう。東は「木」にして青色を、南は「火」にして赤色を、西は「金」にして白色を、北は「水」にして黒色を、中央は「土」にして黄色を現す。四方から中央に至って、この五色が生じるのである。

また未生挿花では、水をもって黒色を現すことがある。重陽の節句で五色を挿けるときには、体に白菊を、用に黄菊を、そして留に赤菊を三才格に挿け、菊の葉の青と、黒を現す水とでもって五色とする。

さらに、この五色の上の最上の色として紫がある。紫は瑠璃紺青にあらず、つまり瑠璃色でもなく、紺でもなく、青でもない。また、黒でもなく、赤でもなく、朱でもない。この紫は、赤と青とでもって作り出される現在でいうところの紫ではなく、赤と黒とでもって生じる色である。「太陽」「太陰」の和合するとき、すなわち太陽と月の両気が相応するとき、紫の雲がたなびくという。「太陽」である火の赤と、「太陰」である水の黒が和合して、その結果として紫が生じるのである。

時節としては、月の十三、十四日あたりの夕方に月が東より出て夕日が西に残るとき、また月の三、四日あたりの朝に朝日が東より出て月が西に残るとき、「太陽」「太陰」の両気が和合し紫の雲が現れる。古来より日本では、この最上の色である紫は、禁色（きんしょく）として安易に用いることを禁じてきた。このことは、挿花においても同様である。紫の色を放つ杜若（かきつばた）のような花を、安易に一輪だけ挿けてはならない。杜若一輪の挿け方は、最上の挿け方であって、その通じる真意を内に通わせたときにのみ挿けることができよう。

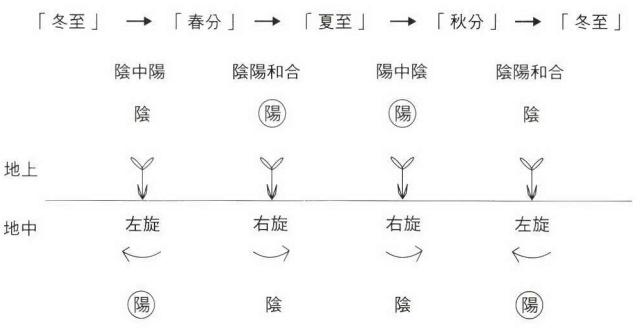
太陰	冬至より春分	萌すといえども、未だ生ぜざる季節
少陽	春分より夏至	生じる季節　（外より暖の気が序々に生じる）
太陽	夏至より秋分	盛んなる季節
少陰	秋分より冬至	生ぜざる季節（外より寒の気が序々に生じる）

6 草木人畜出生

諸木諸草にさまざまな姿があるのは、土と水と火の三気の影響によるものである。つまり「地水火」、大地の恵みである土と水、そして太陽の光を受けて草木は成長する。「地」と「水」と「火」の三つを「三光の枝葉」という。この「三光の枝葉」によって、万物は育まれている。

また、草木は「陰陽寒暖の気」の影響を敏感に受け、縦に伸びる「陽」、横に伸びる「陰」というように陰陽和合した姿をもつ。また種より生じるもの、宿根より生じるものがあり、性質の強いものと弱いものがあり、さらに暖（陽）を好んで左旋（陽）し、寒（陰）を好んで右旋（陰）する。このような草木の現象は、陰陽寒暖の運行するところと一致し、四季の季節と「造化（ぞうか）」の性を現すものである。以下に述べるところの、草木それぞれが持つ現象としての「出生（しゅっしょう）」を理解して、その内奥に在る未生自然を感じることが大切である。

実が熟して後に種となって内に二葉を含むこと、種より生じること、また宿根より生じること、草木の育つこと、直（すぐ）になること、曲がること、ねじれること、しだれること、草木に節のできること、草木が内の透いた状態になること、枝の出ること、芽ふくこと、花咲くこと、実のなること、実が良し悪しの味を持つこと、草木が善悪の匂いを備えること、竹の類で節を備えること、すべて根に節をもつこと、竹をはじめ草木が皮を備えること、草木に蔓のできること、花葉実に色が備わること、浮草・水草が出生すること、草木の枝葉を土にさして根のつくこと、葉の中に花の咲くこと、土はだに花の咲くこと、花咲かずに実のなること、花咲いて実のならないこと、実から生じて花咲くこと、花に好悪の匂いが備わること、花葉枝がさまざまな形を備えること。



陰陽と季節のめぐり

さらに、草木が「左旋」「右旋」することは、陰陽寒暖の往来によって起きるものである。つまり陽の影響を強く受ければ左旋し、陰の影響を強く受ければ右旋する。なお、ここでいう左旋は現在の右回り（時計回り）、右旋は現在の左回り（反時計回り）である。

春の彼岸前後より夏至までは、一切のものが生じるところの「少陽（しょうよう）」の時候にあたる。少陽は「陰陽和合」の時節であるが、「陽」の気が多く地上に在り、一方「陰」の気が多く地中に在る状態である。よって、このときに地中より生じる草木は、地中の「陰」の気を多く受けて、蔓（つる）物（もの）をはじめとして「右旋」して生じることが多い。しかし、種を下すことなく生じる草木は、「陰陽和合」の時節に従い、「右旋」「左旋」と偏ることなく生じる。

夏至より秋の彼岸前後までは、漸次盛んとなるところの「太陽（たいよう）」の季節である。「太陽」は「陽中陰」の時節であり、陰の気は地中に含まれた状態にある。よって地中より生じる草木は、この「陽中陰」のときに従って、地中に在る陰気のために「右旋」して生じる。しかし、このとき水草だけは「左旋」して生じる。それは、水草が冷気を司る水によって生じるためである。水は「陰中陽」であり、よって内に陽気を保つために「左旋」する。

秋の彼岸前後より冬至までは、生ぜざるところの「少陰（しょういん）」の時候にあたる。「少陰」は「陰陽和合」の時節であるが、「陰」の気が多く地上に在り、一方「陽」の気が多く地中に在る状態である。よって、このときに地中より生じる草木は、地中の「陽」の気を多く受けて、水仙をはじめとして草木は「左旋」して生じることが多い。

冬至より春の彼岸前後までは、萌すといえども未だ生ぜざるところの「太陰（たいいん）」の季節である。「太陰」は「陰中陽」の時節であり、陽の気は地中に含まれた状態にある。よって、地中より生

じる草木は、この「陰中陽」のときに従って、地中に在る陽気のために、麦・そら豆をはじめとして「左旋」して生じる。

春・秋は陰陽寒暖の気が片寄ることなく「和合」の季節であるので、人畜をはじめ草木に至るまで荘然としている。そして冬に至っては、性気あるものは内に暖気をもち、このため草木は「左旋」する。また人も暖を好み、生き物は暖気あるところに進んでいく。これは「陰中陽」によるところのものである。こと夏に至っては、性気あるものは内に冷気をもち、このため草木は「右旋」する。生き物は冷を好んで、日影や水辺など冷気あるところに進んでいく。これは「陽中陰」によるものである。暖が極まると冷に進み、一方、冷が極まると暖に進む。これは木物陸草水草に至るまで、その出生の性理である。

以上のように、草木はそれぞれにさまざまな出生を持ちながら生じていく。この草木の「出生」を知ることがなければ、花を挿けることはできない。ただ、花が咲き実をつけても、草木は声を出すこともできず、「死物」のように動くこともかなわない。それ故に、草木を伐って挿花として愛でるときには、草木に「天地人三才」の霊妙を備える。つまり活きた「実なる花矩」に収めることで「活物（かつぶつ）」として取り扱うのである。

なお、ここでいうところの「死物」とは、一般的に用いる意味のものではない。人畜鳥虫は性として心があり、「活物」とされるものは眠りを知る。眠れば本性のみが明らかになって、心・意・気情という感覚がなくなり、煩悩のない「死物」に等しい状態となる。四季寒暖の変化で多様な表情を見せる草木であるが、これを手折り伐っても活物が夢をみている状態にあり、皮と肉を通う「性（せい）」はあっても「情」というものはない。いうなれば常に眠ったときの「死物」の状態

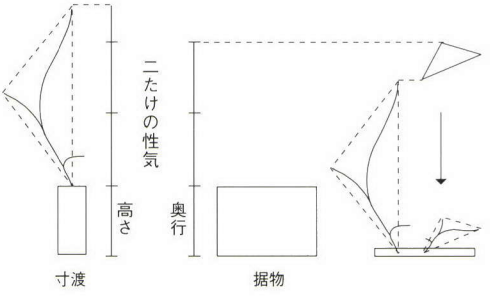
であるといえる。「阿吽の呼吸」、つまり阿は「呼息」で「陽」、吽は「吸息」で「陰」である。草木の花がつぼみを持ち、開花するのは、陰陽の働きが作用する呼吸と同じものであると捉えることができる。「真人の息はかかとを以てし、衆人の息は喉を以てす」という。呼吸というものは、我々が考えているよりも、本質的にはもっと奥深いところで成されるものであろう。

以上、「草木」の出生に関して述べてきた。この草木に対して、有情の活物は「胎・卵・湿・化」の「四生」がある。そしてまた、天上・人間・修羅・畜生・餓鬼・地獄の六道の中を、一段二段三段と至って輪廻していく。母胎から生まれる胎生、卵から生まれる卵生、湿気より生じる湿生、ものが変化して生じる化生、この四つをもって「四生」という。

7 挿花全体の指南

万物かたちあるものはすべて、表裏・陰陽を備えているものである。よって表裏が尽きることなく変化する三角形の鱗形をもって未生挿花の花矩とする。この三角形の鱗型には、陽性である立姿（半立姿）、そして陰性である横姿（半横姿）がある。

花を挿ける寸法としては、花器の下から体の先端までを三つ割りにして、下から一分を花器に、そして残り二分を花の寸法とする。これを「体割の法」という。たとえば人体においては、膝で折れ、腰で折れて三段となる。膝より下までを花器の寸法とし、残り二分を花の寸法として「二丈の性気」を通わせる。ただし「この寸尺に足らざる花は、花と花器との合体を背くが故に、風情の本式にはあらざるなり」と伝書にある。よって実際は、花器の高さの二倍半と、少し高くし



体割の法

て挿ける。また、このときの根締りは、花器の口の差し渡し（奥行）分だけ、下方より枝葉を取り除く。

広口・水盤・盥・馬盥などの据物に挿ける場合も、この「体割の法」に準じて寸法を割り出す。器の周りの寸法をもって三丈と定め、一分を花器の寸法、そして残り二分を花の寸法として「二丈の性気」を通わせる。およそ、花器の差し渡し（奥行）の三倍となる。この原則に添えない場合は、木物で谷間をとり（谷間分け）、草花で株を分け（株分け）、さらに水草は魚道をあけて（魚道分け）、一株・三株・五株と株を増やして挿ける。また、このときの根締りは、花器の差し渡し（奥行）三分の一ほど、下方より枝葉を取り除く。ただ、これら据物の場合は、留下の根締り、用の腰が常よりも少し高くなっても構わない。以上のことは基本のものとして、「花の丈高くして移ることあり、低くして応ずる事あり」と伝書にある。つまり花の出生、花器の変化に応じて、その花の丈も変化するものである。

また、三角形の鱗に収まらず風雅ある曲をもった枝葉は、臨機応変に使って挿ける。ただし、曲は一瓶の中に一カ所に限って使うものとする。この曲をもって餘性を現す。餘性とは万物の真理に通じる、未生という本質が溢れ出たものである。

次に、花の本数について述べる。二本の花の挿け方は、一本で体・用を兼ねて挿け、これに添わせて留を挿ける。三本は大中小の枝を見立てて、体・用・留の三才に挿ける。五本は体に二本・用に二本・留に一本、そして七本は体に二本・用に三本・留に二本、また九本は体に三本・用に三本・留に三本と挿ける。さらに数多く挿けるときも、これに準じて数を定めるものとする。

また以下に、季節に関するところを述べていく。挿花において、季節を守るということは未生

自然の本意である。草木は非情といっても、季節寒暖に応じて変化し、四季それぞれの姿をもつ。季節に遅れた花は、自分で楽しむ分には構わないが、客へのもてなしに用いてはならない。いわば残り物を客に供するようなものである。一方、季節に先んじて早く咲いた花は、次の季節を待つ趣のある花なので、客のもてなしに使ってもよいとされている。床に季節感のない掛物を掛けた場合などには、その時候に応じた花で季節感を現す。

花を挿けるに際しては、季節の移り変わりを強く感じることが大切である。子の月（旧暦十一月）は、「陰」が極まって「陽の兆し」を含んだ状態の冬至である。この陽の兆しが次第に長じていき、七つ目の月である午の月（旧暦五月）には、「陽」が極まって「陰の兆し」を含んだ状態となる。この頃が夏至である。このように季節は「陰陽消長」し、一年十二カ月二十四節を構成する。なお、夜の子の刻に一陽が生じ、昼の午の刻に一陰が生じる。年と同様に、日もまた「陰陽消長」し、十二支二十四節を構成する。

十月になって、桃・桜をはじめとして諸木が再び花咲くことがある。これは「陰」の気が盛んな時節にあるものの、「陽」の気が地中に照りこんで、その陽気が水脈（すいみゃく）に留まって秋の長閑（のどか）をかもしだすからである。これを「小春」という。この「小春」という寒暖の惑いのために、再び花葉が生じることがあっても、実を持つことはなく、また葉が栄えることもない。この「かえり花」「かえり咲きの花」は、四季に違うものであるので、客へのもてなしに使ってはならない。

さらに、挿花四季水次方（みずつぎかた）のことに関して述べる。花を挿けて瓶に水を注ぐとき、「五行の死活」というものを理解しておかなければならない。五行の死活とは「甲乙丙丁戊己庚辛壬癸（こう・おつ・へい・てい・ぼ・き・こう・しん・じん・き）」の十干のことである。「木火土金水」で構

成される五行は、それぞれ陰と陽の両面を合わせもち、合わせて十干となる。干支とは、この十干と十二支（子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥：し・ちゅう・いん・ぼう・しん・し・ご・び・しん・ゆう・じゅつ・がい）の組み合わせのことである。以下に、「五行の死活」である十干について述べる。

◎木の陽（兄）である甲は、大地に生じる動く木（活の木）である。一方、木の陰（弟）である乙は、家屋敷部屋等の細工された動かない木（死の木）である。

◎火の陽（兄）である丙は、性よく燃えて動く火（活の火）である。一方、火の陰（弟）である丁は、燃え去って動かない火（死の火）である。

◎土の陽（兄）である戊は、大地山をはじめとする動く土（活の土）である。一方、土の陰（弟）である己は、土器をはじめとして細工された動かない土（死の土）である。

◎金の陽（兄）である庚は、大地の土に生じる動く金（活の金）である。一方、金の陰（弟）である辛は、金物の類となった動かない金（死の金）である。

◎水の陽（兄）である壬は、滝の流れ・谷の流れ・川水・井戸水など動く水（活の水）である。一方、水の陰（弟）である癸は、器に汲み置いた動かない水（死の水）である。

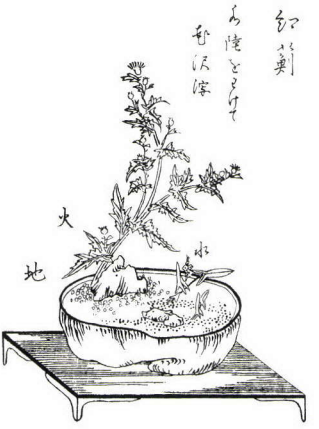
以上「五行の死活」の中で、水の陰陽である「壬」と「癸」のことを知らなければ、挿花に水を注ぐことはできない。花を挿け、そして瓶中に六～七分だけ注いだ水は、動かない癸の水（死の水）である。しかし花を挿けた後に、四季寒暖の和合をもって足し水を行なった瓶中の水は、動く壬の水（活の水）となるのである。花器に水を注ぐとき、四季寒暖和合に従うとは以下の通りである。

春・秋は寒暖が等しく和合の季節であるので、花器への足し水は九分に注ぐ。そして夏は潤いが充満する季節であるので、足し水は十分に注ぐ。ただし暑中は、花器からこぼれるほど十一分に注ぐものとする。また冬は潤いが足りないので、足し水は八分にひかえて注ぐ。ただし寒中は冷気が甚だしいので、七分をもって水を注ぐ。このように、水の死活の様相を捉えて、四季寒暖の和合をもって、足し水を行なわなければ挿花とはいえない。

8 禁忌三十六カ条

草木には「地気の濁り」が内在しているという。天と地という概念が生じたとき、清い気は上昇して「天」となったが、濁った気は「地」に下降したという。よって、この地上には「地気の濁り」があるといわれている。草木は塵芥清濁の区別なく地上に生じ、本来あるべきではないもの、美とはいえないもの、つまり禁忌（きんき）に触れる姿をもつものがある。故に、この禁忌をなくして、その本体を清いものとして昇華させる。自然に内包する「地気の濁り」を取り去って、挿花全体の姿を清潔にすることは、草木に「陰陽和合」そして「虚実」の理を備えることに通じるものである。

花を挿ける上で禁じられているものとしては、三十六カ条の禁忌が示されている。禁忌が地気の濁りによって生じたものとし、「地」の数である九に「四季」の四を掛け合わせて、三十六カ条の禁忌が定められた。禁忌は大地の濁りと捉えることができ、その禁忌を取り去って、風流をもって挿けるところに未生挿花の本意がある。これは我々自身において、内にある醜なるこころ



『四方の薫り』　薊　地水火

を浄化し、また真の理に通じるものはどこに在るのかと模索する道につながる。

なお、刺のある草木が、呪い殺す調伏のものとして禁忌に挙げられることがある。刺のあるなしに関わらず、草木というものは「地水火」つまり大地・水・光の恵みで育ったものである。この「地水火」の三つを現すという「三光の枝葉」を備えたならば、刺のある花でも挿花として用いてもよいとされている。「三光の枝葉」を備えるとは、大中小と変化の相を現した枝と葉を使って挿けることである。いずれにしても刺は取らないといけないが、葉に刺をもつ薊は、刺をつけたままでもよいとされている。草木に関わらず、我々も「地水火」の恵みを受けて存在している。このことを改めて思い返すことで、内より生じる刺、つまり醜なるこころを取り去ることができよう。

以下に禁忌三十六カ条を記すものとする。

◎禁忌三十六カ条

1　**見切**
枝が横に出て交差し、もつれることをいい、礼を欠き筋道が通らない不調和のものとして禁じる。

2　**十文字**
体の枝と交差して十文字になる枝をいい、礼を欠き自然の摂理に合わないものとして禁じる。

3　**刺天枝**
地中より曲がりなく天に突き刺した枝をいい、天に逆らって和合しないので禁じる。

4　**刺地枝**

真下に下がって枝先が立ち上がることのない枝をいい、地に逆らって和合しないので禁じる。

5 **刺人枝**（ひとさすえだ）
正面に真っ直ぐ突き出した枝をいい、見る人に対して礼がないので禁じる。

6 **刺掛物枝**（かけものをさすえだ）
掛物を書いた人に対する礼を欠くため、掛物に向って出る枝を禁じる。

7 **天蓋枝**（てんがいえだ）
枝がすべてうつむいている姿をいい、成長の姿なく和合することがないので禁じる。

8 **丈競**（たけくらべ）
枝の先が同じ長さにそろうことをいい、和合しないものであるので禁じる。

9 **両指**（りょうさし）
左右の手を広げたように、同じ位置から左右に同じ勢いの枝が張り出すことをいい、礼がないことより禁じる。

10 **両垂**（りょうだれ）
手を左右に下げたように枝が下がっている状態をいい、死活の気が正しくないので禁じる。

11 **連々枝**（れんれんえだ）
四方に枝が下がっている状態をいい、和合しないことより禁じる。

12 **三ツ真**（みつしん）
三方に分れて伸びる枝で、東西南北の方位に背くことより禁じる。

13 **害身**（がいしん）
体より出た枝が、その体を見切る枝をいい、我自身害する故に禁じる。

14 **箭**（やはず）
左右に同じように二本出た枝で、陰陽の隔てがないので禁じる。

15 抱枝（かかえだ）
両手を前に出して物を抱えたような姿の枝で、その姿正しくないことより、これを禁じる。

16 花器摺（かきずれ）
花器の縁に枝葉がかかっているもので、これを禁じる。

17 貫通枝（かんつうえだ）
用の枝が、体を超えて留の方にまで出たもので、体を見切ることより禁じる。

18 肱金枝（ひじがねえだ）
肱のように曲がった枝をいい、これを禁じる。

19 弓箭（きゅうぜん）
用の枝が体の半ばあたりから直角に出ているもので、弓で矢を射る姿に見え、客に対して礼がないので禁じる。

20 顧枝（かえりみえだ）
顧て他の枝を見切るもので、これを禁じる。

21 窓（まど）
骨にて一本にまとめるべき足許に、隙間の空くことをいい、これを禁じる。

22 片箒（かたほうき）
片方に小枝が片寄っている状態をいい、万物片寄ることは自然でないので、これを禁じる。

23 捻枝（ねじれえだ）
縄のようにねじれているように見える枝をいい、姿が正しくないので禁じる。

24 剣葉（けんば）
葉物を挿けるとき、正面から葉の表面がまったく見えないことをいい、葉の縁（ふち）が剣を向けてるかのようであり、これを禁じる。

25 片指（かたさし）
一方に偏って出る枝をいい、これを禁じる。

26 天蓋花（てんがいばな）
花がうつむいた状態をいい、陰気の憂（うれ）いを含み、陽の気を感じとることができないので禁じる。

27 鏡花（かがみばな）
鏡を掛けたように花が真正面に向くことをいい、花の中を正面より直接見ることはよくないので禁じる。

28 五徳花（ごとくばな）
三本足のある五徳のように、三カ所に花が咲いた状態をいい、これを禁じる。

29 理屈花（りくつばな）
花の大きさに変化のない状態をいい、陰陽の変化に乏しいので、これを禁じる。

30 抱花（かかえばな）
花と花が向かい合う状態をいい、その姿が風雅でないので禁じる。

31 花隠（はなかくし）
どのように見ようとしても、全く見えない花は無情であり、これを禁じる。

32 段々花（だんだんばな）
体・用・留と同じように階段状に並んだ状態をいい、変化に乏しいので禁じる。

33 猪目花（いのめばな）
前を向いて三つの花が咲いた状態をいい、このようなものは風雅でないので禁じる。

34 色競（いろくらべ）
種々の草木を取り混ぜて挿け、花の色を無造作に用いたものは、統一せず和合しないので禁じる。

『葉組の巻』　界葉

35　色切（いろきり）

上下に白い花を使い、その間に赤い花を使うと、赤い花で白い花を区切ってしまう。また、上下に赤い花を使い、その間に白い花を使うと、白い花で赤い花を区切ってしまう。故にこれらの取り合わせを禁じる。花の色を取り合わせるときは、上から白・紫・黄・紅・赤の順に挿ける。

36　見隠（みえかくれ）

顕れることもなく、また隠れることもないような中途半端な様を禁じる。ただし、その姿がしおらしく風流で自然に適ったものであれば、逆に最上のものとなる。

9　二季の通い

未生挿花に、草花の葉を組んで挿ける葉組がある。この葉組においては「二季の通い（にきのかよい）」を備える。「二季の通い」とは、陰が陽に、陽が陰にと尽きることなく変化する様である。

陸草には株を分け（株分け）、水草には魚道を分け（魚道分け）、また木物には谷間を分け（谷間分け）て性気の通いを注入する。つまり草花を何株かに分けて挿けるとき、その分けられた各々の株が互いに呼吸しあうように性気を通わせる。数多く挿ける時には、花を中心として株を作り、陰陽和合を備えて挿ける。

また葉組において七枚の内に界葉（さかいば）を入れ、日裏を前に見せて株を分けて挿ける。子・丑・寅・卯・辰・巳という「陽」より、七つ目の牛になると「陰」に変化する。万物は七つ目に大きく変化するとされているが、この陰と陽の境を成す七つ目の葉を界葉とする。すなわち、この界葉に

『葉組の巻』　河骨

『葉組の巻』　杜若

『葉組の巻』　万年青

よって株を分け、「二季の通い」を備えて挿けるのである。

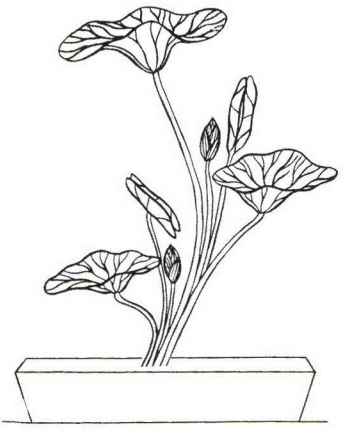
未生挿花では、一本の立木の姿・一株の草花の姿に、それぞれがもつ自然の美を求める。根を違う草木は互いに交わることはない。よって、根を違うものは株を分けて、枯葉・黄ばみ葉に至るまで界をとって挿ける。以下に草花水草のそれぞれの出生に応じて「二季の通い」を説明する。

万年青（おもと）に「七葉の出生」というものがある。万年青は七枚目の葉が生じて、ようやく花が開く。そして八枚目の葉が生じたときに、最初の一葉は朽葉となる。風囲いの葉・霜囲いの葉・実囲いの葉・砂囲いの葉・泥囲いの葉・黄葉・枯葉に至るまで、七枚目の葉に界をとって株を分け、季節の本性である「二季の通い」を備える。

杜若（かきつばた）は、長短の葉をして葉先のかぎを向き合わせ、中に短く芽吹葉を組んで挿ける。そして葉に添わせて花を入れ、太刀葉（たちば）・冠葉（かんむりば）と長葉の追葉（おいば）を挿けていく。露受け・露流し・露止めの冠葉、水吸葉、水切葉に至るまで、七枚目に日裏をみせて界をとる。さらに葉数多く挿けるときは、水切葉を挿け、魚道を分けて性気を通わせる。

河骨（こうほね）は、地下より生じた葉（角葉（つのば））が水上に現れて、半開・開花となり、そして朽葉となる。なお、水面で開き浮いた状態にある葉が、水が減ったときには水面と平行になることがある。この葉を、水面を叩く様をもって「水たたきの葉」という。この「水たたきの葉」をはじめとして、莟・開花をあしらい、開葉・半開の葉でもって界をとり「二季の通い」を備える。さらに角葉でもって株を分け（魚道分け）、ここに性気を通わせる。

蓮（はす）の花は一葉の浮葉と、水上に高く開く一葉を併せもつ。葉は巻葉（陰）の姿として地下より水面に生じ、伸び上がるとともに半開（和合）・開（陽）の姿を現す。蓮葉の円形は「天円」に



『葉組の巻』 蓮

『高野之玉川』 女郎花

等しく、そのため和合を成すときは半開の葉でもって「地方」の気も同時に備える。花にも、蕾（つぼみ）・半開・開花と、陰・陽・和合の姿を見てとれる。蓮の花は陽気に進んで満開となり、陰気に向って凋んでいく。開いた花を高く挿けて陽とし、一方、蕾を低く使って陰とし、これでもって陰陽和合とする。さらに巻葉を用いて魚道を分け、ここに性気を通わせる。また蓮の蕾には三腑（みふ）を備える。三腑とは天・地・人の三才であり、心眼でもって天・地・人という三腑の気を、これから咲く蓮の蕾に通わせるのである。この蕾の姿に「三腑を備える」ところに、未生の本質が埋め込まれている。

女郎花（おみなえし）は諸草と違って、花と葉が同じ年に生じるのではなく、昨年に葉が生じれば、今年には葉の跡に花が生じるという出生をもつ。この昨年に生じた葉のことを、大根の葉のように大きいことから「大根葉」という。大根葉を用いて界をとり、花と葉の株を分け、「二季の通い」を備えて挿ける。

以上のように、草花の花葉に陰陽和合をもって「二季の通い」を備える。「二季の通い」とは七つ目で陰陽の変わり目が起き、陰が陽に、陽が陰にと尽きることなく変化する様である。この「二季の通い」が巡りゆく中で、季節・五行十干も変化していく。

日は、七つ目の刻をもって陰陽変化する。「子」の刻は「極陰」として陰気が最大になる中にあって陽気の兆しを含み、その七つ目の「午」の刻は「極陽」として陽気が最大になる中にあって陰気の兆しを含む。「子」の次の刻である「丑」の刻に陽気がようやく漸長し、その七つ目の「未」の刻に陰気が漸長する。そして「寅」の刻には陽気が定まり、その七つ目の「申」の刻に陰気が定まる。「卯」の刻に陽の位となり、七つ目の「酉」の刻に陰の位となる。「辰」の刻に陽気が盛

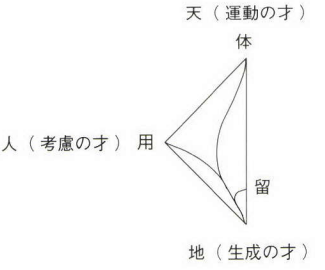
んとなり、七つ目の「戌」の刻に陰気が盛んになる。「巳」の刻に陽気が長じ、七つ目の「亥」の刻に陰気が長じる。このように陰陽十二支が消長して巡りゆくことは、円というものに端がなく、永劫に続くことと同様に考えることができる。

また年も、七つ目の月にあたって陰陽が移り変わる。さらに、月もまた同様である。一日より七日までが「陰の一廻り」であり、七日より十三日までが「陽の一廻り」となる。月日ともに変わりゆくときにあたる七月七日は厄日である。人生では、生まれてから七歳を陰の初厄とし、十三歳を陽の初厄とする。そして十九歳・二十五歳・三十一歳・三十七歳・四十三歳・四十九歳・五十五歳と厄が続いてゆき、六十一歳で本卦大厄となって、また元に戻るのである。

なお季節の十二支とは、子（旧暦十一月）丑（十二月）寅（一月）卯（二月）辰（三月）巳（四月）午（五月）未（六月）申（七月）酉（八月）戌（九月）亥（十月）を指す。また季節の五行とは、春七十二日、夏七十二日、秋七十二日、冬七十二日、土用七十二日の三百六十日をいう。土用とは、春と夏・夏と秋・秋と冬・冬と春の間に、それぞれある十八日を土用としてあてたものである。

10 三才の事

未生流の花矩は、天円と地方の和合をとり、そこから割り出された二等辺三角形の鱗形でもって定められている。草木は各々に形が異なり、四季折々にその姿は移り変わる。しかし「素（もと）よりの本性（ほんしょう）」というものを、みな同じように持っている。「素よりの本性」とは、万物が未だ生じる



天地人三才

前の、未生に在る本質的なものである。

この「素よりの本性」に従って天円地方和合の花形の中に収め、草木各々の「出生」に応じて花を挿ける。草木の「出生」である現象、「素よりの本性」である本質、この両極なるものより未生挿花は成り立っている。

よって草木の「出生」のみが正しいと考え、虚実という変化を知ることがなければ本意を失うことになる。人も人倫の教えがなければ、たとえ美しいものをまとっても愚かなだけであり、人も草木も、「虚」である外観の美と、「実」である内なる理念が調和されてこそ真の姿がある。花を挿けるときには、草木と自分が同じ源、すなわち「未生」という一つのものから生じたという原点に立ち戻り、草木と我が同体になって挿ける。地上にあるもの万物すべて、本質は一つであることを忘れてはならない。

草木は非情無心のものとされているが、天道の教えに背くことはなく、四季寒暖の恵みに素直に従って生じる。人も通らないような山奥であっても、咲く時節になれば咲き、また散る時節になれば散っていく。道端の草木は往来する人や馬に踏まれようとも、怒の気を持つことなく花咲いて、人のこころを和ましてくれる。生き物は日々、草木を食して体を養い、また諸病を治すのにも草木をもってする。草木というものは、天に素直に従う貴いものであるといえる。よって、神仏を祭るには麗しい花を奉げるのである。「地気の濁り」である禁忌を取り除き、草木を清浄なものに昇華させる。そして万物の形につながる「天円地方の和合」より成る、天地人三才の花矩でもって挿花の姿に移しとる。

天には「運動の才」があり、地には「生成の才」が、また人には「考慮の才」がある。この天・

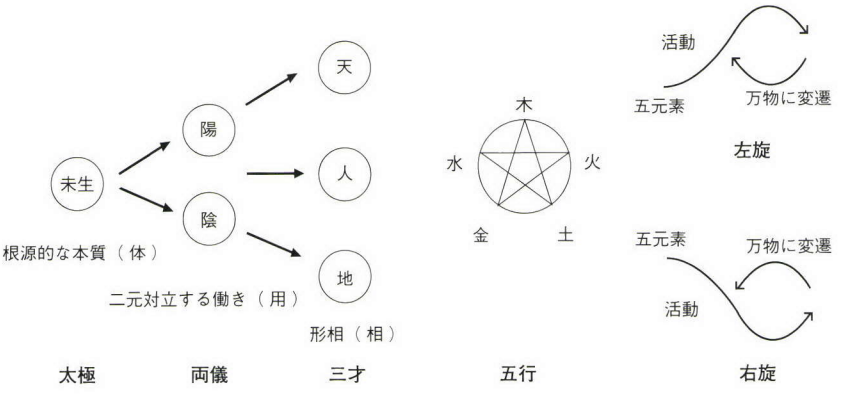
地・人がそれぞれにもつ特性であるところの、三才の霊妙を草木に備える。天地人三才を花の姿に置き換えると、体・用・留となる。

「運動の才」をもつ天、「生成の才」をもつ地、「考慮の才」をもつ人、天地人三才はそれぞれが活動に通じる源と捉えることができる。天が運動することにより地は物を生成し、その地の恵みを受けて人は生きている。逆に、人が認識することで大地は現実としての相を現し、地が在ることでその極なるところの天の働きが作用する。天地人三才は、各々の働きによって互いに成り立っているといえよう。

11 体用相応の事

易経では、孔子の記した『周易繋辞上伝』に「易に太極(たいきょく)あり。これ両儀(りょうぎ)を生ず。両儀は四象(ししょう)を生じ、四象は八卦(はっけ)を生ず」とある。太極から両儀が生じ、両儀より四象（老陽―陽中陽、少陰―陽中陰、老陰―陰中陰、少陽―陰中陽）に、そして四象より八卦（乾(ケン)、兌(ダ)、離(リ)、震(シン)、巽(ソン)、坎(カン)、艮(ゴン)、坤(コン)）に転じるということである。

一方で、老子の記した『道徳経』には「一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず」とある。すなわち、一なる「太極」が、陰陽という相対的関係の「両儀」を生じ、「両儀」が天地人の「三才」を生じ、さらに「三才」が万物を生じるということである。前者の、孔子を祖とする儒学は、いうなれば現象的、また人為的なものである。それに対して後者の、老子を祖とする道は、自然に素直に従うこと、つまり無為自然の中に理想を見出したものである。未生の理は、前



者の儒学に通じる一方で、後者の「空」につながる道にその源を置いている。

太極は未生という未だ生じていない根元的な本質を現す「体」であり、両儀は陰陽という相対的関係を現す「用」であり、三才はその現象としての「相」である。「相」は「木」と「目」の二字でもって構成されており、二つの要素が程よく並んだ「中庸（ちゅうよう）」にこそ和合があるといえる。

また「体」は、天地の間にあって動かない万物一体の「理」「未生以前の理」である。対して、「用」は、四時に移り変わり千変万化して、また一なる体に帰っていく「働き」である。そして「相」は、この「体」「用」という、理と働きが作用した結果、その現象として「姿」が生じたものである。よって、その理と働きに考慮を及ぼすことなく、現象としての姿だけにとらわれては、形骸に陥ってしまうだけである。

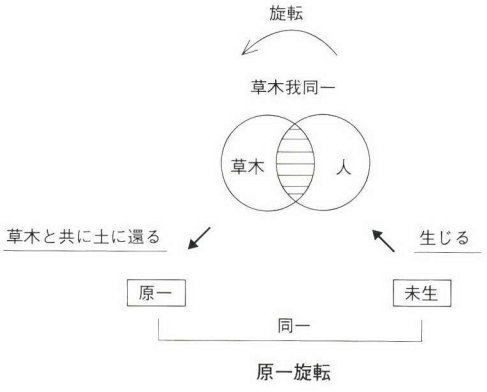
自然という草花の「実」に、花形としての「虚」を加え、「虚実等分」とする。無形無限を現す天円は万物の本質（体）であり、有形有限を現す地方は万物の現象（用）を成すものである。無限の本質と有限の現象が通い合ったときに、はじめて体用相応した姿を見てとることができるのである。

なお、体は「性」であり、用は「情」である。肉眼による認識より離れて、この「性情の両気」を心眼でもって感じとることが大切である。天地人の三才を体・用・留と挿ける一方、この中に性情の両気を体・用と挿ける。性情の両気を内に感じとって、ようやく形というものから離れて、心に通じることができる。一本の枝を姿よく揉めて花瓶に移すは「体」であり、この枝に程よく小枝を添わすは「用」である。体・用と分けたとしても、その源は一つである。両者に縁を通わせてこそ、体用相応の姿がある。一切のものは、この体と用を併せもたなければ成り立つことは

ない。視覚の下に捉える形である「相」より離れて、視覚による認識を超えた「理」「働き」を感じとるのである。

未生挿花は単に花を美しく挿けるだけのものではない。草木と深く接し、万物の根元にある最も大切なものは何かと模索すること、そしてまたその本質に近づこうとするところに、花を挿ける意義がある。

12 原一旋転の事



原一旋転

「原一旋転」とは、一なるものを原初にたずねて旋転すること。つまり万物の一なる本質に近づくことを意味する。挿花を学ぶにあたっては、花を挿けることを単に目の前の慰み、表象的なものとのみ捉えるのではなく、その内奥にある真なるものを一心に感じとることが肝要である。

草木は春夏秋冬、四時季節の陰陽消長、さらに陰陽寒暖に応じて、万物の源である五行の気を等分に受けて生じたものであり、私心はなく、天が導く道に素直に従うものである。よって草木は、活物（生き物）の主であるとされる人よりも、真理に近い存在である。

この草木と深く接することで、天地自然の真なるところ、万物自然の道理、さらには神儒仏の三道の尊さというものを観じることができる。この過程を経て花を愛するとき、はじめて自然と本心となり、我と草木が同性になれる。草木と同性になれば、すなわち神仏と同体になることができるといえよう。花を挿けるということは無益の慰みではなく、万物の本質に近づくものである。

季節四方（よも）の移り変わりに応じて、草花が落花落葉し、また枯木枯葉の姿となるのを人は愛でる。花は満開となった後に散り、葉は土の色に戻って枯れ散る。しかし落花落葉・枯木枯葉は、元々の出生の色を失った衰えのあるもので、このような姿のものを挿花として用いてもよいのだろうか。否、そうではないのだ。万物というものはすべて土に帰るということが自然の道理であって、草木が放つ盛衰の様相を愛で、この姿からほんとうに大切なものを感じとることができる。

「陰陽和合」「虚実和合」を備え、そして花葉枝の禁忌の箇所を取り去って、生々の気が全体に充ちるとき、草木は麗しく最上のものとなる。自然が刻々と変化し、原初にたずねて旋転していく様を感じさせる草花こそ、我々が求める花ではないだろうか。

13 草木養いの事

挿花として草木を養うには、一年の季節を「真・行・草」と三つの区分に分け、養いの時候を知る必要がある。

真の時候は旧暦五月夏至より旧暦八月彼岸までをいい、陽中陰の「太陽」の時節である。つまり陽の中に陰気を含んだ状態といえる。この時候は人畜に限らず、草木をはじめとして生あるものは内に陰の気をもつために、損じ衰えることが多い。そのために、この時節に伐った草木は熱湯でもって養う。陰気をもつ時候の草木を伐り、そのまま冷水（陰）につけてしまえば、陰に陰を合わせることとなり、性気を衰えさせてしまう。よって、伐った根元を熱湯（陽）の中に入れることで、内より陽気を生じさせ、その後に冷水につけて三時（六時間）ほど養う。

真の時候（太陽）	暖の季節	草木、熱湯で養う
行の時候（少陰・少陽）	寒暖等しく和合の季節	草木、炭火で養う
草の時候（太陰）	寒の季節	草木、冷水で養う

真・行・草　養い

草の養い（草の時候）	旧暦十一月（子の月）	午前十二時（子の刻）	冬至　太陰（陰中陽）
	旧暦十二月（丑の月）	午前二時　（丑の刻）	
	旧暦一月　（寅の月）	午前四時　（寅の刻）	
行の養い（行の時候）	旧暦二月　（卯の月）	午前六時　（卯の刻）	春分　少陽（陰陽和合）
	旧暦三月　（辰の月）	午前八時　（辰の刻）	
	旧暦四月　（巳の月）	午前十時　（巳の刻）	
真の養い（真の時候）	旧暦五月　（午の月）	午後十二時（午の刻）	夏至　太陽（陽中陰）
	旧暦六月　（未の月）	午後二時　（未の刻）	
	旧暦七月　（申の月）	午後四時　（申の刻）	
行の養い（行の時候）	旧暦八月　（酉の月）	午後六時　（酉の刻）	秋分　少陰（陰陽和合）
	旧暦九月　（戌の月）	午後八時　（戌の刻）	
	旧暦十月　（亥の月）	午後十時　（亥の刻）	

真・行・草　養いと時候

行の時候は旧暦二月彼岸より旧暦五月夏至までの「少陽」、また旧暦八月彼岸より旧暦十一月冬至までの「少陰」をいう。この時候は陰陽の寒暖が等しく、すなわち陰陽和合の季節である。そのため、この時候に伐った草木は炭火でもって養う。損じ衰えることが少ない和合の季節とはいえ、草木を伐れば、その瞬間に陰気を生じさせてしまう。よって、伐った根元を炭火（陽）の中に入れて焼くことで、内より陽気を生じさせ、その後に冷水につけて三時（六時間）ほど養う。

草の時候は旧暦十一月冬至より旧暦二月彼岸までをいい、陰中陽の「太陰」の時節である。つまり陰の中に陽気を含んだ状態といえる。この時候は、生あるものが内に陽気をもつために、衰えることは少ない。よって、この時候に手折り伐った草木は、冷水（陰）や氷水（陰）でもって養う。

なお、蓮・河骨をはじめとして水草・藺物・浮草などは、「陰中陽」である「水」を主とするため、外に冷気（陰）をもち、内に暖気（陽）をもつ。よって、これら水を主とする草木は、冷気をもって養う。

草木に養いを施すことなく、花葉に直接水を打ってはならない。花葉が表面に自ずと持つ水分のバランスを崩すことがあるため、かえって衰える結果になるからである。また、密室で蒸したり、強い風にあて過ぎると水分の蒸発が盛んになり、草木の衰えが早くなる。挿花は養うことをまず第一のものと考え、挿けた花が自ずから性気を導き、葉は健やかに、そして花は麗しくあるようにする必要がある。養うことがなければ、草木は潤色枯労して、葉は乾き花はしおれてしまう。生きた花が衰えたにも関わらず、水を打つようなことがあるが、いかに粧ったとしても愁の色を隠すことはできない。このような花を見ても美を感じることはない。また床の花や茶室の風

炉前の花に、直接水を注ぐようなこともあってはならない。

挿花が麗しいのは、葉に水を拭きつけるのではなく、養いをするところにある。「二陰一陽」である水と、「一陰二陽」である火を合わせると、合わせて「三陰三陽」となる。この水と火でもってして「三陰三陽」の養いをすることで、花は麗しくあり続ける。また手折り伐った草木に限らず、庭の草木や鉢植え物などに至るまで、「真行草」の時節に応じて、水と火の「三陰三陽」でもって養う時、まだ性気の尽きない草木であれば、性気たちまちに蘇って元の姿に戻る。このような草木の養いも、天の教えに従った方法であるといえる。

草木の花葉は夜陰に至れば花が凋むもので、性気が衰えたように見えるものがある。特に、蓮・木槿・檜扇・ササゲ・金盞花などは花が凋みやすい。しかし天地自然の道理に従って水火寒暖の和合をもって養いを行なえば、夜陰になっても花が凋むことはないだろう。

すべて草木を養うには、四季寒暖の移り変わり、そして陰陽の両気が消長することで生じる気候の変化、さらに風雨霜露がときに害となり、ときに恵みとなる自然界の道理を知ることが大切である。生命の根元であって、万物の活力になるものを「気」という。この「気」というものは、陰と陽の両気から成る。この両気のうち「陰」は水となり、一方「陽」は火と変化する。そして火（太陽）と水（太陰）が交感し合って、土（中性）が生じる。土は動くことで木（少陽）を生じ、また逆に収まることで金（少陰）を宿す。そしてその結果、「木・火・土・金・水」という五行の要素が生じていく。

この「木・火・土・金・水」の五元素はそれぞれ相生じ合い（五行相生）、また一方で滅し合う（五行相剋）。木は火を生じ、火は土を生じ、土は金を生じ、金は水を生じ、水は木を生じる。こ

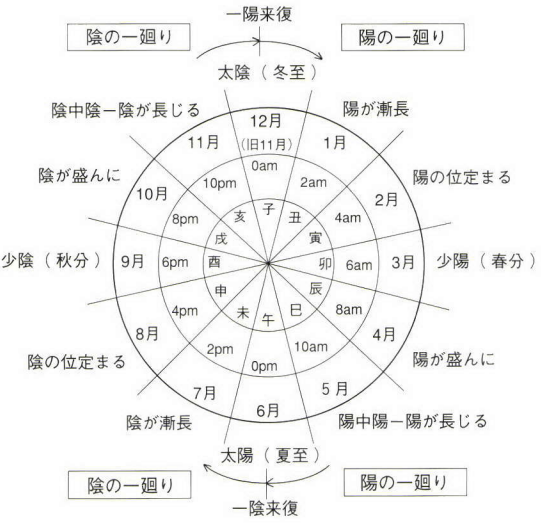
れが五行相生である。一方で、木は土を剋し、土は水を剋し、水は火を剋し、火は金を剋し、金は木を剋する。これを五行相剋という。

この五行をさらに陰陽という兄弟、死活の二元に分けると十干となる。木の兄を甲、木の弟を乙、火の兄を丙、火の弟を丁、土の兄を戊、土の弟を己、金の兄を庚、金の弟を辛、水の兄を壬、水の弟を癸という。「甲」は生きている木、「乙」は枯木、「丙」は燃える火、「丁」は炭火、「戊」は大地の土、「己」は土器、「庚」は地中にある鉱物、「辛」は精製された金属、「壬」は自然に流れる水、「癸」は汲み置いた水を意味する。

草木を伐って「性気の通い」が途絶えてしまったとき、この草木は木の死を意味する乙の状態となる。しかし、この草木に養いを施して、土にあった状態と同じように性気を取り戻したとき、この草木は木の活を意味する甲となる。詮ずるに、草木を甲の状態にすることが養いの目的である。

なお、陽木である松は、水気を好むものの、湿地に植えると腐朽してしまう。よって松は乾地において成長する。一方、陰木である柳は、乾を好むものの乾地に植えると枯渇する。よって柳は湿地において生育する。このように、万物その好むところによって、逆に災いとなることもある。

草木の養いを知るにおいて、季節・時の巡りゆく姿を再度思い返していきたい。旧暦十一月（子の月）である「太陰」の頃、陰が極まって地中に陽を含んだ状態となる「一陽来復」の頃を冬至という。旧暦十二月（丑の月）にはこの陽が漸長し、旧暦一月（寅の月）には陽の位が定まり確かなものとなる。この三カ月の間は、陽気が地中に含まれた状態にある。そして、この地中の陽



が地上に現れるのは、旧暦二月（卯の月）である。この「少陽」の頃を春分という。旧暦三月（辰の月）には、表に現れた陽が段々と盛んになって、旧暦四月（巳の月）の頃には表裏に陽が長じた「陽中陽」の状態となる。

旧暦五月（午の月）である「太陽」の頃、陽が極まって地中に陰を含んだ状態「一陰来復」の頃を夏至という。旧暦六月（未の月）にはこの陰が漸長し、旧暦七月（申の月）には陰の位が定まり確かなものとなる。この三カ月の間は、陰気が地中に含まれた状態にある。そして、この地中の陰が地上に現れるのは、旧暦八月（酉の月）である。この「少陰」の頃を秋分という。旧暦九月（戌の月）には表に現れた陰が段々と盛んになって、旧暦十月（亥の月）の頃には表裏に陰が長じた「陰中陰」の状態となる。以上のように、子の月から午の月までが「陽の一回り」、そして午の月より子の月までが「陰の一回り」となり、このように陰陽が消長して一年となる。

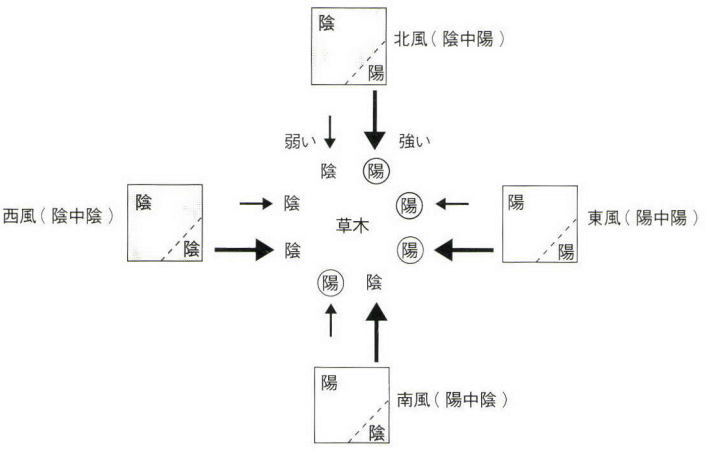
また一日の巡りも月と同様である。午前十二時（子の刻）太陰のときは、陰が極まって陽を含んだ状態の「一陽来復」の時刻である。午前二時（丑の刻）にはこの陽が漸長し、午前四時（寅の刻）には陽の位が定まり確かなものとなる。この陽が表に現れるのは、午前六時（卯の刻）少陽の時刻である。午前八時（辰の刻）には陽が段々と盛んになって、午前十時（巳の刻）には陽が長じた「陽中陽」の状態となる。

午後十二時（午の刻）太陽の頃、陽が極まって陰を含んだ状態の「一陰来復」の時刻となる。午後二時（未の刻）にはこの陰が漸長し、午後四時（申の刻）には陰の位が定まり確かなものとなる。この陰が表に現れるのは、午後六時（酉の刻）少陰の時刻である。午後八時（戌の刻）には陰が段々と盛んになって、午後十時（亥の刻）には陰が長じた陰中陰の状態となる。

このように、十二の月・十二の刻は六つで一回りし、七つ目でもって陰陽が変化する。葉蘭の葉組で七枚目の葉を境として界葉を挿けるのは、陰陽の変わり目にあたるからである。人間も生まれてより六年が経ち、七歳で初厄を迎える。これより十三歳で二の厄、十九歳で三の厄、二十五歳で四の厄、三十一歳で五の厄、三十七歳で六の厄、四十三歳で七の厄を迎える。厄が一回りして七つ目の厄を迎えた四十三歳は大厄である。よって前年の四十二歳のときに、神仏を祭り厄難がないように祈るのである。四十九歳は八の厄、五十五歳は九の厄、六十一歳は十の厄となる。この十の厄を迎えると、十干・十二支が生まれた年の干支に戻るので、すべての厄が終わることになる。これを本卦帰り・還暦という。このように一回りする厄年に神仏を祭って無難を祈るのは、自分自身の養いである。

還暦より後には厄はなく、以後は寿の祝いがある。六十一歳は「華寿」を祝う。これは「華」の字を分解すれば、六つの十と一とで構成されることからこの名がある。七十歳は「古稀」を祝う。「人生七十古来稀」という杜甫の曲江詩（きょくこうし）に由来する。また七十歳は「杖の賀」といい、鳩のついた杖を送る慣わしなどもある。七十七歳は「喜寿」を祝う。「喜」の字の草体の文字が「七十七」と読まれるところからくる。また八十八歳は「米寿」を祝う。「米」の字を分解すれば「八十八」になることから、そう呼ばれている。九十九歳は「白寿」を祝う。これは百歳を前にして祝うもので、「百」という字から一という字をとれば「白」という字となることからきている。このように草木だけでなく、人においても養いの時候というものを知り、それに応じた養いが必要であるといえる。

さらに以下に、風・霜・雨・水の性質を詳しく知り、草木養いの参考としたい。



◎　風は草木に影響を与える。

冬至より春分までは、性質として捉えると「北風」である。この「北風」が強いときは草木万物を養うが、一方で弱いときはこれを害するという。北は「陰中陽」の方角であるため、強く吹くときは裏にある陽が働くので養いとなるが、弱く吹くときは表にある陰のみが働くので害となる。

春分より夏至までは、その性質として捉えると「東風」である。「東風」は草木万物に潤いをもたらし養いとなる。東は「陽中陽」の方角であり、常に陽の影響を受けるからである。

夏至より秋分までは、その性質が「南風」である。この「南風」が強いときは草木万物を害するが、一方で弱いときはこれを養う。南は「陽中陰」の方角であるため、強く吹くときは裏にある陰が働くので害となるが、弱く吹くときは表にある陽のみが働くので養いとなる。

秋分より冬至までは、その性質として捉えると「西風」である。「西風」は草木万物には害となる。西は「陰中陰」の方角であり、常に陰の影響を受けるからである。

挿花の席に毒となる風が吹き入るときは、山の実・山椒などを焚いて、その気を花にあてて毒気を払うことがある。

◎　霜も同様に草木に影響を与える。

冬至より春分までの「霜（しも）」は「極陰」であり、草木の毒となる。そして、春分より夏至までは「水霜（みずしも）」となり、毒とも薬ともならない。ただし若芽などには毒となることがあるので注意が必要である。また、夏至より秋分までは「露（つゆ）」と変じて「極陽」となり、よって草木万物を潤い養

冬至より春分	北風（陰中陽）	霜（極陰）
春分より夏至	東風（陽中陽）	水霜
夏至より秋分	南風（陽中陰）	露（極陽）
秋分より冬至	西風（陰中陰）	水霜

う。そしてまた、秋分より冬至までは、再び「水霜」となって、毒にも薬ともならない。

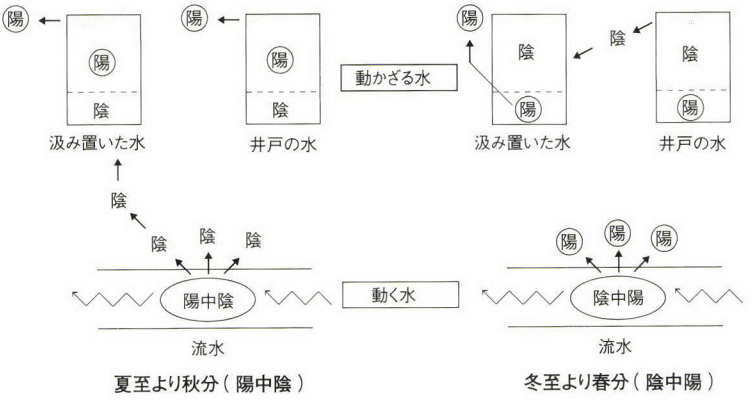
◎　雨は四季通じて降り、草木万物に潤いを与えるが、風の状況によっては養いとはならないことがある。

陰中陽である「強い北風」、陽中陰である「弱い南風」のときに降る雨は養いとなり、陽中陽である「東風」のときに降る雨は大いに養いとなる。これは、北風が強いときは陰中陽の内にある陽気が雨に作用し、また南風が弱いときは陽中陰の表にある陽気が雨に作用し、そしてまた陽中陽の東風は常に陽気が雨に作用することによる。

一方で、「強い南風」「弱い北風」のときに降る雨は養いとならず、「西風」のときに降る雨は大いに害となる。これは、南風が強いときは陽中陰の内にある陰気が雨に作用し、また北風が弱いときは陰中陽の表にある陰気が雨に作用し、そしてまた陰中陰の東風は常に陰気が雨に作用することによる。

◎　水の用い方には四季の違いがある。

冬至から春分までは、「流水」を使いるとよい。またこの時期に「井戸の水」を使う場合には、汲み置いて一夜冷やして用いるものとする。この頃は極陰である「陰中陽」の時候であり、動く水「流水」は動くことで内にある陽気が表に出るために、そのまま用いることができる。しかし一方で、動かざる水「井戸の水」は、井戸底にある陽気を含んだ水を用いることができないので、一夜汲み置いてから、器の底に生じた陽気を含んだ水を用いる。



春分から夏至まで、また秋分から冬至までは、「流水」「井戸の水」共にそのまま用いてよい。

夏至から秋分までは、「井戸の水」をそのまま用いるのがよい。この時候に「流水」を使う場合には、汲み置いた後に用いる。この頃は極陽である「陽中陰」の時候であり、動かざる水「井戸の水」には、陰気が底にたまっているので、表面の陽気のみを用いることができる。しかし一方で、動く水「流水」は、動くことで内にある陰気が表に出ているために、いったん動かない水にしてから用いるのである。

以上、水の用い方について述べたが、これは草木に限らず、すべての作物や、煎じて飲む薬に用いるときも、同様に扱えばよい。

また以下に、特に水揚がりの悪い花の養い方に関して述べていくものとする。

a 四季陸物草木養い

熱湯でもってする「真の養い」、炭火でもってする「行の養い」また冷水でもってする「草の養い」と、草木は四季寒暖の理に応じて養えば、性気たちまちに蘇えるものである。

しかし、中には薬を用いなければ養いのできないような、水揚がりの悪い花もある。薬を用いて「真の養い」「行の養い」をすべき、陸物を以下に記す。このときの薬としては、アソン（灸）を用いる。

（真の養いを施すもの）

桜・藤・柏毬花・鶏冠・ケマンソウ・牡丹・蒲公英・天南星・桜草・風車・草下野・額草・鉄線・大山蓮・縞芒・夏萩・薊・檀特花・紫陽花・木槿・縮沙・夏菊・熊鷹蘭・芭蕉・トウゴマ・夏藤・車前草・トウタデ・蘞

金蕉・岩藤・芙蓉・佛桑花・曼陀羅花・水引草・秋海棠・午時花・岩蕗・時鳥草・秋牡丹・美人蕉・紅葉・ハゲイトウ・照葉類一切

（行の養いを施すもの）

折楊木・芍薬・時計草・下野・桔梗・茴香・蔓荊子・黄金花・唐紫苑

また、朝顔養いについて以下に述べる。朝顔は、午前四時（寅の刻）より午前六時（卯の刻）の間に花が開き、午前十時（巳の刻）より午後十二時（午の刻）の間に花は凋んでしまう。夜陰に開く花の姿を昼に挿花として見せるというのは、天地自然の本性ではない。しかし、女童のこころを慰めるのに用いたいと思うのであれば、その拙い技としては以下の通りである。

明日に挿けようと思うときは、明日開くであろう莟を持った蔓をまず伐り置いておく。午後十二時（午の刻）にこれを伐って、細竹にくくりつけ、熱湯でもって真の養いを施す。そして、この明日開くであろう莟に、今日凋んでしまった花の先を鞘にかぶせて、根ごと井戸水につけて置く。このとき花葉に水を少しでもかけてはならない。翌日はいつでも来客の前に出して花瓶に移し、かぶせてあった鞘を取れば、やがて開くものである。

花が開いてから養う場合は、薬法として三盆（砂糖）を少し盃に入れ、上々笹（清酒）で薄く溶き、そして火にかけて温めた後に冷やし置き、朝顔の花が開いたときに直接三しずく程つけてやる。そうすれば翌朝までもつ。この薬法は鉢植えなど、根をもつものにも効果がある。しかし、天地自然の法に違うことを安易にするべきではない。

b 庭中並びに鉢植え草木養い

庭や鉢植えの草木が性気を失ったときは、草木に応じて程よくアツン（灸）をすえてやる。内に陽を含む冬至より春分までは、暖気ある日の真昼に養いを施す。春分より夏至まで、秋分より冬至までは陰陽和合の季節であるので、何時に施してもよい。また内に陰を含む夏至より秋分までは、早朝の涼しい間に養いを施す。一回りである七日（一週間）の間に、一つの箇所に三度ほど灸をすえてやる。

この養いは、草木に限らず人間においても同様である。草木も人も万物一切のものは「素よりの本性」というものを持ち、すべて一なる太極から生じたものであることによる。陰陽の釣り合いがとれた和合の状態にある、無病の人の養生として灸をすえる時節としては、陰陽和合の時候である春分より夏至まで、また秋分より冬至までがよい。夏や冬に無病の人に灸を施したとしても、養いとなることはない。これは、陽の気を強くもつ夏至に施すと体の陽気が多くなり、一方、陰の気を強くもつ冬至に施すと体の陰気が多くなり、そのため体内の陰陽のバランスが偏ってしまうからである。ただし病人であれば、四季の何時にかかわらず施しても養いとなる。灸の効能は万薬に勝るものである。病は「陰」であり、四季それぞれの「陽気」をうまく引き出して養う。

c 梅花年中囲方

梅の囲い（養い）として、まず青梅をわさびおろしでおろして種をとり、北味（五方の鹹味（しおからい））を作る。それを壺に詰め置き、目張りの蓋をする。そして梅の花が半開になった頃に枝を伐り、さきほどの薬の中に、枝先から根元まで詰めて蓋をしておく。入り用の時にこれを薬より出して、

しばらく水につけておいてから挿花として用いる。小枝は梅干の壺の中にいれておけば養いとなるが、白梅には色が移るので用いることはできない。

d 竹真行草養い

竹の「草の養い」として、まず上花（茶）を濃く煎じて冷やしておく。そして竹を伐り、上より節を抜き、この薬を詰めて挿ける。挿花として日数置くときは三日目ごとに、この薬を加えればよい。竹の養いは非常に難しいものであり、常に目の行き届くところにおいてのみ用いるものとする。

「行の養い」としては、竹の根元に灸をすえ、火の中にいれ根元を焼きとる。五尺もある竹であれば、根元を五寸ほども焼く。その間に、草の養いで行なった薬をつけるとよい。その後に、井戸の中や川の水などの冷水に深くつけ、三時（六時間）ほどよく養う。このとき、しっかりと薬の気を抜かなければ、水揚がりも悪くなる。なお、変色した根元は伐ってから挿ける。

「真の養い」としては、灸を入れた水を熱湯にして、伐った竹の根元五寸ほどをこの中に入れて養い、その後に冷水に深くつけて三時（六時間）ほどよく養う。最初の水には北味を加えてもよい。二つ割りの竹垂撥（たけすいはつ）を養う場合には、先に割って伐っておく。この真行草いずれの養いにおいても、養う前には必要のない小枝は伐っておくことが大切である。水が揚がった後に、一葉でも伐ってしまえば、その葉がついていた枝より損じ衰えていく。

e 竹青葉附き自在にて船釜釣り養い

青葉附きの竹で作った「自在（じざい）」の養い方である。これは、船などの掛花器を上下自在に据えることができるようにしたものである。掛釘を打って、垂撥（すいばち）として用いる。この養いとして、山椒などの山の実をすって、およそ一対十の割合でもって水と混ぜ合わせ、薬の気を出すために置いておく。そして竹を伐り、自由に程よく「活の員（数）」をもって丈を定める。数字には一から百八まで、それぞれ死活がある。「活の員」とは（一・二・三・五・六・七・八・九・十・十二・十五・十六・十八・二十・二十四・二十八・三十・三十六・四十八・五十・六十・六十四・七十・七十二・八十・九十・九十六・百・百八）の二十九箇の数字であり、一方「死の員」は活の数字以外の七十九箇ある数字のことである。

伐った竹の節を上から抜いて、下一節のみを残し、そして先ほどの薬を擦りこむのである。挿けた後にも毎日この薬を加える。下に釜を釣って「火の気」の上においてやると、竹の葉が青々と数日もったりすることもあるので参考にしたい。

寸法としては、三通りのものが伝書に挙げられている。まず、丈三尺六寸のものであるが、これは地の数である九に、四季の四を掛けた数（三十六）で寸法をとったものであり、この寸法のものは、割竹でなく円竹を用いてもよいとされている。次に、丈四尺八寸のものは、一年二十四節に二を掛けた数（四十八）で寸法をとったもので、釣舟を掛けた自在の寸法である。また、丈二尺八寸のものは、天の星座である二十八宿星の二十八より寸法をとったものである。なお、陰陽の日月と木火土金水の五星を合わせた七星は、東西南北それぞれにあると捉えることができ、よって全部で二十八宿星となる。

f 竹青葉附き花器に伐る養い

青葉附きの竹花器を作るにあたって、このときの養いとしては「真の養い」をする。まず、灸を入れた水を熱湯にしておく。そして割り伐った竹花器に必要な枝葉だけを残して、根元をこの中に入れて養う。その後に冷水に深くつけて一夜置き、翌朝に花器として伐る。最初の水には北味（五方の鹹味（しおからい））を加えてもよい。そして後に、セキハク（白石灰）を白油（菜種油）で練ったものを薬として、伐った箇所に直接擦りこむ。このとき、竹の性気を抜かないようにすることが大切である。この青葉附き竹花器に蒔絵を合わすこともある。

寸法としては、まず寸渡は、丈八寸くらいまでに定める。この丈の八は、地の八象である乾坤坎離艮兌巽震を現すものである。そして手杵は、丈は一尺二寸くらいに、口は二寸四分くらいに定める。これは、一年十二季・二十四節を現す。また獅子口は、丈は八寸くらいに、口は一寸八分くらいに定める。この十八は極陰極陽、つまり陰の九と陽の九の合数である。

g 竹即挿け養い

竹の即挿け養いとしては、まず竹を伐って、挿けるのに程よく寸法を定めておき、竹の節は抜き通しておく。そして上の切り口にスウ此薬を塗る。このスウ此薬とは酢などの酸性のものであり、伐り口より一気に吸い上げる性質をもつものである。この養いを行なえば、竹の葉は青々ともつものである。

h 河骨真行草養い

河骨（こうほね）の「草の養い」としては、井戸より汲みたての冷水を伐り口よりポンプなどで注入する。このときには葉脈がつぶれないように注意し、程よく冷水を注入することが大切である。

次に「行の養い」として、上花（茶のこと）を一合、山実（山椒）を二勺、この二つを水十合に入れた後に、九合まで煎じて、程よく三時（六時間）ほど冷ましておく。そして、これを伐り口よりポンプなどで注入するものである。

また「真の養い」としては、上花（茶のこと）のみを濃く煎じて、人肌よりも少し熱いくらいのものを伐り口より注入する。

空挿け（奉書挿け）といって、花台の上に紙を敷いて挿ける挿け方がある。このときの養いとしては、ヌルデの若芽や若葉などに生じた瘤状の虫である五倍子（ふし）を、布に包んで熱湯で煎じてから、これを伐り口からポンプなどで注入する。

i 蓮真行草養い

蓮の「草の養い」は、河骨の「行の養い」と同様に行なう。蓮の「行の養い」は、河骨の「真の養い」と同じ方法で行なう。そして蓮の「真の養い」としては、水十合に上北味（塩）を一合だけ加えて熱湯にわかし、この中に蓮の根元を三寸ほど入れておく。その後、蓮の軸が煮て固まってから熱湯より取り出して、さらに冷水へ一時（二時間）ほど深くつけておく。そして、この根が固まったところを一寸ほど残しておいてから挿ける。なお、空挿け（奉書挿け）として挿ける場合は、河骨のときに述べた養いと同法で行なうものとする。

j 蓮即挿け養い

蓮の即挿け養いとして、まず上赤実（唐辛子の類）を十個ほど竹筒に入れ、その中に熱湯を三合ほど入れておく。そしてこの気が抜けないうちに蓮を伐って、その根をこの薬につけて養う。この薬がなまぬるくなるまでつけておき、根の色が変わったところを少し残してから蓮を挿ける。したがって、蓮を最初に伐るときには、体・用・留ともに、蓮の寸法をしっかりと定めておかなければならない。

また、芦・嶋蒲・三ツ柏・水芭蕉・水葵・慈姑（くわい）・澤瀉（おもだか）・猿猴草（えんこうそう）などの水揚がりの悪い水草も、この手法で養いを施すとよい。

k 雨中の景色柳養い

「雨中の柳」は獅子口、舟をはじめ、竹や金物の器に挿ける。獅子口を使うときは、垂撥に掛けて、床より指尺六～七尺程度上に留めて用いる。

まず、肉となるところの柳の枝を「用」として挿け、この枝より垂れ下がるところ曲なく挿ける。そして、これに添の枝を挿けていく。次に、皮となるところの枝を「体」として挿ける。この枝の先は日に枯れたものを用いて、渦のように巻き上がる様でもって風雅に挿ける。雨の中の柳の景色を移しとる挿け方であるので、鬱鬱（うつうつ）とした様が感じとれるようにする。枝先に強い勢いがあるのはよくない。また、細い枝が大きく垂れたものも風流がない。肉が多く、たわやかな柳が雨中の様を現してこそ風流がある。

この「雨中の柳」の水揚げとして、数多くの柳の芽をすべて起こしてあげ、芽のない枝先は手

で伐って、一夜置いて陰に通わしておく。このようにしてから挿けるとき、水が程なく揚がり、数多くの枝先や芽の間より雨の降るが如く水が落ち、時雨の柳の様を感じとることができる。

この露が落ちる露受けとして、薄広口を用いて天地人三才の石飾りをする。このとき天石に水仙二本、人石に水仙一本、寒菊、そして根元に蕗の苔（ふきのつぼみ）などをあしらって閑静に挿ける。初春は、福寿草を天石に二本、人石に一本、あるいは天石に三本、人石に二本使って挿けたりする。この「雨中の柳」は、全陰（陰中陰）である旧暦十月（亥の月）を過ぎて、旧暦十一月の一陽来復が起きた後、ちょうど旧暦十二月（丑の月）旧暦一月（寅の月）のころに挿ける。

また、このときの養いとしては、「潮の満干」も考えねばならない。草木は潮が満ちるときに伐れば勢いがいいが、潮が干くときに伐ると勢いが悪いものである。よって柳を伐るときは、陰が表に現れる午後六時（酉の刻）の頃、つまり「少陰」の時刻がよい。このときは、刃物を用いることなく、手折り伐る。なお、節のある類のものは、正午に伐るのがよい。正午は陰陽の変わり目となり、節がゆるむからである。

この「潮の満干」は海面のことだけでなく、地にあるすべてのものに影響を与える。人をはじめとして、木石鳥獣虫魚に至るまですべてのものの内には満干がある。出産は満ちるときであり、また命の尽きるのは干くときである。山上の池にも潮の満干があり、大石に穴があって絶えず水が満干する。

このように、万物に影響を与える天地自然の陰陽寒暖の法則に従い、草木に養いを施すことが大切である。養いを施して挿けても、性気が衰えれば死物に等しく、よってそのような花を神仏

に供じ、また、もてなしとして用いることはできない。麗しい花葉を見れば自らのこころを養うが、萎れた花葉を見れば自らのこころに憂いをもつ。草木に養いを施すということは、挿花にとって根幹を成す行ないであるといえる。

14 一花一葉　一花三葉の事

「一花三葉」の心得として、葉組や菊・椿などを挿けるとき、花一輪に対して葉を三枚使うのが定法である。一という太極から二という両儀に変化し、万物を構成する天・地・人という三才が定まっても、人が声を発することがなければ、このような概念も生じることはない。この人の声とは認識することであり、これは四つ目であるといえる。

一が生じて二となり三に通じ、そしてまた一に戻っていく。一日も子の刻（夜十二時）に一陽が生じ、丑の刻（二時）には陽が漸長し、そして寅の刻（四時）に陽が確かなものとして定まる。しかし、それでも未だ明るくはない。ようやく明るくなるのは、四つ目の卯の刻（六時）である。このように、天地自然というものは三が定まって四つ目に移行することがなければ、次の展開の花を生じることはない。よって、一花三葉の割合よりも葉の数が多いのは構わないが、その割合よりも葉の数が少なくあってはならない。

「一花三葉」を現象に通じるものと捉えるならば、以下に述べる「一花一葉」は本質に結びつくものである。花一輪、葉一枚で構成する「一花一葉」を挿けるにあたっては、その一輪の花は莟（つぼみ）のものでなく開のものでもない。また一葉も日裏でなく日表でもない。いわゆる、莟や開、裏

や表というような相対的な関係を超えたところにある、真なるものを感じとったものである。

「不生不滅　不垢不浄　不増不減　是故空中無色」という至言がある。一花一葉は、陰でもなく陽でもない、静でもなく動でもない、死でもなく活でもない。すなわち「空性」である。空性は、実体から形、音、味、触覚、匂いといったすべての「属性」を取り除いたものである。詮ずるに、これは「未生」と捉えることができる。はたして、このような概念のものは実在するのであろうか。何の要素もはらまないものは、完全な無ではないのか。

すべての現象それ自体も、究極的には存在することはない。空性とは、存在するとか存在しないといった言葉で判断されるものではなく、ただ静かに息づいた状態のものである。すべてのものは、ここより生じ、そしてここに帰っていく。これらのことは、草木と共に土に還ったときにようやく解るものなのかもしれない。

15 徳相　貧相　閑静

未生挿花に「徳相・貧相・閑静」の花というものがある。「徳相の花」とは万枝に障りなく勢いよく、用に満開、体に半開、留に莟を使って挿けたものである。すなわち「陽極まりて一陰生じる」が如くのものである。陽気は体から用、そして留へと移りゆく。半開より満開の状態に至って、陽が極まり極陽となる。そしてようやく次の莟が生じる。

「貧相の花」とは、柔らか味がないもの、また枝に勢いが強過ぎるもの、心を通わすことのないようなもの、さらに透き間が多くあるもの、寂しいものなど、全体的に調和がとれていないもの

を指す。すなわち、花が潜在的にもつ美を取り去ってしまうようなものである。

そして「閑静の花」とは、控えめに出た枝の中に強さを併せもつもの、また花葉が少なく風流なもの。枝葉を揉め曲げるにおいても、その姿全体が自然なものである。

以上、未生の理として未生挿花における理をいくつか述べてきた。何事においても原理原則がある。そしてそこから応用が生まれ、また変化が生じる。「守・破・離」という言葉があるが、「守」は原理原則、「破」は意識のもとで基本を破った応用、そして「離」は修行のすえ無意識のうちに離れ出た変化である。未生流の花矩の原則にのっとった上で、この「守・破・離」ということを念頭において花を挿けることが大切である。

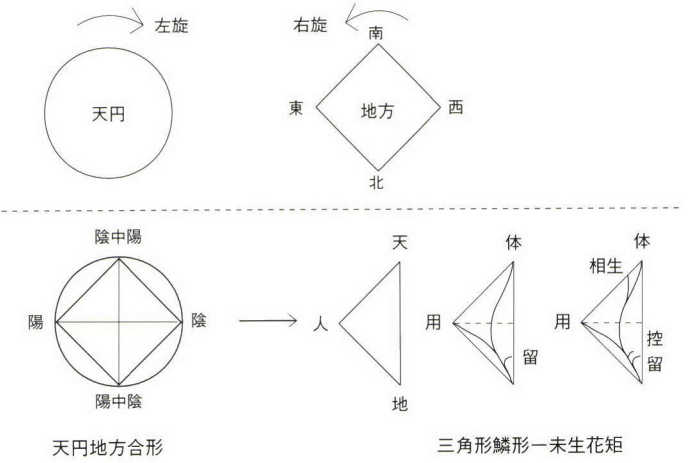
Lecture Ⅱ 未生花形

1 未生花形

未生流の花形には、三つの基本形がある。天円を現すところの円相体（内用）、地方を現すところの方形体（松竹梅・万年青七五三の一株扱い）、そして天円地方の和合を現すところの三角形の鱗形（三才格・五行格）である。そしてさらに、陽性である立姿・半立姿、陰性である横姿・半横姿があり、また花の姿も三体九姿と多様な相を現す。

三角形の鱗形の応用形としては、七曲と七曲によらない変化挿けがある。七曲とは、体流し・体後添流し・体前添流し・用流し・用添流し・留流し・控流しの七つの曲のことである。さらに変形のものとしては、分性体（飛用・飛留・送り添・地水火）がある。

花の出生を捉えて、未生という形として本来認識できないものを挿花として移しとる。花の姿は、その内奥に在る理と働きが作用した結果として生じたものである。よって、現象としての姿だけにとらわれては、形骸に陥ってしまう。花の形に捕えられるのではなく、ただそれらの形というものを感じることが大切である。



天円地方合形　　三角形鱗形ー未生花矩

2 天地人三才

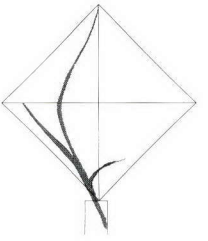
天を現す円と地を現す方形によって割り出した二等辺三角形の鱗を、上・中・下の三段に分け、上部の高い枝を天の位として「体」、下部の低い枝を地の位として「留」、この体と留との中間の枝を人の位として「用」と定める。このように、体・用・留という三才の格を構成するのが三才格である。

この三才格に対して、五行説に基づく五行格がある。五行とは天地の間にとどまることなく循環する五つの気（元素）である木・火・土・金・水のことで、この五元素より万物が生じたものと考えられている。三才格の「体」「用」「留」に、「相生」「控」の二つを加えて、万物生成のもととなる五行を現す。

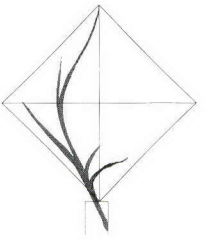
「伐りたる草木に、天地人三才の霊妙を備えて」「出生の本性を失わず、天円地方の理に随い挿し上げたる処は、即ち陰陽三才五行ことごとく備わる」と伝書にある。自然の草木がもつ出生に準じて、天円と地方が和合することで生じた二等辺三角形の花矩に収める。ここに、自然の出生と花形の調和、つまり虚実等分の理がある。

一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生じるという。一なる「太極」が陰陽という相対的関係の「両儀」を生じ、「両儀」が天地人の「三才」を生じ、さらに「三才」が万物を生じるということである。天地人を三才というのは「天に運動の才、地に生成の才、人に考慮の才がある」ことによる。

このように挿けた花の姿を「皮・肉・骨」という三層でもって捉えたとき、上部は皮、そして



三才格



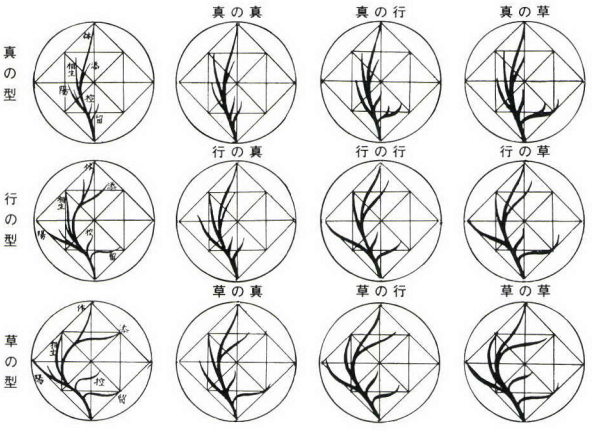
五行格

半ばは肉、また根元は骨であるといえる。この「皮肉骨」の三つを兼ね備えることもまた大切なことである。「体」の枝を弓なりに揉め、渦のように旋回させ、その流れを受けて「用」の枝で肉づけをする。また「留」下の根元は、骨にて一本にまとめる。

三才格の寸法・揉め方について以下に述べる。天の位である「体」は、挿けあがった寸法が、寸渡の口より、寸渡の高さの二倍半程度となるように定め、その真ん中を中心にして上下一握り程度を弓形に揉める。そして体の枝先と根元が、垂直線上となるようにする。人の位である「用」は、体の長さの三分の二程度に寸法を定め、その真ん中より少し下あたりの位置を揉める。そして用の枝の先端が、体の高さの真ん中になるようにする。主位の場合は、用の枝先が敷板の左前角の方向へ向かうようにする。地の位である「留」は、体の長さの二分の一程度に寸法を定め、寸渡の口から寸渡の直径の寸法あたりの位置を揉める。主位の場合は、留の枝先が敷板の右前角の方向へ向かうようにする。そして、寸渡の口の寸法分程度の枝葉を下方より取り去る。

天の位である「体」は上方へと昇華し、地の位である「留」は横へと出て下方を固める。そして、人の位である「用」は斜方に伸び、陰陽和合、中庸を示す。

五行格は、三才格の「体」「用」「留」の役枝に、「相生」と「控」の二つの枝を加える。「相生」は体より少し短い目の寸法に定めて、体の枝が一番よく揉まっている部分まで体に添わせ、そこから徐々に離していくように挿ける。そして挿けた相生の枝先が、体と用を結んだ線上に位置するように定める。この相生は「添うて不添」、添うて添わずのものとする。つまり体に添うようで添わない、しかしやはり体に添っていく。このような姿をもつものが相生である。また、「控」は留より少し短い目の寸法に定め、留の揉め口より少し上の位置を揉める。主位の場合は、控の



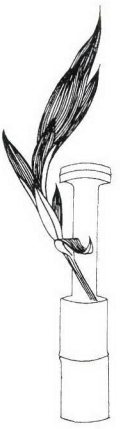
三態九姿

枝先が敷板の右後角の方向へ向かうようにする。そして、寸渡（ずんど）の口の寸法分程度の枝葉を下方より取り去る。

体・用・留の三つの役枝でもって天地人を現す三才格に対して、五行格は、相生（あいおい）と控の枝を加えて、木・火・土・金・水という万物生成の源である五行を現す。木は留、火は用、土は体、金は相生、水は控と、五行格の役枝が五つの元素である木・火・土・金・水にそれぞれ相応している。

天と地は交感・交合を繰り返し、天上には太陽（日）・太陰（月）・五惑星が生じ、地上には五元素が生じて輪廻・交感を繰り返し、さまざまな物質が生じていったといわれている。五行には、五行相生（そうしょう）と五行相剋（そうこく）という二つの働きがある。木は火を生じ、火は土を生じ、土は金を生じ、金は水を生じ、水は木を生じる。この五元素が互いに相生じる働きが五行相生である。木によって火が燃え、火によって生じた灰は土に還り、土は鉱物である金を生み出し、金属は冷えることで水滴である水を生じ、水は木を養うということである。

また、五元素は互いに生じ合う一方で、互いに剋し合う。これを五行相剋という。木は土の栄養を吸い取り、土は水を堰き止め、水は火を消し去り、火は金を溶かし、金属である金は木を伐り倒すということである。この五行相生と五行相剋という大きな働きを感じることで、体・用・留に加える相生（あいおい）と控のことを知ることができよう。



『葉組の巻』 真の挿け方

『葉組の巻』 行の挿け方

『葉組の巻』 草の挿け方

3 三体九姿

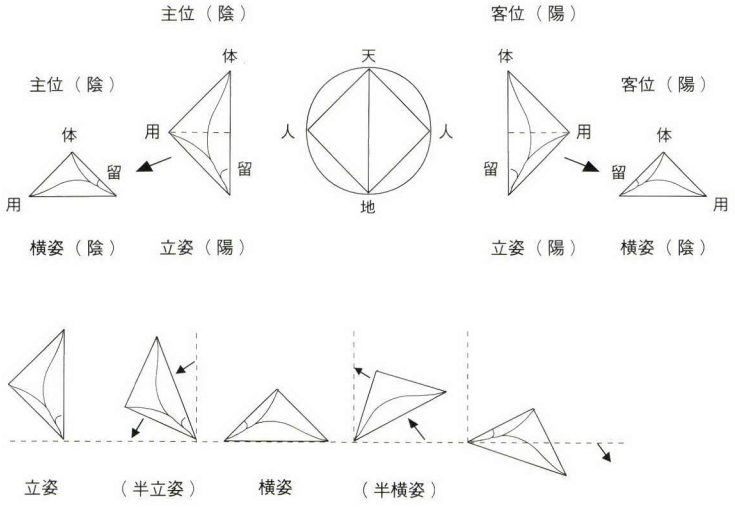
天地人三才（三才格・五行格）の基本花形は、三体九姿という変化した姿をもつ。三体とは真・行・草のことである。九姿とはこの三体をさらに三つに分け、真の真・真の行・真の草、そして行の真・行の行・行の草、また草の真・草の行・草の草と、九つに分類したものである。この三体の真・行・草は、「真は行を生じ、行は草を生ず。真は人の立つがごとく、行は人の行くがごとく、草は人の走るがごとし。いまだ立たずして、能く行き、能く走るものあらず」という中国の言葉からきたものである。端正厳格なものを真とし、少し崩して柔らかみをもったものを行とし、また大いに崩して柔らかみをもったものを草とする。

「幹となる体」の曲がりの具合いによって、直立したものを真体、少し変曲したものを行体、そして大きく変曲したものを草体とする。また「幹となる体から出る枝」の分岐の具合によって、さらに真・行・草と分けていき、合わせて三体九姿となる。

真の姿は、体の枝に花葉が多く茂り、その姿は暖に籠る風情を備え、用と留を軽々と直にして挿けたものである。行の姿は、天と地に枝葉を閑静に使い、半ばに花葉を多く挿ける。そして草の姿は、半ばより下に花葉が多く、根元に風流を備え、水際を涼しく挿ける。

真の真は、幹となる体、その体より生じる枝ともに真なる姿のものである。行の草は、幹となる体が行の姿で、その体より生じる枝が草の姿のものである。また草の真は、幹となる体が草の姿で、その体より生じる枝が真の姿のものである。

地にある草木を、三体九姿という大きく九つに分けた姿は、大地の数員である九によるところ

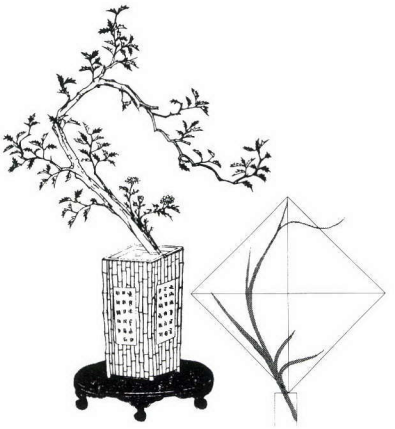


のものである。形として無いものを、形に求めるところに未生がある。このことを失念してはならない。

4 立姿横姿　主位客位

天を現す「円」と、地を現す「方形」によって割り出した二等辺三角形の鱗形（うろこ）は、「天」と「地」の間にある形あるものすべての形成の源である。そして、この万物の基盤といえる二等辺三角形の鱗が、そのまま未生挿花の形となっている。この鱗形は、陰性のものと陽性のものの両極に分けることができる。

二等辺三角形の花矩（はなかね）には、陽性である立姿（半立姿）と、陰性である横姿（半横姿）がある。花全体の形や花器に応じて、立姿（半立姿）・横姿（半横姿）と、花の姿の基となる鱗が変化する。また、主位（陰）と客位（陽）という両極の姿がある。主位の花は、陽より陰を指して出る「陰中陽」の花である。花全体の姿は体より留へと右旋する「陰」であるが、その中心となる体は「陽」である。したがって、体の枝は「陽」に基づいて、足許より左旋に揉める。一方、客位の花は、陰より陽を指して出る「陽中陰」の花である。花全体の姿は体より留へと左旋する「陽」であるが、その中心となる体は「陰」である。よって、体の枝は陰に基づいて、足許より右旋に揉める。左旋・右旋は天地にあるものすべてが持つ性質であり、陰陽寒暖が旋回することで生じる現象である。



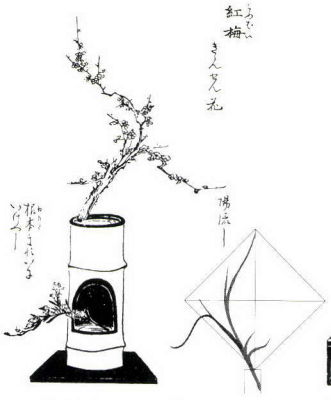
『献備千歳花』 体流し

5 七曲

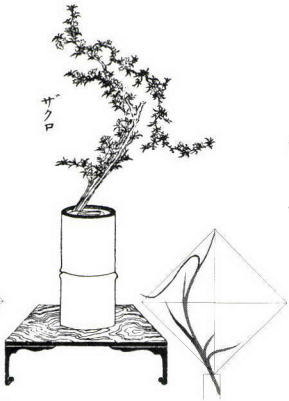
七曲とは、天地人三才の鱗に納まらず、それより溢れ出た枝の扱いである。基本の花形から、一本の枝が変化をもって長く流れ出した姿で、この流し方の基本的なものを大きく七つに分けて七曲という。自然の枝ぶりで面白く変化したものを生かすものであり、風流な枝は切ってしまわず臨機応変に、その溢れ出た枝ぶりを餘性（よせい）として活かして使う挿け方である。餘性とは万物の真理に通じる、未生という本質が溢れ出たものである。

この七曲には、「体流し」「体後添流し」「体前添流し」「用流し」「用添流し」「留流」、「控流し」とある。七曲で挿けるときには、一つの枝に変化をつけるので、残りの枝には曲をあまりつけることなく、一つの曲枝を強調するようにする。以下に「七曲」の詳細として基本的なところを述べるが、風流な枝を伐るには忍びないという考えから、この「七曲」があるということを失念してはならない。以下に述べることは基本のものとして、その風雅ある枝振りによって、挿ける花の姿を変化させることが大切である。

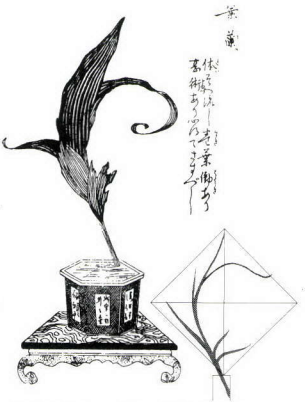
「体流し」は、体の枝が後方より大きく曲をもって流れていくものである。このとき、体の枝そのものが流れ出るものの、その分かれ目にも枝があって、仮体（かりたい）すなわち仮の体として立ち上がるようにする。仮体は体の常の位置に定め、この仮体と体流しの枝との分かれ目は、仮体の枝先より五分の一程度の位置とする。体が右後方に流れ出るため、体前添は左右のバランスを取りながら、重心が一方に傾かないようにする。次に、用は前後の添をつけて肉づきをよくする。留はやや短くして常の位置に挿け、深く揉めずに体の流し枝を受けるような感じでもって挿ける。短



『生花玉かつら』 用流し



『伝書四方之薫』 体前添流し



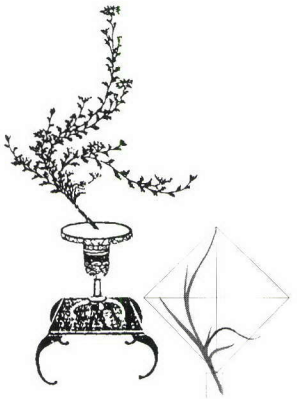
『生花玉かつら』 体後添流し

めにする留とのバランスを考えて、控もやや短めに定める。なお、相生は常の通りとする。

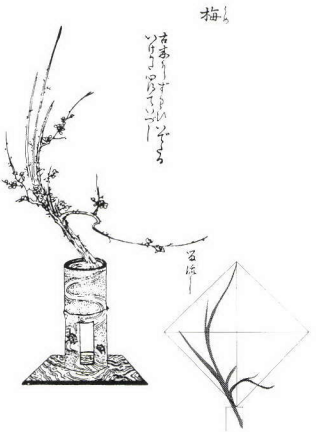
「体後添流し」は、体の後添の枝が大きく曲をもって流れていくものである。この体後添は、体の枝先から上三分の一程度の位置から曲をつけて大きく揉めて流す。そして、その枝先は上方へと勢いづけて挿ける。用は常の通りに、もしくは少し短めに定めて、左右のバランスを取りながら添の枝でもって肉づけをする。また、留は枝先を短くし、軽く受けるような感じでもって、少し前に振り寄せて挿ける。なお、体・体前添・相生・控は常の通りとする。

「体前添流し」は、体の前添の枝が重なることのないように用の上を通って、大きく曲をもって流れていくものである。その姿から、別名で「相生流し」ともいう。体の枝は常の通りとし、曲をもって流れ出る体の前添は、体の胸（体の先より上四分の一程度）のあたりまで体と同一に揉め、その先は反対の外側の方に折り返して十分に揉める。このとき、体後添は左右のバランスがとれるように考えて挿ける。次に、用は常よりも短く控え目に定めて、用の先を少し手前か向こうに振るようにする。相生も常より小さくし、体前添の流し枝と交差しないようにする。留は、体前添の流し枝とのバランスを考え、少し張り出して挿ける。また、用を常よりも低くしているので、控もこれに合わせて常よりも少し低い位置より揉める。

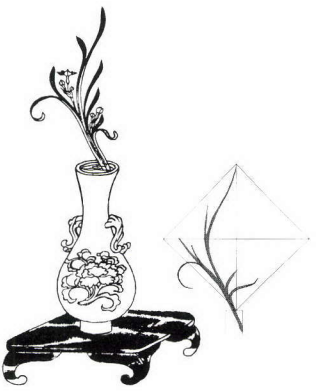
「用流し」は、用の枝が長く前方に曲をもって流れていくものである。まず、この流れ出る用流しの枝をはじめに挿ける。そして常の用の位置に、仮の用である仮用を軽めに挿けて、前後の添をつけて肉づけする。この仮用と用流しとの分かれ目は、仮用の枝先より上五分の一程度の位置とし、用流しの枝先は立ち上がるようにして挿ける。体は常の通りに挿け、流し用とのバランスをとるため、留はあまり下がらないように受け留にする。相生・控は奥行きをつけて肉づけする。



『四季之栞』　控流し



『生花玉かつら』　留流し

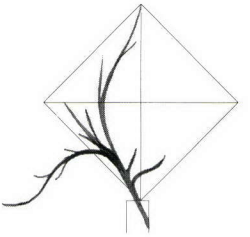


『挿花蓮の香』　用添流し

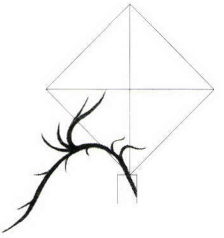
「用添流し」は、用の枝が勢いよく伸び上がったものの、その力を失って下方へと垂れ下がった状態で用添となり、その次に生じた枝が用の位置に定まったものである。用の下の用添の枝が前方に曲をもって流れ出て、そのまま力強く下方に伸びていく。用の下の風情ある枝が内側に流れでるように挿けるものであるが、枝ぶりによっては外に伸びるようにして挿けてもよい。このとき、流し枝は「用流し」のときよりも、低い位置（用の上より三分の一程度）のところから用より分かれていくようにする。また、体・用・相生・控は常の通りに定めるものとする。そして、留は左右のバランスを考えて、左右両方に下がることのないように受け留とし、枝先をあまり下げないように力強く起こし勢いをつけて挿ける。この「用添流し」は、行体・草体を基本とする。

「留流し」は、留の枝が長く斜め前方に曲をもって流れていくものである。体・相生は常の通りに挿け、用は常より少し短めにして、その枝先が立ち上がるように揉めて勢いをつける。常の留の位置には、仮の留である仮留（かりどめ）を軽めに挿ける。そして、留流しの枝は常の留よりも長くして挿ける。この留の揉める位置は、体の枝下から五分の一くらいと、常よりも足許を長めにしてすっきりとさせる。留が流れ出るため、用と留との間が抜けて見えることのないように、控は留の分かれ目近くに挿ける。

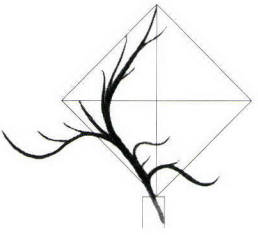
「控流し」は、控の枝が体の胴の部分から後方より、大きく留の方に向かって勢いよく伸び、その枝先が留の方に向いた姿のものである。その姿から、別名で「洞（ほら）流し」ともいう。この「控流し」は行体・草体を基本とし、よって用・相生も力強く挿ける。体は常の通りとする。そして、流しの控を邪魔しないように、留は前方から小さく短めに受け止めるようにして挿ける。また、仮の控は軽い感じにして、常より少し高い位置から揉める。控流しの枝は体の後方から挿け、枝



華やかな用流し



遠山



書院

を留の方向に向かって前向きに揉め、先を上に向けて勢いをつけて挿ける。このとき控の枝が留の上部後方で、前方に流れるようにして、上から見たときに流し枝と留とが半円を描くような形となるようにする。

6 七曲によらない変化挿け

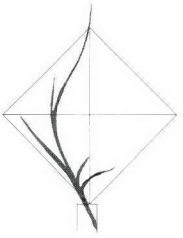
未生流の花形の基本となる三角形の鱗形の応用形としては、「七曲」「七曲によらない変化挿け」がある。ここでは七曲によらない変化挿けとして、「華やかな用流し」「遠山」「書院」「生け登し」「裏体（逆体）」の花形について述べる。「守・破・離」という言葉がある。ここで述べる花形は、修行のすえ無意識のうちに離れ出た変化「離」であるといえる。

「華やかな用流し」は、七曲の中の「用流し」と同じように、用の枝が長く前方に曲をもって流れていくものである。しかし、その姿は七曲のものよりも特に華やかで「家元好みの用流し」ともいう。仮用を常の用の位置に挿け、これに前後の添をつけて肉づけする。用流しの枝は、体の寸法とおよそ同寸と長く定め、体の下より三分の一程度の位置より体から分かれ、一度上に少し上がってから大きく流れ出るように挿ける。その枝先は立ち上がるようにして、軽い枝を仮用との間に適宜添えていく。なお、体・留・相生・控は常の位置に定め、特に華やかな姿に挿ける。

「遠山（えんざん）」は、遠方の山々が連なる景色を見てとるような心持ちで挿けるものである。七曲の「用流し」よりも低い位置で用を揉め、流し枝は花器の下方の位置まで流れて、その先は立ち上がるようにする。そして仮用を入れて、また用の添を多く入れて十分に肉づきをしていく。体の長さ

『葉組の巻』 裏体（逆体）

『葉組の巻』 生け登し



生け登し

は常よりも一段と低くし、草の姿として大きく揉め、その枝先は水際を離れて主位の場合は花器の左縁の位置にくるようにする。また、相生は体・留・控に合わせて十分に揉めて挿ける。

「書院（しょいん）」は、三体九姿の「草の草」を基本として、体・用・留ともに充分に大きく揉めて挿けたものである。全体に華やかな感じの形であり、花材を十分に使って、華やかさとボリュームを出して挿ける。大きく草の姿に揉めて挿けた、体と用と留の三つの役枝を結ぶと、およそ正三角形に見えるように、特に派手な姿に挿ける。用は前後に添を十分に入れ、控・留は特に奥行きをつけ、用・留・控の枝ともに常よりも長めにして曲線をゆったりとつける。また、全体が草の形なので、相生もそれにあわせて大きく揉めて体に添わせて挿ける。体前添・体後添・用前添・用後添・留と控の間の添と、全体に添の枝を充分に入れ、それぞれのつながりをもたせるように挿けあげる。

「生け登し（いけのぼし）」は、体の枝が常の位置よりも上方に伸び上がった形をいう。常のときの寸法は「体割の法」によって定める。花器の下から体の先端までを三つ割りにして、下から一分を花器に、そして残り二分を花の寸法とする。たとえば人体においては、膝で折れ、腰で折れて三段となる。膝より下までを花器の寸法とし、残り二分を花の寸法として「二丈（ふたたけ）の性気」を通わせる。このとき、実際には器の高さの二倍半と少し高くして挿け、頭と捉えることができる半空を加える。そして、この半空がさらに上方へと立ち上がった姿が「生け登し」である。頭つまり内に秘めるものが、高らかに伸び上がった姿が「生け登し」であるといえる。

「裏体（うらたい）（逆体（ぎゃくたい））」は、最も高く用いる体の、裏を手前にして用いる挿け方である。このとき、体後添は、表を手前にして釣り合いを保つ。草木の葉裏に陽気を備えているのが自然にして和合

である。葉裏はもともと日表であり、その葉裏に陽気を感じてこそ陰陽和合がある。この「裏体」は、葉の裏に潜む美を強く感じとって挿けるものである。

7 円相体

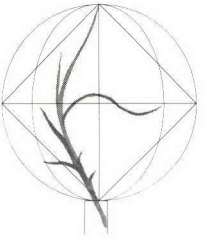
未生流の花形には、三つの基本形がある。天円を現すところの円相体、地方を現すところの方形体、天円地方の和合を現すところの二等辺三角形の鱗形である。

そして、以下に述べる「内用」のみが円相体に属する。天円は太極という万物の根源を現し、この円相に収める花形である「内用」は最上のものである。よって「太極の挿け方」とも呼ばれている。無限に尽きることなく、生々流転する未生自然の理に通じるものであるといえる。円相体といっても空間の中では球形となり、よって立体的に挿けることが求められる。なお「真・行・草」の「草」の姿では円相が円形となるが、「行」の姿においては楕円相となる。

「内用」の挿け方として、内用は内用前留ともいうように、まずはじめに前留（まえどめ）を常の用の下側の位置に挿ける。この前留は円相に内接するように大きく揉め、その足許は常の留よりも少し高い位置とする。後に挿ける内用の枝の変化に応じて、均整を持たせることが肝要である。次に、常の用の位置に小さめに軽く仮の用となる仮用を挿ける。この仮用は円相に内接することはない。そして、体は常の位置に挿ける。

この花形の中で最も際立った枝である内用は、奥行きの関係においては、体の後ろより後方に回して後に再度前方に大きく振り出し、枝の先端が球に内接するところまで揉める。一方、上下

『生花玉かつら』 内用


内用

『挿花浪速之花』　内用

の関係においては、一度上方に立ち上げ、一旦下げて後に再度立ち上げて、枝の先端が体の中心の高さに戻るように揉める。最後に、仮留は常の留の位置に短く軽く、少し前方に振り出して挿ける。また、控も同様に小さく軽めに挿ける。

この内用の花形は、円相の半分の空間の中に、内用の枝がもつ美が生じるように挿けあげ、全体の姿から円相・球を感じとれるようにすることが肝要である。

8 方形体

方形体には、「万年青（おもと）七五三の一株扱い」と「松竹梅」の挿け方がある。ともに、正月や婚礼の際の花として挿けられるものである。

まず、「万年青七五三の一株扱い」の挿け方について述べる。万年青は、その緑のすこやかな葉と赤い実で喜びを現し、正月や婚礼の花として用いられる。十五葉を三株に分け、七葉一実、五葉一実、三葉とでもって、七・五・三の伝としている。七枚の株は盛んな子株、五枚の株は隠居した親株、そして三枚の株は将来の発展を期する孫株であり、このように三代が同時に揃う子孫繁栄おめでたいものである。これは、陰陽・万物流転する未生の本質に通じるものであるといえる。

万年青の出生は、はじめに二枚の葉が向かい合って出て、その中よりまた二枚向かい合って出る。このため自ずと中から生じる葉が新しい出生葉となる。この四葉は東西南北を指して開いていく四方葉である。またこれより三葉が生じ、七葉になると花が生じる。花は五月頃に咲き、十

『伝書四方之薫』　万年青七五三（株分け）

万年青七五三（一枚扱い）

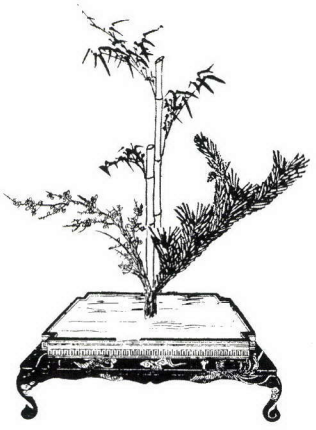
二月頃には青い実が赤く色づく。七枚ではじめて花を開き実を生じる出生から、実は七枚以上の場合においてのみ使う。ただし、万年青七五三に使う五枚葉は、成長途上ではなく、成長後の隠居した親株の意味をもつ五枚葉であるため、この万年青七五三を挿けるときには、五枚葉にも実を使って挿ける。

実の上にあって霜から実を守る霜囲いの葉（体後添の葉）、そして実を風から防ぐ風囲いの葉（用添の葉）、また実を抱えて実を守る実囲いの葉（留の葉）、砂・泥から実を防ぐ砂囲いの葉（控の位置）・泥囲いの葉（留後添の葉）は、それぞれに実を守る役目を成している。

十五葉の組み方は、七葉・五葉・三葉の三株を一つに寄せて、実は二本使って挿ける。まず、盛んな子株を現す七葉一実（立姿）の株として、先端が丸みを帯びた二年目の葉を体と用に用いる。次に、体と用の間に先端が尖った一年目の葉を体添・用添として出生葉を二葉それぞれ使って挿ける。出生葉は葉の見えない下部分を大きくそぎ取って使う。そして、用前添（留が転じたもの）に風囲いの葉を、体後添に霜囲いの葉を、控の位置に砂囲いの葉を使う。この七枚葉の体・用は、「万年青七五三の一株扱い」全体の体・用の扱いとなる。

次に隠居した親株を現す五葉一実（横姿）の株として、先端が丸みを帯びた二年目の葉を体と用に、特に広く丸みを帯びた三年目の葉は留に用いる。また体と用の間に、先端が尖った一年目の葉を体添・用添として出生葉をそれぞれ二葉使って挿ける。この横姿の五枚葉における用は、「万年青七五三の一株扱い」全体においては留の扱いとなる。

最後に、将来の発展を期する孫株を現す三葉（立姿）の株として、体・用・留と若い一年葉を使って挿ける。伝書に、実囲い三葉にて根元を包むとされているのがこれである。



松竹梅

次に、「松竹梅」の挿け方について述べる。高位高官の御方の婚礼の際には、注連の伝の「松竹梅」を挿けると伝書にある。また正月にも、この「松竹梅」を物事のはじまりの、めでたい花として挿ける。

花器は薄端または広口を使い、まず中央に伐竹を二本使って挿ける。長い陽の竹には三節二枝を備えて、先は大斜に伐る。そして短い陰の竹には二節一枝を備えて、先は平に伐る。このとき竹の大斜の伐り口が、平の伐り口と向き合うように調和して挿ける。節の間が短いときは、陽の竹に陽数（奇数）の節と陰数（偶数）の枝を備え、陰の竹に陰数（偶数）の節と陽数（奇数）の枝を備えて扱ってもよい。長い竹は陽中陰、一方、短い竹は陰中陽である。陽の中に芽生える陰を感じとり、また陰の中に芽生える陽を感じとる。つまり、この中に腹籠という、視覚では捉えることのできない、未生の存在を見てとることができる。

そして次に、明り口の方に注連の伝の松を挿け、床柱の方に注連の伝の梅を挿ける。竹を立姿に、松を半立姿に、梅を横姿とし、挿けあげた「松竹梅」全体の姿でもって方形体とする。最後に、足許は水引七本を相生結びとし、金は松の方に、銀は梅の方に出して用いる。この位置としては、水際より七寸程上である。

松は元旦、竹は正月二日、梅は正月三日の花である。この三日の花を一つの器に挿け、三則一に帰する。すなわち、この「松竹梅」は天円地方和合の姿であるといえる。「松竹梅」という三才の現象を、一なる本質に帰せしめる。この松竹梅は「歳寒三友」とされている。松は千年の緑を尊び、竹は万木千草に勝れて成長が早く、梅は百花にさきがけて最も早く咲く。昔、晋の武帝が学問を怠ったときには梅の花が咲かず、励んだときには開花したという故事から、梅には好文

木という名がつけられ、「三元の冠花」花中の君子として尊ばれた。また古では、梅をもって花の総称とし、次いで桜を花の総称としてより後には、この梅を花の兄と称した。

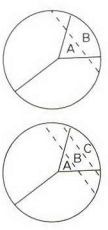
この「松竹梅」は、陽の司（松）と、陰の司（竹）と、そして三元の冠花（梅）の三つを一瓶のもとに挿け、めでたい最上のものである。よって、元旦、婚礼ただし高位高官に関してのみ挿け、軽々しく挿けてはならないとされている。

9 分性体

分性体とは二つ・三つと花矩の部分が分離して、全体で一つの花矩を構成する挿け方である。このとき分離した花矩の間には一定の美妙な空間が生じ、各々は分離するものの互いの性が通い合うように挿ける。

この分性体には「飛用」「飛留」「送り添」「地水火」の四種類のものがある。用の格が、体と留の格から分離して二株となるものを「飛用」という。そして留の格が、体と用の格から分離して二株となるものを「飛留」という。また「送り添」は、体後添と留の格が、体と用の格から分離して二株となるものである。

「地水火」は、体・用・留と分離した三つの格がそれぞれ一株となって、全体で三株となる。諸木諸草にさまざまな姿があるのは、土と水と火の三気の影響によるものである。つまり「地水火」、大地の恵みである土と水、そして太陽の光を受けて草木は成長する。「地」と「水」と「火」の三つを「三光の枝葉」という。分性体の「地水火」は、この三光の恵みに想いを通わせて挿ける。



寸渡配り木

飛用

飛留

送り添

地水火

『挿花明之色』　地水火

『伝書四方之薫』　飛留（株分け）

なお、この分性体を挿けるときは、配り木を工夫する必要がある。株と株の足許に区割りの木を入れて、根元に空間を作る。そして、その空間が枝先にまで連なっていくように、各々の株を揉めて挿ける。

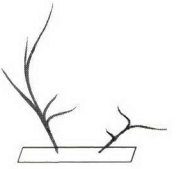
一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生じるという。一なる「太極」が陰陽という相対的関係の「両儀」を生じ、「両儀」が天地人の「三才」を生じ、さらに「三才」が万物を生じるということである。そしてまた、「一二三三二一」「一則三、三則一」「色則是空、空則是色」という至言がある。万物すべてのものは、一なる本質に帰っていくものである。一から二に、そして三へと展開していく現象も、自然に一へと収まっていく。二つ・三つと花矩の部分が分離する分性体ではあるが、その姿は一に通じるものとして捉える必要があろう。

10 株分け

「広口、馬盥の類に株分けて入るとき、木物ならば谷間といひ、草花ならば株を分るといふ。水草ならば魚道と唱ふべし」と伝書にある。株分けは広口に二株・三株と株を分けて挿け、性気の通いを注入するものである。つまり草花を何株かに分けて挿けるとき、その分けられた各々の株が互いに呼吸し合うように性気を通わせる。数多く挿けるときには、花を中心として株を作り、「二季の通い」を備えて挿ける。「二季の通い」とは、陰が陽に、陽が陰にと尽きることなく変化する様である。

この株分けには、「株分け」「谷間分け」「魚道分け」「水陸分け」の四つがある。またその変化

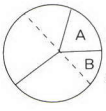
用下の株分け



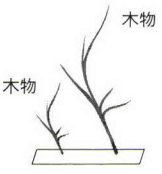
留下の株分け

飛留（株分け）

飛留（株分け）

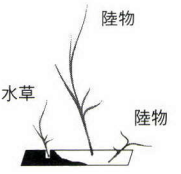


寸渡配り木（飛留）



谷間分け

魚道分け



水陸分け

挿けとして、株分けの「飛留」がある。以下にその詳細を述べる。

「株分け」は、草花のみ、また木物と草花を用いて株を分ける挿け方である。大株の用の方へ小株を挿けて「用下の株分け」としたり、また大株の留の方へ小株を挿けて「留下の株分け」としたり、さらに二種三種と株を増やして挿ける。

「谷間（たにあい）分け」は、木物のみを用いて株を分け、山峡にある谷間を見立てる挿け方である。この谷間には、雲がたなびいていたり、川が蛇行して流れていたり、日の光が一点に差し込んでいたりする。そのような美妙な空間をここに求める。

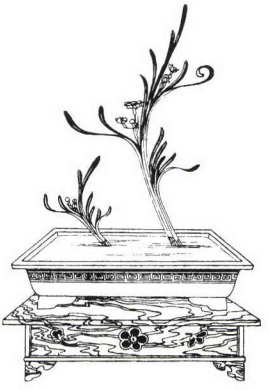
「魚道（ぎょどう）分け」は、水草のみで株分けにして挿け、その株と株の間に黒石で魚の通い道（魚道）をとる挿け方である。ここでの魚道は、人工的に作られたものではなく、自然が自ら生み出した道である。

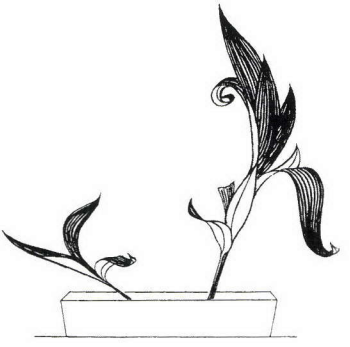
「水陸分け」は、陸物と水草を水陸に分けて挿けるものである。水草に陸物を応合い、また陸物に水草を応合うことは禁じられている。よって広口に陸物と水草を挿けるときは、石を使って陸と水辺とを分けて挿けなければならない。陸は白い小石・砂利でもって現し、一方水は黒い石・砂利で見立てて水陸を分け、陸物と水草を水陸に分けて挿ける。

株分けとしての「飛留」は、立姿の足元に横姿を挿けて、横姿を全体の留と見立てる挿け方である。この飛留は広口だけでなく寸渡を用いても挿ける。このときの立姿の留は、横姿を邪魔しないように軽めに挿ける。

未生挿花では、一本の立木の姿・一株の草花の姿に、それぞれがもつ自然の美を求める。根を違う草木は互いに交じわることはない。よって、根を違うものは株を分けて、「二季の通い」を注

『伝書四方之薫』　水陸分け


『挿花蓮の香』　用下の株分け


『葉組の巻』　留下の株分け

入するのである。

11 三方正面

挿花は、原則的には床の間に置くものであり、よって床の間に手をついて正面より拝見するものであった。また会席の花として座敷に並べるときでも、床の間と同様に正面から拝見するものである。

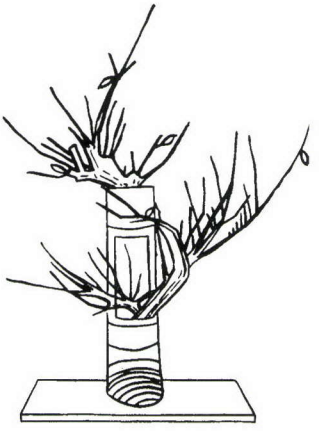
しかし、三方よりよく見える場所に挿けるときのために、正面からだけではなく、左右少し斜めの位置からでも美しい三方正面の花の挿け方がある。

この挿け方としては、正面より向こう側の背後に花葉を多く使う。つまり正面からは見えにくい「見隠（みえかくれ）」の花葉を多く使って挿けるのである。このとき、奥深い余情のこころでもって挿けることが大切である。左右より見たときにはよく見えるような後方の枝をうまく生かして、三方より見て枝の見切（みきり）などの禁忌がないように、法格に従って姿を整えて挿ける。

また留流しに挿けて、その向こうへ控えて使った枝が左右より見たときには、留流しであるのに留に見えるなど、後方の「見隠」の枝をうまく生かして挿けたりする。

12 抜け生け　打ち抜き

二重・三重の竹花器を使って、挿けた木が竹花器の中を抜け出るように見せる挿け方を「抜け



打ち抜き

生け」という。また、三重・五重の竹花器を使い、挿けた太い木が竹花器を打ち抜いていくように見せて挿ける手法を「打ち抜き」という。両者ともに、竹花器とそれを貫く木とが統一感をもって、全体の姿でひとつの木の姿を現す。

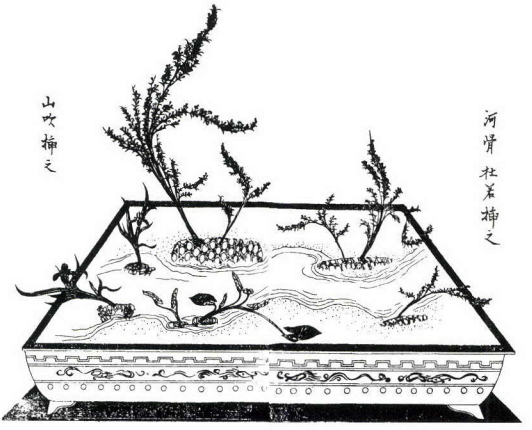
「抜け生け」を繊細な陰のものとして捉えるならば、「打ち抜き」は力強い陽のものと考えることができる。しかし、両者の挿け方は共に、繊細な中にも力強さ、また力強さの中にも繊細な面が感じとれるように、つまり陰中陽・陽中陰の様を含みとりながら挿けるものである。

全体の組み立てとしては、下口より上口へとつながりを持たせて考え、三重の場合は上口には横姿を、中口には立姿（半立姿）を、そして下口には立姿（半立姿）を挿ける。竹花器の下口の方に挿けた木を全体から見た根本の木、上口の方に挿けたものをその木の先端と捉え、下口より上口までが一本の木と見立てるように挿けあげる。そして全体の姿として、一本の木の姿に見えるように統一感をもたせる。

「打ち抜き」は、一本の古木が左右への曲がりをもって、竹花器の下口より上口へと貫いていくように扱う。そして、この古木にそれぞれ体・用・留と若枝を添わせて肉づけをしていく。このとき、古木も体・用・留の格をもったものにするのが好ましい。

古木は自然に曲がったものがあると使いやすいが、なければ、その自然な曲がりを人工的に作る必要がある。この古木には、松・桜・梅などの風情あるものがよく合う。また、これに添わせる若枝は、必ず古木と同じ種類のものを用いる必要はなく、宿り木として別の種類のものを使っても構わない。

Lecture Ⅲ　景色挿け 草木出生花材の扱い



『献備千歳花』　山吹　河骨　杜若

1 山吹　玉川の景色　挿け方

この玉川は、山城国の井手（現在の京都府綴喜郡井手町）にある、木津川に流れ込む小川のことである。奈良時代、井手の地は橘諸兄の管轄地で別荘があり、諸兄は井手の左大臣と呼ばれていた。この井手の玉川は、どうしたわけか水量が乏しく、そのため水無川とも言われていた。そこで諸兄は井手の玉川から庭に水を引き入れて、一面に山吹を植えた。それが玉川をはじめ、井手の邑に咲き誇るようになったので、いつしか山吹は井手の枕詞となり、多くの歌に詠われた。『新古今集』に収められている藤原俊成の「こまとめて　なほ水かはむ　款冬（山吹）の　花の露そふ　ゐでの玉川」という歌が有名である。

山吹玉川の景色は、この美しく流れる玉川に咲く山吹の情景を、広口に移しとったものである。水を現す黒の石と、陸を現す白の石を使い、流れの急な小川を表現するために、川を現す黒の石は斜めに取る。そして、蛇籠を二つ三つ用いて花を留める。蛇籠とは、丸く細長く粗く編んだ籠の中に、砕いた石などを詰めて、河川の護岸や水を防ぐものとして使われるものである。花留としての蛇籠は、中に砂や石を詰めて花を留めて使う。花留の蛇籠の寸法は、長さ九寸・差し渡し三寸六分の大きいもの、長さ八寸・差し渡し二寸八分の中のもの、また長さ七寸二分・差し渡し

二寸四分の小さなものと三種類あり、それぞれ広口に合わせて用いる。

山吹の花は、立姿と横姿を二株・三株・五株と、広口の大きさに準じて挿けていく。立姿の主株は、三才の飾り石の天石に位置するところに挿ける。一方、横姿の株は人石に位置するところに挿ける。山吹は、枝が横に広がる出生をもつ。立姿として程よい山吹の枝を見立て、自然の枝を生かしながら風流に挿ける。玉川の水の流れに咲く、山吹の美しさを愛でるこころでもって挿けるものである。なお、水揚げの悪い山吹を挿けるにあたって、その根元にアルカリ性のみょうばんを擦りつけたり、酸性の酒に浸すなどすると水揚げの効果がある。

この井出の玉川をはじめとして、歌枕としてよく詠まれる玉川には六つあり、合わせて六玉川（むたまがわ）とされている。三島の玉川・井出の玉川・野田の玉川・野路の玉川・調布の玉川・高野の玉川の六つで、それぞれの玉川の特徴を現した和歌や浮世絵がある。以下に詳細を述べる。

三島の玉川は、摂津国の玉川、現在の大阪府摂津市三島にある川で、別名「砧（きぬた）の玉川」と呼ばれている。「砧（きぬた）」とは布を柔らかくするときに使う木の台のことである。河畔で砧をうつ女性の姿などが、浮世絵に描かれている。また、「みわたせば　なみのしがらみ　かけてけり　うの花さける　たまがはのさと」（『後拾遺集』）、「松風の　おとだに秋は　さびしきに　衣うつなり　玉川のさと」（『千載集』源俊頼）のように、卯の花や衣を打つ様子が詠まれた歌が多く残っている。

井出の玉川は先ほども述べたが、山城国の玉川、現在の京都府綴喜郡井出町を流れる川である。山吹の名所であり、山吹の咲く浅流を乗馬する様子などが浮世絵にも描かれた。「こまとめてなほ水かはむ　款冬の　花の露そふ　ゐでの玉川」（『新古今集』藤原俊成）、「かはづなく　ゐでの山吹　ちりにけり　花のさかりに　あはましものを」（『古今集』読人不知）などの歌が詠まれ

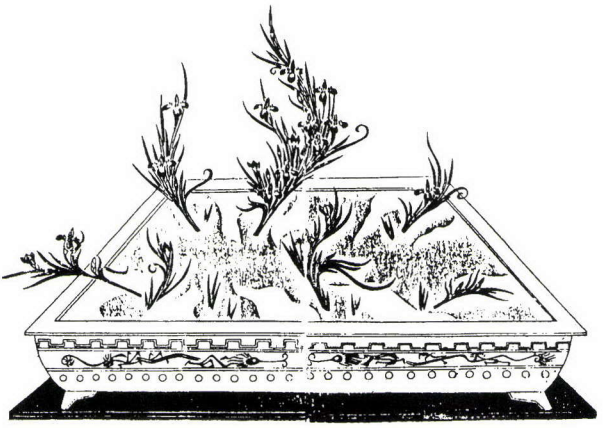
ている。

野田の玉川は、陸前国の玉川、現在の宮城県宮城郡母子川の末流で、別名「千鳥の玉川」と呼ばれている。砂浜を飛ぶ千鳥の群れなどが、浮世絵に描かれた。また、「ゆふされば　しほ風こして　みちのくの　のだの玉河　千鳥なくなり」（『新古今集』能因法師）など、絵と同様に千鳥や潮風の様が多く詠まれている。

野路の玉川は、近江国の玉川、現在の滋賀県草津市野路にある。琵琶湖に注ぐ小川で、別名「萩（はぎ）の玉川」と呼ばれ、旅人たちの憩いの場だったといわれている。萩の花の咲く川に、月を投影した様子などが浮世絵に描かれた。「あすもこむ　野ぢの玉川　はぎこえて　色なる浪に　月やどりけり」（『千載集』藤原俊成）など、萩の花を詠んだ歌が多い。

調布の玉川は、武蔵国の玉川、現在の東京都調布市の多摩川である。綿織物の名産地で、女性が河畔で布さらしをしている様子などが多く描かれている。また、「てづくりや　さらすかきねの　朝露を　つらぬきとめぬ　玉川の里」（『拾遺愚草』藤原定家）、「多摩河に　晒す手作り　さらさらに　何ぞこの子の　ここだかなしき」（『万葉集』東歌）等の歌が詠まれた。この歌の中の「手作（たづく）り」とは、綿で織った布のことで、それを川にさらしている様子が多く詠まれている。

高野の玉川は、紀伊国の多摩川、現在の和歌山県高野山奥院大師廟畔の小流である。死者生前の罪業を払う、流れ灌頂（かんじょう）が行なわれる川である。浮世絵としては、高野山中の渓流などが描かれている。また、「忘れても　くみやしつらん　たび人の　たかののおくの　たま川の水」（『風雅集』伝弘法大師）の歌が詠まれている。



『からころも』 杜若　八ツ橋

2 杜若　八ツ橋の景色　挿け方

「むかし男ありけり」の出だしで有名な『伊勢物語』に、京の都を追われて鎌倉に下るようにと、左遷を命じられた在原業平のことが描かれている。在原業平は東下りする途中に「八橋」という地（現在の愛知県知立の東部）を訪れた。「ここを八橋と言ひけるは、水行く河の蜘蛛手なれば、橋を八つ渡せるなり」と伊勢物語にある。その八橋の逢妻川の辺に、杜若が美しく咲いており、旅の一行の一人が「かきつばた」の五文字を読み込んで旅の心を歌にするよう業平に促した。そのときに詠まれた歌が、「から衣　きつつなれにし　つましあれば　はるばるきぬる　旅をしぞ思ふ」である。その意は「旅を続けるにつけ、唐衣の褄が次第に身に柔らかく馴じんできた。この唐衣のように慣れ親しんだ都や、都においてきた妻のことを想うと、なんと侘しいものか。ほんとに遠くはるばる来てしまったものだ」というものである。この在原業平の気持ちを察した、旅の一行の者は涙したといわれている。この故事を偲び、このときの杜若の情景を表現する。

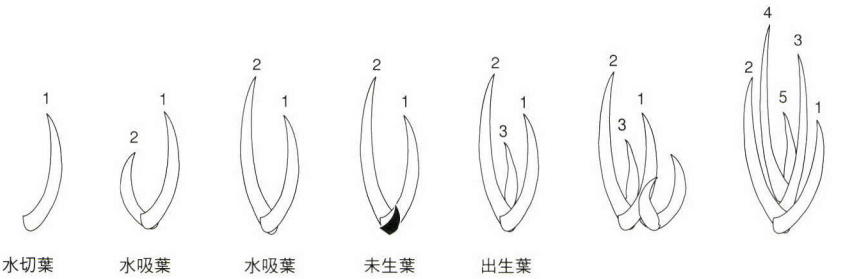
小さな広口に黒白の砂利をもって川を取り、八ツ橋の景色を移しとる。このとき黒は陰を現す水、白は陽を現す陸地と考える。まず、広口の真ん中に大川をとる。大きな川ではあるが、非常に流れの緩やかなものであるため、よって真横に幅広く黒石で現す。ちなみに縦に川をとれば、急な川の流れを現すことになる。そして大川の左右に、蜘蛛の手のように川が集まった四川の支流を作る。この大川を挟んでできた八川に、橋が架けられているかのように杜若を挿けるのである。この景色を移しとれば、杜若の数は少なくとも構わない。

杜若は、それぞれ岸の方に寄せて挿けていく。まず、三才の飾り石の天石にあたる位置に大株

を挿ける。花は五輪以上、手練にしたがって二十五、二十七輪も使い、花は一花三葉の心でもって挿ける。そして大株の後より広口の中央に向かって、蜘蛛の巣とぢ葉三枚を水を潜らして出す。この上に半開一輪、追葉二枚を加えて五葉一花の横姿とする。蜘蛛の巣とぢ葉は、蜘蛛の手の如く広がる川の景色を受けたもので、追葉二枚（太刀葉・冠葉）は、冠をつけ太刀を帯びていた在原業平を現す。そして半開一輪は、このときの業平の心を察するものである。また、留の方に水吸葉の二枚を加える。

追葉（太刀葉・冠葉）に関しては、以下に詳しく述べる。杜若は、寒厳しい冬の地中にあるとき、葉が花を冠包んで守っている。そして春の萌しを受けて地上に生じたとき、花を冠包んでいた葉が長く伸び、垂れ下がったり、斜上に立ち上がったり、また真横に伸びたりと曲の姿となる。この花茎についた葉のことを「冠葉」という。そして、冠葉よりは新しい葉で、花茎の一番上についた葉を、その立ち伸びた姿をもって「立葉」「太刀葉」という。これは『伊勢物語』の「八橋」の故事に登場する在原業平が、冠をつけ、太刀を帯びていたことに由来するものである。この「太刀葉」「冠葉」は花茎についた葉であるため、形を整えにくい。そのため、他の長い葉を別に用いて、「太刀葉」「冠葉」として長葉を入れる。これを追葉という。すなわち、これは「虚」の挿け方であるといえる。多く体の後ろに用いたり、また八ツ橋の景色挿けにおいて、蜘蛛の巣とぢ葉三葉と合わせて太刀葉・冠葉の追葉二葉を使うのがこれである。

さらに冠葉には、露流葉（下に垂れ下がったもの）、露受葉（斜上に立上ったもの）、露止葉（真横に出たもの）と三通りのものがある。秋の杜若を挿けるとき、花を葉よりも高く用いるが、花茎に実の姿の「太刀葉」「冠葉」を花茎に残したまま使うこともある。これは、すなわち「実」



出生　実による葉組

の挿け方であるといえる。

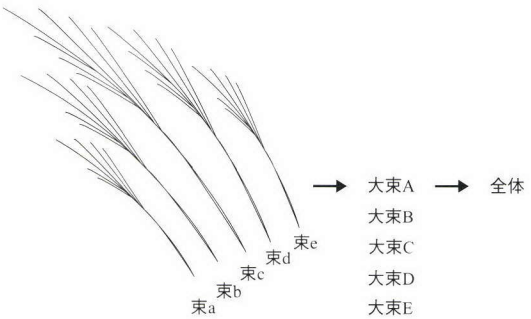
続いて八ツ橋の挿け方として、七葉二花の立姿、五葉一花の立姿、七葉二花の横姿と都合五株を、向こうと手前の川に景色よく挿けていく。そして、その間々に若芽を一・二・三枚と組んで、水切葉・水吸葉・出生葉を挿ける。一枚の若葉を用いる「水切葉」は、水を切って生じる成長初期の葉、そして二枚の若葉を用いる「水吸葉」は、水を吸って成長する成長途上の葉である。さらに成長して、二枚の若葉を用いる「未生葉」は、未だ生じてはいないが、今まさに生じようとしている瞬間的な未生の葉を内にはらむ。そして三枚の若葉を用いる「出生葉」は、三葉目の芽吹葉が視覚のもとに生じている。無形の本質を有形の現象でもって現す、未生の理に基づいて杜若の葉組を為す。

この八ツ橋の景色挿け方は、在原業平の心を感じながら、八ツ橋の情景を移しとって挿けることが大切である。

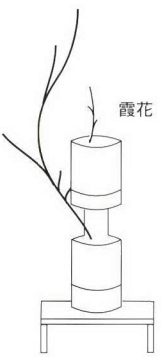
3　遠山霞花の景色　挿け方

微細な水滴が空中に浮遊して空がぼんやりして、遠方がはっきりと見えなくなる春の現象のことを霞という。またそのような秋の現象のことを霧という。霞は、穏やかな春の日の明け方や夕方ごろによく生じる。そして夜は、朧となる。季節の相を現す七十二候では、新暦二月二十四日頃を「霞始靆（かすみはじめてたなびく）」として、霞が春景色を彩りはじめる頃としている。

この遠山霞は、霞が遠方の山々に帯状にかかって、おぼろげな雲のように見える景色を移し



銀柳 米柳 数挿け



遠山霞花の景色

とったものであり、よって春に挿けるものである。二重切もしくは三重切の花器を使い、上口には草花を挿け、下口には木物を上口の花よりも高く挿ける。

まず、上口に挿ける草花は、山の上に咲く草花を山の下より見上げたものとして、遠くかすんだ景色を現すように、花や葉が明白に分かりにくい「霞花（かすみばな）」の風情で挿ける。小菊などを上口に挿けるときは、この「霞花」の風情でもって、小さく切葉にした葉を主体にして、莟・半開のものがちらちらと見え隠れするように挿ける。とにかく、この上口に挿ける草花は、葉が小さく、そして数もしっかりしていないような花材がふさわしい。

次に、下口に挿ける木物は、上口に挿けた草花より高く使い、霞がかかる遠山の景色を移しとる。下口に挿ける木物の留の方は近景を、一方、体の方は遠景を表現するもので、体の懐（ふところ）あたりにかけて、霞がたなびく風情を感じとれるようにして挿ける。

4 銀柳 米柳 数挿け 挿け方

銀柳は川柳（かわやなぎ）のことで、これを三百本・五百本と数多く挿けることがある。その挿け方として、まず数本を同じ長さとならないように流れをもたせて一つの束とする。そして束としたものを、半ばより下の芽をきれいに取って一本づつ揉めて姿を整えていく。このような束をいくつか作って組み合わせ、全体の姿に挿け上げていく。一本一本の枝が流れを作り出し、繊細な線の美をかもし出すようにして挿けることが大切である。

また、米柳は行李柳（こうりやなぎ）のことで、これを数多く挿ける方法としては、銀柳のそれと同様である。

米柳は「内用」や「留流し」などに挿けると、特にその繊細な美が引き立つ。この応合いの花としては、草花や、また木物であれば椿などを添えて挿けるとよい。

5 糸柳　三景　挿け方

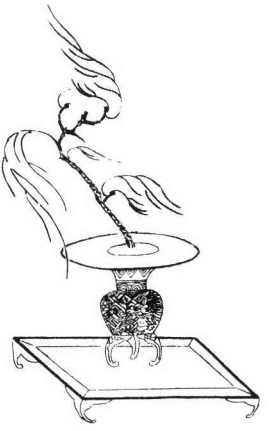
糸柳は枝垂柳（しだれやなぎ）ともいう。糸柳三景として、「長閑（のどか）の景色」「春風に随う景色」「雪中の景色」の三つ、さらに「雨中の景色」の挿け方が伝わっている。以下に前者三つを説明するが、「雨中の景色」に関しては、雨中の景色柳養いの項を参照いただきたい。

まず「糸柳長閑の景色」は、風も吹かない春の穏やかな日に、糸柳が静かに垂れ下がる風情を移しとった挿け方である。二重切の掛花器を用いたとき、上口には、柳を横姿にして十分に垂れ下げて挿け、柳の本性と長閑なこころを表現する。

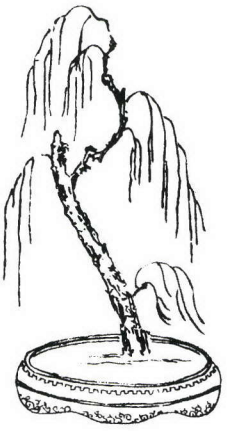
柳は枝が垂れるのが本性・出生であり、よって垂れ下がる「死の枝」が実の姿である。また一方で立ち上がる「活の枝」は虚の姿であるといえる。この虚実の姿をもって、垂れ下がる「死の枝」が、立ち上がる「活の枝」よりも多くなるように定めて、死活の枝をつくって挿けていく。「死の枝」の次は「活の枝」、そしてその次は「死の枝」とバランスよく挿けることが大切である。なお、留の枝は短いので「活の枝」を中心に挿けてよい。ただしこのときも、枝先に強い勢いを持ったものを使ってはならない。

この糸柳は「実」として、法格を正しく守ることに固執することはない。垂れ下がる柳の性と、そして長閑な情でもって表現し、性情の両気を備えた、体用相応した姿で挿ける。自然の草木は、

『生花早満奈飛』　糸柳長閑の景色



『生花早満奈飛』 糸柳春風に随う景色



『生花早満奈飛』 糸柳雪中の景色

性があっても情や心はなく非情無心のものとされている。しかし、四季それぞれの相を放つ草木の姿に、我々は心をとらえられる。その自然の働きに、情を感じとるのである。すなわち、糸柳長閑の景色は、体である性と、用である情を兼ね備えた「体用（たいよう）の挿け方」である。

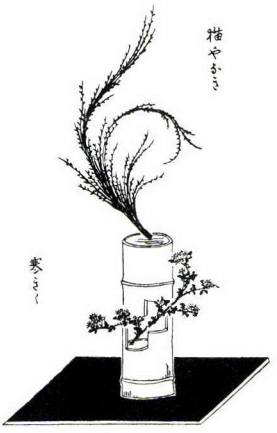
一方で、下口の花は椿などを立姿にして、しっかり法格を守って「虚」として挿けるものとする。上口の「実」、下口の「虚」。この「虚実」でもって、「体用の挿け方」と捉えることもできる。

次に「糸柳春風に随う景色」について述べる。これは晩春の風景であり、暖かく強い春風によって、川辺に大きく垂れる柳が吹き上げられている様子を現す挿け方である。花器は薄端などの置花器を用いて、古木に若枝を添えて古木扱（こぼくあつか）いとする。

体は「吹き上げの枝」として、春風によって下から吹き上げられるように枝先を上に揉め上げる。そして用は「吹き下しの枝」として、体の枝を吹き上げた風が、回り回って用の枝を留の方向へと吹き下している姿とする。また留は「吹き流しの枝」として、用の枝からの流れを受けて水平に流して挿けるものである。

このように垂れ下がる柳の本性と、柳が春風に舞う情を表現する。すなわち性情の両気を備えた、体用相応した姿でもって挿ける。なお、この挿け方は風情ある柳の姿を移しとったものであり、よって多少の枝の見切は許される。これに応合う花としては、椿や千両など花車（きゃしゃ）な花を選んで挿ける。

「糸柳雪中の景色」は冬の雪中の景色であり、夜に降った雪のために、柳がより一層垂れ下がった姿を表現するものである。雪中の景色であるので、応合いの花を使うことはなく、小垂れの柳を使って、一種でもって薄端などの置花器を用いて挿ける。



『四方の薫り』　猫柳玉取り

全体の姿として、雪が降り積もったような様になるように、柳の枝を揉めていく。枝の上の部分は雪の重さでたわみ、そして枝の先端が雪をはね上げるような感じになるように挿けていく。また、枯木に若枝を添わして古木扱いとする。枝の揉め方としては、徐々になめらかに揉めるのではなく、揉める曲線をきつくして、雪の重さで大きくたわんでいる姿とする。このときの糸柳も法格にあまり固執することなく、性情の両気を備えた体用相応のこころでもって挿ける。

6 猫柳　玉取り　水潜り　挿け方

取り合わせや配合が良く、美しく調和する様を例えるものとして、「梅に鶯」「紅葉に鹿」「牡丹に唐獅子」「竹に虎」「竹に雀」などの言葉があるが、猫といえば玉を取る猫の姿を思い浮かべる。まず、「猫柳玉取り」の挿け方として以下に述べる。猫柳の穂の銀毛は、猫の姿を思い出させる。この猫柳に玉を取って挿けるわけだが、体の後添の枝でもって玉の姿を備えるのが一般的である。しかしまた、用の下や留の下に玉を取ることもある。

勢いよく伸びる出生をもつ猫柳は、伸び過ぎた枝先が何かの勢(はず)みで下に垂れて、玉の姿ができることがある。この風情を移しとった挿け方である。この玉は大きすぎても、小さすぎても調和はなく、花の姿全体から見て玉の大きさを定める。柳の線の美しさを引き出すことに重点をおき、この応合いの花として添えるとすれば、葉物か草花に限られる。

次に、「猫柳水潜り」の挿け方として以下に述べる。水辺に勢いよく生じる猫柳の枝が、長く伸び過ぎて倒れ、水中に潜って水に流される。そして、その枝先が再び水上に立ち上がってくる様

『伝書四方之薫』　梅水潜り

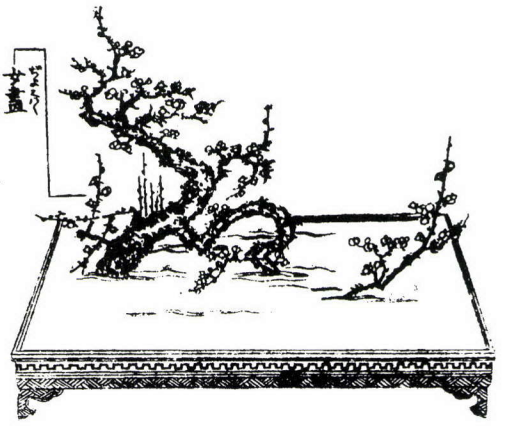
を移しとった挿け方を「猫柳水潜り」という。

花器は広口を用いて、水を現す黒石と、陸を現す白石を使って水陸を分ける。縦に川をとれば急流、横にとれば緩やかな川の流れを表現できる。陸を現す白石のところに、猫柳を用流しや留流しにして挿ける。そして、この流しの枝が水中を潜って、その枝先が再び水上に伸び上がってくる姿を表現する。自然な様に柳の枝を水に潜らせ、その立ち上がった枝先にも、自然の美を備えることが大切である。さらに水中のところへ、冬咲きの杜若などを応合ったり、また猫柳の根元に陸草や草物を応合って挿けたりする。

7 臥竜梅　挿け方

臥竜梅（がりゅうばい）は、江戸本庄亀井戸村にあった梅のことで、そのむかし水戸の徳川光圀公が、竜が臥しているかのような、この梅の姿を「臥竜梅」と名づけたともいわれている。臥竜梅は、幹が地にわだかまり、その枝は垂れて地につき、そこからまた根を生じるような強い勢いのあるものである。

臥竜梅を挿けるときは、まず竜の臥したる如き曲のある大きな古木を横姿にして挿ける。五徳の花留などで留めて広口の向こうの隅より手前の隅へと大きく振り出して、水をまたいで土に潜っていくように扱う。そしてまた、その土より再び立ち伸びた幹を、別の枝でもって挿ける。この先の枝は、立ち上がるように挿けてもよいし、また再び土に進む勢いのあるように揉めて用いてもよい。



『生花早満奈飛』　臥竜梅

古木の根元である留の方を竜の頭に、土より新たに生じた枝のほうを竜の尻尾に見立てる。この臥竜梅の大木が土に潜っていく様に、竜が臥しているが如き勢いを見てとることができる。強い勢いのある小枝を使って、竜の四肢や爪を現し、さらに梅の若枝（ズワエ）を使って臥竜梅の勢いを強めたりする。

この臥竜梅は、砂利留めにしたり、また飾り石を使って、大広口もしくは大小の広口二個を斜めに置き合わせて挿ける。さらに万年青、水仙、福寿草など応合いの草花を、これに添えて挿けて構わない。

最後に、その他の梅の景色挿けとして、いくつか挙げることとする。「霞中の梅」は、早春にかかる霞（かすみ）を通して、これから咲く梅の香を感じとる心でもって、春分に白梅を挿けたものである。次に「凌雲梅（りょううんばい）」は、梅が雲を貫くように立ち上がった姿を移しとったもので、真直ぐに伸び上がる勢いのいい若枝（ズワエ）を三本特に高くして挿けたものである。また「雪中の梅」は、春を待たずに雪の中にさきがけて咲く、梅の力強い姿を現したもので、雪割り草とも呼ばれる水仙をこれに応合って挿けたものである。

8 南性　北性の梅　挿け方

梅の挿け方としては、「珍花」「正花」「残花」と三通りある。早咲きの珍しい梅である「珍花」、旬の「正花」、そして晩春に残った梅である「残花」の三つを総称して「三世の梅」という。「珍花」である南性の梅と、「残花」である北性の梅を二瓶対に並べたり、またさらに中央に「正花」

『生花早満奈飛』　南性の梅

『生花早満奈飛』　北性の梅

である孟春の梅を置いて三瓶とする。これは始・中・終という万物自然の流れを感じとって扱ったものである。また、それぞれ一瓶のみを挿けて置いても構わない。

客位に挿けたものを「南性の梅」といい、主位に挿けたものを「北性の梅」という。客位は、体より留へと左旋する花全体の姿が陽であるが、その中心となる体は足許より右旋して陰となる。よって客位は陽（陽中陰）であるといえる。一方、主位は、体より留へと右旋する花全体の姿が陰であるが、その中心となる体は足許より左旋して陽となる。よって主位は陰（陰中陽）であるといえる。この陽（陽中陰）である客位の姿でもって、陽性である「南性の梅」を挿ける。春の陽気を受けて南の方の枝から咲きはじめた梅の花、この珍花の風情を南性の梅で表現する。一方、陰（陰中陽）である主位の姿でもって、陰性である「北性の梅」を挿ける。「南枝に始まって北枝に終る」というように、北枝の残花に惜春の情を、この北性の梅でもって表現するのである。

南性の梅・北性の梅ともに一本の枝で体と用を備えて古木扱いとし、体には半開の花を、そして用には満開の花を使って挿ける。また留は別の枝を用いて、花は莟のものを使って挿ける。ちなみに、正花である孟春の梅は、開・半開・莟と、花全体に片寄ることなく扱って挿ける。

この南性の梅・北性の梅の相違点として、早春の花である南性の梅には、春一番の陽気を受けた風情を現し、よって咲きはじめの満開の花を用に使って挿ける。一方、晩春の花である北性の梅には、残花の風情を現し、よってその年の春の最後に残った風情ある花を用に使って挿ける。南性の梅は早咲きの珍花を、そして北性の梅は残花を、その枝振りや花の状態で趣よく表現することが大切である。

また体の後など程よい所に、真直ぐに伸び上がる勢いのいい若枝（ズワエ）を使い、女画（にょかく）を取っ

て挿ける。女画とは、交差した梅の出生を表現するものである。南性の梅は珍花であるので、ズワエは短く低くし、留や控あたりに使う。一方、北性の梅は残花であるので、ズワエは特に長く高くし、相生から体添あたりに使って挿ける。ちなみに正花である孟春の梅は、ズワエは高くあるものの、中庸に扱って挿ける。

南性の梅・北性の梅ともに、花器は薄端などの置花器を使う。

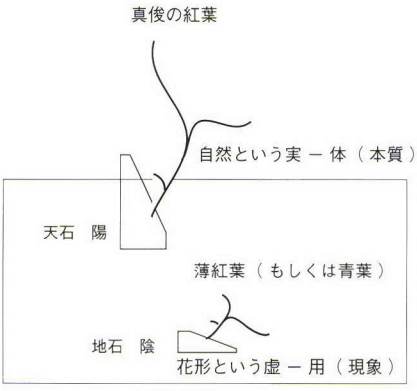
9 紅葉　真俊の景色　挿け方

季節の相を現す七十二候では、新暦十一月二日頃を「楓蔦黄（ふうちょうきなり）」として、楓の葉が色づきはじめる頃としている。

真俊（しんしゅん）とは真に優れた様を意味する。この紅葉真俊の挿け方は、最も美しい紅葉の景色を挿花として移しとったものである。今まさに燃え盛る紅葉と、未だ充分には紅葉していない薄紅葉（もしくは青葉）を対照的に扱い、生々流転し変化し続ける自然の理を、心の内に感じとって挿ける。花器は台付きの広口を用いて、陰陽二石もしくは天地人三才の石飾りをする。

まず、天石の後には大株を挿ける。古木を用いて古木扱いとし、これに添える枝として、真俊の紅葉を使う。この真俊の紅葉は、花形という法格にこだわり過ぎることなく、自然の風雅ある姿を表現し、あまり手を加えず「実」の姿として挿ける。なお、ここで古木と若枝を使うのは、万物が生々流転し変化し続ける時間の流れを捉えたものである。

また一方、地石の後には小株にて、薄紅葉（もしくは青葉）を使って挿ける。この紅葉は「虚」



紅葉　真俊の景色（体用の挿け方）

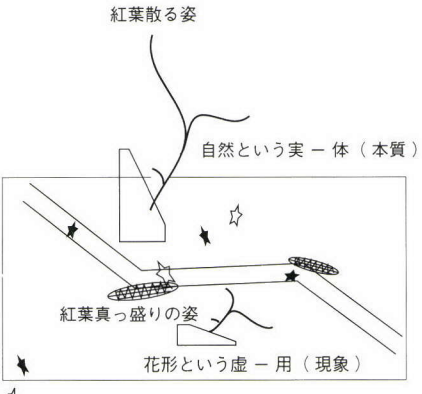
として法格を守り、横姿に挿ける。法格を守って挿けた花形は、すなわち人工的な「虚」のものである。自然という草花の「実」に、花形としての「虚」を加える。ここに「虚実等分」がある。「地」に生じる有形有限の現象（用）と、「天円」という無形無限の本質（体）。この相対的な関係を持つ「天円地方の和合」の姿を求める。大きい主株の立姿は「実」、つまり「体」である。一方、小株の横姿は「虚」、つまり「用」である。この体用相応した姿とする「紅葉真俊の挿け方」は、無限の本質と有限の現象を現す「虚実等分」「体用の挿け方」である。

なお、この景色は散る景色を現すものではないので、落葉を使うことはない。

10 紅葉　龍田川へ散る景色　挿け方

龍田川は奈良県生駒郡を流れる川で、近くに龍田神社がある。昔から龍田川は紅葉の名所として天下に知られ、紅葉といえば龍田川とまで連想されるほどである。この秋の龍田川の紅葉散る景色を、挿花として移しとる。

花器は台付きの広口を用いて、真ん中に黒白の石でもって龍田川の川を現す。黒石は斜めにとるほど、急な川を表現することができる。この龍田川は清らかな急流であるので、黒石を使って細目に斜めに川をとる。また花留として、蛇籠二つ三つを用いて留める。ただこのとき、蛇籠で留めずに景色の添え物と考えて扱っても構わない。本来、蛇籠は川の流れの急なところに用いて、両岸の侵蝕などを防ぐ設備のことであり、花留として使うときは中に石を入れて用いる。花留の蛇籠の寸法は、長さ九寸・差し渡し三寸六分の大きいもの、長さ八寸・差し渡し二寸八分の中の



紅葉　龍田川へ散る景色（体用の挿け方）

もの、また長さ七寸二分・差し渡し二寸四分の小さなものと三種類あり、それぞれ広口に合わせて用いる。

そして、天・地の陰陽二石、もしくは天・地・人の三石を用いて飾り石をする。花が主位であれば石は客位に、花が客位であれば石は主位に扱って陰陽和合の姿とする。

挿け方として、まず川の向こう天石のところには古木を用いて、葉付の風情あるものをこれに添わせて挿ける。これは紅葉の散る姿を現す挿け方であるので、葉はあまり多くつけず閑静につけておく。また法格にあまりこだわることなく、自然の「実」の姿でもって雅味のあるように挿ける。

次に、川の手前の地石には紅葉の盛りのものを正しく法格を守って、「虚」の姿にして横姿に挿ける。この株は紅葉真っ盛りの姿であり、まだ散るには至っていない風情で挿けるものである。天石の「実」の姿、地石の「虚」の姿でもって、「虚実等分」「体用の挿け方」とする。

最後に瓶中や瓶外に、葉を五～七葉と日表・日裏を取り混ぜて自然な感じに散らし、紅葉散る景色を現す。

また、薄端などの置花器を用いて、紅葉散る景色を表現することもあるが、このときも古木扱いにして若枝を姿よく応合って挿ける。ここで古木と若枝を使うのは、万物が生々流転し変化し続ける時間の流れを捉えたものである。

紅葉していく植物には、楓のほかに錦木・イチョウ・クヌギ・ケヤキ・ブナ等多くあるが、楓は紅葉の王として最も尊ばれ、その総名の「もみじ」を己の名前にしている。なお、春の首である桜と、秋の首である楓を同時に用いたものを、花の雲と紅葉の錦と称して「雲錦」という。伝

書『原一旋転之巻』には、桜の景色と紅葉の景色の挿け方が記されている。

11桜　散り景色　挿け方

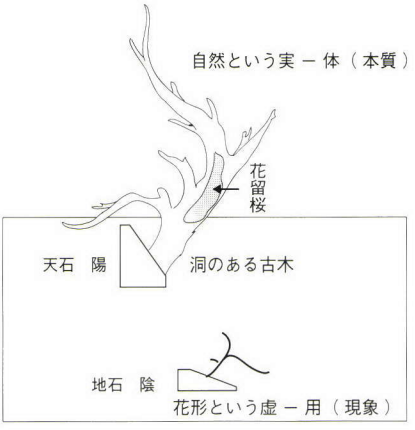
『挿花浪速之花』　桜散り景色

花器は台付きの広口を用いて、三才または陰陽二石の飾り石をする。まず、天石には風雅な姿の古木を使い、花のついた風情あるものをこれに添わせて挿ける。これは桜の花が散る姿を現す挿け方であるので、花はあまり多くつけず閑静にだけつけておく。また法格にこだわり過ぎることなく、自然の「実」の姿でもって雅味のあるように挿ける。すなわち、格を離れて空に至る様である。古木より若枝を添わして、古木扱いにして挿けていく。ここで古木と若枝を使うのは、万物が生々流転し変化し続ける時間の流れを捉えたものである。

次に、地石には若枝を横姿にして、正しく法格を守って「虚」の姿として挿ける。これは、谷に咲く桜の景色を現したものであり、よって莟と開花を取り混ぜて挿け、咲き始めの桜の景色を表現する。

すでに花が散っている姿を現す天石に挿ける桜に対して、日当りが悪いためにようやく花がちらちらと咲き始めた、谷間に咲く姿を現した地石に挿ける桜。この対極に見てとれる桜を対照的に扱って挿けるものである。「実」の扱いをする天石の花と、「虚」の扱いをする地石の花を広口のもとに移しとる。

「地」に生じる有形有限の現象（用）と、「天円」という無形無限の本質（体）。この相対的な関係を持つ「天円地方の和合」の姿を求める。大きい主株の立姿は「実」、つまり「体」である。



桜　散り残りたる景色（体用の挿け方）

一方、小株の横姿は「虚」、つまり「用」である。この体用相応した姿とする「桜散り景色」は、無限の本質と有限の現象を現す「虚実等分」「体用の挿け方」である。

最後に瓶中や瓶外に、桜の花を程よく散らして使い、桜散る景色を風情よく移しとる。

12 桜　散り残りたる景色　挿け方

花器は台付きの広口を用いて、三才または陰陽二石の飾り石をする。まず天石には、洞（ほら）のある古木を使い古木扱いにして立姿に挿ける。老樹の桜が自然のままの姿で、久しい時の流れを感じさせるような趣でもって「実」の姿で挿ける。桜の古木がなければ、他の洞のある古木を用いてもよいが、このとき桜の皮を外したものを巻いて、桜の老幹の趣を作り出す必要がある。

次に、この古木の洞の中に、花が九輪ばかりついた桜の枝を挿ける。日当りの悪い洞の中では開花も遅れ、また風雨にさらされることもないので花が散るのも遅くなる。この桜を「花留桜（はなとめざくら）」といい、散り残った桜の花をここに表現する。九輪ばかりついた花を使うのは、九が地の数であることによる。大地の恵みのもとで、「実」の姿として桜が散り残った風情を現すのである。「花留桜」以外には花を使うことなく、花の過ぎた姿の青葉ばかりの桜だけを使って挿ける。この天石に挿ける大株の桜は、「実」にして「体」である。

そして、大株の桜と谷間を分け、若枝を横姿にして、地石のところへ小株でもって挿ける。この若枝には、花が程よく散り残ったものを使って挿ける。日当りが悪いために咲きはじめるのが遅く、そのぶん散るのも遅れた谷間に咲く桜を移しとるものである。なお、このときの花は七輪

ばかりにして用いる。これは、七が天の数であることによる。この横姿に挿ける桜は、法格を正しく守って挿け、すなわち「虚」にして「用」であるといえる。

「実」の扱いをする天石の花と、「虚」の扱いをする地石の花を広口のもとに移しとり、桜散り残りたる景色を現す。すなわち「虚実等分」「体用の挿け方」である。そして最後に瓶中や瓶外に、桜の花を程よく散らして使い、桜散り残りたる景色を風情よく移しとる。

また薄端などの置花器に挿けるときも、体に古木を使って古木扱いとし、これに花のついた枝を姿よく応合って、桜散り残りたる景色を表現する。古木に若枝を添えて使うことで、生々流転する時間の流れを己の内に感じることができよう。

桜は「千早振る神代の頃、花を挿け む事の初めに花瓶に移し給ひしとなん。石上古き書に見えたり。是れまことに我国にては草木花中の主にて、蔵王権現の御神木なれば、是軽々しく取り扱ふこと禁ず」と伝書にある。古来より桜は花の王と称せられ、日本の国花としても尊ばれている花である。

13 根遣い三種　挿け方

「根遣い」の挿け方は、縁起のよい吉事が永久に続くことを願ったものである。本来、挿花は草木の花・葉・枝のみを用いて挿けるものであるが、この「根遣い」の挿け方においては、根も使って挿ける。草花の源である根を切らずに挿花として用いることで、永久に流転する吉なるものを現す。この「根遣い」する花として、福寿草・富貴草・水仙の三種がある。福と寿というめ

『生花玉かつら』　福寿草

でたい名をもつ福寿草、富み栄え貴い富貴草、そして清純なものを現す水仙の三種を吉なるものとする。

福寿草は花丈が短いために、浅い薄広口を用いて石飾りをして挿ける。天地人の三石、また陰陽の二石、さらに五石、七石と石を飾り、天一地六の割合で小石を配する。石が主位であれば、福寿草の花は客位とする。一種で挿けたり、また白梅の応合いとして添えて使ったりする。いずれにしても、福寿草は白い根を見せて扱い「根遣い」の挿け方をする。

吉事草の別名をもつ富貴草は、地下茎が横走して山地に群生する常緑の多年草である。この富貴草は、決して根を切ることなく挿ける。

厳しい寒さの中にあって花を生じ、水草の仙ともいわれる清純なる水仙も、この「根遣い」の挿け方をするときがある。水仙が最も盛んとなるのは、一陽来復の冬至の頃である。そして漸次芽生えてきた陽気に連れられて、春になれば白根が盛り上がり、花も高く成長する。この花を葉よりも高く使う「春陽」の挿け方をする頃に、白い球根を用いて「根遣い」の挿け方をする。浅い薄広口などの据物に石飾りをして、真の花留として砂利留めにして挿ける。また、白梅の応合いに添えて挿けることもある。根の使い方としては、白い表面を見せて、その中心をくり抜いたところに袴をつけた水仙の葉を用いる。

14 白蓮一輪　挿け方

泥の中に成育する蓮であるが、そのようにあっても泥に染まることなく清浄な姿をもつ蓮は、

『生花玉かつら』 蓮

諸仏の座するところとされ、清い花として常に尊ばれてきた。蓮の花は荷華、また蓮の葉は荷葉ともいい、荷は蓮のことを指すものである。「蓮の出生は、荷葉といって、二葉一花を生じても、一葉は浮葉となって、すなわち水上には一葉一花を生じる」と伝書にあるように、二葉の内の一葉は浮葉となって水上に留まり根元を守り、そしてもう一葉は花と共に空中に伸び上がって花を守る。したがって、水面より上に見えるのは一花一葉である。この自然界にあって、一花一葉の出生をもつものは蓮だけである。

なお、季節の相を現す七十二候では、新暦七月十二日頃を「蓮始華（はすはじめてはなさく）」として、蓮の花が咲きはじめる頃としている。

蓮を挿けるときには、台付きの広口を用いる。まず定法の主株のところへ、大葉一枚を挿け、これに花を一輪だけ添えて挿ける。花は開花のものであれば葉よりも高く使い、莟であれば葉よりも低く使って挿ける。この扱いは、蓮の出生に沿ったものである。

次に半開の葉と巻葉を、これに添えて姿よく挿ける。本来この葉にも花があるはずであるが、半開・巻葉の状態では花は未だ水上には生じていない状態にあるものとして、この葉に対する花を挿けることはない。またそれより魚道を分けて、浮葉を大小二枚使って挿け、蓮の出生の景色を移しとる。

このように、五葉一花として挿けた蓮の一花を愛でて、過去・現在・未来の三世というものを明らかにする。花は現世にして、その中に莟という過去の姿があり、またその中に蓮肉つまり実があって未来の姿を含む。この蓮の一花という現在の姿を篤と見てとり、目前に見ることはできない莟や蓮肉という、過去と未来を心眼でもって感じとるのである。

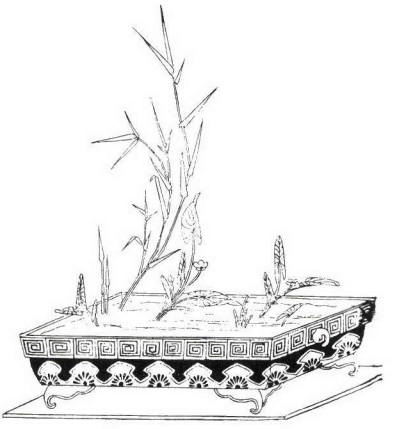
『高野之玉川』　蓮

現世に過去・現在・未来という三世が備わっているものは蓮以外にはないといえる。開花を現在と、莟を過去と、蓮台（蓮肉つまり実がはじけた後のこと）を未来と説く者がいるが、これは誤りである。開花は開いた花の現在、そして莟は莟の現在、また蓮台は蓮台の現在である。目の前にある厳然と在るものは現在であり、心眼をもって対象の奥にまで深く眼を向けてこそ、ようやく過去や未来が見えてくる。時間の概念を心眼で捉えて、蓮の一花の奥に潜む過去や未来を心の眼でもって感じとる。これが未生でいうところの、蓮三世の挿け方である。

仏の教えは平等を説き、よって過去・現在・未来を問わず、天地万物というものは時空・方位・大小・多少に関わらないものである。極楽浄土には、過去・現在・未来の区別がない。時空を超越した姿を持つとされる蓮は、浄土の世界を象徴した花とされている。そして、そこには観音様が蓮の花を持って出迎え、それぞれの魂は蓮の中に生れおちる。

「体」は、天地の間にあって動かない万物一体の「理」「未生以前の理」である。「用」は、四時に移り変わり千変万化して、また一なる体に帰っていく「働き」である。そして「相」は、この体・用という理・働きが作用した結果、その現象として「姿」が生じたものである。よって、その理と働きに考慮を及ぼすことなく、現象としての姿だけにとらわれては、形骸に陥ってしまうだけである。

未生挿花は単に花を美しく挿けるだけのものではない。草木と深く接し、万物の根元にある最も大切なものは何かと模索すること、そしてまたその本質に近づこうとするところに、花を挿ける意義がある。



『挿花さくらの香』 芦　河骨挿け方

15 芦一式　挿け方

季節の相を現す七十二候では、新暦四月二一日頃を「葭始生（よしはじめてしょうず）」として、芦が芽を出しはじめる頃としている。

まず、芦の由来するところに関して述べたい。玉垣の内つ国（日本という国）が未だ開かれていない青海原の草原であったときに、はじめて芦が芽生えて、次第にはびこって遂には大成島（淤能碁呂島（おのころじま））一体に広がり、この日本という国ができたとされている。つまり、芦の広がりが日本の国のはじまりであると捉えることができる。そして古来より、神の国である日本国のことを豊芦原瑞穂国（とよあしはらみずほのくに）と呼んでいた。よって、この森羅万象の主ともいえる芦をみだりに取り扱うことを禁じている。

芦の挿け方として、花器は広口を用いて三才の石飾りをする。まず、天石の後ろに芦を三本か五本挿ける。この姿は「空」にして、出生を重んじて自然の姿を「実」として挿ける。つまり自然のあるべき姿を純粋に捉えて、不変なる自然の姿を無相・空相でもって挿けるものである。すなわち、これは「体」であるといえる。

次に、人石に二本か三本の芦を「虚」の姿として、法格を守って横姿に挿ける。天石に挿ける「体」の姿に対して、人石に挿ける姿は「用」であるといえる。この「体」と「用」でもって虚実等分とし「体用の挿け方」とする。

そして地石のきわには、白い芽出しの若芽を「虚」の姿として、法格を守って三本挿ける。これを「飛根（とびね）」といい、白い芽出しの若芽を使うことで、青海原にはじめて芦が生じた景色を移し

とる。黙して心眼でもって、万物の無きところにはじめて一物が生じた姿をここに感じとる。この芦の芽出しは、「無一物」として「未生以前」を現す。万物が生じる前、またこの天地が生じる前には、形のない一物のものがあった。この一物は、未生以前という根源的な太極であるといえる。

このように挿けた芦は、床の中央に据え置き、掛物は外しておく。ただし、大きい床であれば二幅対の掛物を用いることもある。同じ間に他の花を挿けてはならない。書院には、釣香炉に香を焚いてもよいとされている。いずれにしても、礼節をわきまえて扱わねばならない。

16 段取物　挿け方

花が散らばってつくのではなく、小花が一カ所に集まって咲く花材を挿けるときの方法を、段取挿けという。小花のかたまりを一段とし、五段から七段、九段と段を作って挿ける。この段取挿けをする花材としては、羽衣草（はごろもそう）・小車草（おぐるまそう）・弁慶草（べんけいそう）・小菊（こぎく）・繡線菊（しもつけ）・瞿麦（なでしこ）・藤袴（ふじばかま）・女郎花（おみなえし）・男郎花（おとこえし）などの花が挙げられる。

まず、五段の段取挿けとして、用・用添に二段、体・体添に二段、留に一段と挿ける。七段の段取挿けとしては、用・用前添・用後添に三段、体・体添に二段、留・留添に二段と挿ける。九段の段取挿けは、体・用・留ともに三段づつ、前添と後添をそれぞれ配して挿けるものである。いずれにしても花の大きさに大小の変化をつけて、花の美しさを引き出すようにして挿けることが大切である。花が階段状に並ぶと段々花として禁忌に触れるため、そのような様にはならない

『高野之玉川』　女郎花

ように気をつけて挿けなければならない。

段取挿けをする女郎花の挿け方として、「女郎花は、諸草に異にして花と葉と同じ年に生ぜず、今年葉を生ずれば、明年葉の跡に花を生ず、これ大根葉と名づけて、花と葉に株を分かちて界を入る。これ二季の通いを備えて葉組を成す」と伝書にある。女郎花を段取にして挿けるときは、出生の葉を使うのである。この出生の葉とは、今年生じた花のところについていた、昨年に生じていた大根の葉に似た大きな大葉のことをいう。この組み方として、葉を向き合わせて形を整え、花を体と用に使い、大根葉を留に挿けたりする。また大根葉を前留にして内用前留の姿に挿けたり、そしてまた株分けにしたりと、うまくこれを扱って挿ける。

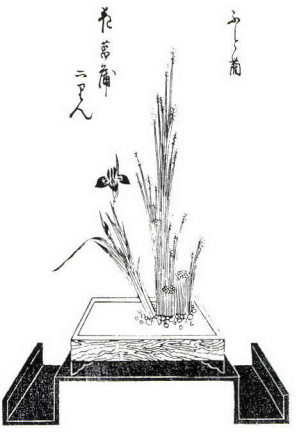
17 蘭物　挿け方

蘭はイグサ科の多年草で湿地に自生し、茎の先端に小さな花穂をつける。細蘭・三角蘭・琉球蘭・富久蘭・太蘭などの蘭物は、細い茎を何本か集めて一段とし、そして五段・七段・九段と段取挿けに準じて挿ける。

段取挿けの五段は、体・体添・用・用添・留、もしくは体・用・留と大小の切株二段の合わせて五段として挿ける。段取挿けの七段は、体・体添・用・用添・留に、大小の切株二段を加えて挿ける。段取挿けの九段は、七段に相生と控を加える。

「富久蘭の出生は根元株になりて蒲の如く、末は蘭の如くなり。しかし少し平みあり」と伝書にある。富久蘭は四季を通じて生じるものであり、そのときの時候の草花をこれに添えて挿ける。

『献備千歳花』　太蘭　河骨　杜若


『四季之栞』　太蘭

また、細蘭・三角蘭・琉球蘭・富久蘭などの蘭物に添える応合いの草花としては、杜若・水葵・沢瀉・猿猴草・河骨などを挙げることができる。

太蘭は縦縞があって、また横班があり上品なものである。この応合いに添えるものとしては、蓮・河骨などの水草の類がよい。さらに、三種・五種と数多く取り合わせて挿したり、水陸分けにして陸草を応合って挿けることもある。

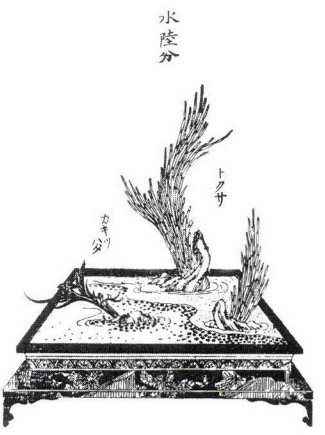
蘭物を挿けるときの花器としては、据物、また置舟、釣瓶、薄端など口の広いものを用いる。蘭物の体後添に、一本から数本折れたものを用いて「腰折れ」とするのも風情がある。また杜若を用に使い、体に蘭物を、そして留に河骨を使う挿け方などもおもしろい。このように、蘭物は趣向を凝らして種々に取り合わせて挿ける。

18 木賊　刈込み　挿け方

木賊刈り込みの挿け方は、数多くの木賊を使い、さらに切株も加えて、刈り込まれた木賊の情景を移しとるものである。木賊を刈る老人が、別れた愛児の好きだった小歌曲舞を舞った後に、偶然にもその子と再会する能「木賊」などがあるが、木賊といえば刈り込みを連想する。

「体を虚実にして挿花の法に揉める」と伝書にある。木賊は直立する出生をもつが、この自然の姿を揉めて虚を加えた姿にする。しかし、このとき大きく揉め過ぎて、木賊の直ぐなる出生の美を摘み取ってしまわないように、虚の中にも実なるところを残すことが肝要である。

一方、出生の直きところは、用と留に使って挿ける。これは木賊の自然の出生を活かすもので、



『伝書四方之薫』　木賊

実の扱いである。さらに、木賊を刈り込んだ後にできる切株を加える。この切株は、陰陽二株を用いるものとする。ひとつは体と用の間に挿けて、先を斜めに刈り込む。そして、もう一つは留のところに使って、先は平たく刈り込む。切株を一つ使うときは留に、三つ使うときは体・用・留それぞれに用いる。木賊の若芽があるときには、株を分けて若芽を使い、木賊の出生を現したりする。

花器は水盤や広口などの据物を用いて、木賊の主株は広口の定法のところ、すなわち天石を配するところに挿ける。木賊の応合いに使う花としては、四季それぞれに麗しい時節の草花を添えて用いる。水陸分けにして杜若や河骨などを応合ったりと、応合いの草花を加えて数株に分けて挿けるものである。

19 伐竹に筍応合　挿け方

新暦六月（旧暦の五月）頃、伐竹（きりたけ）に筍（たけのこ）を応合って用いる挿け方である。季節の相を現す七十二候では、新暦五月十五日頃を「竹笋生（ちくかんしょうず）」として、筍が地上にようやく現れる時としている。この筍が生じてより一カ月程度後、少し伸び上がってきたものを用いて挿けるのである。なお、筍の生じている頃であれば、いずれの竹でも筍を用いて挿けても構わない。

伐竹を二本使うとき、長い陽の竹には三節二枝を備えて、体と用の枝をとり、その先を大斜に伐る。一方、短い陰の竹には二節一枝を備えて、留の枝をとり、その先を平に伐る。このとき、竹の大斜の伐り口が、平の伐り口と向き合うように調和して挿ける。これは、注連の伝の竹の挿

『生花玉かつら』 寒竹　小菊

魚尾　　金魚尾　　飛雁

け方に準じるものである。

また伐竹を三本使うときは、長い竹に四節二枝を備えて、体の枝をとり、その先は大斜に伐る。次に、中の竹に三節二枝を備えて、用の枝をとり、その先は中斜に伐る。そして、短い竹に二節一枝を備えて、留の枝をとり、その先は平に伐る。この長中短の三本の竹を姿よく調和して挿ける。

竹の葉には、「魚尾（ぎょび）」「金魚尾（きんぎょび）」「飛雁（ひがん）」の三通りのものがある。竹の葉の成長の状態で、葉先が二葉開いた状態のものが「魚尾」、その中葉が伸びて未だ開いていない状態が「飛雁」、その中葉が開いて三葉となった状態が「金魚尾」である。体にはこの三通りの葉が平均してつき、用には金魚尾の葉が多く、そして留には魚尾の葉を多く備える。このように竹の葉の形態を変化させることで、自然にある陽気の移り変わりを現すのである。

花器は広口などの据物を用いて、天地人三才の石飾りをする。竹は天石に挿け、人石・地石には筍を一本ずつ用いて挿ける。また、これに応合いの花を添えて挿けたりする。竹の種類は何でもよく、応合いの花としては四季の趣あるものを用いる。ただし、応合いとして挿ける木物も草物も、花車（きゃしゃ）なものを選んで使う。

さらに、この筍が細くて非常に長いものであれば、竹よりも高く使って体として挿け、用・留に竹を用いて挿けたりすることがある。旬を揉めるときは特に注意し、徐々になめらかに曲げて揉めていく。

『伝書四方之薫』　芒

20芒　三種　挿け方

芒（すすき）に三種の挿け方の伝がある。花が白色で、穂の丈が一尺位と長く成長し、花の開いたシロススキを真麻穂（ますほ）の芒という。そして花が赤色で、穂の丈が一尺位のムラサキススキを真蘇穂（まそほ）の芒という。また花が白色で穂の丈が五寸くらいの、未成長で花の開かない頃のシロススキを政穂（まさほ）の芒という。この真麻穂・真蘇穂・政穂の三種の芒を使う挿け方である。

体に真麻穂、用に真蘇穂、そして留に政穂の芒を挿ける。そして、体の後添の位置にシロススキを円状に曲げて、真麻穂と政穂で「月の座」をとる。月の座は、月の形を表現するものではなく、そこに月を迎える場所を設けるものである。よって、月見の花として月を迎える心で月の座をとる。

この芒三種は、清く澄み渡った明月のときに挿ける花である。特に秋の季節、旧暦七・八・九月の中間にあたる八月の満月は、仲秋の名月として月見の好時節である。なお、この月の座は月のない夜にはつけてはならない。

挿け方として、体に三本・用に二本・留に二本・月の座に二本と、合計九本程度使って挿ける。穂についた生来の葉は大きすぎて風情がないので、穂のある茎を葉のある茎から切り離して、適宜に組み合わせて使う。長すぎる穂は、穂先をつまんで先を指で引きちぎると穂が短くなり、垂れ下がった穂も自然な感じに立ち上がる。また、先が垂れ下がった葉は、葉先を斜めに鋏でそぎ上げる。芒の葉は二方向に出るので、向きが悪いときには、葉のさやの部分を指先で回して、葉先を思う方向に回して扱う。これを回し葉という。

月の座は葉でとる方法と、穂でとる方法がある。葉は自然と曲をもって月の姿になっており、簡単に月の座をとることができる。しかし、穂は自由に曲げて月の姿をとり難いものである。

まず葉でとる方法として、体の後添あたりに軸付の葉があればよいが、なければ他の軸付の葉を一つ体の後ろに添え、大きくひらりと下げて使う。次に、体の後ろの控の位置に、真麻穂・政穂を大小各一本づつを添えて、この穂と上の葉とでもって月の座をこしらえる。

穂でとる方法としては、体の後添あたりに真麻穂を挿け、その長い穂をひらりと後ろに下げる。そして次に控の位置に短い穂である政穂を挿け、これを上に立ち上げて扱う。穂を自由に曲げるために、前もって、ノリなどで穂をかためておくと曲をうまく作ることができる。

水揚げとしては、酢につけた後に火で焼く、また酢につけた後に深水に入れるなどの方法がある。この芒三種を挿けるときは、寸渡や薄端などの置花器を用い、必ず花台に載せて扱う。

21 萩　猪の座　挿け方

「梅に鶯」「紅葉に鹿」「牡丹に唐獅子」「竹に虎」「竹に雀」と同じく、「萩に臥猪」と調和するもののたとえがある。臥猪（ふせい）とは猪が伏した姿をいう。猪が臥猪する床を「猪の座」といい、この臥猪の景色を萩に表現するものである。

枝先が垂れる出生をもつ萩は、掛籠など掛花器を用いて、横姿にして挿ける。「体用に花あるを用い」と伝書に記されているように、体と用は法格をしっかりと守って、花のついた自然の枝ぶりでもって姿を整える。

『高野之玉川』　萩　猪の座

横姿に挿ける用の枝は、下方に大きく垂らして挿ける。留には花を使うことなく、葉を小さく切って切葉にして茂らせて使う。この切葉を使った留に、猪が臥猪する「猪の座」をとるのである。猪の臥す床となったところには萩の花は散りこぼれ、葉だけが茂った状態となっている。よって猪の座とする留には、切葉のみを挿けるのである。

なお、萩に関係するものとして挙げるが、歌枕としてよく詠まれる玉川には六つあり、六玉川とされている。三島の玉川・井出の玉川・野田の玉川・野路の玉川・調布の玉川・高野の玉川の六つで、それぞれの玉川の特徴を現した和歌や浮世絵がある。その中のひとつ野路の玉川は、近江国の玉川（現在の滋賀県草津市野路にある琵琶湖に注ぐ小川）である。別名「萩の玉川」と呼ばれ、旅人たちの憩いの場であったといわれている。そして萩の花の咲く川に、月を投影した様子などが浮世絵に描かれた。「明日も来む　野路の玉川　萩こえて　色なる波に　月宿りけり」（『千載集』藤原俊成）など、萩の花を詠んだ歌が多く伝わっている。この野路の玉川を移しとる景色挿けも、萩を挿ける風情あるものとして伝書に記されている。

22 牡丹　挿け方

季節の相を現す七十二候では、新暦四月三十日頃を「牡丹華（ぼたんはなさく）」として、牡丹の花が咲きはじめる頃としている。中国では牡丹を、その大輪の花姿から「百花王」と称し、これに勝る花はないとして、富貴の象徴とした。また、菊・芍薬と共に三佳品の一つともされている。なお、日本では、花の総称は桜である。

『挿花さくらの香』 牡丹

『生花玉かつら』 牡丹

牡丹の挿け方としては、「獅子隠れ」「花隠し」「爪隠し」の役葉を使う。「梅に鶯」「紅葉に鹿」「牡丹に唐獅子」「竹に虎」「竹に雀」などと調和する様がいくつも例えられているが、葉が密生する牡丹の陰には、獅子が潜んでいることを想わせる。そこで、「獅子隠れ」「花隠し」「爪隠し」の葉を使うのである。

この大きな花をつける牡丹は、体・用の格先に大輪の花を使わない。花のついていない幹や、次の年の春には再び花をつける枯木でもって体・用の格先をとる。

まず、用に勢いのある葉を「獅子隠れ」として数多く使って挿ける。この密生する葉の陰に、獅子が潜んでいる様を見てとることができる。そして満開の花を、葉に載るようにして挿ける。ただし、この用として挿ける満開の花は、体の懐（ふところ）（体前添）に近いところに配する。

次に南天の木など、黒ずんだ幹をもつ黒木を長短に二本使い、その黒木に添わして半開の花を体として挿ける。この花についた葉を「花隠し」という。花隠しは獅子の象徴である鼻を隠すに掛けたものであり、体の辺りに獅子の顔が見え隠れするような様を現す。

そして留には莟を挿けて、切葉をたくさん使う。この小さく切った切葉を「爪隠し」といい、ここに獅子が爪をしのばせているような様を表現する。

用に満開、体に半開、そして留に莟を用いるのは、自然の陽の気が、体から用そして留の順に巡っていくという移り変わりを示したものである。

この牡丹には、薄端、広口、また特に手附の大籠がよく合うとされている。牡丹は、四・五月頃に咲く「春牡丹」が一般的だが、八月頃より冬にかけて咲く「冬牡丹」がある。これを別名で「寒牡丹」ともいい、花葉ともに艶しく、花の軸が短いので扱いは難しい。この冬牡丹の挿け方

も、春牡丹のそれと同様である。

23 紫陽花　挿け方

紫陽花（あじさい）は、集（あつ）と真藍（さい）を掛けて名づけられた花である。青白色から薄紅、濃紫、藍色と色とりどりの紫陽花は、花が密に集まって咲く。花期は六月から七月である。

この大きな花をつける紫陽花は、牡丹を挿けるときと同様に、体・用の格先に大輪の花を使わない。花のついていない幹や、次の年の春には再び花をつける枯木でもって体・用の格先をとる。

牡丹を挿けるとき、南天の木など黒ずんだ幹をもつ黒木を使い、それに添わして花を使うが、これと同様に黒木扱（こくぼくあつか）いをしても構わない。大きい紫陽花の花は、懐（体前添）に趣あるように使って挿ける。

紫陽花は花と同じく葉も大きいので、葉先を切って切葉にしたりと、うまく葉を除いて、透かし過ぎないように注意して挿ける。大葉をそのまま使うときは、特に見せ方を工夫する必要がある。

紫陽花は、元々の花の色が紅色であっても、植え替えると翌年には青色の花が咲いたりする。これは土の性質によって紫陽花が変化するためである。酸性の土に育つ紫陽花は紅色に、アルカリ性の土に育つものは青色になることが多い。水揚げが悪い紫陽花は、伐り口を少したたいて、ミョウバンを擦りつけたり、酒に浸す等するとよい。ミョウバンはアルカリ性、酒は酸性の性質をもち、陰陽どちらかの性質に傾けることで、水揚げの効果がでるものと考えることができる。

『本朝挿花百練』　枇杷

24 枇杷　挿け方

枇杷（びわ）の出生として、まず先に生じた大きい古葉が二枚向き合い、そして後から生じた小さい若葉が二枚向き合い、このように次々と大小の葉が二枚づつ陰陽と向かい合って生じていく。よって枇杷を挿けるときは、この出生に準じて、大小・陰陽の調和を崩さないように葉を透かして挿けることが大切である。万物すべて陰陽が備わってこそ活物であるといわれるように、大小・陰陽と備える枇杷の出生をうまく捉えて挿けるものである。

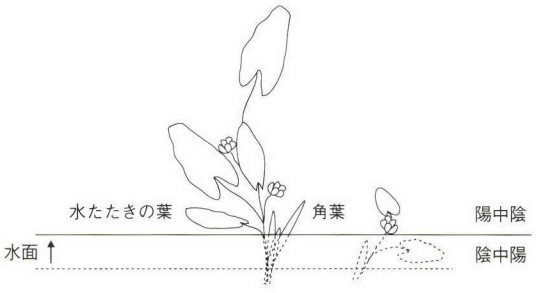
また、このように葉が規則正しく整列する出生をもつ枇杷には、一枚だけ変化の葉を使うこととされている。これを「横一文字の葉」といい、実（じつ）の姿に虚（きょ）を加えた「虚実の一葉」である。枇杷の出生に応じて陰陽の葉を正しく調和させて挿けたとき、全体の葉の総数が偶数である陰数となる。よって、全体の葉を奇数である陽数となるようにするため、一枚だけ葉をつけ加えるのである。

この「横一文字の葉」として、一枚の大きい老齢の葉である古葉を選んで、体の後に水平に扱って挿ける。実の姿としての枇杷の葉に、虚の葉として「横一文字の葉」を一枚加えることで、挿けあがった全体の姿の中に虚実の働きを見てとることができる。

25 河骨　挿け方

河骨（こうほね）の出生として、河骨ははじめに二枚の葉が向き合って開き、そして新たに二枚の葉が向き

『生花玉かつら』 河骨



河骨雨中の景色

合って開いて四方に拡がる。そしてまた、その中心から追々と花葉が生じていくため、一株に何枚の葉と定まることはない。春の彼岸頃より秋の彼岸頃まで、次々と葉が生じて成長していく。

河骨の挿け方として、花器は広口を用いて、体と用と留に開葉を使い、体の添として半開の葉を、また留の添として「角葉（つのば）」を使って挿ける。「角葉」とは角のように巻いた葉であり、「巻葉（まきば）」ともいう。花を挿けるところは定まってはいないが、葉よりは低くして、姿よく出生に応じて挿ける。

葉が大きく存在感のある河骨を挿けるときは、五葉二花・七葉二花・九葉三花・十三葉五花と、花の本数を多めに使ってもよい。魚道を分けて立姿と横姿と二株に挿けたり、また花器の大きさに応じて五株・七株と挿けることもある。

この河骨には雨中の景色の挿け方がある。「河骨雨中の景色」として、まず体と用の葉に開葉を使い、体の添として半開の葉を、そして用の添として小さい開葉を水面より五分ほど上がったところに使って挿ける。この用の添として挿ける小さい開葉は、水面をたたく風情を現した葉であり「水たたきの葉」という。なお、株分けにした横姿の留をもって「水たたきの葉」と捉えることもある。花は体と用の間に一輪、そして体と留の間に一輪使う。留には「角葉」を大小と三枚使って挿ける。以上で七葉二花となるが、さらに九葉三花と数を増やして挿けても構わない。

次に魚道を分けて、小さい葉の開葉、半開、角葉を三葉使って、これに満開の花を一輪添えて水中に挿ける。そしてさらに、曲のある角葉に莟を添えて水中に挿ける。以上で三株となるが、株を増やして五株にして挿けても構わない。

水上に現れた花葉は「陽中陰」、一方、沈んだ花葉は「陰中陽」である。そして、水上に浮い

『挿花さくらの香』　藤　河骨　杜若三種取合せ

『献備千歳花』　藤　河骨　杜若三種取合せ

た花葉は「和合」である。この浮き沈みのある河骨の花葉を愛でて、雨中の景色とする。

26 藤　河骨　杜若　三種　挿け方

山の渓谷や池の辺などに、風情よく花房を垂らして咲く陸物である藤の花に、杜若と河骨の水草を対照的に取り合わせた景色挿けである。花見といえば、今は桜見が恒常的なものとなっているが、古では桜に加えて、藤見も人々に好まれて行なわれていた。垂れ下がる藤の花影が、水面や地面に映る姿を愛でる趣向を影藤という。この影藤の風情で、水辺に咲き誇る藤の花が水面に映る姿を愛で、そしてまた、その水面に杜若や河骨などの水草が凛とした姿で咲く景色を広口に移しとる。

花器は広口を用いて、黒白の砂利で水陸を分け、三才の石飾りをする。天石は陸を現す白砂のところへ据え、一方、人石と地石は水を現す黒砂のところへ据える。

まず、天石の後ろには藤を挿ける。三才の石飾りを主位にしたときは、天石に挿ける藤の花は客位とする。枝が垂れ下がる出生をもつ藤であるが、花房が垂れ下がったものをあまり多く使い過ぎると詠(なが)めがよくない。よって、蔓などの風情ある枝や、また立ち上がった幹のものをうまく使いながら、莟と若葉などを取り合わせて挿ける。

そして、人石には杜若を七葉二花で横姿に挿ける。また、地石には河骨を開・半開・角葉と用いて、三葉一花や五葉一花で挿ける。「角葉」とは、角のように巻いた葉であり、「巻葉」ともいう。河骨の花を用いる箇所は特に決まっていないが、葉よりは低くして、そして姿よく出生に応

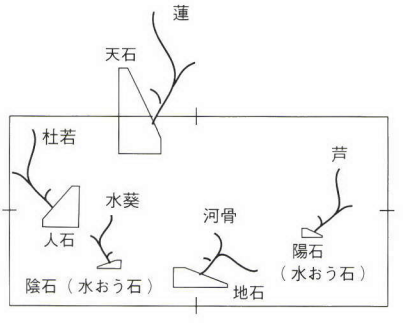
じて挿ける。さらに大広口であれば、杜若、河骨を株分けにして数多く挿けても構わない。

27 蓮　河骨　杜若　芦　水葵　五種　挿け方

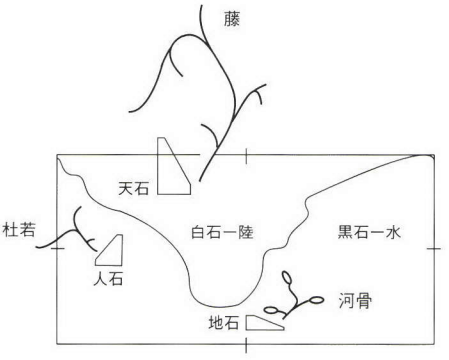
蓮、河骨、杜若、芦、水葵の五種の水草を取り合わせる挿け方である。この挿け方は、大広口に五石の石飾りをして挿ける。天地人三才の石に、「水おう石」という陰陽二石を加えて五石とする。「水おう石」の二石は、水草のみを挿けるときに使う石で、水嵩が低いときには見えるが、水嵩が上がれば見えなくなるような石であり、水面ほどの高さのものを用いる。

まず、天石の後ろに蓮を五葉二花、もしくは七葉三花と挿ける。このとき石が主位であれば主株の蓮の花は客位に、石が客位であれば蓮の花は主位に挿ける。そしてまた、これに魚道を分けて大小の浮葉の二葉を加える。

次に、人石の後ろには杜若を五葉一花の横姿にして挿け、地石の後ろには河骨を三葉一花に挿ける。そして、陽の「水おう石」には芦を三本挿け、一方、陰の「水おう石」には水葵もしくは花沢瀉（はなおもだか）を三葉一花で挿ける。この「水おう石」は、水嵩が低いときには見えるが、水嵩が上がれば見えなくなるような石であるので、よって水面ほどの高さのものをそれぞれ「陰」「陽」にして大小と用いて使う。主株の蓮は大きい姿に挿け、ほかの花は小さい姿に挿けて、全体の姿が調和するように気をつけねばならない。



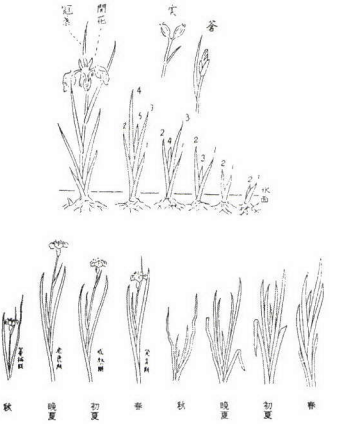
蓮　河骨　杜若　芦　水葵　五種



藤　河骨　杜若　三種

『葉組の巻』　杜若　秋の挿け方

『葉組の巻』　杜若　夏の挿け方



『葉組の巻』　杜若　出生の順序

28 杜若　四季咲き　挿け方

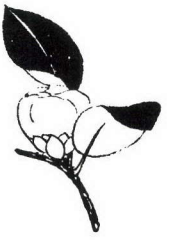
杜若はアヤメ科に属する。この杜若は、そのときの時候をしっかりと捉えて挿けるものである。以下に、四季に応じて挿ける四季咲き挿け方について述べる。

春の杜若は、昨冬に出遅れたものが、春の暖さを感じとって咲き出たものである。よって春の杜若は「虚実」に挿ける。体用という性情の両気をもって、出生のままに葉を組む。この頃の葉は柔らかいために組み直すことが困難であるので、出生のまま「実」をもってして挿けるのである。花は葉より大いに低くして、半開に挿ける。この半開にするところは、すなわち陰陽和合である。また、魚道を分けて花矩を守り、水切葉を適宜使って挿けていく。このように「実」に従い、一方で挿花として「虚」を加えていく。これをもって虚実の挿け方とする。

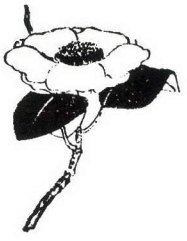
夏の杜若は、葉がしっかりしているので、花矩をしっかりと守る。葉先のかぎが向き合うように組んで葉組する。葉で三才の格をとり、花は開花・蕾と陰陽に用いて、葉よりも低くして挿ける。花で三才の格を取るときは、大株を「実」として自然のままに挿け、「虚」として小株で葉を組み株分けとする。そして、これにそれぞれ花を応合って挿ける。また、水切葉も適宜使って挿けていく。なお、葉は短い葉が手前に、長い葉が奥にくるように扱い、中に添わせる芽吹葉は中低にして組む。

秋の杜若は、組葉の中に黄葉を加え、花は葉よりも高く挿ける。魚道を分けて、秋の閑静の情を現す。さらに、実（み）を使って挿けたりする。

冬の杜若は、枯葉・虫食い葉を多く使い、葉組することなく出生のままに挿ける。花は、低い



『生花早満奈飛』 椿　霜囲いの葉



『生花早満奈飛』 椿　挟葉

葉よりもさらに低く、すくんだ状態の「すくみ花」として扱う。実を使って挿け、さらに枯葉・垂葉・折葉を用いて、霜枯れたる冬の景色を移しとる。

29 椿　四季咲き　挿け方

椿は花がぽとりと落ちるので、戦場の花やめでたい花としては挿けることを禁じられてきた。しかし白玉椿は「八千代椿」とも呼ばれ、その生命の長さや清浄感を賞して、めでたい花として挿けられる。

四季咲きの椿を春に挿けるとき、用には半開の花を、そして体には満開の花を挿ける。そして留には莟を、体に準じた花数にして挿ける。春の椿は、冬を越すために花を守ってきた葉が花の上に反転してついているものである。この葉を「霜囲いの葉」といい、これを花の上にかざして使って挿ける。また、この「霜囲いの葉」と同様に椿の花を守ってきた葉で、花の両端を二枚の葉で挟んでいる姿をもつものを「挟葉（はさみば）」という。この「挟葉」も同様に扱って挿ける。

夏の椿は、用には満開の花を、体には半開の花を、また留には莟を挿ける。夏の椿を挿けるときは、冬を越すために花を守ってきた葉である「霜囲いの葉」「挟葉」を使うことはない。

秋の椿は、春のときと同じ扱いでもって挿けるものである。

冬の椿は、開花の花を用いることなく、莟を多くして半開を少し混ぜ合わせて挿ける。この冬の椿を挿けるときは、「霜囲いの葉」「挟葉」を用いて挿ける。このときの「霜囲いの葉」と「挟葉」は、これから続いていく冬の寒さに堪え、椿の花を守っていく葉と捉えることができ

る。

なお、季節の相を現す七十二候では、新暦十一月八日頃を「山茶始開」として、椿の花が咲きはじめる頃としている。

30 軸付葉物　挿け方　十二カ条

軸付葉物とは、葉が数枚生じた後に、その中より長い花軸が出て花が咲くものをいう。この軸付葉物を挿けるときには、まず花軸についている付葉を一旦外して形を整える。そしてより、最初に外した付葉を使って、花軸の根元のところを囲むように挿ける。もしくは、外していた付葉の葉で形を整え、これに花軸を添えて挿ける。

軸付葉物として、伝書では十二種挙げられている。荻・芒・檜扇・紫蘭・厳蘭・金鶏蘭・熊竹蘭・檀特草・縮砂・欝金蕉・美人蕉・芭蕉である。以下に詳しく述べるものとする。なお、軸付葉物として現在よく挿ける花材は、グラジオラス・フリージャ・チューリップ・ストレリチアなどがある。いずれにしてもこれら軸付葉物は、葉と花軸をそれぞれ分けて扱う考えでもって挿ける。

◎ 荻

荻は、五・六月頃に黄褐色の蘇枋色の麗しい穂が生じる。四季通じて若葉を生じる常磐草で、芒によく似ており、寒中でも葉が枯れないために寒芒の別名をもち、冬にも挿けられる。

『伝書四方之薫』　芒

この荻の挿け方としては、葉でもって形を整えていく。まず穂を取って葉ばかりにしたものを使って姿を整えて、用として挿ける。次に、葉をすべて取り除いた二・三本の穂を、先に挿けた用の葉に添わして挿ける。体には直ぐなる立ち上がる葉を挿け、これに二・三本の穂を体の葉に添わせて挿ける。この穂も用と同じように、葉を残らず取り除いておく。そして、体の前添として立ちたる葉を使い、穂を体添より留の方に挿け、最後に留の葉と穂をそれぞれ挿ける。

つまり荻は、穂のない葉ばかりにした軸と、葉を取り除いて花の穂ばかりにした軸とを組み合わせて挿けていくのである。

全体の姿として、穂の数は五本から十七本まで使って挿ける。花の穂がない季節に挿ける場合には、水仙や寒菊などを応合って挿ける。穂があるときは、応合いの草花を使っても使わなくてもよい。なお、花器はその時々に応じて見合わせて用いる。

◎芒（すすき）

秋に花を咲かす芒であるが、芒には三種類のものがある。花が白色で、穂の丈が一尺位と長く成長し、花の開いたシロススキを真麻穂（まおほ）の芒という。そして花が赤色で、穂の丈が一尺位のムラサキススキを真蘇穂（まそほ）の芒、また花が白色で穂の丈が五寸くらいの、未成長で花の開かない頃のシロススキを政穂（まさほ）の芒という。清く澄み渡った明月のときには、この三種を同時に用いて挿けるものとされている。

芒の穂出しのときの挿け方としては、荻のそれと同様である。葉でもって全体の形を整えていき、これに葉を取り除いた穂を添えて挿けていく。つまり、穂のない葉ばかりにした軸と、葉を

『葉組の巻』　檜扇（平組）

取り除いて花の穂ばかりにした軸とを、組み合わせて挿けていく。

長すぎる穂は、穂先をつまんで先を指で引きちぎると穂が短くなり、垂れ下がった穂も自然な感じに立ち上がる。また先が垂れ下がった葉は、葉先を斜めに鋏でそぎ上げる。芒の葉は二方向に出るので、向きが悪い場合には、葉のさやの部分を指先で回して、葉先を思う方向に回して扱う。これを回し葉という。

穂の出ていない芒を挿けるときは、これに美なる時候の花を応合って挿ける。この応合いの花としては、麗しく花車（きゃしゃ）なものを用いる。花器は置花器や据物を使うものとする。

なお、穂が多く出てからのものは、数多く使っては挿けない。ただし縦縞、横腐のある箭芒（やはず）を、穂のない葉ばかりのものを使って、数多く三百本と用いて段取り挿けにしたりすることもある。

◎檜扇（ひおうぎ）

檜扇はアヤメ科に属する多年草である。この檜扇の挿け方としては、三本から九本まで用いて挿ける「平組」と、十一本以上を用いて挿ける「角組」の二通りのものがある。

まず「平組」の挿け方として、はじめに中葉を長くして葉を三枚組んで挿ける。この三枚組んで挿ける葉は、全体の姿として挿けあがった用の前にくるもので、花姿の足許を包むものである。そしてそれから、体・用・留と檜扇の花を三本使って挿け、最後にまた二葉を加える。この二枚組んで挿ける葉は、留の前に挿け、さきほどの三枚の組葉と同様に花姿の足許を包むものである、これでもって五葉三花の「平組」とする。

花を七本・九本と多く使うときは、花姿の用の前にくる前葉として五枚組んで挿け、そして留

『葉組の巻』 檜扇（角組）

『伝書四方之薫』 紫蘭

の前に葉を二枚組み、以上で七葉の「平組」とする。なお、檜扇を五本使って挿けるときの組葉としては、五葉の「平組」、七葉の「平組」どちらにしても構わない。

次に「角組」の挿け方について述べる。このときの檜扇の花は、十一本以上使って挿ける。花姿の用の前にくる前葉として葉を五枚組み、そして留の前に葉を二枚組み、足許の前方を包む葉として、合わせて七葉を用いて挿ける。そしてさらに、用の向こう相生の方に葉を二枚、また留の向こう控の方に葉を二枚組んで、足許の後方を包む葉として、合わせて四枚の葉を用いて挿ける。角軸があり角々から四方に葉が出る出生をもつ檜扇を、足許の四方を葉で包んで挿ける挿け方を「角組」という。

軸付葉物である檜扇であるが、地上にようやく生じたときには未だ軸は見えるものではない。よって軸を見せて挿けることは出生に背くものとして、葉でもって軸を包み隠して扱うのである。

◎ 紫蘭（しらん）

紫蘭は蘭科に属する多年草で、花茎の上部に紅紫色や白色の可憐な花をつける。紫蘭の出生は、葉がまず向き合って二方向に出て、その中より花茎が伸びていき花が生じる。よって挿花として移しとって挿けるときも、この紫蘭の出生に従って挿ける。つまり、向き合った葉で形を整え、これに葉を外した花軸を添えて挿けていく。

「実」として紫蘭の出生に準じて挿け、そして挿花つまり「虚」として花瓶に移しとる。これをもって虚実の扱いとする。

この紫蘭は、三本より九本まで使って挿ける。大きいものは三尺あまりにまで伸びることがあ

り、軸も太く幅も広いが、このような大きなものは数を増やして挿けるものとする。

◎ **巌蘭**（がんらん）

常盤草である巌蘭の出生も紫蘭と同じく、葉がまず向き合って二方向に出て、その中より花茎が伸びていき花が生じる。よってこれを挿けるときは、この巌蘭の出生に従い、向き合った葉で形を整え、これに葉を外した花軸を添えて挿けていく。花は二本か三本と少なめに用いて、これを葉に添わせて挿けるものである。

◎ **金鶏蘭**（きんけいらん）

金鶏蘭は蘭科に属する多年草で、花は葉が出たその脇から生じていく。この出生は巌蘭と同じで、その挿け方や扱いも巌蘭に準じるものとする。つまり葉で全体の形を整え、これに葉を外した花軸を添えて挿けていく。

◎ **熊竹蘭**（くまたけらん）

熊竹蘭はショウガ科に属する多年草で、葉の真ん中より花茎が生じて、その先端に紅色の斑点をつけた白い花が咲く。熊竹蘭の葉は大きいため、挿けるときには葉を適当な長さに切って切葉とし、葉でもって全体の姿を整えていく。そして、これに葉を外した花軸を添えて挿けていく。花が咲いていないときに挿ける場合には、時候の草花をこれに添えて挿けたりする。

『葉組の巻』　檀特

『伝書四方之薫』　欝金蕉

◎ **檀特草**（だんどくそう）

檀特草はダンドク科に属する多年草で、花の丈が長く伸び、夏から秋にかけて赤色の美しい花が総状にして開く。この出生も、葉の真ん中より花茎が生じていって花が咲く。よって挿け方としても、花の軸についた葉をそのまま用いては挿けない。花のついていない葉を使って、これを適当な長さに切って切葉とし、全体の形を整えていく。そして、これに葉を外した花軸を添えて挿ける。

◎ **縮砂**（しゅくしゃ）

縮砂はショウガ科に属する多年草で、四・五月頃に純白の大きな花が開き、十月に赤い実をつける。縮砂は、花の頃も、また実の頃にも愛でて挿ける。そして、この縮砂を挿けるときも、花の軸についた葉をそのまま用いることなく、花のついていない葉でもって全体の形を整えていく。そして、これに葉を外した花軸を添えて挿ける。

◎ **欝金蕉**（うこんしょう）

欝金蕉はショウガ科に属する多年草で、花は葉が四方に出た中より生じる。挿け方として、花の軸についた葉をそのまま用いることなく、花のついていない葉でもって全体の形を整える。このとき葉を二本寄せて使い、これを一本の心でもって挿ける。そして、これに葉を外した花軸を添えて挿けていく。

丈が長く伸びない欝金蕉は、三本くらいにして数を少なく挿けたほうが美しい。

『生花玉かつら』 美人草

『伝書四方之薫』 芭蕉

◎ **美人蕉**

美人蕉はバショウ科に属する多年草で、花は葉の中心より紅色に生じる。この花の美しい様をもって、美人蕉と名づけられたものである。

挿け方として、花の軸についた葉をそのまま用いることなく、花のついていない葉でもって全体の形を整えていく。そして、これに葉を外した花軸を添えて挿けていく。

◎ **芭蕉**

芭蕉はバショウ科に属する多年草で、その丈は非常に長く伸び上がっていき、葉も非常に大きいものである。よって、芭蕉を挿けるときは、できるだけ小さなものを選んで用いる。この応合いの花としては、大菊をはじめとして存在感のあるものを使って挿ける。

「花の王」と呼ばれる牡丹に対して、芭蕉はその雄大な姿から「草の王」とも呼ばれている。

31 葉物　組み方　九カ条

葉物組み方のこととして、唐おおばこ・岩蕗・宝子・擬宝珠・水芭蕉・紫苑・芭蘭・万年青・浜万年青の九種のものが伝わっている。以下にその組み方として詳しく述べるものとする。なお、葉物の組み方として現在よく挿ける花材としては、カラー・アンスリュームなどを挙げることができる。

『伝書四方之薫』　唐おおばこ

◎ **唐おおばこ**

唐おおばこはオオバコ科に属する多年草で、一般的なおおばこに比べて葉が大きく、その丈も長く伸びていく。この出生として、葉は十方へと開き出て、夏から秋にかけて四方に生じた葉の間から、葉よりも高く穂状に花が咲く。「実（み）の出る処は真中にあらず」と伝書にあるように、この花は実と間違うくらいのものである。

挿け方としては、まず葉でもって全体の姿を整えていく。添うて添わずの葉、また界葉を挿けて、丈に準じて五葉から九葉まで組んで挿けていく。

このように葉で三才の格をとる一方で、真ん中より出ることのない花を実（み）として扱い、この花でも三才の格を整える。実（み）として花を使う箇所としては、体の葉の後ろより一本、用の葉より一本、留の葉の下より一本と、とにかく組葉の外に用いて、葉よりも高くして挿ける。

◎ **岩蕗（つわぶき）**

岩蕗はキク科に属する多年草で、黄色の花を咲かせる。

挿け方として、まず用には大葉を挿け、体には用より少し小さい大葉を用い、この体と用の間に添として小葉を使って挿ける。大葉と大葉の間に小葉を用いることがなければ変化もなく、風雅な姿をそこに求めることはできない。よって小葉を用いるわけだが、この小葉のことを「力葉」という。

花は組葉の中に葉よりも高くして用い、五葉一花、五葉二花、七葉二花、七葉三花、九葉三花と挿けるものである。数多く用いるときは、界葉を用いて株を分ける。また、この岩蕗は多年草

であるので、花のないときには麗しき草花を応合って挿ける。

なお、唐岩蕗は大きいものなので、葉数を多くして挿けるが、朝鮮岩蕗はしわが多く小さいものである。そして、深山岩蕗は花葉ともに三尺余りの高さまで伸び、その葉は八つ手のように細く切れ、志々草（ししぐさ）とも呼ばれている。

◎ **宝子**（たからこ）

宝子はキク科に属する多年草で、尖った葉先と葉牙をもち、黄色い花を咲かせる。異名として般若草ともいう。この出生は岩蕗と同じで、挿け方も岩蕗に準じるものとする。

◎ **擬宝珠**（ぎぼし）

擬宝珠はユリ科に属する多年草で、楕円形の葉は十方に広がり、紫色の花を真ん中より咲かせる。擬宝珠の葉は花に比べて大きいものである。

挿け方として、まず用に大葉を使って挿け、次に体に中葉を挿ける。そして留に小葉を使って挿け、葉でもって全体の形を整えていく。体に大葉を用いて、用に中葉を用いても調和をとることができる。いずれにしても、葉の大中小をうまく取り合わせて、バランスよく挿けることが大切である。そして、花は組葉の中に、葉よりも高く用いて挿ける。

数多く挿けるときは、添うて添わずの葉、界葉を挿けて株を分け、九葉三花まで挿ける。

『高野之玉川』　擬宝珠

『生花玉かつら』 紫苑

◎ **水芭蕉**

水芭蕉はサトイモ科に属する多年草で、春に緑白色の仏焔花をつける。夏になると、カイウを大きくしたような葉が生じるが、その頃に挿けることはない。

この挿け方は擬宝珠と同じ扱いとし、葉でもって全体の形を整えていく。全体的に小さなものであるので、七葉二花までにして挿ける。

◎ **紫苑**

紫苑はキク科に属する多年草で、葉は向き合って生じ、薄紫色の花を咲かせる。この出生として、葉が向き合って生じることより、この葉のことを「拝葉」という。

挿け方として、まず用に大葉を挿け、この葉と向き合うようにして「拝葉」を挿ける。このとき、大葉と拝葉の二枚の葉が同性のものとならないように、一枚は直ぐな葉を選んで使い、もう一枚は曲のある葉を選んで挿ける。ここに陰陽和合がある。そして、この二枚の葉の間に、葉よりも高くして用の花を挿ける。

次に、体には中葉を挿け、この葉と向き合うようにして「拝葉」を挿ける。そして、この二枚の葉の間に、葉よりも高くして体の花を挿ける。また、小葉を使って挿ける留も、用と体と同様に扱って葉と花を挿けるものである。

未生の理では、七つ目に生じる変化に対して、四つ目にしてようやく物事が確かなものとして定まるものとし、元来は花一本に対して葉を三枚使うのが「一花三葉」としての定方である。よって、五葉には花を一本使い、七葉にしてようやく花を二本使い、九葉にして花を三本使うのであ

る。しかし、力強く大きい葉をもつ紫苑のような類いのものは、界葉を使いながら株を分けて、五葉二花、また七葉三花と挿け、「一花三葉」の定法によらずに葉を組んで使って構わないとされている。これは、いわゆる虚実の扱いであるといえる。

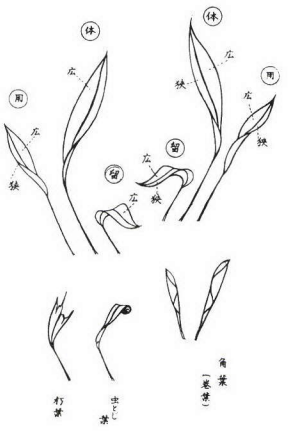
以下に、再度「一花三葉」に含まれる意に関して述べるので参考としたい。一という太極から二という両儀に変化し、万物を構成する天・地・人という三才が定まっても、人が声を発することがなければ、このような概念も生じることはない。この人の声とは認識することであり、これは四つ目であるといえる。

一が生じて二となり三に通じ、そしてまた一に戻っていく。一日も子の刻（夜十二時）に一陽が生じ、丑の刻（二時）には陽が漸長し、そして寅の刻（四時）に陽が確かなものとして定まる。しかし、それでも未だ明るくはない。ようやく明るくなるのは、四つ目の卯の刻（六時）である。このように、天地自然というものは三が定まって四つ目に移行することがなければ、次の展開の花を生じることはない。よって、一花三葉の割合よりも葉の数が多いのは構わないが、その割合よりも葉の数が少なくあってはならない。

◎ **芭蘭**（ばらん）

芭蘭は、ユリ科に属する多年草で、春の三月より四月ごろ地下に花を咲かせる。この芭蘭は三葉五葉七葉九葉と、葉の丈に応じて、多くは五十枚あまり用いて挿けることがある。

まず七葉の組み方として、日裏である界葉を用いて四枚の一株と三枚の一株と、合わせて二株に分けて挿ける。万物は七つ目に変化するものといわれている。陰と陽の境を成す七つ目の葉を



『葉組の巻』　芭蕉

『葉組の巻』　芭蕉

界葉として日裏を用い、この界葉によって株を分けて「二季の通い」を備えて挿けるのである。九葉、十一葉と挿けるときは、界葉を二枚用いて、三株に分けて挿ける。さらに、これよりも多く挿けるときも、界葉を多く使って株を分けて挿けていく。また相生のような添うて添わずの葉も、数を限らず程よく使って挿けていく。

芭蕉は常磐草であるので、時候の草花をこれに応合って挿けても構わない。この応合いの方法として、まず芭蕉を十三葉、十五葉と常のごとく挿ける。そして体と用の間、体添の間、留の間、用と用添の間などに、撫子や仙翁など花車（きゃしゃ）な花をちらちらと見せて麗しく挿ける。芭蕉は春の三月より四月ごろ地下に花を咲かせるものであるが、この頃に芭蕉を挿けるときは、応合いの花を添えることは控える。

広口などに挿けるときは、三才の石飾りをして砂利留めとし、大株を二株、三株と挿ける。またその間に、「尖葉（とがりば）」に花を添えたものを応合って挿ける。「尖葉」とは、葉の先が巻いた状態にある新葉のことである。この「尖葉」には左旋と右旋の別があり、陰陽和合のこころでもって扱うものとする。大広口であれば、天一地六の割合で小石を配し、飛び石の景色を移しとったりとする。

二間、三間と座敷が続くときには、次の間には成長した状態の芭蕉を挿け、さらに奥の床には薄広口に石飾りをして、未成長の「尖葉」に花を添えたものを応合って二株・三株と挿ける。このようにして、芭蕉の出生を想わせる。茶席の床にも、「尖葉」に花を添えたものを応合って、陰陽和合という未生の姿を移しとっても構わない。

『葉組の巻』　万年青

◎ 万年青（おもと）

万年青は、ユリ科に属する多年草である。その出生として、はじめに二枚の葉が向き合って出て、その中よりまた二枚向き合って出る。このため自ずと中から生じる葉が新しい出生葉となる。この四葉は、東西南北の四方を指して開いていく四方葉である。またこれより三葉が生じ、七葉になると花が生じる。花は五月頃に咲き、十二月頃には青い実が赤く色づく。七枚ではじめて花を開き、実を生じる出生から、実は七枚以上の場合においてのみ使う。ただし、万年青七五三のときの五枚葉は、成長途上ではなく、成長後の隠居した親株の意味をもつ五枚葉と捉えることができるので、このときには五枚葉にも実を使って挿けて構わないとされている。

まず、七葉一実の挿け方として、先端が丸みを帯びた二年目の葉を体と用に使って挿け、特に広く丸みを帯びた三年目の葉は実囲いの葉として留に用いて挿ける。体と用の間には、先端が尖った一年目の葉を、体添・用添として出生葉を二葉使う。そして、用添に風囲いの葉を、体添に霜囲いの葉を使って挿ける。

実を守る葉としてはいくつかのものがある。実の上にあって霜から実を守る霜囲いの葉（体後添の葉）、実を風から防ぐ風囲いの葉（用添の葉）、実を抱えて実を守る実囲いの葉（留の葉）、砂・泥から実を防ぐ砂囲いの葉（控の位置）・泥囲いの葉（留後添の葉）と、それぞれに実を守る役目を成している。特に、霜囲いの葉・風囲いの葉・実囲いの葉の三枚は、実を守る三役と呼ばれている。

九葉、十一葉、十三葉までは、この実を守る三役を使いながら一株に挿ける。このときの実囲いの葉には枯葉などを混ぜて、砂・泥から実を防ぐ砂囲いの葉（控の位置）・泥囲いの葉（留後添

の葉）なども挿ける。

なお万年青は、十三葉までは実を一つだけ使って挿けるものとする。これは、先程も述べたように、七枚ではじめて花を開き実を生じるという万年青の出生に準じたものである。さらに、十五葉の組み方としては、方形体の項を参照いただきたい。

万年青を広口などに挿けるときは、時候の花車（きゃしゃ）な草花を応合って挿けたりする。大広口に挿けるときは、さらに種々の万年青を取り混ぜて五株・七株と挿け、応合いの草花をこれに添えて挿けても構わない。

◎ **浜万年青（はまおもと）**

浜万年青は、「はまゆう」という名でよく知られるヒガンバナ科に属する多年草である。その出生は万年青と同じで、挿け方も万年青のそれに準じるものとする。

相違点として、浜万年青は、水仙の袴のような外皮である葉の鞘を、足許につけて姿よく挿けたりする。また、花は開花に至って葉よりも高くなることより、花を使って挿けるときは葉よりも少し高くして挿ける。

32 長葉物　挿け方　九カ条

長葉物挿け方のこととして、伝書では九種の花材が挙げられている。シャガ・イチハツ・翁草（おきなぐさ）・カンゾウ・正宗菖蒲・縞蒲（しまがま）・花菖蒲・水仙・蘭（らん）の九種類であり、以下に詳しく述べるものと

する。長葉物である杜若は、杜若四季咲き挿け方の項を参照いただきたい。なお、長葉物として現在よく挿ける花材としては、アマリリス・アガパンサスなどがある。

『葉組の巻』 シャガ

◎ シャガ

シャガはアヤメ科に属する多年草である。シャガは葉が柔らかいために、外して葉組するのは難しい。よって葉を外して組み直すことなく、自然に整った葉をそのままに使って挿ける。

まず四・五枚の行儀よく組んだ葉、つまり自然のままに姿良く葉組された様をもつ葉を、四・五枚用いて花姿の用として挿ける。そして用の花と体の花を挿け、体の葉として自然に整った三・四枚ついた葉を挿ける。最後に留の花を挿け、小さい葉で姿のよいものを留の葉として挿ける。このとき小さい葉がなければ、留の葉は組み直して葉組して構わない。なお、花は組葉の中に添わせて挿ける。

花数を多く挿けるときは、界葉を使って株を分けて挿ける。咲きはじめの頃の短い花を挿けるときは、シャガの花を葉よりも低く用いる。そして旬の開花の頃の高い花を挿けるときは、シャガの花を葉よりも高く使って挿ける。いずれにしても、挿けるときのシャガの姿と、その時候に準じることが大切である。

◎ イチハツ

イチハツは、アヤメ科に属する多年草である。挿け方・花葉の使い方ともに、シャガのときと同様であると伝書には記されている。しかし、葉が柔らかいシャガに対して、イチハツは葉が

『葉組の巻』　イチハツ

『生花玉かつら』　翁草

しっかりしているので、葉を組み直して挿けたほうが形を整えやすい。とにかく姿良く葉を使うことが肝要である。花は二本・三本・五本まで使って挿けるものとする。

花を三本使う挿け方として、まず用に三枚葉を中低にして組み、用の花を葉よりも高くして挿ける。次に体と用の間に界葉として二枚組んで挿け、体の花と中低にした三枚葉を体として挿ける。最後に、留の葉を中低に三枚組み、留の花を挿けるものである。なお、花は組葉の中に添わせて挿ける。

シャガ、イチハツともに、掛花器を使って挿けたり、また他の花材の応合いの花として添わせて挿けたりとする。

◎翁草（おきなぐさ）

翁草はユリ科に属する多年草である。翁草の出生の特徴として、古葉の中より新葉に花をもって、花は葉の外に添って生じる。よって挿けるときも、この出生に準じて挿ける。新葉のものを一株づつ使って挿け、さらに古葉を添えて花の姿を整えていく。これは、虚実における「実」の扱いである。新葉と古葉をうまく調和させて、翁草の出生を現す。そして、花は組葉の外に添わせて挿ける。

なお、新葉のみを用いて、「虚」の扱いでもって挿けても構わない。

◎カンゾウ

カンゾウは別名「わすれ草」ともいい、ユリ科に属する多年草である。カンゾウの出生として、

古葉の中より新葉に花をもって、花は葉の外に添って生じる。これは万年青の実が生じる姿と同じである。この出生に準じて、カンゾウを挿けるときには、葉でもって全体の姿を整え、花は組葉の外に添わせて挿ける。

一株に花を一本使い、株分けにして二株・三株と挿けていく。三株挿けるときは、花を三本用いて体・用・留に一株づつ挿け、古葉でもって花の足許を包んで挿ける。この花の足許を包む古葉のことを「花囲いの葉」といい、古葉の中より新葉に花をもって生じる出生を現したものである。

◎ **正宗菖蒲**（まさむねしょうぶ）

正宗菖蒲は、サトイモ科に属する多年草である。ちなみに花菖蒲・杜若・イチハツはアヤメ科である。

この挿け方として、自然のままに姿良く葉組された様をもつ葉は、そのままに使って挿ける。しかし、そのような整った葉がないときは、葉を中低に組んで葉組して挿ける。「花の咲かざるものなれども美しき葉故用う」と伝書にある。正宗菖蒲の花は、実（み）と見間違うようなもので、美しいものではない。しかし、正宗菖蒲の葉がもつ美を愛でて、これを挿けるのである。

花器は据物を用いて二株・三株と挿け、河骨・杜若・水葵・オモダカなどの水草を応合って挿けたりする。さらに、花車（きゃしゃ）な麗しい陸物の草花を応合って、水陸分けにして挿けたりもする。

『葉組の巻』 花菖蒲（三花九葉）

◎ **縞蒲**（しまがま）

縞蒲（しまがま）は縞（しま）のある蒲で、ガマ科に属する多年草である。縞蒲は穂が出るような頃になると、葉が十分に伸びすぎて格好のいいものではない。よって、穂が出る前の、あまり伸びてない若い葉のものを用いる。葉にはねじれがあるので、これを風情よく直す。葉でもって全体の姿を整えて、程よい長さとした穂を葉に添えて使って挿ける。

花器は据物を使い、魚道を分けて水草を応合う。また水陸分けにして、縞蒲に陸草を応合って挿けたりとする。なお、縞のない普通の蒲も、挿け方は同様である。

◎ **花菖蒲**（はなしょうぶ）

花菖蒲（はなしょうぶ）はアヤメ科の多年草である。

この挿け方として、七葉二花で挿けるときは、まず用として三枚の葉を中低にして組む。そして、体の花に開いたものを使って陽の花として挿け、体の葉を二枚挿ける。最後に、留の花として莟のものを使って陰の花として挿け、留の葉を二枚組んで挿ける。開花の高い花を「陽」、莟の低い花を「陰」と捉えて扱うものである。ただし、体の花も留の花も、葉よりは高くして、組葉の中に添わせて扱う。

九葉三花の挿け方としては、まず用として五枚の葉を中低にして組み、用の花として満開のもの、体の花として半開のものを用いて挿ける。次に、体の葉を二枚組んで挿ける。そして最後に、留の花として莟のものを用いて挿け、留の葉を二枚組んで挿ける。このときも、体・用・留の花はいずれも葉よりも高くして、組葉の中に添わせて用いる。

『葉組の巻』　花菖蒲（五花十五葉）

十五葉五花の挿け方としては、まず用として五枚の葉を中高にして組む。真ん中の葉を中高にして挿けるのは、十一葉・十五葉と数多く挿けるときである。真ん中の葉は成長の度合いによって中低となったり、中高となったりとするのが出生である。全体の株で考えたときに、九葉までは未成長のものと捉えて中低とし、十一葉以上になると株として成長したものと捉えて中高とするのである。また女性的な杜若に対して、菖蒲は男性的なものであるので、中高として力強く挿けた方が美しいともいわれている。

次に、用の花と用添の花を二本使って挿ける。体の前に界葉として三枚の葉を中高に組んで挿け、体の花と体添の花を二本使って挿ける。そして、体の葉として長短に四枚の葉を中高に使い、最も長い葉を後ろにして、その葉を折って「風折葉」として挿ける。菖蒲は杜若と違って、その出生が直立した葉であるために「冠葉」を使うことはない。風のために葉先が折れることが多い出生より、この風折葉を使って挿けるのである。そして最後に、莟のものを使って留の花を挿け、留の葉三枚を中高に組んで挿ける。

また、さらに十五葉以上に葉組して、数多く挿けても構わない。

なお、この項に、花かつみ・アヤメ・馬藺草（ばりんそう）の挿け方として、この三種は細葉であるので、葉を組み直さずにそのままにして「実（じつ）」の扱いとし、葉の中に花がちらちらと見えるように使って挿けるものと伝書に記されているので参考にしたい。

◎　水仙

季節の相を現す七十二候では、新暦十一月十七日頃を「金盞香（きんさんこうばし）」として、水仙の花が咲きはじ

『葉組の巻』　水仙

『葉組の巻』　水仙　春の挿け方

める頃としている。水仙はヒガンバナ科に属し、他の花にさきがけて花を咲かせる。出生として、水仙は左右にそれぞれ二枚の葉が向き合って生じ、その間より花茎が伸びていく。そして、足許は袴（はかま）と呼ばれる白い根に包まれている。この出生より、水仙は四枚の葉を一元として扱い、この中に花を一本用い、合わせて一花四葉と定めて一元とする。これは出生に添った「実」の扱いである。

この水仙の葉は、指先で自由に揉（た）めて形をとることができる。二元の挿け方として、まず足許の袴のところを手で揉（も）んで潰して外しておき、一元として葉を組むときに根元にこの袴をはかせる。このとき、袴の長い方が、葉の長い方にくるように扱うものとする。

一花四葉でもって一元の株をつくり、これを「陽の株」とする。この「陽の株」は、片方の二葉でもって体の格をとり、そしてもう一方の二葉でもって用の格を備える。次に、同じく一花四葉でもって一元の株をつくり、これを「陰の株」とする。この「陰の株」は、片方の二葉でもって体添とし、そしてもう一方の二葉でもって留の格を備える。このとき、体添となる二葉は一枚に見えるように重ねて使う。つまり「陰の株」を陽数である三枚に見えるようにして、「陰中陽」と捉えるのである。これは「虚」の扱いである。このように「陽の株」を「実」と、「陰の株」を「虚」とし、ここに虚実等分の働きを見てとることができる。

三元の挿け方としては、体・用・留それぞれを一元でもって姿を整える。五元は、体に二元、用に二元、留に一元として五元で三才格として挿けたり、体・用・留・相生・控それぞれに一元使って五行格として挿けたりする。そして、七元までに葉の丈に応じて、数多く挿けていく。

株を増やして広口に数多く挿けるときは、大株を出生のままに使って挿け「実」の扱いとし、

『生花早満奈飛』　蘭鳳眼

一方、小株は挿花の法に従って揉めて挿け、「虚」の扱いとしたりする。これはすなわち、体用の挿け方であるといえる。

◎ **蘭**（らん）

蘭は蘭科に属する多年草であり、唐より日本に渡ってきたものと伝書に記されている。

まず五葉一花の挿け方として、用に皮骨肉を備えた趣のある曲がった葉を挿け、この用の添に真直ぐな葉を挿ける。この二葉でもって「象眼（ぞうがん）」を取る。「象眼」を取るとは、象の眼のように細く切れの長い空間を、用の「曲の葉」と用添の「直の葉」でもって作り出すということである。

次に、体に勢い強い葉を挿け、体の添として後ろへひらりと返る葉を使って挿ける。そして最後に留として真直ぐな葉を挿ける。この体添の葉と留の葉でもって、「鳳眼（ほうがん）」をとる。「鳳眼」をとるとは、最も貴き相であるとされる鳳凰の眼のような空間を、体添の「曲の葉」と留の「直の葉」でもって作り出すということである。

古い観相術では目の形について、鳳眼を最高として、以下、竜眼、牛眼、羊眼、蛇眼など、細かく分けて眼形を規定している。人間の資質を洞察する観相上で、最も重要なものは目とされている。

花は葉の手前より挿けて、体と用の葉の中に出して使う。花が葉の外より生じる出生より、花の軸を隠してはならない。七葉二篠、九葉二篠、十一葉三篠と扱い、花は三本までにして挿ける。ここでの一篠とは一株のことである。花器は、銅製のものや陶磁器が良いとされている。

33 実物　挿け方

天地の間にある森羅万象ものの姿に、陰陽が備わらないものはない。つまり形が生じれば、上下・左右・内外・表裏と相対した関係が必ず備わるものである。しかし実物は、その姿が円にして陰陽が肉眼では分かりにくい。陰陽の備わらないものは、用を成すことはない死物であると捉え、これを挿花として用いることはできない。よって、万年青・南天・石榴（ざくろ）などの実物を挿花として使うときは、必ずそこに陰陽を備えて挿けなければならない。

その昔、御書院の先に見事に咲いている南天があった。遠州公は、その麗しい実のついた南天を挿花として挿けたいと常々思っていたが、陰陽の区別のないものを挿けるのをためらい、ただ眺めているだけであった。ところがある日、ひよどりが飛んできて南天の実をついばみ飛び去っていった。これを見た遠州公は、これで陰陽が備わったと、即座に挿花として愛でたという故事がある。鳥が実をつつき、実の中が表面に出ている情況を現し、鋏で「鳥の嘴（くちばし）当り」として疵をつけ、陰陽を備える方法がある。

しかし、未生流では自然の風情のままに、実物に陰陽を備えて用いることが大切であるとしている。万物すべて形を成したならば、そこに陰陽という両極を備えないものはない。挿花百錬に「実物を花として取り扱うときは表裏、内外、陰陽和合を備えて挿花とする。私を用いず、自然にまかすを以って当流の伝とする」とあるように、実の中が自然に現れているような風雅あるものを選んで挿けるのである。なお、実物の表を前に見せて使うを「陽の扱い」とし、裏を前にして使うを「陰の扱い」として、陰陽を備えて挿けることもある。

34 木物　揉め方

枝を揉めるときは、両手の温もりでもって徐々に曲げていく方法をとるが、南天や梅擬などの揉めのきかないものもある。そのような枝を扱うときは、揉めるところを塩水に浸した紙で巻き、炭火などの火で熱を加えながら揉めるとよい。そして揉めた後は、元に戻らないように冷水で養っておく。

また、その他の揉めにくい木物などは、鋏で切り目をいれて切り揉めにしたり、手で折って折り揉めにしたりする。このとき、枝の節は折れやすいので、節と節の間を見定めて揉める。細い枝であれば枝を折り揉めにし、また太い枝であれば枝を切り揉めにするとよい。

35 花首　揉め方

花首揉め方、伝ある品の心得として、大輪の菊、百合、杜若、芍薬、椿、柘榴、南天と七カ条が伝書に記されている。

菊は、花が常に上を向いて咲くものである。特に大輪の菊は思うような向きに花を揉めるのは難しい。この揉め方として、花首と茎を一カ所によらず数カ所にわたって、自然な感じに温めて揉めていく。また現在よく用いるワイヤー等を、茎の中に入れて揉めてもよい。

百合は、花首が下に向く出生をもつ「臥す花」である。そのため勢いがない天蓋花として禁忌に触れることが多い。この百合を使うときには、一瓶の中に二～三輪の花は上に起こしてやり、

虚の姿として取り扱うものとする。そして残りは出生のままに下を向いた実の姿とする。この揉め方としては、花首の箇所にピン等を通して、花首を上に起こす方法などがある。

杜若は、茎を挿けてもやがて花が開いてしまい、花形が変わってしまう。よって杜若の花が開かないように、その茎の部分を少し切って、水があまり揚がらないようにする方法がある。現在ではスプレーなどで、その姿を固めてしまう方法もある。また花の軸がゆがんで使い勝手が悪いときには直して使う。花菖蒲やイチハツなども、この杜若と同様の扱いとする。

芍薬の花が咲かないようにするとき、菊と同様に濃い塩水を注入する方法がある。また、曲がりのよくない軸のものに形のいい花がついているとき、この花茎だけを切ってしまって、曲がりのいい軸につけ代えてしまう方法も伝わっている。

椿も芍薬と同様に、花茎だけをつけ代えて、程よいところに花を咲かす方法が伝わっている。また柘榴も、芍薬や椿のときと同様にして、花茎だけをつけ代えることが許されている。

水揚がりが悪い南天は、垂れ下がる実が多いと勢いがない。よって、南天を挿けるときは、実を自然な感じにうまく間引いて、軽くすることで全体的に立ち上がるようにする。

Lecture Ⅳ　四季祝日 諸事の花

1 五節句

「五節句」は月日ともに陽数である奇数の数字が重なり、大変めでたい重要な日とされたものである。物事を陰と陽という両気の性質で分けたとき、偶数を「陰」、そして奇数を「陽」と捉えることができる。そして、月日共に奇数が重なる日は陽気が極まるときであるとされ、厄祓いの行事が行なわれた。それぞれに季節の節目でもあり、体の穢れを祓い、また厄除けと無病息災を祈って、季節の産物の恵みに感謝した。

この五節句は一月一日の「元旦」、三月三日の「上巳」、五月五日の「端午」、七月七日の「七夕」、九月九日の「重陽」の五つの節句をいう。ただ一月一日は、奇数が重なったためでたい日という以上に重要な一年のはじめの日でもあり、「元旦」に代わり一月七日の「人日」をもって「五節句」とすることもある。この「五節句」はもともと中国の風習であった。日本には飛鳥時代に伝わり、次第に一般にも広まっていく。さまざまな風習と習合しながら行事として定着していき、江戸幕府が公式な年中行事として「五節句」を定めた。

1a　元旦の花

「五節句」の一つである一月一日「元旦」のときには、「元旦の節会」が行なわれた。元日の朝賀の後に天皇が正殿である紫宸殿（ししんでん）において、文武もろもろの役人に宴を賜る儀式のことである。この元旦の節会では、新年の会につながる三献（さんこん）の儀などが行なわれた。

正月一日の「元旦の節会」、正月七日の「白馬節会（あおうまのせちえ）」、そして正月十四・十六日の「踏歌（とうか）の節会（せちえ）」の三つが「三節会」とされている。正月七日、この日に白馬を見ると一年中の邪気を祓うという故事より、天皇の御前に白馬を引き回し、天皇が群臣に宴を賜る儀式を「白馬節会」という。また、正月十四・十六日に国家安泰を祈念して歌舞が舞われ、天皇が群臣に宴を賜る儀式を「踏歌の節会」という。この三節会に、騎射や競馬などを行なって邪気を祓った五月五日の「端午（たんご）の節会（せちえ）」と、五穀豊穣を神に感謝する十一月新嘗祭の最終日に行なわれる「豊明（ほうめい）の節会（せちえ）」の二つを合わせて「五節会」という。

一年の邪気を除くといわれる元日の朝に、その年はじめて汲む水である「若水」を用意し、その年の福徳をつかさどる神である歳徳神（としとくじん）を迎えるために、元日から十五日までの松の内の間（現在では普通七日まで）、家々の門口に門松を飾って新年の無事を願った。鏡餅を陰陽に二個重ねて一重として飾り供え、容易に折れない太い箸で餅の入った雑煮を食し、また屠蘇（とそ）の薬を酒の中に入れて、歳の若い者から順に歳徳神のいる吉方に向って飲み、悪鬼を祓った。

この元旦のときに挿ける花としては、注連（しめ）の伝の若松を挿ける。「注連（しめ）（七五三（しめ））の伝」とは注連縄の故事からきたもので、特にめでたいときの花の挿け方を未生秘伝としたものである。「注連の伝」には、正月一日の若松、同二日の伐竹、同三日の梅、万年青の挿け方がある。

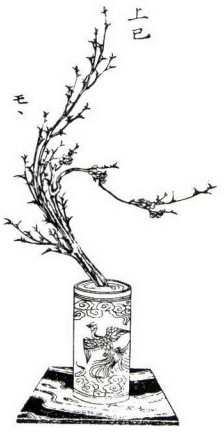
『四方の薫り』 元旦の花

注連とは注連縄のことを指し、この縄でもって境界を示して清浄・神聖な場所を区切り、神前に不浄なものの侵入を禁じるようにしたものである。三筋・五筋・七筋と、順次に藁の茎を左旋にして捻り垂らし、その間々に紙垂を下げて、新年などに門戸や神棚に張るのである。神代の時代、天照大神が天の岩戸からお出になった後、再び中に入られないように岩戸に縄を張った。この縄が「尻久米縄」で、注連縄の起源とされている。正月に、門松とともに戸口に注連飾りを置くのも、家の中に悪霊を入れず、穢れを祓い、無病息災・家内安全などを祈念してのことである。

注連の伝の若松として、用に陰陽二本、体に陰陽二本、留に陰陽二本、体と用の間へ腹籠を一本、合計で七本を三才格で挿ける。体・用・留として、それぞれ挿ける長短二本の若松は、万物の成り立ちがこの陰陽という両気の消長によるものとする意を含んでいる。また、体と用の間に挿ける「腹籠」は、身籠っているもの、生じるものを現し、人間の腹の部分にあたる体の真中に挿ける。身籠り、そして五体満足に揃った嬰児が生まれるということは、生成流転し発展していく姿を現すものである。

このときの松は姿の変りたるものを用いる。つまり、陰陽六本の松に黒松（雄松）を用いたときは、腹籠を赤松（雌松）とする。そして、陰陽六本の松に赤松（雌松）を用いたときは、腹籠を黒松とし、それぞれ種類の違う松を使うのである。もしくは、七本の内で芽の五つ揃った綺麗なものを一本選んで、葉先を少し取って芽を綺麗に出し、これを腹籠として他の六本と区別して用いる。いずれにしても、万物は七つ目において変化するという理に立ったものである。

そして最後に、奉書で折り鶴を作り、金銀の水引七本を相生結びにして、用の下に金の水引がくるように結ぶ。若松の本数として七、五体生じる腹籠の五、陰陽の枝で成り立つ天地人・体用



『伝書四方之薫』　上巳の花

留の三才格の三、この七五三をもって注連（七五三）の伝とする。三筋・五筋・七筋と、順次に藁の茎を左旋にして捻り垂らし、その間々に紙垂（かみしで）を下げる注連（七五三）縄に通じる扱いのものである。

1b　上巳（じょうし）の花

三月三日は「五節句」の一つである「上巳（じょうし）」で、「桃の節句」である。古代の風習としては、この日を除厄の日として、水辺で身を清めて不浄を祓った。平安時代の宮中では、曲水の宴が張られ、祓えが行なわれた。曲水の宴とは、曲水に臨んで上流から流されてくる杯が自分の前を過ぎないうちに、それぞれが詩歌を作り、杯をとりあげて酒を飲み、さらに次へ次へと流していく行事である。祓えのときの紙人形である「形代（かたしろ）」をつくり、己の穢れをその「形代」に移して川や海に流して不浄を祓った。これは流し雛の風習として各地に伝わっている。

現在では主に女児を祝う節句として、厄除けの人形である内裏雛を飾り雛祭りが行なわれている。内裏雛の並べ方としては、当初すべて男雛は向って右、また女雛は向って左に置かれていた。向って右（そのものの左）は陽、一方、向って左（そのものの右）は陰であることによる。

桃は邪気を祓う仙木とされ、桃の花を浸した酒である桃酒は百病を除くといわれている。端午の節句における菖蒲酒、そして重陽の節句における菊酒も、同様に厄除の意をもつ。桃の節句である上巳、菖蒲の節句である端午、菊の節句である重陽の三つを「三斉日」といい、特に邪を祓う日とされている。

上巳の節句には、桃一色を挿ける。全体的に桃の若芽を主体として使って挿け、咲いた花は体

『伝書四方之薫』　端午の花

添に、もしくは内用の枝に奥ゆかしく使って挿ける。これは陰の方につつましくある女性の在り方を示すものである。

このときに挿ける桃は一重のものに限る。八重には毒があるとされているためである。桃の花が散ってしまっているときには、桃の若芽に、山吹などの草花をあしらって挿けてもよい。さらに広口を使って株分けにしたりと、数多く挿けたりもする。

なお、季節の相を現す七十二候では、新暦三月十日頃を「桃始笑（ももはじめてわらう）」として、桃の花の莟が開きかける頃としている。

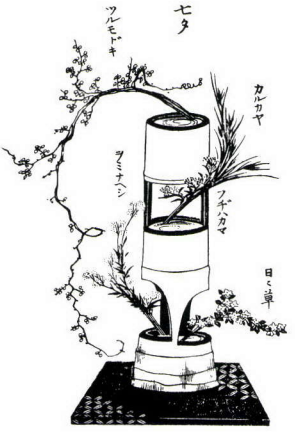
1c　端午（たんご）の花

五月五日は「五節句」の一つである「端午（たんご）の節句」で、三月の女子の節句に対して、この節句は男子の節句である。端ははじめ、午は五のことである。「端五」とは「初五」の意味をもち、元来は月のはじめの五日（牛の日）のことをいった。それが、数が重なる日をめでたいものとして、五月五日を代表して「端五」と定められた。

古来より五月五日の重五の日に、邪気を祓うため、菖蒲や蓬（よもぎ）を家の戸口にかけ、粽（ちまき）や柏餅を食べたり、また菖蒲酒を飲んだりして邪気を祓う行事が行なわれていた。菖蒲は邪鬼を祓い、また火災を除くとされている。菖蒲と尚武をかけて、近世以降は男子の節句とされ、甲冑・刀・武者人形などを飾り、庭前に鯉のぼりを立てて男子の成長を祝った。地方によっては、邪鬼を祓うとされる薬草の菖蒲湯に入る習慣などもある。

この端午の花としては、真菖蒲（サトイモ科）の葉に、花菖蒲（アヤメ科）の花を使って挿け

『四方の薫り』　端午の花



『四方の薫り』　七夕の花

る。真菖蒲には花と呼べるようなものがないので、これに花菖蒲をあわせて使うのである。このとき用の葉に「実分（みわけ）の組み方」というものがある。真菖蒲は初夏の頃に実のようなものが出てくる。この実が出る心でもって、葉組した三枚の葉と二枚の葉の間を少し分けて挿けることを「実分」という。

また、真菖蒲と蓬（よもぎ）の二種類を使って挿けたりしてもよい。このとき体と用に真菖蒲を使って、法格を守って挿け、そして体の前添より留にかけては、蓬を法格にあまりこだわることなく挿ける。葉組した真菖蒲と、あまり手を加えず自然のままの蓬を用いる挿け方は、体用の挿け方であるといえる。体用の挿け方とは、出生である「体」を重んじて挿ける一方で、花術である「用」として葉組し、同時に一瓶の下に挿けあげる。蓬は陸物のもので極陽、一方の菖蒲は水草で極陰とされているが、本来は水草と陸物のものを同じところに使って挿けてはならない。しかし、極陰と極陽は日月の如く両立しうるものであり、この両草をもって毒気を祓う端午の節句として挿けるときだけは許される。

また据物に挿けるときには、真菖蒲を姿よく二株・三株と挿けて、杜若や河骨などの水草を応合って挿けたりしてもよい。

なお、季節の相を現す七十二候では、新暦六月二六日頃を「菖蒲華（しょうぶはなさく）」として、菖蒲の花が咲きはじめる頃としている。

1d　七夕の花

七月七日は「五節句」の一つである「七夕」である。天の川の両岸にある牽牛星と織女星が年

『伝書四方之薫』 七夕の花

『四方の薫り』 七夕の花

に一度出会うという七月七日の夜、この二星を祭る行事で、古来中国から乞巧奠（きっこうでん）として伝わり、江戸時代には五節句の一つとして民間にも広がったものである。庭前に供え物をし、葉竹を立てて願い事などを書いた五色の短冊をつけ、また歌や字を書いて飾りつけ、書道や裁縫など芸事の上達を祈った。もともと七夕は、お盆の前に己の穢れを祓い清める行事のことをいった。水に穢れを流すという行ないは日本独特の風習であり、むしろ七夕の日には雨が降った方がよいとする地方まである。現在の七夕は、お盆の前に行なう行事というよりも、星祭りの色合いの方が濃くなり、お盆に行なう先祖祭りと七夕の祭りと、それぞれ別に行なわれるようになった。

この七夕の花は、初秋の情を現す。体に苅萱（もしくは桔梗）、用に桔梗（もしくは苅萱）、そして留に女郎花（おみなえし）を挿ける。桔梗は女性的な花で、一方、苅萱は男性的な花とされている。主体となる体に男性的な苅萱と女性的な桔梗のどちらを使うかは、挿ける者が決めて構わない。素朴な中に強さをもつ苅萱を牽牛に、そして華麗な中にもつつましくある桔梗を織女に見立てる。契りを忘れないようにと、地上に置いていった女郎花の下で、牽牛と織女は再会する。この苅萱、桔梗、女郎花の三種の花を、風情良く合わせて挿けるのである。体・用・留と一瓶に挿けるときに、桔梗と苅萱が互いに花を見切っても、風雅を感じるものであれば構わない。苅萱の中に桔梗がちらちらとある如くに挿ける。

また広口に挿けるときは、株分けにして風雅に挿ける。水陸を分けて、五～七種類と秋の七草〔萩（はぎ）・薄（すすき）（尾花（おばな））・葛花（くずばな）・撫子（なでしこ）・女郎花（おみなえし）・藤袴（ふじばかま）・桔梗（ききょう）（古く朝顔（あさがお））〕など秋の花材を取り合わせ、初秋の風情を移しとって挿けてもよい。大広口であれば、飾り石で天の川を見立てて、九～十一種と挿けることもある。

『伝書四方之薫』 重陽の花

『四方の薫り』 重陽の花

1e 重陽の花

九月九日は五節句の一つである「重陽の節句」である。陽数（奇数）で最も大きい、位の高いとされる九の数字が月日に並ぶことから重陽の節句とされている。この日、中国では高い丘などへ登る「登高」を行ない、菊の花を飾って、菊酒を飲み厄除けをした。日本でも、奈良時代より宮中では、杯に菊花を浮かべた酒を酌み交わして互いに長寿を祝い、詩歌をつくって宴を楽しむ「観菊の宴」が催された。江戸時代には、五節句の中でも最も公的な性質を備えた行事となり、武家の間では菊の花を浸した酒を互いに汲み交わして祝い、民間ではこのとき菊を飾って粟御飯が食されたりした。菊は寿命を延ばす延寿の効があるとされている。また蘭・竹・梅と共に「四君子」として、高貴なものの象徴とされている。

なお、季節の相を現す七十二候では、新暦十月十三日頃を「菊花開」として、菊の花が咲きはじめる頃としている。

この重陽の花としては、菊五色を挿ける。体に白菊を、用に黄菊を、そして留に赤菊を挿け、それぞれの菊の葉を青とする。黒色の花はないので、水をもって黒と見立て、以上の白・黄・赤・青・黒でもって五色とする。

この重陽の花においては、水も「五色」の黒という意味を成すものであるため、よく見えるように十一分にたっぷりと水を注いでおく。また、色々な菊を取り合わせて株分けに挿けたり、三重切の花器を使って三種挿けにしたりする。

2 四季祝日の花

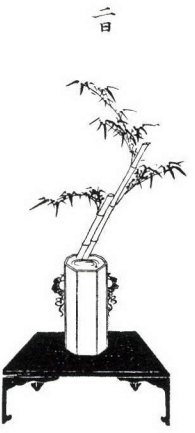
2a 正月二日の花

元旦には若松を、正月二日には伐竹を、そして正月三日には梅を挿ける。この松と竹と梅の三つは、厳しい寒さに堪える姿をもって「歳寒の三友」と呼ばれ、めでたいものとして古くより慶事の際に用いられてきた。この松竹梅を、正月の三カ日に注連の伝として挿けるのである。

正月二日の花としては、注連（七五三）の伝の伐竹を挿ける。細い若竹を用いて、伐竹を長いものと短いものと二本挿けるのである。長い陽の竹には三節二枝を備えて体と用の枝をとり、竹の先を大斜に伐る。一方、短い陰の竹には二節一枝を備えて留の枝をとり、竹の先を平に伐る。このとき、竹の大斜の伐り口が、平の伐り口と向き合うように調和して挿ける。

竹の節間が短いとき、陽の竹は三節二枝にこだわらず、陽数（奇数）の節と陰数（偶数）の枝とし、また陰の竹は二節一枝にこだわらず、陰数（偶数）の節・陽数（奇数）の枝としてもよい。陽の節に陰の枝をもつ長い竹は「陽中陰」、一方、陰の節に陽の枝をもつ短い竹は「陰中陽」である。陽の中に陰を宿し、そしてまた陰の中に陽を宿す。この姿に、内に宿る「腹籠」の存在を見てとることができる。

竹の葉には、「魚尾」「金魚尾」「飛雁」の三通りのものがある。竹の葉の成長の状態で、葉先が二葉開いた状態のものが「魚尾」、その中葉が伸びて未だ開いていない状態が「飛雁」、その中葉が開いて三葉となった状態が「金魚尾」である。体にはこの三通りの葉が平均してついたものを選び、用には「金魚尾」の葉が多く、そして留には「魚尾」の葉を多く備えるものを選んで挿



『伝書四方之薫』 正月二日の花

魚尾

金魚尾

飛雁

『伝書四方之薫』　正月三日の花

ける。このように竹の葉の形態を変化させることで、自然にある陽気の移り変わりを現すのである。

そして最後に、奉書で雀を作り、金銀の水引七本を相生結びにして、用の下に金の水引がくるように結ぶ。以上、体用留の三つの枝、天地人三才の三、五つの竹の節の五、そして水引の七をもって、以上で注連（七五三）の伝とする。

2b　正月三日の花

正月三日には、注連（七五三）の伝の梅を挿ける。このときの梅の枝は、古木を二本、若枝を三本と、合わせて五本使って挿ける。花形は天地人の三才格とし、最後に水引七本を相生結びにしてかけ、以上でもって注連の伝とする。

古木は親の姿を、若枝は子の姿を意味し、親二人に子が三人生まれていくという子孫繁栄の姿を現す。古木の二本は偶数（陰数）の陰、そして若枝の三本は奇数（陽数）の陽である。この合わせて五本使う梅は、陰の中より陽が芽生えていく「陰中陽」の状態であるといえる。梅の姿は一本の古木で体と用の格を備えるのがよく、留は別のもう一本の古木を使う。そして若枝の三本を、この二本の古木より生じたように扱って挿ける。

梅はその生態から交叉する枝を多くもつ。よって「女格（にょかく）」を一カ所とる。「女格」をとるとは、女という字の姿になるように枝を交差させて挿けることをいう。ただ必ず用いなければならないというものではない。梅の出生からどうしても交差する枝があるので、これを出生のものとしてそのままにして挿けるという考え方のものである。これは、自然という体と、花術である用が相

応した姿、つまり体用相応した姿であるといえる。

花は、体・用・留それぞれに、開・半開・莟のものがあるように、片寄ることのないよう取り合わせる。この梅中期の正月のときの梅を「孟春の梅」といい、「南性の梅」の珍花、そして「北性の梅」の残花と合わせて「三世の梅」という。「南性の梅」と「北性の梅」は、用に開のもの、体に半開のもの、留に莟を使って、自然の陽気の移り変わりを示す。それに対して、正月のときに挿ける「孟春の梅」は、開・半開・莟と、花全体に片寄ることなく扱って挿ける。

また、真直ぐに伸び上がる勢いのいい、若枝(ズワエ)を程よいところへ高く使って挿ける。「南性の梅」は珍花であるので、若枝（ズワエ）は短く低くし、留・控あたりに使う。一方「北性の梅」は残花であるので、若枝（ズワエ）は特に長く高くし、相生から体添あたりに使って挿ける。この注連の伝のときの「孟春の梅」は、若枝（ズワエ）は高くあるものの、中庸に使って挿けるものである。そして最後に、奉書で鶯(うぐいす)を作り、金銀の水引七本を相生結びにして、用の下に金の水引がくるように結ぶ。

梅は百花に先駆けて最も早く咲く。昔、晋の武帝が学問を怠ったときには梅の花が咲かず、励んだときには開花したという故事から、梅には好文木という名がつけられ、「三元の冠花」花中の君子として尊ばれた。また古では、梅をもって花の総称とし、次いで桜を花の総称とした後には梅を花の兄と称した。

2c　人日の花

正月七日を「人日」という。中国では、正月一日を鶏の日、二日を狗の日、三日を猪の日、四

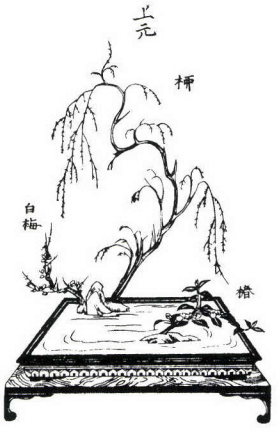
『四方の薫り』　人日の花

『伝書四方之薫』　人日の花

日を羊の日、五日を牛の日、六日を馬の日、そして七日を人の日として、それぞれの日には、その動物を殺さないようし、「人日」の日には、犯罪者に対する刑罰も行なわれることはなかった。また、天候でその年の運勢を占い、晴れなら幸の陽があり、曇りなら災いの陰があると、その日の陰陽から一年の動向を占った。

この正月七日「人日」のときに、人の命をつなぐ大切なものとして、春の七草（セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベ、ホトケノザ、スズナ、スズシロ）を入れて炊いた粥を食べる風習がある。七草を食すれば、その年の万病を除くことができるといわれ、江戸時代には将軍以下が集まって七草粥を食べて祝う幕府の行事が行なわれた。なお「人日」は「七種の節句」として、古くは「元旦」に代わって「五節句」とされていたときもある。季節の相を現す七十二候では、新暦一月七日頃を「芹乃栄（せりすなわちさかう）」として、セリが盛んに茂る頃としている。

春の七草として、春の七草の代表格で、二千年も昔より薬草として用いられてきた「セリ」は、根を捨てないで用い、その香りは強く、精神状態を安定させたり、肺を潤して咳を静めたりする効用がある。「ナズナ」は身近なものとしてペンペン草のことをいい、その味は甘く、消化機能を整えて血圧を下げるなどの作用がある。「ゴギョウ」はハハコグサのことで、春に花をつけてから根より引き抜いて陰干しする。そしてこれを煎じて飲めば、咳を止めるといわれている。「ハコベ」はハコベラやヒヨコグサのことで、汁物に入れて食し、胃炎に効くとされている。「ホトケノザ」はキク科のタビラコの別称でホトケのツズレともいう。薬名は宝蓋草で、打撲、筋肉や骨の痛み、四肢の痺れに効くとされている。「スズナ」は現代のカブのことで、大根よりも甘く、大根と似た薬効がある。また「スズシロ」は大根のことで、胃腸に良いものとされている。



『伝書四方之薫』　上元の花

「人日」のときに挿ける花としては、「梅」「柳」「椿」を用いて挿け、これにナズナか若菜の葉を三〜五葉と添える。百花にさきがけて最も早く咲く三元の冠花である「梅」、垂れ下がる長い枝に永久なるものを尊ぶ「柳」、そして、八千年を春とし、八千年を秋とするといわれ、長寿を象徴する「椿」。この「梅」「柳」「椿」を主体にして使うのである。これに添える花としてはナズナか若菜の葉とするが、その時候にあった自然の花を応合って挿けたりしてもよい。

2d　上元の花

正月十五日は、三元（上元・中元・下元）の中の一つ「上元」である。「陰陽五行説」に対して「三元論」というものがある。「三元論」は物事を三つに分けて考えるもので、一年を上元（旧暦正月十五日）、中元（旧暦七月十五日）、下元（旧暦十月十五日、もしくは旧暦十二月十五日）の、三つの変わり目に分けて考えた。「上元」は人々に福を与え、「中元」は人々の罪を許し、そして「下元」は災厄を除くという三元思想に基づき、「上元」には天官（天神）を、「中元」には地官（慈悲神）を、そして「下元」には水官（水と火の神）を祭った。

また、これは太陰暦で考えた日付であるので「十五日」は十五夜、つまり上元・中元・下元は、それぞれ満月の日であった。この満月である三元の日には夜祭りが行なわれ、終夜にかけて灯籠に日を灯して神を祭ったといわれている。そして「上元の日」には、小豆粥を食して一年の厄を除いた。

「上元の花」としては、「梅」「柳」「椿」の三種類を挿ける。百花にさきがけて最も早く咲く三元の冠花である「梅」、垂れ下がる長い枝に永久なるものを尊ぶ「柳」、そして、八千年を春とし、

八千年を秋とするといわれ、長寿を象徴する「椿」。この「梅」「柳」「椿」を主体にして使うのである。

花器は広口を使って三才の石飾りをして、天石の後より小垂れた柳を挿ける。そして人石の後より椿を横姿に、地石の後より古木の梅を横姿にして挿ける。梅は五～七輪の開花のものを使い、朽ちた幹より梅の若枝が生じていく姿にして挿ける。この梅は「陰中陽」と捉えることができる。

旧暦十一月は子の月、旧暦十二月は丑の月、そして旧暦一月は寅の月である。子の月は一陽来復、つまり陰の中に陽がようやく生じるときで、丑の月は生じた陽が長じるときである。そして、寅の月は陽の定まる月であり、この時候を挿花として床へと移す。つまり「上元の花」は、「陰中陽」の陽がしっかりとした確かなものとなってくることを現し、「陰」の中にも強い「陽」の気を感じとれるように花を挿ける。

2e　節分の花

季節の移り変る時の分かれ目、すなわち立春（新暦二月四日頃）・立夏（新暦五月六日頃）・立秋（新暦八月八日頃）・立冬（新暦十一月八日頃）の前日を節分という。そして、特に立春の前日（旧暦一月十三日頃／新暦二月三日頃）を、代表して節分という。これは立春が一年のうちではじめに訪れる節分であり、この日に内外の邪鬼を祓う様々な行事が行なわれてきたためである。この立春より暦の上では春となる。

立春の節分のときには、鰯（いわし）の頭を刺した柊の枝を戸口の前に立てて、「鬼は外、福は内」と称しながら、大豆をまいて邪鬼を祓った。鬼が鰯の悪臭を受けて、柊のとげに刺されて逃げていくよ

『伝書四方之薫』　節分の花

うにしたものである。また神社では、節分祭として「追儺（ついな）」や「鬼遣（おにやらい）」の行事が行なわれた。「追儺」とは鬼を祓い疾病を除く儀式のことで、鬼に扮装した者を内裏の四門をめぐって追いまわし、邪気を祓うといわれる桃の木で作った矢でもって鬼を射る行事である。

この「節分の花」としては、神の木と書く榧（かや）を挿け、これにめでたい名をもつ福寿草を添えて挿ける。福寿草は「根遣い三種」の一つとして、生きていく上で大切な根を切ることなく、縁起のよい吉事が永久に続くという願いをこめて白い根を見せて使う。本来、挿花は草木の花・葉・枝のみを用いて挿けるものであるが、この「根遣い」の挿け方においては、根も使って挿ける。草花の源である根を切らずに、挿花として用いることで、永久に流転する様を現したものである。「根遣い」する花としては、この福寿草の他に富貴草、水仙と三種類のものがある。福と寿というめでたい名をもつ福寿草、富み栄え貴い富貴草、そして清純なるものを現す水仙の三種は吉なるものとされている。

また、節分の花として柊を挿けたり、榧に春の神に奉る花として梅を添えて挿けたりする。柊には、奉書で四垂（よたれ）・八垂（やたれ）・スルメを折ってつける。百花にさきがけて最も早く咲く梅は、「三元の冠花」花中の君子として位の高い花とされている。この梅を榧に添えて、立春の前日にあたる「節分の花」として挿けるのである。

2f　中元の花

七月十五日は、三元（上元・中元・下元）の中のひとつ「中元」である。この中元の日は贖罪の日とされ、庭などで終日火を焚いて過去の罪を懺悔した。「中元」は人々の罪を許すといい、

『四方の薫り』　中元の花

『伝書四方之薫』　中元の花

このときには地官（慈悲神）を祭るものとされている。御世話になった人に贈物をする現在の贈答の風習は、この贖罪の意を込めたものとして残ったものともいわれている。

また、この中元の日には過ぎゆきた半年間の無事を祝って、盂蘭盆（うらぼん）の行事をして祖先を供養した。盂蘭盆とは、祖先の霊を死後の苦しみの世界から救済するための仏事であり、種々の供物を祖先の霊・新仏・無縁仏（餓鬼仏）に供えて冥福を祈った。盂蘭盆の初日に、祖先の魂を迎えるために焚く火を迎え火といい、最終日に祖先の魂を送るために焚く火を送り火という。また盂蘭盆の終りの日には、灯籠に火を点じて川や海に流して魂を送った。これを燈篭流し（とうろう）という。古来中国では、天地万物の根源である「太乙（たいいつ）」、それを擬人化した「太乙帝」を中元の日に祭って、その年の無事なることを祈った。

この「中元の花」としては、まず広口を使って陰陽二石または三才の石飾りをして、黒白の石で水陸を分ける。そして、伐竹に時候の花、特にミソハギを添えて挿けるものである。竹は陰の司であり、中元や仏事にはふさわしいものである。またミソハギは盆花であり、追善の花や中元の花のとき以外には用いることはない。仏の座とみなす天石には、陰性の竹と、仏に献じるミソハギを挿ける。そして地石には、仏を拝む姿として、ミソハギを横姿にして挿ける。

七月は「竹の春」といって若竹を愛する月であり、正月は「竹の秋」という。陽の司である松にとっては正月が「春」であるが、陰の司である竹にとっては正月が「秋」となる。そして、陰の司である竹にとっては七月が「春」であるが、陽の司である梅にとっては七月が「秋」となる。一切の物は生じてから三カ月目が、そのものの「春」とされる。中元の七月に春を迎える竹、この竹にミソハギを添えて「中元の花」として挿けるのである。

『伝書四方之薫』　八朔の花

『伝書四方之薫』　八朔の花

29　八朔の花

「朔（ついたち）」は一日を意味し、八月一日を「八朔（はっさく）」という。この「八朔」の頃は、台風や害虫の被害をこうむることが多い。そのため「田の実の節句」として、農家では穂掛けが行なわれ、風雨の順調や五穀豊穣が祈願された。穂掛けとは、稲の刈初めに穂を門戸などにかけて神に奉り、新米の収穫を神に感謝したものである。この農耕儀礼に源を発し、次第に武家や公家へと浸透していった。

また、天正十八年（一五九〇）八月一日は、徳川家康がはじめて江戸城に入城した記念すべき日であり、江戸幕府は「八朔」を正月に次ぐ祝日とした。さらに朝廷においても、『後水尾院當時年中行事』に「八朔」が恒例の行事として紹介されており、江戸時代においては上下の別なく盛大に行なわれていた。なお、「田の実」を「頼み」と解し、君臣・朋友互いに頼み合うことから、その御恩を感謝する意味をもって、八朔の日に互いに贈り物をするようになったともいわれている。

この「八朔の花」としては、白梅・白萩・白菊・男郎花など、とにかく白い花を挿ける。八朔の頃は秋半ばであり、「五行五色」において捉えると、八朔は「西」の方向の「白」を現すときである。よって、このときの花として白い花のみを挿けるのである。五色とは「木火土金水」の五行の色をいい、東は「木」にして青色を、南は「火」にして赤色を、西は「金」にして白色を、北は「水」にして黒色を、中央は「土」にして黄色を現す。そして四方（よも）から中央に至って、この五色が生じるものとされている。

『伝書四方之薫』　八朔の花

『伝書四方之薫』　乙朔旦の花

なお早咲きの梅で、八朔の頃に咲く梅を八朔梅といい、「八朔の花」としてこの梅を用いるときは少し色のついたものでも構わないとされている。

2h　乙朔旦の花

「朔旦（ついたち）」は、月のはじめを祝うものである。そして、その年の最後の「朔旦」となる十二月一日を「乙朔旦（おとついたち）」という。長男を太郎といい、年のはじめの月である一月を「太郎月」という。また末の子を乙子といい、年末の月である十二月を「乙子月」という。十二月一日は、「乙子月」の「朔旦」であるので「乙朔旦」とされた。

「乙朔旦」には、「乙子の祝い」として、末の子の成長を祈って餅をついて食した。この餅を、乙子の餅という。また、「川浸りの朔日」として、水難除けを祈願して水神を祭り、餅をついてこれを水神に供えた。この餅を、川浸餅（かわびたりもち）という。

「乙朔旦」の花としては、梅・椿などの花を挿ける。年の最後の朔旦である「乙朔旦」のときに、今年一年が無事に過ぎたことを感謝し、めでたく春陽を迎えるこころで、梅・椿以外に春めいた花なども用いて挿ける。

月のはじめを祝う朔旦の中でも、元旦（一月一日）・八朔（八月一日）・乙朔旦（十二月一日）を始・中・終の「三朔」として、このときには格別に神仏を祭るものとされている。なお、元旦（一月一日）・氷室の節供（六月一日）・田の実の節句である八朔（八月一日）を「三朔」とすることもある。

『伝書四方之薫』　事始の花

2-i　事始の花

十二月十三日は、古より天地が穏やかで憂いのない穏やかな日であり、このときより新年を迎える用意を始める。このときを「事始」という。

その年の福徳をつかさどる神である歳徳神（としとくじん）を迎えるために、身心を清めて、すす払いや大掃除をして家を清める。この歳徳神のいる方角は「明の方」また「恵方」といい、万事に渡って吉であるとされている。またこの日は、歳徳神をお迎えする神棚（恵方棚）を設え、歳徳神が降りてくるときの目印となる門松や松飾りに使う木を、「恵方」にあたる山へ取りにいく「松迎え」の日でもある。正月飾りは、二十九日に行なうと「苦立て」とされ、また三十一日に行なうと「一夜飾り」になるといって忌み、それまでに飾るものとされている。

この「事始」の花としては、梅にシダを応合って挿け、福徳をつかさどる歳徳神に奉る。シダは冬至の後に若芽を生じるめでたいものである。この若葉が綺麗なシダを、百花にさきがけて最も早く咲く「三元の冠花」花中の君子として尊ばれている梅に添えて挿けるものである。

2-j　下元の花

十二月十五日（もしくは十月十五日）は、三元（上元・中元・下元）の中の一つ「下元」である。この「下元」のときに、その年が無事に過ぎ行きたことを感謝してお祝いを行なった。十五日は毎月祝うものであるが、上元（正月）・中元（七月）・下元（十二月）は始・中・終の三元として、格別大切に神・仏を祭り祝うものである。「下元」は災厄を除くことから、このときには水官（水と火の神）を祭った。

『伝書四方之薫』　下元の花

『四方の薫り』　冬至の花

この「下元」の頃は、冬が深まって草木は枯れゆくものの、その中には春の陽の気を含んでいる。「事始」も済んだ後のことであり、新年の春を待つこころでもって、ゆずり葉を挿け、これに万年青や藪柑子（やぶこうじ）などを応合って春の神に奉げる。

ゆずり葉は、若い新しい葉が開いて育成した後に、古い葉が譲って落ちていく出生をもつ。このゆずり葉を主体に使って、旧年と次にくる新年の両年が、変わらず安泰であることを願って挿けるものである。

2k　冬至の花

「冬至」は「二十四節気」のうちの一つで、陰が極まって一陽来復する「極陰」の時候である。この「極陰」のときに、はじめて内より「陽」が再び芽生えるといわれている。また「冬至」は「日短きこと至る」を意味し、古代では「冬至」の前後になると太陽の力が弱まり、人間の魂も一時的に仮死する。すなわち、陰極まれば万物みな衰えて、太陽が巡り帰ってくる「一陽来復」によって再びよみがえるものと考えられていた。

この「冬至」のとき、北半球では、正午における太陽の高度が一年中で最も低くなり、夜が最も長く、日が最も短くなる。現在使われている「太陽暦」では十二月二十二日頃で、旧暦の「太陰太陽暦」では十一月下弦の頃になる。

新暦である「太陽暦」は古代エジプトにはじまり、旧暦である「太陰太陽暦」は中国で作られた。また「太陰暦」はイスラム諸国で現在でも使われている。「太陰暦」の基準となる月の満ち欠けの周期は二十九日半で、それを一カ月として一年を計算すると三百五十四日あまりとなり、「太

陽暦」に比べて一年が十一日短くなってしまう。よって約三年に一度の割合で一年を十三カ月とした。これが旧暦「太陰太陽暦」の閏年である。そして季節とのずれを解消するため、暦と季節との関係がはっきりするように季節の標準を暦に書きこみ、「二十四節気」として気候の推移を現した。

「二十四節気」のうちで、立春からはじまる「立春、啓蟄、清明、立夏、芒種、小暑、立秋、白露、寒露、立冬、大雪、小寒」を『節』といい、季節の指標とされた。また、雨水からはじまる「雨水、春分、穀雨、小満、夏至、大暑、処暑、秋分、霜降、小雪、冬至、大寒」を『中』といい、これは月名を現すものである。この「二十四節気」の中でも、「二分、二至、四立」は『八節』といい、特に重要なものとされた。『二分』は「春分、秋分」を、『二至』は「夏至、冬至」を、そして『四立』は「立春、立夏、立秋、立冬」をいう。

なお、「七十二候」とは、「二十四節気」の各一気を第一候から第三候と三つに区分し、季節の指標としたもので、一候（五日）ごとに時候の移り変わりを現している。

「冬至」のとき、民間では冬至南瓜や冬至粥を食べたり、柚子をいれた冬至風呂につかったりして疫鬼を祓った。また、冬至の月である旧暦十一月中旬の卯の日には、太陽の復活を祝い、豊かな実りを感謝する祭りが行なわれた。この毎年行なわれる祭りを「新嘗祭」と呼び、新しい天皇が即位された際に行なう一代一回限りの大祭りを「大嘗祭」としている。古来より日本人は、米や酒などの物から、生あるものに至るまで、万物すべては自然の一部であるとし、このような自然に感謝する祭りを行なってきた。

「冬至」のときの花としては、まず梅を挿けて、これに蕗の薹や、実物などを添える。芽や苔

立春	2/4	春の気始めて立つ
雨水	2/19	氷雪解け雨水温む
啓蟄	3/6	冬籠りの虫声を啓く
春分	3/21	春の最中夜昼平分
清明	4/5	草木清明風光明媚
穀雨	4/20	百穀春雨に潤う
立夏	5/6	夏の気始めて立つ
小満	5/21	陽気盛万物稍満足す
芒種	6/6	麦を収め稲を植う
夏至	6/22	夏の最中日北上の極
小暑	7/7	やや暑熱を催す
大暑	7/23	蒸熱酷暑を感ず

立秋	8/8	秋の気始めて立つ
処暑	8/23	暑気退かんとする
白露	9/8	気界冷露白し
秋分	9/23	秋の最中昼夜平分
寒露	10/9	気寒く露草重し
霜降	10/24	霜結んで厳霜白し
立冬	11/8	冬の気始めて立つ
小雪	11/23	寒く少し雪降る
大雪	12/7	天地閉塞雪降る
冬至	12/22	冬の最中日南下の極
小寒	1/6	寒気稍強し
大寒	1/20	厳寒を感ず

二十四節気（新暦 2003）

『伝書四方之薫』　誕生の花

を保護する苞に包まれた蕗の薹は、これからようやく芽生える春の「陽」を感じとることができる。また、冬至の頃に咲く梅を冬至梅という。一陽来復するときであるとされている「冬至」の時候に、これにふさわしい花として梅を主体にして挿けるのである。

実物は、その外は「陰」であって、実の内は「陽」である。よって、実物は「陰」の中に「陽」を含ませている「陰中陽」のものであると捉えることができる。実物の扱いとして、挿花百錬では「実物を花として取り扱うときは表裏、内外、陰陽和合を備えて挿花とする。私を用いず、自然にまかすを以って当流の伝とする」と、実の中が自然に現れているような風雅のあるものを選んで挿けるものとしている。ただ、この「冬至」のときに扱う実は、「陰陽和合」ではなく、「陰」の気の中にようやく「陽」の気が生じた「極陰」「陰中陽」の風情でもって挿ける。陰が極まってようやく陽が芽生える、一陽来復するときとされている「冬至の時候」をここに現して挿けるのである。

3　祝事の花

3a　誕生の花

高位の方の子が誕生したときには、最もめでたいとされる「松竹梅」を挿ける。しかし一般的には「誕生の花」として、竹に五葉の松を挿け、この五葉の松の根元に草花や、実を結ぶことにつながる実物などを添えて挿ける。また、五葉の松もしくは白梅を挿けて、これに白玉椿を添わして挿けたりもする。

『伝書四方之薫』　誕生の花

『伝書四方之薫』　髪置の花

五体満足を現す五葉の松、寒冬を凌いで百花にさきがけて咲く梅、また八千年の齢があるという椿や、濁りのない色で清純無垢なめでたい色である白の花を用いるのである。

白玉椿を挿けるときは、「霜囲いの葉」「挟葉」を用いて挿ける。「霜囲いの葉」は、冬を越すとき霜から花を守るために、花の上に反転した葉のことで、「挟葉」は花の下に左右二枚出て花を守っている葉のことである。これは、椿の花を子に見立て、それを守る葉である「霜囲いの葉」と「挟葉」を庇護する親の姿として捉えたものである。

以上の挿け方以外にも、七五三の若松を挿けてもよい。身籠り、そして五体満足に揃った嬰児（みどりご）が生まれるという生成流転していく姿を現す。さらに、菊・芍薬・万年青・太蘭など、勢いの強いめでたい花を用いて、子の誕生を祝ってもよい。ただし、このときの花は清純な様を現す白いものでなければならない。枝先に力がなく垂れ下がるものや、名の悪い花などは、このようなめでたい席に使ってはならない。

3b　七五三の花

男児は三歳と五歳にあたる年の旧暦十一月十五日、そして女児は三歳と七歳にあたる年の旧暦十一月十五日に、それぞれ氏神に参詣する。これを七五三の祝いという。昔は三歳の男児・女児の祝いを「髪置（かみおき）の祝」、五歳の男児の祝いを「袴着（はかまぎ）の祝」、そして七歳の女児の祝いを「帯解（おびとき）の祝」といった。旧暦十一月十五日は、一陽来復の満月のときである。

三歳にあたる年の旧暦十一月十五日「髪置の祝」のとき、男児・女児ともに、生まれてきたときの胎髪を切って、このときより髪を伸ばしはじめる。このとき、男児は左より胎髪を切り、女

『伝書四方之薫』　袴着の花

『伝書四方之薫』　袴着の花

児は右より胎髪を切る。そして、白髪に見立てて綿を頭に掛け、氏神に参詣して長寿を祈った。この「髪置の祝」の花としては、寿命永く髪が長く伸びるようにと、垂れ柳に白玉椿を添えて挿ける。垂れ下がる長い枝に、永久なるものを尊ぶ「柳」、そして、八千年を春とし八千年を秋とする、長寿を象徴する「椿」を挿けるのである。また、濁りのない色で清浄なめでたい色をもつものとして、水仙などの白い花を、垂れ柳に添えて挿ける。

男児は、五歳にあたる年の旧暦十一月十五日「袴着の祝」のときに、親族の中の長たる人物にはじめて袴をはかせてもらう。このとき、吉方に向けて左足から袴をはかせてもらうものとされている。そしてその後、氏神に詣でるのである。この「袴着の祝」の花としては、男児が正しく、清く、また強く成長するようにと「白梅・福寿草」「白梅・千両・寒菊」「南天・芒・水仙」などの、濁りのない清浄な白い花や、実を結ぶことにつながる実物、また勢いの強い花などを選んで挿ける。

女児は、七歳にあたる年の旧暦十一月十五日「帯解の祝」のときに、着物の付け紐（ひも）を解いて、吉方に向ってはじめて帯をしてもらう。そしてその後、氏神に詣でる。この「帯解の祝」の花も、「袴着の祝」の場合と同様に、正しく清く、そして強く成長するように、花材を慎重に選んで挿ける。

3c　元服 髪上の花

「元服の祝い」は、男子が十一歳から十七歳の頃、ようやく成人になったことを祝うものである。このとき男子は髪型や服装を大人のものに改めて、頭に冠をかぶる「加冠の儀式」を行なった。元

『四方の薫り』 元服の花

服は人生の大事な節目であって、生まれた年と没した年に加え、この元服の年は必ず系図にも記されるものであった。この「元服の祝い」は正月に多く行なわれた。

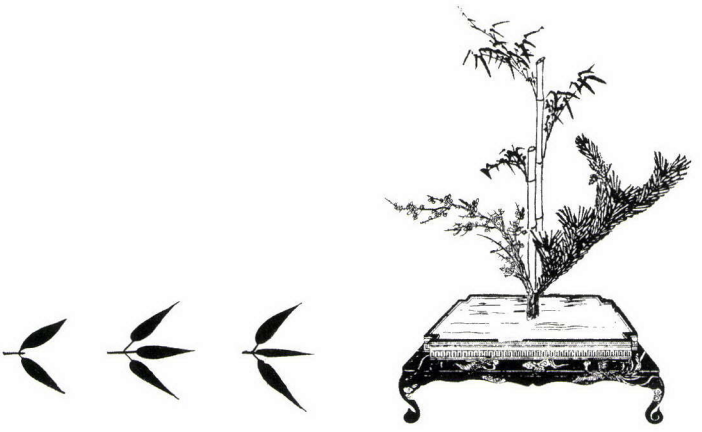
一方女子は、成人して垂れ髪を束ねて結い上げる「髪上の祝い」を行なった。また鉄漿をはじめてつけて歯を黒く染め、成人した女子や一人前になった芸妓を祝う「鉄漿付けの祝い」などもある。鉄漿とは御歯黒のことで、歯を黒く染めるものである。現在では、満二十歳に達したときに男女みな成人とし、一月第二月曜日が「成人の日」とされている。

「元服の祝い」「髪上の祝い」と、成人を祝うときの花としては、白玉椿を一種だけ用いたりと、とにかく清浄な白い花を挿ける。大椿という伝説の椿は、八千年を春とし、八千年を秋とするとされ、長寿を象徴する。白い花は濁りのない清純な姿を現すものであり、成人した男女がそのような姿であり続けることを祈って、白玉椿など白い花を一種のみ使って挿けるのである。

3d 婚礼の花

高位高官の御方の婚礼の際には、注連の伝の「松竹梅」を挿ける。なお一般的な婚礼の際には、松と竹を二瓶にして挿けるものとされている。このとき、床には掛物を掛けず、ただ空座にして、中央に神酒を木地の三方に載せて供する。そして神酒の左右に、明り口の方には男蝶の銚子を、床柱の方には女蝶の銚子を、それぞれ木地の三方に載せて飾り置く。新郎と新婦が婚礼の式に出る前に、男蝶女蝶の銚子の酒を三献づつ神に献じるのである。

正月元旦の花は注連の伝の若松を挿け、二日は注連の伝の伐竹を挿け、そして三日は注連の伝の梅を挿ける。正月と婚礼は両者ともに、物事のはじめとして大切な節目であり、婚礼のときも



正月と同様の考えでもって花を挿ける。「松竹梅」を一つの器に挿けるということは、三則一に帰することを現し、これは天円地方和合の姿であるといえる。すなわち「松竹梅」という天地人「三才」の現象を、一なる本質に帰せしめるものである。

松は千年の緑を尊び、竹は万木千草に勝れて成長が早く、梅は百花にさきがけて最も早く咲く。昔、晋の武帝が学問を怠ったときには梅の花が咲かず、励んだときには開花したという故事から、梅には好文木という名がつけられ、「三元の冠花」花中の君子として尊ばれた。松・竹・梅は「歳寒三友」、これに蘭を加えて「歳寒四友」、そして「四君子」と呼ばれる松・竹・梅・菊に石を取り合わせて清いものの総称「五清」とされた。

この松竹梅は、陽の司（松）と、陰の司（竹）と、そして三元の冠花（梅）の三つを一瓶のもとに挿け、めでたい最上のものである。よって、元旦・婚礼ただし高位高官に関してのときのみ挿けるものとし、軽々しく挿けてはならないとされている。

高位高官の御方の婚礼の際の「松竹梅」の挿け方として、薄端または広口を使い、まず中央に伐竹二本を挿ける。長い陽の竹には、三節二枝を備えて体と用の枝をとり、竹の先を大斜に伐る。一方、短い陰の竹には、二節一枝を備えて留の枝をとり、竹の先を平に伐る。このとき竹の大斜の伐り口が、平の伐り口と向き合うように調和して挿ける。竹の節間が短いとき、陽の竹は三節二枝にこだわらず、陽数（奇数）の節と陰数（偶数）の枝とし、また陰の竹は二節一枝にこだわらず陰数（偶数）の節と陽数（奇数）の枝としてもよい。長い竹は「陽中陰」、短い竹は「陰中陽」である。この中に腹籠の存在を見てとることができる。つまり、陽の中から陰が生じ、そして陰の中から陽が生じる。父親（陽）が強ければ女子（陰）が生じ、一方、母親（陰）が強けれ

『伝書四方之薫』 色直しの花

『伝書四方之薫』 色直しの花

ば男子（陽）が生じるという。これは「陽中陰」「陰中陽」の考え方によるものである。

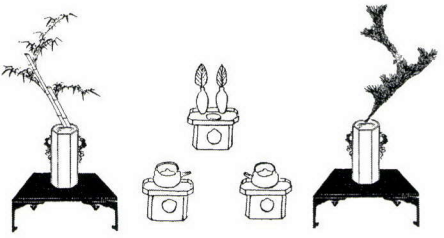
竹の葉の成長の状態で、葉先が二葉開いた状態のものが「魚尾」、その中葉が伸びて未だ開いていない状態が「飛雁」、中葉が開いて三葉となった状態が「金魚尾」である。体にはこの三通りの葉があってよく、陽気を受ける用は成長した「金魚尾」を多く使い、留は「魚尾」を多く備えるものとする。

そして明り口の方に注連の伝の松を挿け、床柱の方に注連の伝の梅を挿ける。竹を立姿に、松を半立姿に、梅を横姿にして、一瓶のもとに挿ける「松竹梅」の姿は方形体であるといえる。

最後に、足許には水引七本を相生結びとし、金は松の方に、銀は梅の方に出して使う。陽を尊ぶ慶事のときの水引のかけ方として、向かって右（陽）には水引の金・紅が、そして向かって左（陰）には水引の銀・白がくるようにする。挿花のときの水引としては、「用金」といい、花姿の用の下に金がくるように水引をかけることとされている。参考として、陰を尊ぶ凶事・仏時のときの水引としては、向かって右（陽）には水引の黒が、そして向かって左（陰）には水引の白がくるようにする。以上が、高位高官の御方の婚礼の際の「松竹梅」の挿け方である。

また、新婦が神聖な白無垢の姿で婚礼の盃事を終えた後、色物の着物に着がえる「色直しの席」には、陽気なるめでたい花を十分に派手に挿ける。このときの花に、垂れ物、弱い物、名の悪いもの、赤色のものを挿けてはならない。

次に、一般的な婚礼の際に挿ける婚礼の花に関して述べる。このときは、松と竹を二瓶にして、それぞれ対にして挿ける。明り口の方には松を挿けて、陽を司る高御産巣日神（たかみむすびのかみ）と、陽の伊弉諾尊（いざなぎのみこと）を祭る。そして、床柱の方には竹を挿けて、陰を司る神御産巣日神（かみむすびのかみ）と、陰の伊弉冊尊（いざなみのみこと）を祭る。花



『華術原一旋転之巻』 婚礼の床飾り

器としては、八神を現す八角の銅製のものを用い、花台は木地の真のものを使う。松と竹ともに水引七本を相生結びにして、花姿の用の下に金がくるように水引をかける。水引の金は陽、銀は陰である。すべて生あるものは、陰陽という二神によって、生じたものであるということを感じることが大切である。

婚礼というものは、子孫繁栄の基となる大事なものである。このときに改めて、人というものが生じた万始の古（いにしえ）に遡り、古きに想いを馳せるべきであろう。

古の頃は自然の気が混沌としていて、天と地というものが未だ分かれず、鶏卵の中身のように固まっておらず、ただぼんやりと何かの芽生えを含む「未生」の状態であった。やがてその中で澄んで明らかなものは、昇りたなびいて天となり、また濁ったものは、重く沈み滞って大地となった。そして、天地の中に一物が生じて、形は芦の如く、神と化身したといわれている。

この天と地が未だ分かれていない古の頃、高天原には天御中主神（あまのみなかぬしのかみ）という宇宙創造「太極」の神が存在していた。そして後に、陽を司る高御産巣日神（たかみむすびのかみ）と、陰を司る神御産巣日神（かみむすびのかみ）という「両儀」の二神が生じて、はじめて天地という陰陽が開いたものである。この「太極」と「両儀」という三柱は、それぞれ独立したものとして「造化三神」と呼ばれている。陽を司る高御産巣日神と、陰を司る神御産巣日神は陰陽和合して、その後に数多くの神が生じていく。

天と地が生成された頃、下界は一面、原始の海に覆われ、大地はその上を浮遊する雲や魚のような状態であった。その中で、天と地の狭間に芦の芽が生え、宇麻志阿斯訶備比古遅神（うましあしかびひこじのかみ）が生じる。この神は、混沌の中からアシカビ（生命）として生まれたことを意味している。また、天常立神（あまのとこたちのかみ）が、この宇麻志阿斯訶備比古遅神と対になって生じる。この神は、混沌の中からトコ（土）とし

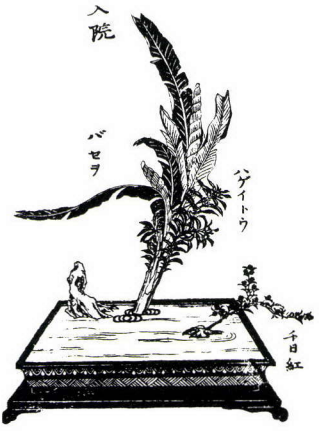
て生まれたことを現す。つまり神々や人間など、いわゆる生あるものは「泥中の芦の芽」から生まれたということができる。以上の五柱の神は、別天津神とし、創造神とされている。

続いて、国常立神、そして豊雲野神が生じる。また二神で一代の対偶神として、宇比地邇神・須比智邇神、角杙神・活杙神、意富斗能地神・大斗乃弁神、於母陀流神・阿夜訶志古泥神、伊邪那岐神・伊邪那美神の神々が生まれ、これらの神々のことを神世七代という。

神世七代の最後の一対の神である、伊邪那岐神と伊邪那美神は夫婦神である。陽の伊邪那岐神と陰の伊邪那美神は、天浮橋に立ち、天の沼矛を降ろして混沌なるものをかき混ぜた。すると、矛の先から滴る潮から、淤能碁呂島ができた。二人はその島に天下って天之御柱を建て、その天之御柱を中心にして、陽の伊邪那岐神が左旋し、陰の伊邪那美神が右旋して、互いに相生じあうことで国が産まれたという。このように、陰陽という両極なるものが作用することによって、万物が生じていったのである。そしてより、本州、四国、九州など八つの島々を生み、国生みを終えた後は、さらに風、水、海、山、草など、次々に神を生んでいく。その数は三十五神に上るといわれている。

宇宙創造の太極の神である天御中主神の一代と、陰・陽の神である神御産巣日神、高御産巣日神の二代までの三神を造化三神といい、我が民創造の神である陰の伊邪那美神、陽の伊邪那岐神の三代までを造化三代という。

婚礼は、その源である産巣日神の御恵によるものである。そして婚礼は人道一世の大礼である。よって、この席の花には、松と竹をそれぞれ二瓶にして挿ける。竹は代々に久しく香具山の昔をもって備え、松は千歳の永きを祝い、これに腹籠りの緑を入れて子孫長久相続の守とする。そし



『伝書四方之薫』 入院の花

『伝書四方之薫』 家名続目の花

て金銀紅白の水引七把で相生結びにして、注連の伝として陰陽の神である産巣日神を祭るのである。

3e 家名続目 入院の花

「家名続目」とは、戸主の隠居や死亡に伴って、長子が家名・跡目を継ぐものである。一方、「入院（じゅいん）」とは、戸主が長子に家名を譲り隠居すること、また出家することをいう。

まず「家名続目」のときの祝いの花としては、ゆずり葉を挿ける。また、ゆずり葉に白梅などの位の高い花を応合って挿けたりする。ゆずり葉は、新しい葉が育成してから、古い葉が譲って落ちていく出生をもつ常磐木である。長子の成長を待って戸主である父が引退し、そして家名が代々と続いていくことを願って、ゆずり葉を挿けるのである。ゆずり葉に添える梅は、百花にさきがけて最も早く咲くものであり、この清純な白梅は古木扱いにして挿ける。古木は代々伝わるもの、そしてその古木から新しい白梅が生じていくような姿にして挿けるのである。ここに、「陰中陽」の姿が現されている。

なお、「家名続目」の花として、注連の伝の若松を挿けることもある。物事のはじめとして、大切な節目であることによる。

「入院」ときの祝いの花としては、開くということを嫌い、よって開く花の類のものを使ってはならないとされている。退いた後は、潔く陰に徹するべきという考えからのものである。このときは、五葉の松を一種のみを使って挿ける。松は千年の緑を尊ぶもので、古今に渡って色をもたず、また五葉の松は木火土金水という五行を現すものである。退いた後は、華やかなものを避け、

『四方の薫り』　入院の花

『伝書四方之薫』　厄年の花

太極・両儀・三才・五行と万物の辿ってきた流れを、ただただ感じ、己の内で深めていくことが大切である。また、陰の司である竹に、実物や清浄な白い花の苔だけのものを添えて挿けることもある。陰に通じることで、ようやく観じることのできるものを、ここに現すのである。他の祝事のときには、めでたい花や位の高い花などを用いて挿けるが、この「入院の花」は祝事といえども華やかに花を挿けるものではない。

3f　厄年の花

「厄年」は、人の一生の中で厄にあうおそれが多いとして忌み慎まねばならないとされている年である。現在では、男は数えで二十五歳・四十二歳・六十一歳、そして女は十九歳・三十三歳・三十七歳が「厄年」とされている。また特に男の四十二歳は死に結びつき、女の三十三歳は散々なもので大厄とされ、その前後の年も前厄・後厄として慎むべきとされている。

なお未生流伝書では、以下のように説かれている。「人間も生まれてより六年が経ち、七歳で初厄を迎える。これより十三歳で二の厄、十九歳で三の厄、二十五歳で四の厄、三十一歳で五の厄、三十七歳で六の厄、四十三歳で七の厄を迎える。厄が一回りして七つ目の厄を迎えた四十三歳は大厄である。よって前年の四十二歳の時に、神仏を祭り厄難がないように祈るのである。四十九歳は八の厄、五十五歳は九の厄、六十一歳は十の厄となる。この十の厄を迎えて、また生まれた年の干支に戻るのですべての厄が終わることになる。これを本卦帰り・還暦という。このように一回りする厄年に神仏を祭って無難を祈るのは、自分自身の養いである。還暦より後には厄はなく寿の祝いがある」。

『伝書四方之薫』　厄年の花

『四方の薫り』　厄年の花

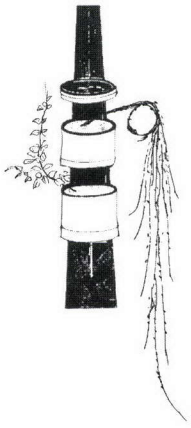
万物は七つ目にして陰陽が移り変わるもので、この七つ目の節目を未生の考えでは厄と捉え、何事においても慎むときであるとしている。葉蘭の葉組で七枚目の葉を境として界葉を挿けるのは、陰陽の変わり目にあたるからである。そして、これら十の厄を迎えて、また生まれた年の干支に戻って、すべての厄が終わることになる。これを本卦帰り・還暦という。このように一回りする厄年に神仏を祭って無難を祈るのは、自分自身の養いであるといえる。

還暦より後には厄はなく、以後は寿の祝いがある。六十一歳は「華寿」を祝う。これは「華」の字を分解すれば、六つの十と一とで構成されることからこの名がある。七十歳は「古稀」を祝う。「人生七十古来稀」という杜甫の曲江詩に由来する。また七十歳は「杖の賀」といい、鳩のついた杖を送る慣わしなどもある。七十七歳は「喜寿」を祝う。「喜」の字の草体の文字が「七十七」と読まれるところからくる。また八十八歳は「米寿」を祝う。「米」の字を分解すれば「八十八」になることから、そう呼ばれている。九十九歳は「白寿」を祝う。これは百歳を前にして祝うもので、「百」という字から一という字をとれば「白」という字となることからきている。

この「厄年」のときに挿ける花としては、白木蓮、海棠、牡丹を三種で挿けたり、また糸杉、白玉椿、紅梅、葉牡丹、万年青を用いて五種に挿けたりする。「陰」の中にも「陽」を感じとれるような「陰中陽」の姿に、つまり禍転じて福となるようなこころでもって花を挿けるものである。とにかく、何事においても慎重に行なうことが求められる。なお、還暦より後の「寿の祝い」のときには、「陽中陰」のこころでもって花を挿ければよい。

人生を大きく捉えると、還暦のときに陰陽が変化するが、七つ目の年にも陰陽は変化する。そしてさらに細分化すると、一時ごと常に内において陰陽は変化している。この内なる働きを感じ

ることが大切であるといえる。



綰柳

4 諸事　諸席の花

4a 綰柳（かんりゅう）の花

「綰柳（かんりゅう）」は古く中国の習慣で、旅立つ者が無事に帰ってくることを祈って、別れ際に再会を期して柳を三本使って輪に結び、旅立つ者を送ったことが起源となったものである。これが後に、年はじめに無事一年が過ごせるようにとの願いを込め、「一陽来復」の意をもって、正月の床の間に「結び柳」「綰柳」が挿けられるようになった。「綰」とは、たわめ曲げて輪にすることであり、この「綰柳」は「結び柳」のことを指すものである。また正月十五日は「柳迎え」といって、柳に紅白の小さなお餅をたくさんつけた「餅花」を飾り、その日の夕刻に柳を燃やして、餅をあぶって食する風習がある。

この「綰柳」の挿け方としては、二重切の掛花器を使い、まず上口には大垂の柳三本を一つにまとめて、根元の方を向こうから手前へと輪に結んで挿ける。これは三より一なるものに納まることを意味し、これを解けばまた三に帰することとなる。すなわち「一二三三二一」「一則三、三則一」を現す。一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生じる。太極より陰陽という相対的関係の両儀へと分かれ、両儀より三才に展開し、そして三才より万物が生まれていく。そして、あらゆる現象も一なる本質に還っていく。一元的な根源にある本質と森羅万象の現象を、この「綰柳」でもって現すものである。

『伝書四方之薫』　新宅移徙の花

「絡柳」は、垂れ下がる柳の長い枝に、永久なるものを尊ぶ。茶席の床では、床に接するまで柳の先端を大きく伸ばして挿けるが、未生の花としては、床と柳の間には「空（くう）」が必要である。つまり、柳の先端が床と直接に接点することはない。

長い柳をもって輪に結んで挿けるが、この柳は陰陽どちらにも片寄ることのないようにする。柳に強い勢いのあることを禁じ、また勢い弱いことも禁じる。「絡柳」は中庸にして、長短の枝を取り合わせて挿ける。絡柳の輪は、太極にして本質である。三本の柳は万物万象の現象である。そして、この内に見てとれる姿は、陰陽和合であって「中庸」である。

次に下口に挿ける椿は、開・半開・莟と五輪ほどの花に、「霜囲いの葉」と「挟葉」を備えて挿ける。この椿には白玉椿を用いるが、白玉椿がないときは色のついた椿を用いてもよい。また船花器に挿けるときは、帆花（ほばな）として椿を使い、そして艫花（ともばな）として絡柳を挿ける。このときの船花器は常よりも高く釣っても構わない。

4b　新宅移徙の花

中世の貴族社会では、引っ越しのことを「移徙（わたまし）」と呼び、その後に行なわれる宴会では粥や湯漬けを食したといわれている。中世移徙での粥の変化したものとして、江戸時代ではそばを近所に配る風習があり、現在にも伝わっている。

新しい家に移転する「新宅移徙の花」として、花器は二重切花器を用いる。下口には白い花や水草を挿け、四季の足し水に応じて水を注ぐ。四季の足し水とは、春・秋には叉木より口までが九分となるように、夏には十分に、暑中には十一分に、そして冬には八分、寒中には七分までの

『伝書四方之薫』 古宅移徙の花

『四方の薫り』 追善の花

高さとして、水を注ぐものである。四季の寒暖に応じて足し水をすることで、水は「死の水」から「活の水」へと変化する。そして、二重切花器の上口には花を挿けずに、火難を防ぐ意味から、四季の変化に関わらず水を充分にたくさん注いでおく。

このときの花としては、火に結びつく赤色の花を挿けてはならない。白い花や水草などを挿けるのである。「ひ」の文字がつく花を挿けることも避け、石榴（ざくろ）も菅原道真の家を焼いたという故事に添って挿けてはならない。檜（ひのき）は火を除く意味からして、挿けても問題はない。

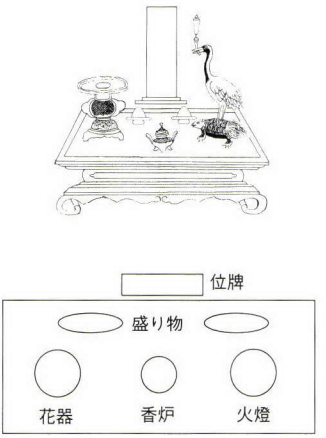
なお、古い家に移転するときには、二重切の上口に白い花を挿ける。そして下口には、黄色の花もしくは水草葉物を用いて挿ける。このとき、水は上口下口ともに、四季に関わらず充分に注いでおく。

4c 追善の花

仏教は三世因果の道理を説くもので、人間の生命も過去・現在・未来とつながっていく。現世において、人間はさまざまな行ないをする。それにより生じる善悪の原因は、その人の因縁となり、この三世を通じて作用するといわれている。死後に善き果報を受けている霊に対してはますます善き道に進むように、また悪道に堕ちている亡者をその苦悩から逃れて安楽の道へ差し向けるように、残された身内の者が故人の冥福を祈り、故人の年忌などに仏事を営むことが追善供養である。

まず死後、四十九日間の中陰（ちゅういん）の間は七日ごとに法事が行なわれる。死者が次の生を受けるまでは四十九日あるとされ、その期間を中陰という。そして一周忌以後、故人の死去の当月当日に法

『伝書四方之薫』 追善の花



三具足飾り

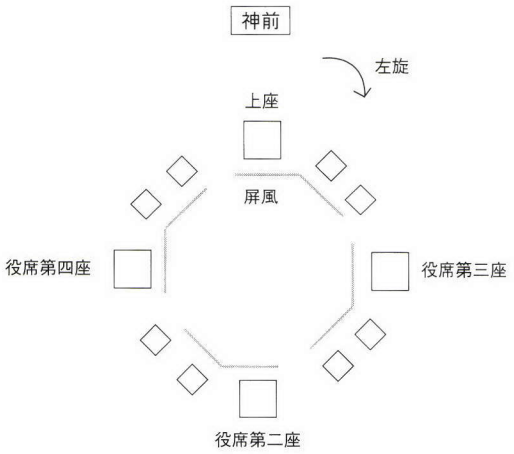
事が行なわれる。一回忌・三回忌・七回忌・十三回忌・十七回忌・二十三回忌・二十七回忌・三十三回忌・三十七回忌・五十回忌・百回忌などがある。これらは、中陰の七という数を捉えてのもので、万物は七つ目でもって変化するという理によるものである。

この追善の花は、枯木を故人に見立てて体として挿け、これに勢いの強い草木を遺族・一門として、体に添わせて挿ける。故人を見立てる主体となる体には、赤色の花を使ってはならない。このときの花としては、梅・柳・糸杉・黄梅・糸桜・エニシダ・レンギョウ・メドハギ、また常磐物などを用いる。なお、応合いの花には赤色のものを使って挿けてもよい。

亡くなった故人の位牌、画、写真などを床に飾り、追善の花は最も縁の深かった者が挿ける。そして、香炉、盛物、火燈を飾る。この諸飾(もろかざ)りは真・行・草とあるが、公開の会のときは、大略の三具足飾(みつぐそくかざ)りをする。三具足飾りとは、押板もしくは平卓の上に、中央に香炉を、その左右に（鶴亀）燭台一基と花瓶一基を、それぞれ一基づつ飾るものである。諸飾りの詳細は、後に述べる飾り付けの項を参照いただきたい。

4d　陣中　和睦の花

「陣中の花」として、戦の中におかれている陣中において花を挿けるときは、兵士の心を和らげ安んじるような、強き陽気な花を派手に挿ける。花首の落ちやすい椿や、また頭を下げて降伏に通じる垂物の類の花を挿けてはならない。戦には積極的な陽性の一面と、そして悠然と敵をかまえる陰性の両面が必要である。この陰陽のバランスを考えながら、やはり陽性を主にして挿ける。強き花としては、千年の緑を尊ぶ松、他家を切るに通じる竹、また先陣として百花にさきがけて



島台飾り

『本朝挿花百練』 陣中の花 馬盥 轡

最も早く咲く梅などを挙げることができる。

次に「和睦の花」として、戦の和睦の折には、榕（しきみ）に時候の花を添えて挿ける。榕は毒性があり虫や獣が寄りつかないため、墓前や仏前に供える陰木である。この榕の持つ陰性は、血気盛んな兵士たちの気を抑えることにつながる。この陰木に対して、時候の花である陽の花を添えて、陰陽和合・和睦を現すのである。このときに添える花としては白いものがよい。色彩において白色は中性であり、和睦に通じる色といえる。

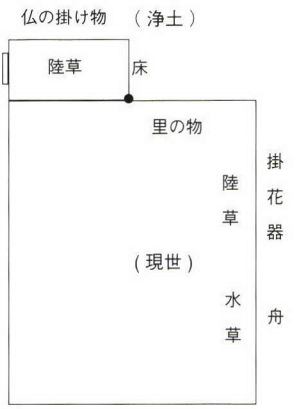
この「陣中」「和睦」の花は、戦に限らずとも、現在の社会生活における戦事や和解にも通じるものであると言えよう。

4e 奉納 献花 供花の花

「神社仏閣奉納の花」として、まず「神社に奉納」する時、また能舞台等の席に花を挿ける時は、島台飾りにする。島台飾りとは、屏風で丸い囲いをし、その周りに花を並べ、四方廻って見えるようにしたものである。神前の正面を上座とし、その反対側を役席第二座、そして神前より左（陽）を第三座、神前より右を第四座とし、このように花を配して奉納する。

次に「仏閣に奉納」する花としては、水陸に分けて山水に挿ける。これは、浄土と現世の二元的な状態を示すものである。床には、仏の掛物を掛けて、里の物である食べ物を供える。床に陸物の花を挿けた時には、床脇より陸草を並べ、そしてそれより先には水草を挿けて景色よく飾る。掛花器は陸草の上に、舟は水草の上に釣る。この掛花器と舟は、草木の取り合わせに応じて用いる。

『伝書四方之薫』　茶席の花



「神社また霊祠へ献花の事」として、このときの花は、神の木と書く榊（さかき）を挿ける。なお神前に供える献花に対して、仏前に供える花は供花という。花器は清浄なものとして青竹を用いて、花台は木地の真のものを使う。挿ける花は、体に七つの枝、用に五つの枝、そして留に三つの枝を備えて、不浄なものを取り除く「七五三」として、三才の格をしっかりと整える。榊以外としては、若松を「七五三」でもって献じても構わない。

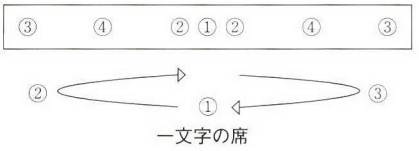
「涅槃像に供える花」として、糸桜に縞芭蕉をあしらって挿けたり、また糸柳に白玉椿のあしらいでもって挿ける。涅槃像とは、釈尊の入滅の様を現した像であるから、有情非常に至るまで、自然に憂いの意をこめ、いと艶しく挿けるものである。

釈尊が菩提樹の下にて瞑想し、解脱したときの境地を涅槃（ねはん）（ニルバーナ）という。ニルバーナとは吹き消した状態を意味する。燃える火を風が吹き消すときのように、燃えさかる煩悩の火が智慧によって吹き消され、苦悩のなくなった状態を現すものである。煩悩の炎が吹き消された悟りの世界である「涅槃」は、静やかな安らぎの寂静である。なお、釈迦入滅の日は二月十五日とされている。

4f　茶席　香席の花

「茶席の花の心得」として、茶席に挿ける花は挿花の法格を正しく守って、姿小さく閑静に挿ける。「閑静の花」とは、控えめに出た枝の中に強さを併せもつもの、また花葉が少なく風流なものである。枝葉を揉め曲げるにおいても、その姿全体が自然なものである。

白梅・白菊・蘭などの匂いのある花を挿けたときには、香を焚いてはならない。床脇の風呂先



一文字の席

座の上下席順

『伝書四方之薫』　茶席の花

には、火の気で凋んでしまわないような花を挿けるものとする。また三重棚の上には、一花三葉に葉組したりと、花葉を少なくして挿ける。

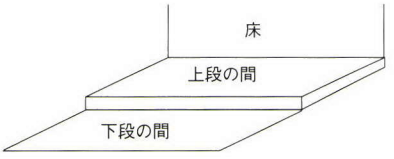
次に「香席の花の心得」として、香道は香を焚いて楽しむ芸道で、茶道と同じく室町時代の末期より行なわれ、文学と結びついて発展したものである。清浄な香を焚く香道の席には、茶席のときと同様に派手な花を挿けない。また香りのある花を使うことは避け、とにかく閑寂なこころでもって花を挿ける。

49　会日役席　免許披露会席の花

「会日役席の花」として、挿花の会での役席・幹部の花に関して述べる。まず床の第一座には、最も上位の秀でた花を置く。次に第二座の床脇（違棚など）、そして第三座の巻頭（かんとう）、第四座の巻軸（かんじく）、第五座の中央の順に置くものとする。玄関は第一座である主人の名代として、第三座に相当する上位の花を置く。玄関に数多く置くときは、玄関中央を役席とし、その左右に花を配するものとする。

床に二瓶置くときは、陽である明り口の方が上座、陰である床柱の方が下座である。三瓶置くときは、中央が第一座、明り口の方が第二座、そして床柱の方が第三座である。床がなく一文字の席であれば、中央を第一座とし、次にその左右を第二座、一番端の左右を第三座、左右それぞれの中央を第四座とする。

挿花の会において、役席の者は全体に心を配り、悪しきところがある花は、挿けた者と話をして直す必要がある。無免許の人は、伝承花を公開の席で挿けてはならないので、初心の人には麗



上段床の間

三方

しい花を花材として与える。以上の席を定め、花を割り振る行ないは、秀逸の席に花を挿ける第一座の者がする。とにかく、口論が起きないように心を配ることが大切である。

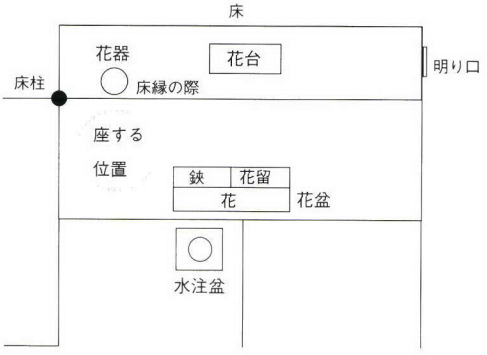
「免許披露会席の花」として、免許披露の会席は免許を受けた者を披露するものであるので、他に上位の免許を持つものがいても、免許披露される者が挿けた花を第一座の床に置く。そして免許を三方（さんぽう）に載せて、違棚などの床脇に飾る。この三方は、神仏また貴人に供物を奉り、儀式で物を載せる台である。方形の折敷（おしき）を檜の白木で造ったもので、前・左・右の三方にえぐってあけた穴である刳形（くりがた）がついているものである。

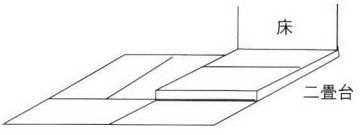
5 諸々心得の事

5a 花手前の心得

上段床の間、二畳台附き床の間における花手前「上段床花手前・二畳台附床花手前の心得」に関して述べる。

「上段床の間」は、書院造で段を一段高くし、貴賓の座するところとした間である。その床へ花を挿けるときには、まず花台を床に置き、水が六～七分はいった花器を上段床の間の際である床縁のとこまで運び置く。そして次に水注・花盆を下段に運び、そのまま下段に座って挿けるものである。上段床の間はいくら広くても、常の床と同じものとして考える。挿け終わってから床へと運び、花を向こうに直す。それより後に水注を持っていき、四季に応じて足し水をする。最後に花台の上と床縁を拭いて、そのまま下段の間に下りる。この上段床の間に挿ける花としては、





二畳台附き床の間

松・竹・梅・椿など位の正しいものとする。貴人の御前であるので、万事にわたり失念のないようにすることが大切である。

「二畳台附き床の間」は、二畳分、段を一段高くし、貴賓の座するところとした間である。この二畳台附き床の間も、上段床の間と同様に考えて花を挿ける。

なお、上段床の間、二畳台附き床の間に上るときには、畳の上を直接に踏むのではなく、毛氈（もうせん）などの上を通らなければならない。そのときの方法として、巻いた毛氈を伸ばしながら敷いていき、その上を小膝（こひざ）で進む。そして戻るときは、毛氈を巻きながら小膝で戻るものである。侍従などの「上段の間立ち廻り御免の人」は、このような煩わしさを避けるために、「上段の間立ち廻り御免」ということで、毛氈などを用いずとも、その間に上ってよいとされている。上段床の間、二畳台附き床の間の花手前は、以上に述べたもの以外は、平座敷のそれと同様である。

「平座敷床花手前の心得」としては、以下にその順を述べるものとする。

一　花台を床の中央に置いておき、掛物などの準備をあらかじめしておく。
二　床の花台の上に、水が六～七分はいった花器を置く。
三　座が定まってから、席中に出て人々に挨拶をする。
四　水注を載せた盆を運び、次に花盆（上に花・鋏・花留・布巾）を運ぶ。
五　床柱の方に座る。
六　床の中央に膝行していき、花器を花台より下して床縁の際に置く。
七　花器の口を、布巾で左右にと拭き、そのまま花盆へ戻す。

『華術三才之巻』　床花手前

『華術三才之巻』　床柱花手前

八　鋏を鋏袋より取り出し、鋏袋は花盆の前に置いておく。
九　配り木をした後に、さらに程よく水を注ぐ。
十　「お煙草を」の挨拶をする。
十一　枝葉の屑が散らないように、花盆の上で花を伐って挿けていく。
十二　挿け終わってから、鋏を拭いて鋏袋に入れ、花盆へと戻し、その花盆を水注盆の横に下げ置く。
十三　布巾を、水注の盆へと載せ置く。
十四　「ご退屈様でした」の挨拶をする。
十五　挿けた花を向こうの方に寄せ置いてから、床正面に膝行していき、花を挿けた花器を花台に載せる。
十六　少し下がって、花を篤と見る。
十七　もとの座する位置に戻り、再び布巾と水注を持っていき、花の正面から四季に応じて足し水をする。
十八　花台と床縁を拭く。
十九　布巾は花盆に載せて、そのまま持ち帰る。
二十　水注を持ち帰り、最後に挨拶をして辞する。

※　明り口が向かって右にくる陽の床では、花盆は右脇へ附けて持ち、陰の床では左に附けて持つ。水注は口を向こうにして持つものである。

最後に「平座敷花手前の心得」として、床のない平座敷などの場所に、花を挿けるときの花手前について述べる。まず、花を挿ける席に花台を置き、花器を花台に載せておく。このとき水は六～七分入れておく。そして水注を運び、次に花盆をもって出る。このとき、小型の水注であれば、花盆に載せて同時に持っていってもよい。以下の花手前は、「平座敷床花手前」のそれとほぼ同様である。

5b　花所望の心得

「貴人より挿花御所望の心得」として、貴い御方の要望で花を挿けるときは、花手前など万事に失念のないように行なう。草木は位の高いもの、縁起のよいもの、また名のよいものを十分に吟味して挿ける。貴人の好みの花などがあれば、それに従って挿けるものとする。貴人の御前に召されることがなく、指図された別室で挿ける場合には、取次ぎの者が持っていくときに花が崩れることのないように、十分に注意して挿けておかねばならない。

「高位貴人へ挿花御所望の心得」として、高位の貴人に花を挿けてもらうように所望するときは、床の掛物は外しておく。ただし、神仏の像が書かれた掛物は掛けておいても構わない。まず、床の中央の花台の上に、水を六～七分入れた花器を置いておく。次に、花は四～五種ほどよく養ったものを用意しておき、その中から貴人の選んだ花を花盆に載せ、鋏・花留・布巾を添えて、これを三方か木具に載せて持っていく。花が床に置いた花器に適するかどうかを御伺いして、もし合わないとのことであれば、別に二～三種類の花器を持っていって選んでいただく。

貴人が床前に御座されてから、花盆、水注の順に運び出て、貴人の右脇程に置く。貴人が花を

挿けているときには、次の間に控えて、手をついたまま拝見する。挿け終わってからも、万事失念のないように気を配る。なおこのとき、書院に釣香炉を掛けていてもよい。

「客に花所望の心得」として、客に花を挿けてもらうように所望するときは、まず花器を床に飾り置き、水は六～七分入れておく。客が座してから、花・鋏・花留・布巾を載せた花盆を持っていき、客が花を見立てている間に床の掛物を外す。三幅対の掛物であれば、真ん中のみを外す。このとき、客は「掛物はそのままに」といってくるが、その場合は、その時の状況に応じて取り計らう。なお、横物の掛物であれば、花を見切るようなこともないので、そのままに掛けておく。客が花盆をもって床前に座してから、主人は水注を運ぶ。客が花を挿け終え、そのまま花盆をもって元の座に戻り、最後に客の「足し水を」の挨拶があった後に、主人は花器に足し水をして、その跡を布巾で拭いてから、水注を持ち帰る。

以上、亭主が客人に花を挿けることを所望したときは、置花器に挿けられた客の花は床の中央に据えて置く。そして、その客が亭主にも花を挿けることを所望したときには、亭主は趣向を変えて掛花器を使い、床柱に掛花を挿ける。このときの主人の花手前としては以下に述べる。

まず、水を六～七分入れた掛花器を床へと運び、手前に向って柱の方に置いておく。次に、花盆に水注などを載せて、常のところへ運び置く。定座して後に挨拶をし、花盆を置きなおし、床に向って鋏を出す。そして花留をして水を注ぎ、花器を床柱に掛け、膝立てにて挿けていく。挿け終わってから鋏をしまい、さらに四季の足し水をして、花盆を元の位置に戻す。そして床縁を拭き、布巾を花盆に載せて持ち帰る。

「床に立花挿花ある時の心得」として、床に花がある席で、花を挿けることを所望されたときは、

床の花と色や形などがさし合わないような花材を選んで挿けるものとする。そしてこのときに挿けた花は、違棚の下、もしくは座敷に置く。床に挿けてある花が桜・紅楓・白蓮（はくれん）など奥伝のものであった場合は、同じ間ではなくて、次の間に挿けて置く。また、床の花が立花であれば、種類多くの花が挿けられてあるので、多少はさし合う花を挿けてもよい。ただし、役枝として主に使ってある花材は避けるべきである。

5c　花見様の心得

「床の花見様の心得」として、まずは床に関することを述べるものとする。上段床の間や二畳台附き床の間は、貴い御方の座するところであるので、その床には貴人の像を祭り置いて花を供したり、神仏を祭るのが本来のものである。神仏以外の人の書画などが掛けられるようになった現在の床は、厳密にいうと正式なものではない。床のない平座敷であっても、床の前の一畳は床と同じ高さと心得て、貴人の座するところと考える。よって、むやみに床の前に座することは避けるべきである。

床の花を見るときは、床前の畳を半分下って座し、膝の上に手を組み、まずは掛物を書画・名印・表具・軸の順に篤と見る。そして、それより後に花を拝見するものである。花の水際を見るときは、亭主の許しを得てから、膝行して床前まで進んで拝見する。二畳台附き床の間の場合は床縁の際より、また上段床の間では下段の間より拝見する。

「会席の花見様の心得」として、花の会席においては、玄関に花があれば、まずその花を篤と拝見する。座敷に入って床前まで進み床の花を拝見し、次に床脇、巻頭、巻軸の順に花を拝見す

る。その後に、中央の花を拝見して、中央より巻頭の方に至るまで、そしてまた中央より巻軸に至るまで花を拝見する。このときは、二～三瓶を一目で拝見していってもよい。最後にまた床前に戻って、床の花を篤と拝見してから帰るものである。

床でなく一文字の席であれば、まず中央の花を拝見する。そして左脇より順に末席まで拝見し、また中央に戻って花を拝見する。そして次は右脇より順に拝見していく。他流の花会席では、余計な言葉を慎み、特に礼儀や挨拶を正しく行なわねばならない。

5d　寄合　廻り花の心得

「一つの器に寄合挿け方の心得」として、三重の花器に花を五種使って、五人で挿けるとき、上口・中口・下口にどの花を誰が挿けるかをあらかじめくじで決めておく。そして、上口より順に挨拶をしてから挿けていく。最後に下口を挿けた者は、上口より四季の足し水をしていく。また、置花器を用いて一種の花を体・用・留と三人で挿けたり、広口に三種・五種と三人・五人で挿けることもある。いずれにしても、くじで順番を決め、それぞれ挿ける花材をうまく取り合わせ、花手前を正しく行なって挿けるものとする。

「廻り花の心得」として、廻り花というのは、一瓶の花を三人または五人で、変化の動きを見せながら挿けていくものである。三人であれば、あらかじめ始中終をくじで決めておき、まず始の人は花の姿に応じて素直に挿ける。このとき、禁忌に触れない程度に花葉枝を多く使い、後に挿ける人のこころを考えて六～七分の働きでもって挿ける。次に挿ける中の人は、この姿を少し変化させて挿ける。そして終の人も、その姿を変化させて挿け、挿け終わった後に花を床に直して、

四季の足し水をする。このように廻り花は、花の姿が変化し移り変わっていく様を興じるものである。なお「花月の廻り」というものがあって、三人・五人と花をそれぞれ一種類持ち寄り、くじで順番を決めて順に挿けていく廻り花もある。

5e　庭前の草木挿花に用捨すべき心得

「庭前の草木挿花に用捨すべき心得」として、来客のために、庭前にある草木を床へ挿けてはならないとされている。これは、庭の花と床に挿けた花が喧嘩し、興ざめとなるためである。ただし、雨中の来客で、外に花を買い求めることができない場合、また逗留（とうりゅう）の客、つまり旅先でしばらく宿泊していくことになる客に対しては、庭前にある草木を用いることも仕方ない。このような例外として庭前の花を用いるときは、事前に客に許しを請う挨拶をすることが大切である。

5f　夜陰挿花の心得

「夜陰挿花の心得」として、夜には花を外して、暗い中にあっても見やすい掛物に掛け代えるものとされている。しかし、客からの要望があって夜陰に花を挿けるときは、開花のものを使うことなく、莟を多く使って、また半開のものを取り混ぜて挿けるものである。花は陽気に連れて満開を見せ、陰気に連れて凋むものであることによる。ただ、葉物などは昼夜の変化が少ないので、これを夜陰に用いてもよいとされている。

また、燈火によってできた影に禁忌の見切が生じてはならない。とにかく影の移ろいにも気をつけ、花葉がしっかりと見えるように挿けることが大切である。

Lecture Ⅴ　花道具扱い 飾付

1 花と道具

未生という根源に通じるものを感じとり、伐った草木に養いを施し、そして草木の水が揚がった後に挿花として席上に移す。このとき、その席は花となり、また花台敷板も花、花器も花、花留も花、水も花、鋏も花、挿ける姿も花、挿ける草木も花、こころも花となる。ここでいうところの「花」というのは、天地の間にある麗しきものの総名であり、すなわちこのうえなく麗しき美なるものは花である。陰陽寒暖の教えを守り、天の道に素直に従う草木は、生き物の長である人より勝るところがあるといえる。よって挿花の席も、花のように清らかにしてこそ真なるものとなる。

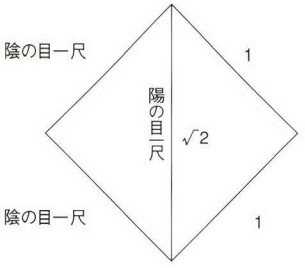
花器などの道具は、正しく寸法を定めて用いる必要がある。つまり、天地によるところの数に従って、正しく寸法をとらねばならない。天は二十八宿星をもって体と成す。すなわち陰陽の日月と木火土金水の五星を合わせた七星は、東西南北それぞれにあると捉えることができ、よって全部で二十八宿星となる。また地の数である九に、四季であるところの四を掛けると三十六となる。よって、地は三百六十度の元と成す。

さらに天地人三才、陰陽五行、十干十二支、四季二十四節と、一より百八までの数より、「活

の員」つまり活きた数員でもって寸法を定める。

「活の員」とは（一・二・三・五・六・七・八・九・十・十二・十五・十六・十八・二十・二十四・二十八・三十・三十六・四十八・五十・六十・六十四・七十・七十二・八十・九十・九十六・百・百八）の二十九箇ある数字であり、一方「死の員」は活の数字以外の七十九箇ある数字のことである。

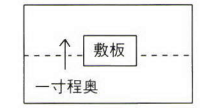
一　天の陽数。根源に在る、万物の始まりである太極。
二　地の陰数。陰陽という両極に分れた両儀。
三　天地人三才の陽数。
五　木火土金水の五行。万物生成の源となる五元素。
六　地の数。万物を止め、造化の働きを成す妙数。
七　天の数。陰陽の日月と五星を合わせた七星。陰陽七つの変り目。
八　八卦。
九　地の員。陽数（奇数）の最上。
十　天の員（一）の大数。十干。一と九の通数。
十二　十二支。十二節。陰陽一回りの数。
十五　注連（七五三）の員。
十六　天と地。陰の八、陽の八の合数。あるいは天の七、地の九の合数。
十八　極陰極陽。陰の九、陽の九の合数。
二十　両儀（二）の大数。
二十四　二十四節。季の変わり十二節の変。

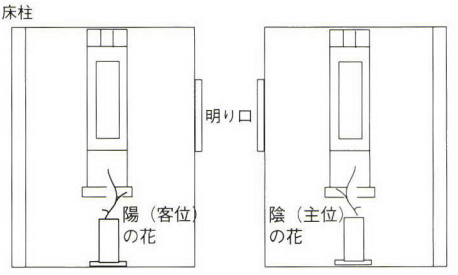


二十八　天の二十八宿星。四方に在る七星。
三十　天地人三才（三）の大数。一カ月の数。
三十六　地の員。地の九に四季を掛け合わせたもの。
四十八　明中、四十八刻の員。
五十　五行（五）の大数。
六十　造化（六）の大数。
六十四　八卦の八卦け。造化の妙数。
七十　天の員（七）の大数。
七十二　春夏秋冬土用を構成する数。
八十　陰の八卦（八）の大数。
九十　陽数（奇数）の最上（九）の大数。
九十六　一時八刻、陰陽十二時の合数。
百　天員。一九通（十）の大数。
百八　百八煩悩。一時九刻、陰陽十二時の合数。

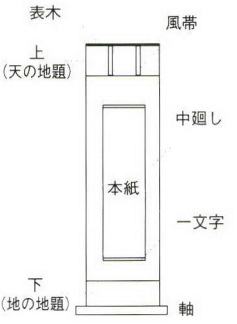
以上のような「活の員」で寸法を定めることで、道具も自然にかなうものとなる。未生流における道具類は、神仏の姿と同体であるといえ、したがって、その取り扱いも正しく行なう必要がある。

以下に、花と道具に関して述べていくが、寸法で一尺は約三十センチ、一寸は約三センチ、そして一分は約三ミリであるので、心得ておきたい。また指尺一つ目とは、約一五センチである。さらに、この項にでてくる「陽の目一尺」とは、「陰の目一尺」を二辺とする直角二等辺三角形





陽の床　陰の床　陰の床



掛軸各部の名称

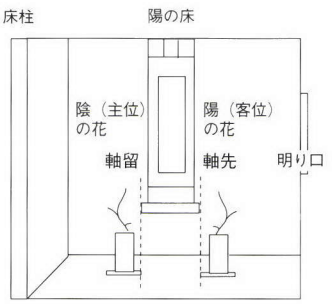
の一辺をいう。つまり$\sqrt{2}$（1.414）尺である。陰の目一尺は約三十センチ、そして陽の目一尺は約四十三センチとなる。この陰の目と陽の目の比率（1:$\sqrt{2}$）は、掛軸、違棚、床の間などにも用いられ、日本の構造美の基本ともなっている。

2 床

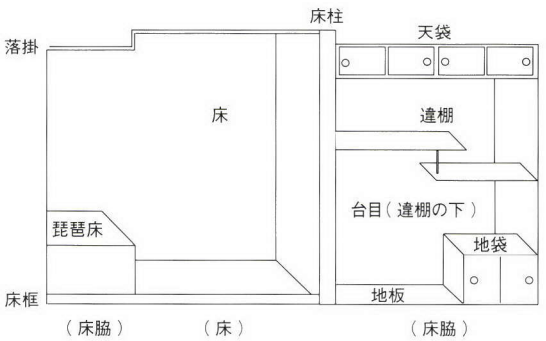
床柱より向かって右にある床の間は陽の床である。この陽の床には、花の用が明り口に向くように、陽の花（客位の花）を挿ける。一方、床柱より向かって左にある床の間は陰の床である。この陰の床には、花の用が明り口に向くように、陰の花（主位の花）を挿ける。

華道未生流初代家元である未生斉一甫は、客位の花を本勝手の花、主位の花を逆勝手の花と定めた。これに対して、嵯峨御所華務職に就いた二代家元である未生斉広甫は、主位の花を本勝手の花、客位の花を逆勝手の花とした。前者が人間賞玩の花を追求した物の見方であるのに対して、後者は仏前荘厳の花としての捉え方である。万物すべてのものは、常に陰陽変化して止むことはない。大切なのは、その働きを感じとることである。

まず、床に花を一瓶だけ挿けるときには、その花台（もしくは敷板）は左右においては床の中央に、そして前後においては一寸ほど奥に据え置く。このとき、掛物に画かれた花を挿けることは避け、花で掛物の名・印・字を遮ってはならない。もし遮るようであれば、花は床柱の方へ寄せて置く。また、床が板床であれば敷板を用いてはならない。板に板を重ねては、間に空がなく陰陽和合に反するからである。さらに、名のある花器や掛花器を使う場合には、必ずそれぞれ花



軸付の扱い



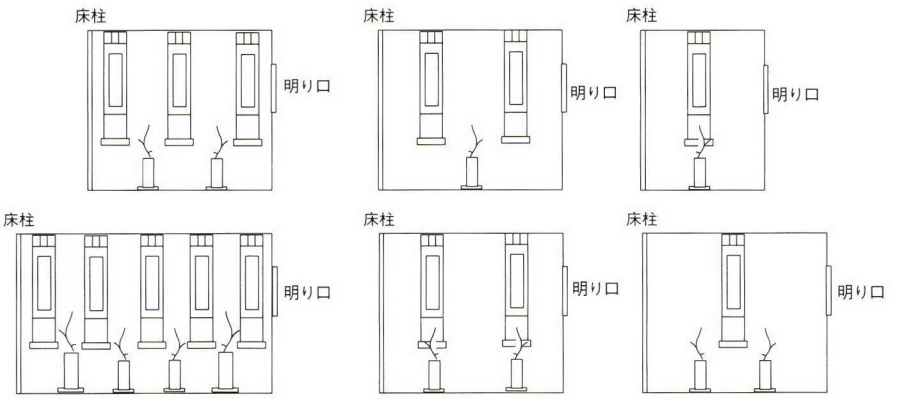
台や垂撥（すいばち）を使う。

床に花を二瓶挿けるときには、陽の床であれば、掛物の軸先（明り口の方）には陽の花（客位の花）を、そして軸留（床柱の方）には陰の花（主位の花）を、それぞれ対にして挿ける。陰の床は、この逆の扱いでもって花を二瓶挿ける。

掛物による心得として、高名の方の筆、または王侯の書画などの、仰ぐべき掛物を床に掛けたときには、花台・敷板を床の中央に据えるのではなく「軸付（じくつき）の扱い」をする。「軸付の扱い」とは、掛物の軸先と軸留を垂直に下したところより外側に、花台・敷板を据えることをいう。しかし、このような仰ぐべき掛物であっても、横物であれば、花で軸を見切るようなこともないので、あえて「軸付の扱い」にする必要はない。明り口の方を軸先、対して床柱の方を軸留という。陽の床の場合は、軸先に挿ける花は陽の花（客位の花）、軸留に挿ける花は陰の花（主位の花）とする。なお、神仏の像などは、誰が書いたものであっても、花は床の中央に据えて挿けてもよいとされている。これは、供花の意を含むからである。しかし、このときも神仏の面体に枝葉がかからないように注意することが大切である。

また、掛物に画いてある花を挿けてはならない。掛物の賛に花の辞があれば、その花を挿けてもならない。多彩な色調の掛物には、白い花や葉物などを挿けるとよい。表飾の色と花がさし合うことを避けるためである。人物や神仏の画かれた掛物であれば、その面体に花がかからないように注意し、画いた者の落款や名印も隠れないようにしなければならない。

掛物を一幅のみ掛けるときは、花を中央に一瓶挿けるか、もしくは左右に二瓶挿ける。二瓶挿けるときには、花器はできるだけ対のものを用いたほうがよい。また、掛物を二幅掛けるときは、

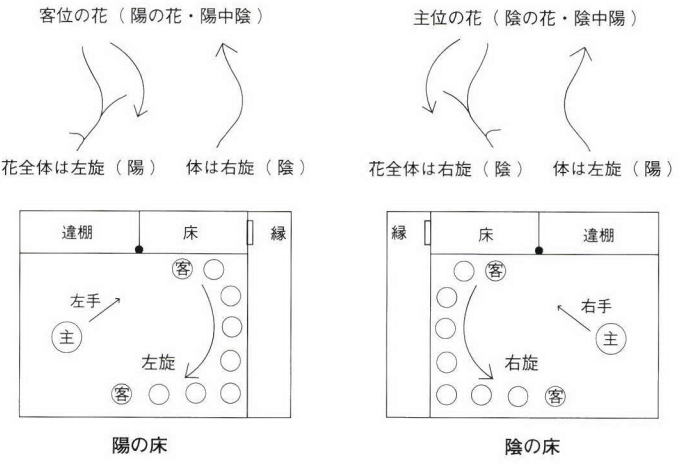


花を中央に一瓶挿けるか、もしくは掛物の前にそれぞれ二瓶挿ける。掛物が三幅のときは、花を掛物の間にそれぞれ二瓶挿ける。さらに、掛物が五幅であれば、掛物の間へ二対の花器を用いて、合わせて四瓶挿ける。このように数多くの花器に花を挿けるときには、同じ花を挿けるのではなく、それぞれ種々に取り合わせて挿けるべきである。また、掛物の書・画は共に時候と昼夜の別を考え、季節に合うもの、その時の行事に相応しいものを、客のこころを察して掛けるものとする。

さらに床の花として、以下に詳しく述べるものとする。床に花を挿けるときには、花台・敷板の掃除を丁寧に行ない、枯葉・虫食い葉・蜘蛛の巣とぢ葉を適宜取り去って瓶中を綺麗にし、陰陽の床に応じて花を挿ける。

陽の床は、明り口が向かって右（そのものの左）にくる床であり、主人が座ったところから見て左の方にしつらえてある床と捉えることができる。この床は陽性をもつ床であるので、上客より左旋（時計周り）に座っていく。この陽の床に挿ける花は、陽（陽中陰）の客位の花である。花全体の姿は左旋する陽であり、一方、この花の体は右旋に揉めて陰に基づく。すなわち、この花は陽中陰の姿である。

一方、陰の床は、明り口が向かって左（そのものの右）にくる床で、主人が座ったところから右の方にしつらえてある床である。この床は陰性をもつ床であるので、上客より右旋（反時計周り）に座っていく。この陰の床に挿ける花は、陰（陰中陽）の主位の花である。花全体の姿は右旋する陰であって、一方、この花の体は左旋に揉めて陽に基づく。すなわち、この花は陰中陽の姿である。



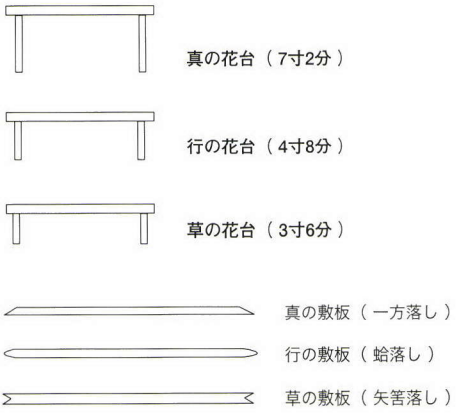
花の体が右旋すれば、その花全体は左旋する。逆に、花の体が左旋すれば、その花全体は右旋する。この右旋左旋の働きは、陰陽寒暖の和合するところのものである。

3 花台　敷板

花台は真・行・草の三種類のものがあり、それぞれ時候に応じて用いる。とにかく、四季の働きを内に感じとることが第一義である。夏季には「草の花台」を使用し、花台の高さを低くすることで、花器の中の水がよく見えるようにする。また口が広い花器「据物」を用いるときは、水面を広くする。いずれにしても、夏は水を多く見せることで、涼しさを感じさせるようにする。そして、夏至より秋分までの九十日間は梅雨の時候であるので、花を挿けた後に、花器にも露を注ぐ。これは涼気を求めて、草木ともに露を楽しむ時候にあたるからである。

冬季には「真の花台」を使用し、花台の高さを高くすることで、花器の中の水をできるだけ見せないようにする。また「据物」を用いるときも、つとめて水面を少なくするように心掛ける。水面が多いと一層寒さを感じさせるものである。そして、春・秋の季節には「行の花台」を使用し、中庸に扱うものとする。

「真の花台」は高さが七寸二分のものであり、これは円を現す一年（三百六十）を、五気の五で割って割り出したものである。五気とは、（木―春、火―夏、土―土用、金―秋、水―冬）の五つの気のことをいう。「行の花台」は高さが四寸八分のものであり、これは一日二十四時間に、それぞれ陰陽をあてた四十八刻を意味する。そして、「草の花台」は三寸六分の高さをもつもので、



花台、敷板と真・行・草

	真	行	草
花姿	立つ姿	歩く姿	走る姿
花器	銅器	土器	竹器
花台	7寸2分	4寸8分	3寸6分
敷板	一方落し	蛤落し	矢筈落し
花材	木物	華奢な木物　強い草物	草物　水草
季節	冬	春　秋	夏

これは一年（三百六十）という円を現す。

花台を三つ床へ置くときは、中央には「真の花台」、明り口には「行の花台」、そして床柱の方には「草の花台」を置く。また中央に「行の花台」、明り口に「真の花台」、そして床柱の方に「草の花台」を置いても構わない。前者は中央を真に通じるものと捉えたものであるのに対して、後者は四季の移り変わりという働きを感じとったものである。

花も花台に合わせてそれぞれ真・行・草と挿け、また花器も真（銅器・金）・行（土器・土）・草（竹器・木）と使う。花台には、長方形のもの以外に、木瓜形（ぼけがた）や松皮菱（まつかわびし）などのものがあり、さらに花台の足も種々に風流なものがある。

次に、敷板（薄板）について述べる。円の花器（陽）を置くには、角の敷板（陰）を使い、一方、角の花器（陰）を置くには、丸の敷板（陽）を使う。これは、陰陽和合の理に基づくものである。横長花器などに用いる敷板としては特に決まりはない。敷板にも、正式には真・行・草と三種類のものがあり、花台のときと同様の扱いでもって、それぞれ時候に応じて用いる。

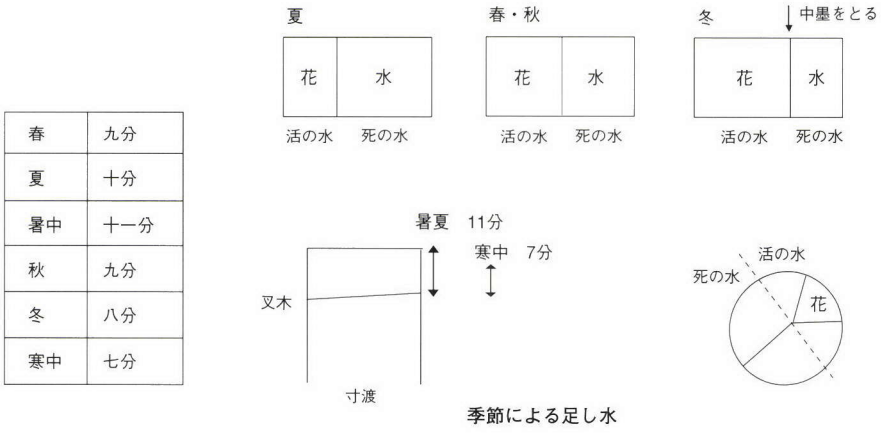
この敷板の寸法としては、長さ陽の目九寸（地の数）、幅陰の目九寸（地の数）、厚さ陰の目二分八厘（天の二十八宿星）である。この敷板の縁面の取り方で、真・行・草の三通りに分けることができる。縁面を「一方落し」にしたものを真の敷板、「蛤（はまぐり）落し」にしたものを行の敷板、そして「矢筈（やはず）落し」にしたものを草の敷板という。以上の長方形の敷板の他には、四方を陰の目九寸とする正方形の角の敷板や、直径陰の目一尺の丸敷板、六角・八角の敷板、さらには木瓜形のものやミタレ縁のある敷板などがある。

4 花器

花器は、真の花器（銅器・金）、行の花器（土器・土）、草の花器（竹器・木）と三通りに分けることができる。真の花器の一つである、青磁の花器や唐金の器に花を挿けるときは、草木ともに露を楽しむ時候であっても、露を注いではならないとされている。露を注ぐとは、直接水を打つことである。このような金属類のものに、湿気を与えれば錆びてしまうからである。露を楽しむ時候は、夏至より秋分までの九十日間で、このとき金属の類ではない花器には露を注いで涼気を求める。なお、真の花は木物、行の花は花車（きゃしゃ）な木物や強く勢いのある草花、そして草の花はやさしい草花や水草である。

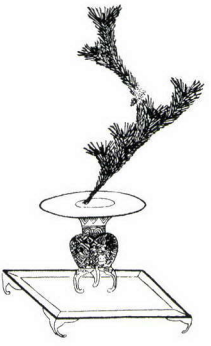
花器に注ぐ水の高さとして、春・秋には叉木より「寸渡（ずんど）」の口までが九分となるように、そして夏には十分に、暑中には十一分に、また冬には八分に、寒中には七分までの高さとなるように、季節に応じて花器に水を注ぐ。また、口が広い花器「据物」に水を注ぐとき、夏には水面を多く見せることで、涼しさを感じさせるようにする。そして冬には、つとめて水面を少なくするように心掛ける。水面が多いと一層寒さを感じさせるものである。なお春・秋には、中庸に水面を見せる。このように四季の寒暖に応じて足し水をすることで、水は「死の水」から「活の水」へと変化する。水を「死活」の様相で捉えたとき、花を挿けた水は「活の水」であり、花のない水は「死の水」である。水の死活をしっかりと定めるためにも、花器の口全部を使って花を挿けてはならない

「寸渡」は、花器の基を成すもので、宇宙の本体をかたどったものである。寸渡の上半分は虚空、



春	九分
夏	十分
暑中	十一分
秋	九分
冬	八分
寒中	七分

季節による足し水



『四方の薫り』　薄端

『挿花蓮の香』　手桶

『献備千歳花』　広口

すなわち天円を現し、一方下の半分は風・火・水・地の四大を現している。

「薄端（うすばた）」は、上皿の端が薄くなっており、その上皿を支える胴と脚がついたものである。この薄端は草の飾り付けのときには用いず、真と行のときにおいてのみ使用する。

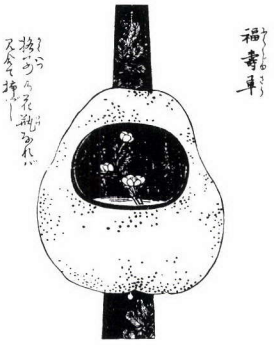
「据物（すえもの）」とは、口が広くて底の浅い平たい花器、すなわち広口・水盤・盥（たらい）・馬盥（ばたらい）などのことである。広口や水盤は花台に載せて、もしくは敷板を敷いて床へ置いて使う。しかし、盥・馬盥・手桶などの、竹のタガで巻いて締めた「輪の入りたる器」とよばれる器は、これを床に用いてはならない。「輪の入りたる器」は床脇に、すなわち違棚の下（台目）などに、花台を使うことなく敷板を敷いて用いる。ただし、「真の花器」である銅器や、「行の花器」である土器のもので、品格のある盥形のものであれば、敷板を敷いて床に用いても構わないとされている。なお、「据物」の花器は、水の死活の様相をしっかりと定めることが大切である。

「広口」に脚がついたものを「台付きの広口」という。「広口」の寸法としては、三通りのものがある。長さ陽の目一尺八寸、幅一尺八寸、深さ四寸八分、板の厚さ八分の大きい広口。長さ陽の目一尺六寸、幅一尺六寸、深さ二寸八分、板の厚さ六分八厘の中の広口。長さ陽の目一尺二寸、幅一尺二寸、深さ三寸六分、板の厚さ六分四厘の小さい広口。以上の三通りの広口は一間の床に用いることができるが、これ以上の寸法が大きいものになると、床には用いることができない。またこれらの寸法以外に、大小種々に広口の寸法を定めて構わない。ただし、このときも「活の員」でもって行なうことはいうまでもない。

「馬盥」や「盥」の寸法も三通りのものがある。馬盥の寸法は、長さ、幅、深さ、板厚ともに、大・中・小と広口の寸法によるものとし、その形は小判形とする。一方、盥は、直径一尺八寸、

体	用	留
白梅　白梅擬 サンシュユ　柳の類	千両　赤椿	葉牡丹　沈丁花 万年青の類
紅梅　楓	縞葉蘭	藪柑子　蕗の薹 金盞花の類
白桃　木蓮	山吹　庭梅（小梅）	芍薬の芽　オダマキの類
葉蘭　木賊　メドハギ 桔梗の類	虎の尾　ガンビ　菊の類	撫子 擬宝珠の葉ばかりの類
太蘭	杜若	河骨　猿猴草
実紫（紫式部）	菊	リンドウ

草木取り合せ



『生花玉かつら』 瓢花器

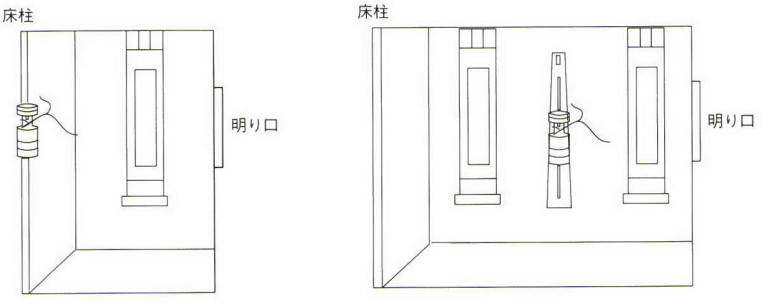
深さ三寸六分の大のもの、そして直径一尺六寸、深さ二寸四分の中のもの、また直径一尺二寸、深さ二寸四分の小さなもの、と三通りである。

「瓢花器」は瓢箪で作った花器で、これは夏を除いて用いる。瓢箪は、邪の気を中に吸収して、浄化させる働きがあるとされている。

「曲のある花器」を用いるときは、特に花の取り合わせが大切となる。花器自体に曲という変化があるものであり、これに挿ける花は素直なものがよい。曲に曲を合わせれば「和合」が生じることがなく、よって曲には素のものがあってこそ陰陽和合である。曲の花器を古木と見立てるならば、そこに挿けるものは古木から生じた素なる若枝であるといえる。草花であっても、そのような面持ちでもって挿けることが大切である。

なお、「草木取り合せ挿け方の心得」として、置花器に三種類挿けるときには、体に使う草木の丈が五尺も伸びる出生のものであれば、用には三尺以上伸びない出生のもの、そして留には一尺五寸以上伸びない出生のものを使う。このように、草木の出生に応じて取り合わせることが肝要である。さらに、広口などの据物に九種・十一種と使って、株を分けて挿けるときには、水の死活をしっかりと定めて、花器を自然にある水面と見立てる。そして、草木の出生、大小の姿、また気品、花葉の美醜を見極めて取り合わす。

以上の「置花器」に対して、花器には掛けて用いる「掛花器」がある。この掛花器は「垂撥」に掛けて使う。垂撥は中央に長い溝を持ち、掛花器を上下自在に掛けることができるようにしたものであり、その大きさには大中小とある。床に垂撥を掛けるための「掛釘」は、床より指尺六つ目（約九十センチ）に、そして畳よりは七つ目（約百五センチ）に定める。花を挿けた姿が、



掛花器の用い方

目の高さからして高からず低からずにするため、掛ける花器によっては若干の変化が必要である。また、床柱に掛花を挿けるときには、花の露が床縁へと落ちるようにする。花で掛物を見切らないようにするため、花姿の用の枝先は心もち前方にふり出して挿ける。一重切の掛花器には横姿の花を挿け、二重切の掛花器を使うときは上口には横姿を、下口には立姿（半立姿）を挿ける。

掛物を二幅・三幅と掛けるときには、床柱に掛花は無用である。また置花が二瓶もあるときも掛花は挿けない。ただし、床に掛けた掛物が季節感のない二幅対のものであれば、その真ん中を季節の場所と定めて、ここに垂撥を掛けて掛花器に時候の花を挿けたりしてもよい。また季節感のない三幅対のものであれば、中幅の掛物を外して、その代わりに垂撥を掛けて掛花器に花を挿ける。そして、掛物と花を合わせて三幅対のものと捉えて、季節を床へと移して風雅を楽しむ。なお、床以外に掛花を挿ける場合は、「掛釘」がなければ、「長押（なげし）」より垂撥を掛けて掛花器を使うとよい。

編んでつくられた「籠（かご）花器（手付籠・耳付籠・掛籠）」は、旧暦の二月中旬より十月上旬まで用いることとされている。現在の新暦では三月中旬より十一月上旬の春から秋の間である。軽い印象を与える籠花器に、重く感じる木物を挿けると、全体の調和がとれない。よって、籠花器は草花が生じる時候に使うといわれる。しかし、籠花器に調和する花材のものであれば、厳密にその時候は問わなくてもよいだろう。「置籠器」に合う花材としては、牡丹、芍薬、百合、紫苑などである。また「掛籠器」は、線の細い蔓（つる）物などがよく合う。とにかく籠花器に挿ける草花は、籠の大小に応じてバランスよく挿ける。

「貴い御方の御銘ある花器」を扱うときには、必ず花台に載せて床に置き、特に大事に扱わなけ

『挿花浪速之花』　籠花器

ればならない。掛花器の場合には、垂撥に掛けて床の中央に据えて用いる。また竹花器であれば、花器全体を水につけておき、よく水を含ませておく。もし乾いた竹花器に内から水を入れてしまえば、内より膨張して割れてしまう。そのようなことのないように、内外ともに水を含ませておくのである。そして、よく拭いてから風のあたらないところに置き、内外ともに徐々に乾かしていく。乾いていない竹花器を、そのまま風にさらしてしまえば、内側が湿っているのに外側だけが乾いていき、その結果、収縮して割れてしまうこともあるからである。この「貴い御方の御銘ある花器」を使うときの花としては、位の正しい草木を挿ける。

また「拝領の花及び花器取り扱いの心得」として、「貴人より拝領した花」は、枝葉を慎重に扱って挿けなければならない。誤って折ってしまうような事もあるので、むやみに揉めないようにする。挿花の法格を守り、そして万枝に支障なく、勢いがあるように徳相のこころでもって挿ける。掛花器に花を挿ける場合は、垂撥を使って床の中央に掛け、置花器に挿ける場合は、花台に載せて床の中央に置く。いずれにしても掛物は外しておかなければならない。気を清めるために、書院には釣香炉に香を焚いたりしてもよい。「貴人より拝領した花器」も、花と同様に慎重に取り扱うものである。

以上、花器に関して述べてきたが、最も大切なことは、花の姿と花器が相応することである。花の寸法としては、寸渡（ずんど）などの置花器に挿ける花は、花器の高さの二倍半と、二倍より少し高くして挿ける。そして、花器の口の差し渡し（奥行）分だけ、下方より枝葉を取り除く。これは、前にも述べた「体割の法」から割り出したものである。また、広口・水盤・盥・馬盥などの据物に挿ける花の寸法としては、およそ花器の差し渡し（奥行）の三倍に挿ける。そして、花器の差

し渡し（奥行）三分の一ほど、下方より枝葉を取り除く。この据物の場合は、留下の根締り、用の腰が常よりも少し高くなっても構わない。以上のことは基本のものとして、「花の丈高くして移ることあり、低くして応ずる事あり」と伝書にある。つまり花の出生、花器の変化に応じて、その花の丈も変化するものである。

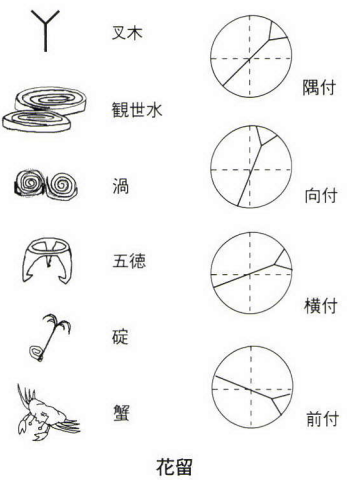
5 花留

花留をするときには、まず花器の正面を正しく定めることが大切である。つまり、耳附きの花器であれば耳を左右に、三つ足の花器であれば一つ足が前にくるように、また模様附きの花器であれば模様が前にくるように正しく花器を据え、その後にしっかりと花留をいれることが肝要である。

花器の基を成す寸渡の花留としては、「叉木（配り木）」を使う。この花留の付け方としては、花器の口より六分下がって性気の通いを入れ、丸い花器の中を角に見てとり「隅付（すみつ）け」にする。また「横付け」「向付け」「前付け」にすることもある。挿ける花の姿に応じて、花留も変化させて用いる。

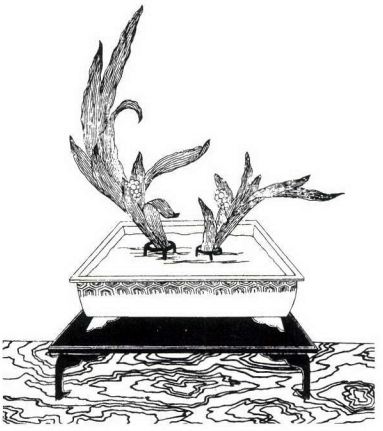
また盥や馬盥、広口などの据物に花を挿けるときには、「渦」「観世水」「五徳」「蓋置」「碇」「海老」「蛸」「二匹鯉」「亀」「眠竜」「兎」「三疋兎」「蟹」「蛇籠」などを花留として用いる。

なお「曲留」として即興で花を挿けるときには、「花鋏」をはじめ「分銅」「文鎮」「鎖」「小刀」「簪（かんざし）」「碁石」などを花留として使ったりもする。碁石は黒白の砂で水陸の景色を移しとる。「鋏（はさみ）



花留

『献備千歳花』　観世水（花留）



『挿花さくらの香』　五徳（花留）

挿け」は、花鋏を花留として用いるものである。花鋏の刃先で花をはさみ、花器の縁で留める。このとき花が重くて動くようであれば、手前の方に小さい石などを置いて用いる。ただし、これら「曲留」は即興のときのものであり、これを会席に用いてはならない。以下に、主な花留に関して説明するものとする。

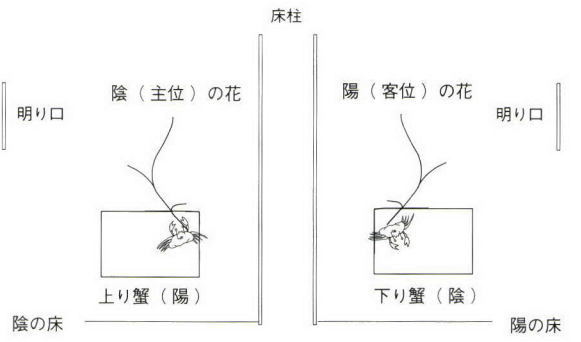
「渦」は、鉛を渦巻きに巻いた花留であり、葉物などを挿けるのに適している。これは現在でいうところの剣山の役目を成すものである。渦を巻いた水の文様を観世水というが、「観世水」の花留も鉛の平板を渦巻き状に巻いたものである。この花留は、水草を挿けるときにのみ、水盤や広口に用いて使う。

「五徳」は、炉の中で用いる道具である。これを花留として用いるときには、火に縁があるものなので慎重に行なわねばならない。また「蓋置」は、茶道において釜の蓋を置くものであるが、これを花留として用いることもある。

「碇」は、置舟のときに舟を載せるのに使うものであるが、舟の中に花留として使ったりもする。ただし、これは「往来の舟」のときに限って使う。というのも、海を往来するときには碇は船の中にあるが、停まっているときには海の中に沈んでいる状態にあるからである。この「碇」の花留は、水草に限って使う。

「海老・蛸・二匹鯉」の花留を使うときも、「碇」と同様に、挿ける花は水草に限る。なお「亀・眠龍」の花留は、水陸の草花いずれにおいても使ってよい。そして、「兎」「三疋兎」の花留は陸物に限るものとし、木賊・萩などの閑静な花を挿ける。このとき、兎が駆け巡る野を連想させるような、枝折れのあるようなものを使うと、よりいっそう風情がある。

『献備千歳花』　蟹（花留）



「蟹（かに）」の花留の使い方には、陰陽の別がある。左（向って右）の広口の縁に足をかけて空に向う蟹を「陽の上り蟹」という。一方で右（向って左）の広口の縁に足をかけて地に向う蟹を「陰の下り蟹」という。背中（表）を見せて、向こうを向く蟹は、すなわち陽である。腹（裏）を見せて、こちらを向く蟹は、すなわち陰である。陰の床に主位の花（陰の花）を挿けるときには、花留の蟹を「陽の上り蟹」とする。一方、陽の床に客位の花（陽の花）を挿けるときには、花留の蟹を「陰の下り蟹」とする。いずれにしても、蟹の花留は床柱付の方に据えおいて用い、光に向う花姿の用下に蟹の正面が向くようにする。この蟹を二つ使うときには、大小陰陽と変化をつけて用いる。また三つ使うこともあるが、このときもそれぞれ同じ向きとならないように、向きを変えて用いる。なお、この蟹の花留は、水陸の草花いずれを挿けるときにおいても使ってよい。

「蛇籠（じゃかご）」は、丸く細長く粗く編んだ籠の中に砕いた石などを詰めて、河川の護岸や水を防ぐものとして使われるものである。花留としての「蛇籠」は、中に砂・石を詰めて花を留める。この花留の蛇籠の寸法としては、長さ九寸・差し渡し三寸六分の大きいもの、長さ八寸・差し渡し二寸八分の中のもの、そして長さ七寸二分・差し渡し二寸四分の小さなもの、と三種類のものがある。それぞれ広口に合わせて、川の情景をかもし出すように用いる。

「轡（くつわ）」は手綱をつけて馬を御するときに用いるものであり、これを花留として使うことは、古く小田原の陣にまで遡る。千利休がこの戦において疲労する陣中で、馬盥を花器に、そして轡を花留にして花を挿けたことが起源といわれている。この轡の組み方には、「浮蛙」「兎」「水鳥」「亀」「花車」「御所車」「掛轡」の七通りのものがある。「兎」「花車」「御所車」を花留として用いるときには花は陸草のものを、そして「浮蛙」「水鳥」「亀」を用いるときには水草を主にして挿ける。

『本朝挿花百練』 轡（花留）

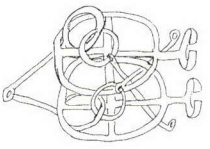
『献備千歳花』 蟹（花留）

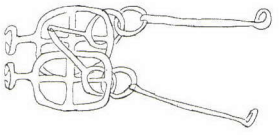
この七通りの組み方以外のものとしては、自由に重ねて用いる「葎（むぐら）」、そして複数の轡を重ねて用いる「八重葎（やえむぐら）」がある。なお、この轡は馬盥に使うものであるので、床に挿ける花留として用いてはならない。以下に、七通りの轡に関してそれぞれ述べるものとする。

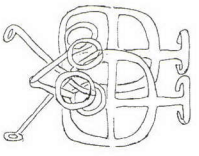
「浮蛙」は両手を伸ばし、両足で水を勢いよく蹴って浮いている蛙の姿を轡で現したものである。轡のハミガネを蛙の頭に、カガミを胴体に、そしてタコガシラを両手に、ヒキテを両足に見立てる。まず、カガミの表が下にくるように裏向けにして、タコガシラの輪が下にくるようにする。そして両方のカガミを左右重ね合わせて、ハミガネの先端がタコガシラの方に向くように立てかけて固定する。またヒキテは、蛙が足を伸ばしているようにする。このときの花としては、カガミの組違いのところに水草を挿ける。自然の池をのびのびと浮いている蛙の姿に想いを通わせながら、その景色を移しとって挿けるものである。

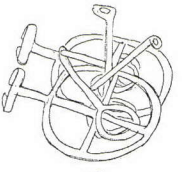
「兎」は、野山を自由闊達に飛び回る兎の姿を轡で現したものである。轡のハミガネを兎の頭に、カガミを胴体に、そしてタコガシラを前足に、ヒキテを両耳に見立てる。まず、カガミの表が下にくるように裏向けにする。両方のカガミを重ね合わせて、タコガシラの輪が下にくるようにし、ハミガネがタコガシラの方に向くようにする。そして、両方のヒキテを両耳としてカガミの下より上に引き上げて、兎の頭であるハミガネのところに交差させて据える。このときの花としては、カガミとハミガネの組違いのところに、山野にある芒や野菊などの陸草物を挿ける。秋の野山を飛び回る兎の姿を想いながら、その情景にふさわしい花材を使って挿けるものである。

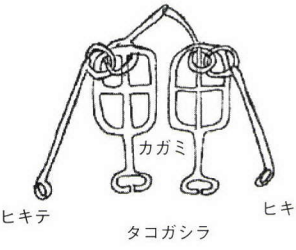
「水鳥」は水の中に首を入れて、餌を探しながら泳いでいる水鳥の姿を轡で現したものである。轡のハミガネを水鳥の頭に、タコガシラを尻尾に、そしてヒキテを足に見立てる。まず、カガミ


水鳥


浮蛙


亀


兎



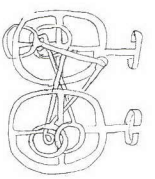
タコガシラの輪のほうが表
ヒキテの輪がカガミの上になるほうが表

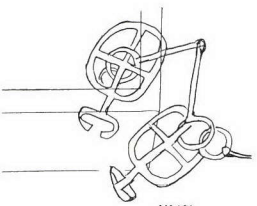
の裏が下にくるように表向けにして、タコガシラの輪が上にくるようにする。ハミガネは下方に向くようにし、水鳥の頭が水中にある様をここに現す。そしてカガミの穴に、二つのヒキテを上から下に引き通して、タコガシラの輪の下にくるように、左右それぞれ交差させて出す。このときの花は、カガミとヒキテの組違いのところに挿ける。杜若など、水陸の草花いずれにおいて挿けるときにも使って構わない。

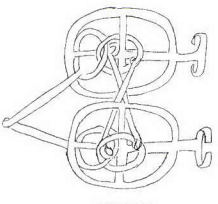
「亀」は、鶴とともに長寿を象徴する生き物である。この亀を轡で現す。轡のハミガネを亀の頭に、カガミを胴体に、そしてタコガシラを後足に、ヒキテを前足に見立てる。まず、カガミの表が下にくるように裏向けにして、タコガシラの輪が下にくるようにする。そして、左右のカガミを重ね合わせ、このカガミの穴に、二つのヒキテを上から下に引き通して、左右にそれぞれ交差させて出す。手足ともに短い亀の姿を現すものなので、タコガシラ・ヒキテともに短く見せておく。このときの花は、カガミとヒキテの組違いのところに挿ける。水陸の草花いずれにおいて挿けるときにも使って構わない。

「花車（はなぐるま）」は花で飾りつけた車であり、百花斉放いっせいに咲き誇ったたくさんの花々を、箱や籠に挿して優美に飾りつけた車である。この花車を轡で見立てて花を挿けるものである。まず、轡のカガミを両方立てて用い車輪と見立てる。このときハミガネがタコガシラの方に、つまり花車の後方にくるようにする。そして、二つのヒキテを、それぞれカガミの穴から通して、ヒキテ先の輪でもって、ハミガネの輪とヒキテの輪とカガミの軸とに絡め合うようにして止める。このときの花としては、牡丹などを豪華絢爛にハミガネの間に挿ける。

「御所車（ごしょぐるま）」は平安時代に貴人が乗っていた牛車で、車輪に漆、金塗り、金具のついた豪華な車を


花車


掛轡


御所車

いう。御所車は、幸と福を運ぶといわれている。この御所車の姿を、轡で表現したものである。まず、轡のカガミを両方立てて用い車輪と見立てる。このとき、御所車を引く牛とつなげるためのハミガネが、前方にくるようにする。そして、二つのヒキテを、それぞれカガミの穴から通して、ヒキテ先の輪でもって、ハミガネの輪とヒキテの輪とカガミの軸とに絡め合うようにして止める。「花車」との違いとして、「花車」はハミガネを上向きに後方へと組むのに対して、「御所車」はハミガネを下向きに前方にくるように組む。このときの花としては、ヒキテの組違いのところに、桜などの位が高く、かつ優美な花を挿ける。

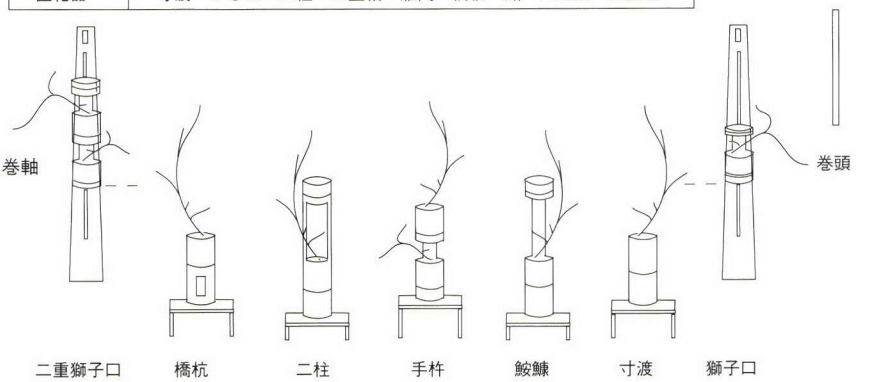
「掛轡」は、広口や馬盥の縁に掛けて据え置く使い方である。まず、轡の一方のカガミを器の隅に安定するように置き、このヒキテは器の中に入れておく。そして、もう一方のカガミを器の外側に立て掛けて据え、このヒキテは全体のバランスがとれるように用いる。このときの花としては何を挿けても構わないとされている。

6 七種竹花器

竹花器には、基本となる七つの「七種竹花器」がある。「獅子口」「寸渡」「鮟鱇」「手杵」「二柱」「橋杭」「二重獅子口」の七種類である。

この基本の七種を同時に用いて「真の七種竹花器飾り」を行なうときは、まず「獅子口」を垂撥に掛けて明り口に用い、次に「寸渡」「鮟鱇」を順に置き、中央には「手杵」を、さらに続いて「二柱」「橋杭」を置き、最後に床柱の方に「二重獅子口」を垂撥に掛けて用いる。明り口の

掛花器	獅子口・二重獅子口・三重獅子口・鰐口
掛置両用	手杵・寿老・天蓋・鮫鰊・真鶴・水虎・登猿・旅枕
置花器	寸渡・ひさご・二柱・二重櫓・雁門・橋杭・鑷・九玉垣・五重切



真の七種竹花器飾り

方（巻頭）には「獅子口」を、一方、逆の床柱の方（巻軸）には「二重獅子口」を使うのである。このときの置花器は、すべて「行の花台」を用いる。また中央に「真の花台」、その左右に「草の花台」、そして左右の端に「行の花台」を用いても構わない。

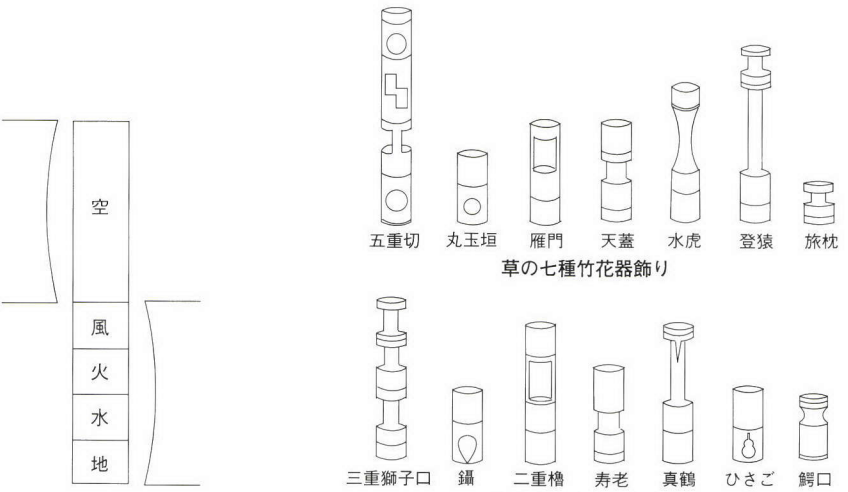
花の挿け方としては、はじめの三瓶が客位の姿であれば、後の三瓶は主位の姿にする。そして中央は「手杵」を使い、明り口が右にくる「陽の床」であれば、上口は客位の立姿、下口は主位の横姿にして挿ける。

花材としては、一種の花材で統一するのもいいし、それぞれ違う花材で組み合わしてもよい。中央には山の木を、次に里の木を左右に、そして次に水草を左右にと挿けたりもする。花形という形においても特に決まりはなく、すべての花を「行」に挿けたり、また中央には「真」、次に「行」を左右に、そして次に「草」を左右にと挿ける場合などもある。さらに、七種竹花器に七曲を組み合わしたりと、それぞれ自由に形を工夫して全体が調和するように挿ける。

七種竹花器は、以上の基本七曲（獅子口・寸渡・鮫鰊・手杵・二柱・橋杭・二重獅子口）以外に、変化曲の二種（鰐口・ひさご・真鶴・寿老・二重櫓・鑷・三重獅子口）、（旅枕・登猿・水虎・天蓋・雁門・九玉垣・五重切）があり、合わせて基本二十一種類となる。

「行の七種竹花器飾り」は、変化曲の「鰐口」「ひさご」「真鶴」「寿老」「二重櫓」「鑷」「三重獅子口」を基本的に用いる。「真鶴」「二重櫓」は丈が高いので、花台ではなく敷板の上に使っても構わない。また三曲のうちで、同じ変化のものを入れ替えて用いたりする。真の竹花器飾りに準じながら、若干の変化を加えて中庸に扱うものである。

「草の七種竹花器飾り」は、変化曲の「旅枕」「登猿」「水虎」「天蓋」「雁門」「九玉垣」「五重



切」を使ったりと、特に定まった配列はなく、変化に富みながら自由に用いる。

この竹花器の寸法を定めるにあたっては、竹の出生を見極め、活の数員でもって行なう。竹の周囲をとり、その長さを二分割し、一つをさらに四分割する。すると、五分割に分けることができる。これを、「空」「風」「火」「水」「地」の「五大」とする。そして「五つ」の竹の丈を、「五大」の長さとする。「四つ半」は、「空」「風」「火」「水」に「地」の半分を加えたもの。「五つ半」は、「五大」に「地」の半分を加えたもの。「七つ」は、「五大」に「地」「水」を加えたもの。以上のように、「九つ」までを基本として丈を定める。

以下に、基本となる「七種竹花器」に注がれている意に関して述べるものとする。

「獅子口（ししぐち）」は、獅子のような気高い口が開いて、法が説かれていく様を現したものである。法は尊いものとはいえ、人の教えによってはじめて開かれる。正しく開かれた獅子の口は、法が広く説かれることに通じている。獅子口の寸法は「四つ」である。この変化としては「鰐口（わにぐち）」「旅枕（たびまくら）」がある。「鰐口」は獅子口と同寸、「旅枕」は丈四寸八分と小さなものである。

「寸渡（ずんど）」は、竹花器の基本を成すもので、宇宙の本体をかたどったものである。寸渡の上半分は「空」すなわち天円を現し、一方、下の半分は風・火・水・地の「四大」すなわち地方を現している。「空」と「四大」を合わせて「五大」となる。万物が形となって生じる前の理、そしてその働きが作用することで生じる現象、寸渡には広大な天地自然のあるべき姿が注がれている。このような意については、理解するというよりも、ただただ内に感じることである。この「寸渡」の寸法は「四つ半」である。「五大」を現す「寸渡」の寸法が、「五つ」ではなく「四つ半」であるところに「未生」がある。また、この変化としては、「ひさご」「登猿（のぼりざる）」がある。「ひさご」は

『伝書四方之薫』　七種竹花器

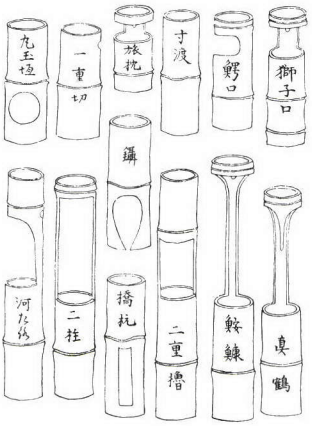
瓢箪の形をくり抜いたものであり、「登猿」は「八つ」の寸法の上部に、「四寸八分」の旅枕がついたものである。

「鮟鱇」は、口の大きい海の魚をかたどったものである。口の大きさは大海を意味し、広い度量を持って、清いものも濁ったものも併せ飲む。この鮟鱇の忍耐強いこころを現す。自然があるように正しく忍受することは、己のみではなくすべての安泰にも通じる。「鮟鱇」の寸法は、総丈「八つ」、下筒「三つ半」である。この変化としては、「真鶴」「水虎」がある。「水虎」は河童のことである。

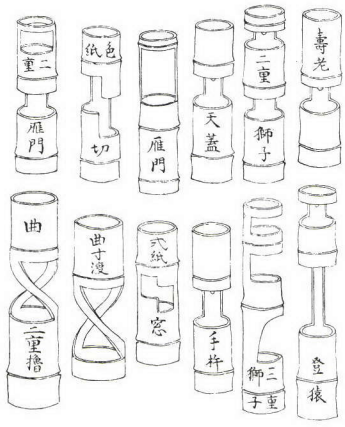
「手杵」は、上下同寸であり、よって陰陽等分・天円地方の和合を現す。天と地が和合することで、万物すべての物が生じていった。その万物流転の源に、想いを通わせるものである。なお、米をつく手杵は、物をこなすことから、物事をよくこなして理解する様も現す。「手杵」の寸法は「五つ半」で、筒の上下は同寸である。この変化としては、「寿老」「天蓋」がある。「寿老」の上筒は下筒より少し長く、「天蓋」の上筒は下筒より少し短い。

「二柱」は、我が国の源であるところの、伊邪那岐神と伊邪那美神という男女一対の二神をかたどったものであり、よって陰陽和合を現すものである。天之御柱を中心にして、陽の伊邪那岐神が左旋し、陰の伊邪那美神が右旋して、互いに相生じ合うことで国が産まれたという。「二柱」の寸法は、総丈「八つ」、下筒「三つ半」である。この変化としては、「二重櫓」「雁門」がある。なお「雁門」の寸法は「五つ半」である。

「橋杭」は、人を渡し導く法の橋をかたどったものである。橋は道、そして杭は法を意味する。節の下を抜いた透しは、橋を支える杭である。道を支える法であるところの、杭がしっかり定ま



『華術三才噺』 竹花器



『華術三才噺』 竹花器

ることで、橋は安定する。すべからく道というものは、その内奥にある理如何によって、導かれることもあり、また惰することもある。「橋杭」の寸法は「四つ半」である。この変化としては、「鐮」「九玉垣」がある。

「二重獅子口」は、師から学んだ法を次の弟子へと伝えていく、すなわち法の伝承していく姿を意味するものである。伝統が受け継がれ、絶えることのない様を現している。「二重獅子口」の寸法は「六つ」である。この変化としては、「三重獅子口」「五重切」がある。なお「三重獅子口」の寸法は「九つ」である。

以上、基本二一種類の竹花器に加えて、「尺八」「立鶴」「大仏柱」「二重玉垣」「二重橋杭」「曲寸渡」「曲登猿」「曲真鶴」「曲水虎」「曲二重櫓」「曲雁門」「曲三重」「洞二重」「洞三重」「色絵切」「相生」「左巻」「右巻」「向々」「中捻三重」「天の原」、さらに青葉附きの「寸渡」「手杵」「二重切」などがある。

7 三管筒

一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生じるという。一なる「太極」が陰陽という相対的関係の「両儀」を生じ、「両儀」が天地人の「三才」を生じ、さらに「三才」が万物を生じるということである。太極は、未生という未だ生じていない根元的な本質を現す「体」であり、両儀は陰陽という相対的関係を現す「用」であり、三才はその現象としての「相」である。

また「体」は、天地の間にあって動かない万物一体の「理」「未生以前の理」である。「用」は、

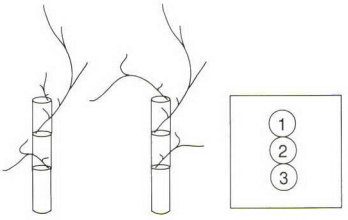
四時に移り変わり千変万化して、また一なる体に帰っていく「働き」である。そして「相」は、この体・用という理・働きが作用した結果、その現象として「姿」が生じたものである。よって、その理と働きに考慮を及ぼすことなく、現象としての姿だけにとらわれては、形骸に陥ってしまう。

花を「体用相応」した姿に置き換えて、未生に在る真なるものを感じとる。筒を三管用いて花を挿ける三菅筒には、未生の真理に通じる「太極」「両儀」「三才」「左旋」「右旋」という置き方がある。以下に、それぞれが現すところに関して述べるものとする。

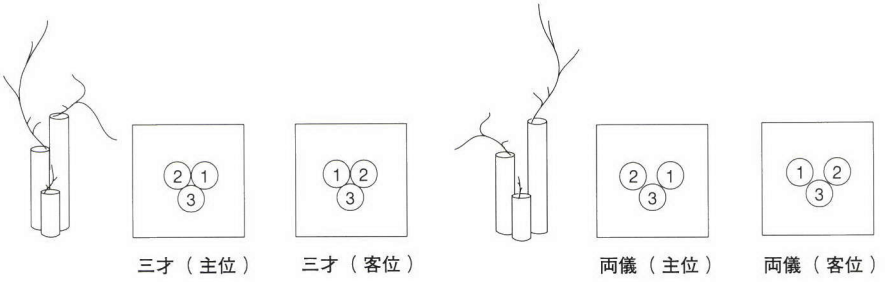
「太極」の置き方は、天地・陰陽が分かれる以前（父母未生以前）に在った、根源的なものを現す。そのため、三つの筒を正面から捉えたときに、一つの筒に見えるように真直ぐに並べて置き合わせる。さらに花の挿け方も、太極の理念に添って、それぞれの筒の花が一に帰するような心持ちでもって挿ける。すなわち、花の種類など全体に一体感をもたせて挿けるのである。

①の筒に小さく立姿を、②の筒に大きく真の立姿を、そして③の筒に横姿と、全体にまとまった姿に挿けあげる。また、①の筒に横姿で内用の用を、②の筒に立姿で内用の体を、そして③の筒に横姿で内用の留を挿け、この三管の花全体で円相体である内用の姿を現し、万物の根源に在るものを感じとって挿けることもある。天円は太極という万物の根源を現し、円相に収める花形である「内用」は「太極の挿け方」とも呼ばれている。無限に尽きることなく、生々流転する未生自然の理に通じるものであるといえる。

「両儀」の置き方は、根源である太極から、陰陽という二元対立の世界に分かれた両儀の状態を現す。この相対的な関係が生じることで、万物万象は働きという作用的な要素をはらむことと



太極



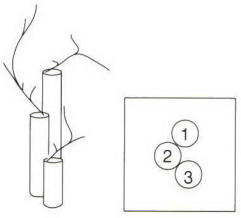
三才（主位）　三才（客位）　両儀（主位）　両儀（客位）

なる。天地が並び立つように、①天②地の筒を間を空けて並べて、その前に③人の筒を隙間を空けることなく、少し重なるようにして置き合わせる。すなわち、③人の筒は、未だ生じていない状態（未生）を現している。

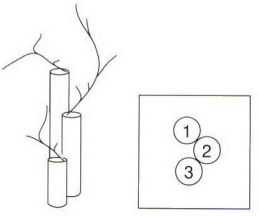
この花の挿け方としては、①天の筒には力強い陽性である立姿を、②地の筒には柔らかい陰性である横姿を、そして③人の筒には未だ生じていない未生を現すため、花は挿けずに水だけを張っておく。③人の筒に花を使う場合は、「陰陽未分」を現すために、主位とも客位とも区別のつかないような「未生の花」を挿ける。陽性である①天の筒には、陽性である立姿の花を挿け、一方、陰性である②地の筒には、陰性である横姿の花を挿ける。ここに、それぞれ陽中陽、陰中陰の姿を見てとることができる。すなわち、陽の中には未だ陰の萌しが現れておらず、陰の中にも未だ陽の萌しが生じていない状態であるといえる。

この「両儀」の置き方にするときは、できれば花の種類を二種類とすることが望ましい。なお、「両儀」には、主位・客位の置き方がある。①天の筒が向かって右にくる、主位（陰）に据え置いた三管筒は、明り口が向かって右にくる陽の床と同性の席に用いる。陽の席には、主位（陰）の器を用いて、客位（陽）の花を挿けるのである。陽より陰に、そして陰より陽に転じるという、自然の理に添ったものである。

「三才（さんさい）」の置き方は、天地人という三才の現象を現す。太極（根源）は両儀（天地・陰陽）に、そして三才（天地人・陰陽和合）へと変化していく。人は天地・陰陽の和合する働きによって生じ、よってこの天地人という「三才」は現在の万物万象の姿が完成された状態であるといえる。この「三才」が開いたことで「五行」へと転じ、さまざまな現象が生じていくのである。天には



右旋



左旋

「運動の才」があり、地には「生成の才」が、また人には「考慮の才」があるとされている。この天・地・人がそれぞれにもつ特性であるところの、三才の霊妙を草木に備える。天地人三才を花の姿に置き換えると、体・用・留となる。

「三才」は、①天②地の筒を間を空けずに並べ、そしてその前に③人の筒を置き合わせる。またこの変化として、①天②地③人の筒との間を広げて、同一の空間を作り出し、正三角形に置き合わせても構わない。このときの花の挿け方としては、陰陽消長の理を現すため、陽性である①天の筒には、陰性である横姿の花を挿け、一方、陰性である②地の筒には、陽性である立姿の花を挿ける。ここに、それぞれ陽中陰、陰中陽の姿を見てとることができる。陽の中に陰の萌しが生じ、陰の中に陽が萌芽する。現象というものが、ようやく生じる「三才」の段階を現したものである。

そして③人の筒には、万物が見せる多種多様な相を現すために、立姿や横姿と陰陽さまざまに変化させて挿ける。一例としては、「山里水」の心でもって、①天の筒に木物を、②地の筒に草物を、③人の筒に水物を挿けたりと、とにかく変化をつけて挿ける。「三才」という概念がもつ、自然の多様な現象を感じとるのである。なお、この「三才」には、主位・客位の置き方がある。

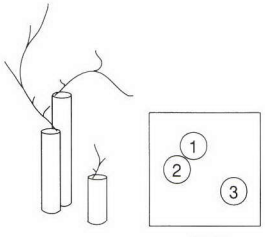
「左旋（させん）」「右旋（うせん）」の置き方は活動を現す。太極・両儀・三才という万物の本質に対し、左旋・右旋というものはその活動の姿を現したものである。現在の西洋的な見方での右回りは、東洋で捉えると「左旋」であり、一方の左回りは東洋で捉えると「右旋」である。左旋・右旋は天地にあるものすべてが持つ性質であり、陰陽寒暖が旋回することで生じる現象である。なお天は陽であって、そのために左旋する。一方、地は陰であって右旋する。この働きは心眼でしかわからないも

のであるが、この「左旋」と「右旋」という活動を感じとることが大切である。

「左旋」「右旋」は、①天の筒から②地の筒③人の筒へと、それぞれ左旋・右旋させて置き合わせる。本質を表す筒が左旋（客位・陽性）であれば、現象を表す花は右旋（主位・陰性）に挿ける。この場合、右旋に挿ける主位の花というのは、三つのうちで主となる①天の筒に挿ける花が主位であり、主位の花が全体において過半数を占めることをいう。一方、客位の花とは、主となる①天の筒に挿ける花が客位であり、客位の花が全体において過半数を占めることをいう。①天の筒には横姿を、②地③人の筒には立姿を挿け、さらに万物活動の姿を表現するのに、動静・強弱と変化をもって挿ける。

以上、三管には「太極」「両儀」「三才」「左旋」「右旋」という置き方があるが、この原則（守）の応用（破）として「飛留」の置き方などがあり、さらに多様に変化させて用いても構わない。

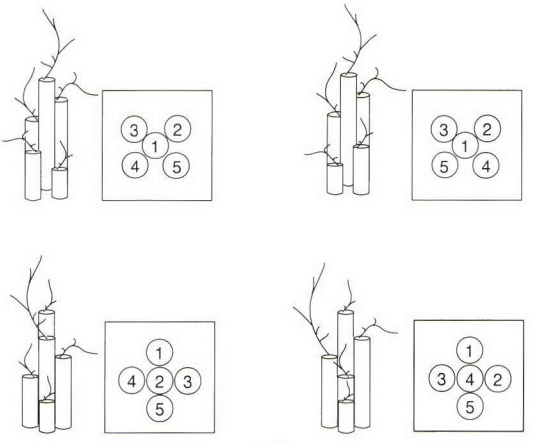
さらに、寸法の事を以下に述べる。二管筒の①の筒は陽であって一尺三寸、②の筒は陰であって四寸五分にその丈を定める。三管筒の①の筒は二尺四寸（季節の移り変り二十四節）、②の筒は一尺六寸（天の七、地の九の合数）、③の筒は一尺（十干）に定める。また短三管筒の①の筒は一尺（十干）、②の筒は六寸四分（八卦八卦け、造化の妙数）、③の筒は三寸六分（地の員）に定めるものである。このとき、それぞれの筒の切口と節が同寸法とならないようにする必要がある。



飛留

8 五管筒

三管筒が、未生という無形の真理を有形の花でもって現すものであるのに対して、五管筒は現



五行

実のものとしての天の現象や、風景などを現したものである。この根底にあるものは、我々自身が、自然を向こう側に認識するのではなくて、自身が自然の中に在って、その一部であるということを改めて知るということである。

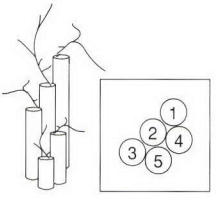
この五管筒の置き方としては、「五行」「山水」「八重垣」「段杭」「稲妻」などがある。以下に、それぞれが現すところに関して述べるものとする。

「五行」の置き方は、万物の生成に作用する五つの元素（木・火・土・金・水）を五管筒で現したものである。この五つの元素である「五行」がさまざまに作用することで、天地にあるすべての現象が生じていく。

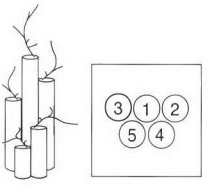
未生伝書には、この五行を色でとらえた五色を備えて草木を一瓶に挿けるものと記されている。五色とは、三原色の赤・青・黄と黒・白の五つの色をいい、四方中央でもって五行の色である五色が生じる。そして、この五色が互いに作用することで、万物にあるさまざまな色が生まれたとされている。逆説的に考えれば、自然の草木には自ずと五色が備わっていると考えることができる。すなわち、草木を挿けた姿の内に、その色彩的な本質である五色を感じとることが大切である。

五色とは「木・火・土・金・水」の五行の色をいう。東は「木」にして青色を、南は「火」にして赤色を、西は「金」にして白色を、北は「水」にして黒色を、中央は「土」にして黄色を現す。四方から中央に至って、この五色が生じるのである。

まず、中央に最も高い①の筒を置く。次に、東西南北の四方を現す②③④⑤の筒をそれぞれ置いて、最も高い中央の筒から四方の景色を眺望するような面持ちで挿ける。なお、最も高い①の



八重垣



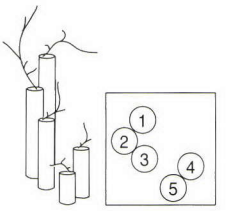
山水

筒を後ろに置いて、②③④⑤の筒をそれぞれ図のように置き合わせる置き方もある。いずれにしても基本は、中央の筒の花を立姿として、この花を最も高く挿ける。そして東西南北の筒には、それぞれ中央の筒よりみてバランスよく取り合わせて挿けていく。主位の花が三つであれば、客位の花は二つに、また客位の花が三つであれば、主位の花は二つにする。このとき花全体で捉えると、前者は主位の花であり、後者は客位の花となる。

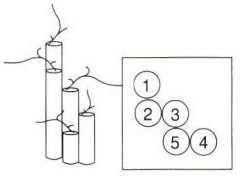
「山水」は、「山・里・水」という自然の景色を五管筒に移しとったものである。山は上って征服するものではなく、遠くより見上げて拝む存在である。そして川は飲む水だけにあるのではなく、地を這うその流れに託して己の醜なるこころを流し去る存在である。山水は、天地という陰陽両極なるものの現象とも捉えることができ、この大きな自然の現象に想いを通わせる。

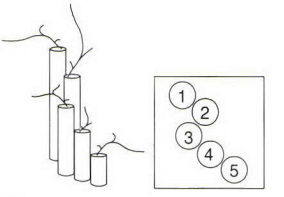
最も高い①の筒は遠景の景色を現す。次に、②と③の筒は山の裾野にある里の風景として中景の景色を現す。そして、④と⑤の筒は近景として谷川などの景色を現すものである。花の挿け方としては、①の筒には山の木物を、②と③の筒には里の草物を、そして④と⑤の筒には川の水物を用いて挿けるのが基本である。山水という自然の景色の風情が感じとることができれば、このときの花材や花型はさまざまに応用しても構わない。

「八重垣」の置き方は、庭の垣根を五管筒として移しとったものである。それは石であったり、土を塗り固めた土塀であったり、樹木で生垣にしたり、竹を細工することによってできた竹垣などである。この垣根によって、外の景色と庭の内の景色とを区切る。外と内とを区切るという行為の中にあっても、やはり両者は溶け合うべきものである。「外」を真に在る理と捉えるなら、「内」はそれに通じようとする意識である。

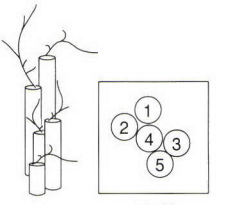


飛留





稲妻



段杭

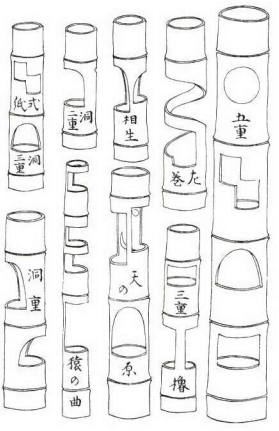
①と②と③の筒は、垣根の外の景色を現す。一方、④と⑤の筒は垣根の内、つまり庭の中の情景を現すものである。垣根の外にある景色としては、②の筒に高くそびえ立つ一本の立木を立姿にして挿ける。そして①の筒には、横たわって連なる遠山の連峰を見立てて、横姿にして挿ける。③の筒には山の立木と並んで立つ低い木々を現すために、半立姿や横姿にして挿ける。そして④と⑤の筒には、垣根の内にある庭の情景を現すように、それぞれ草花や庭の池に咲く水物などを挿ける。

「段杭」とは、川や池の岸などに石垣を築くとき、これを頑丈なものとするために、杭を何列にも打ち込んだものである。この杭は長い年月を経て風雨にさらされ、朽ちて不揃いになっていく。そのような水辺の趣ある風情を現したものである。花の挿け方としては、水辺の景色を現すために水草物を使って挿ける。

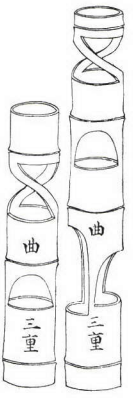
「稲妻」の置き方は、大空にきらめく稲妻の景色を移しとったものである。花の挿け方として、横姿の花は、直線的に横に長くして光の動きを強調して挿ける。

以上、五管筒の置き方として「五行」「山水」「八重垣」「段杭」「稲妻」と説明したが、この置き方以外にも多様に変化させて置き合わせても構わない。ただし、それぞれに用いた筒が全体として見たときに、一つの花器として調和することが肝要である。なお、花の取り合わせに関しては、「五重切」花器の項を参照いただきたい。

さらに、寸法のことを以下に述べる。五管筒の①の筒は二尺四寸（季節の移り変り二十四節）、②の筒は一尺八寸（極陰極陽。陰の九、陽の九の合数）、③の筒は一尺六寸（天の七、地の九の合数）、④の筒は一尺八分（十干、八卦の分岐）、⑤の筒は八寸（八卦）にその丈を定める。また短



『華術三才噺』
二重　三重　五重切　花器



『華術三才噺』
三重　五重切　花器

『生花早満奈飛』
山里水

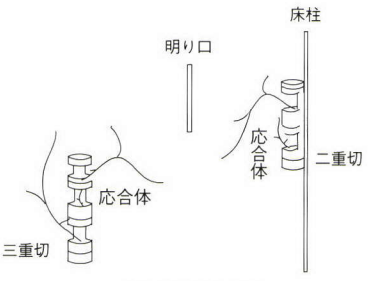
五管筒の①の筒は一尺（十干）、②の筒は六寸四分（八卦八卦け、造化の妙数）、③の筒は五寸（五行）、④の筒は三寸六分（地の員）、⑤の筒は二寸四分（季節の移り変り二十四節）に定めるものである。

9 二重　三重　五重切　花器

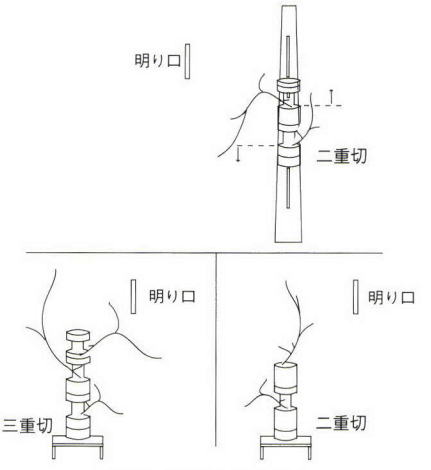
「二重切」の花器の取り扱いとして、置いて使うときは、上口には立姿を挿け、下口には横姿を挿ける。また掛けて使うときは、上口には横姿を、下口には立姿を挿ける。このとき上口には木物を、下口には草物を挿けるのがよい。二重切の花器は寸法的に高いものではないので、置いて使う場合には、上口に立姿を挿けて高さを出す。一方、掛けて使う場合には高さを求める必要はないので、上口には横姿を挿けるのである。また、置花器・掛花器に関係なく、上口に挿けた花の用が明り口の方にくるようにする。これは、上口の花が主体となることによる。

二重切の掛花器を床や座敷に垂撥に掛けて用いるとき、上口に挿けた用の枝が下口の切り口よりも下るときは、下口に挿けた体の枝は上口の切り口よりも高く出すようにする。なお、これを床柱に掛けて挿けるときには、花器の横より見ることになるので、上口には大きな花を挿けない。たとえ上口の横姿の花を大きく下げて挿けたとしても、下口に挿ける花は高くしないようにする。これを「応合体の挿け方」という。「応合体の挿け方」というのは、花の姿に応じてそのものの持つ美を創り出し、全体の調和を重視して挿ける方法である。

「三重切」の花器は、「平地（中口）に大樹あり、仰いでは（上口）遠山の連なりを見、伏して



応合体の挿け方



二重切・三重切の挿け方

は（下口）足下に草花を見る」というような面持ちで挿ける。五種類ほど挿けるときは、上口には遠景を、中口には中景を、そして下口には近景をかもし出すようにして挿けあげる。この三重切の花器の取り扱いとしては、置いて使うときも掛けて使うときも、いずれにおいても上口へ横姿を挿けて明り口に出す。そして中口には立姿を、下口には横姿を挿けるものである。

明り口が向かって右にくる陽の床であれば、上口の花を客位に、そして中口を主位に、下口を客位にして挿ける。いずれにしても、上口に挿けた花を主と考える。ただ、このように挿けたとき、横姿が上口と下口より二つ出ることとなる。よって、下口に大きく花を挿けたいと考えたときには、上口には横姿を挿け、中口には正面に少し振り出して「応合体」としてこじんまりと挿ける。そして、下口には立姿を大きく挿けるのである。以上を基本の挿け方として、花器に応じてさまざまに変化させて挿けるものとする。なお、「三重切」の花器に五種類も挿けるとき、その草木の取り合わせとしては、表に記したものを挙げることができる。

「五重切」の花器は大広間や会席に用いるもので、四季それぞれの取り合わせに準じて、色の見切がないように、上口より「白紫黄紅赤」の色相の順で挿ける。上口に白い花、中口に赤い花、そして下口にまた白い花を使うとき、赤色で白色を見切ってしまい、未生流で禁じられている禁忌に触れてしまう。よって五重切の花器に花を取り合わせるときは、上より「白紫黄紅赤」の順で使うものとする。ただし、黄葉・紅葉などの葉、また黄色や赤く色づいた実は、季節の変化によって生じるものであるので、このようなものは色相の順に違うことがあっても構わない。

また草木の位、山草・里草・水草などの分類を勘案して、不自然なものとならないように花を取り合わせる。木物は上口に、草花は中口に、そして水草は下口に用いる。五重切の花器は丈が

上口	中口	下口
垂柳に白玉椿の応合	紅梅か梅擬に葉蘭 岩蕗　ひとつばの類	万年青の類
白藤	桃か庭梅の類に おだまき草の応合	葉蘭か葉牡丹　斑入の岩蕗 金盞花の類
定家かづらの用 高麗槙の体・留	白菊	杜若に河骨
白萩	桔梗　仙翁	ちゃぼ檜扇　露草の類
蔓梅擬の用 枇杷の体・留	赤椿	葉物か木賊か小菊の類
蔦かづらの照葉の用 白梅擬の体・留	水仙	寒菊　金盞花の類

三重切に五種の草木取合せ

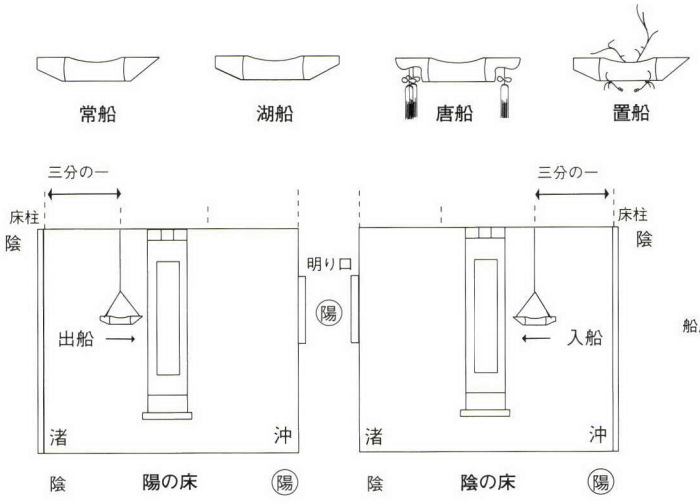
高いので、上口には垂物を用い、そして上口・三の口・五の口を中心にしてバランスよく花を挿ける。

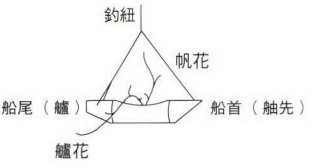
この五重切に挿ける花としては、以下の三つの取り合わせが伝書に記されている。一つは、糸柳（上口）、白梅（二の口）、白椿（三の口）、千両や沈丁花（四の口）、万年青（五の口）の取り合わせ。次に、黄梅や山吹（上口）、桃（二の口）、シャガ（三の口）、岩蕗や葉蘭の小葉（四の口）、金盞花（五の口）。そして、白藤（上口）、大手鞠やスズカケ（二の口）、紫蘭やケマンソウやオダマキ（三の口）、岩蕗や葉蘭（四の口）、金盞花や石竹（五の口）である。

なお、上口に挿ける垂れ物としては、鉄線・風車・金雀花・定家かづら・夏黄梅・白萩・蔓梅擬・蔦かづら・レンギョウの葉などが挙げられる。さらに、七種・九種と挿けるときには、特に取り合わせに注意して挿けなければならない。以上の草木取り合わせは、「五管筒」においても、同様に準じるものである。

10 船

船花器の種類には、「常船」「湖船」「唐船」「銅船」とある。「常船」は、船首である舳先がとがり、船尾である艫が切ってあるもので、これは海上を行き交う普通の船のことである。「湖船」は、船首である舳先も船尾である艫も、共に平らに切ってあるもので、河や湖に浮かび進む船のことである。また「唐船」は大海を行き交う唐風の大船のことで、大きな房がついた豪華な船である。この「唐船」に花を挿けるときは、房を邪魔することのないように、船を漕ぐ櫓を現す





「艫花（ともばな）」を挿けることはない。「唐船」は外国の船であるので、遠方の景色を移しとるため、最も高く釣って使う。「銅船（かねふね）」は、船の形をした銅製の器のことである。釣紐が鎖になっており、竹の船よりも少し小さい船である。そのため、この「銅船」には、花車（きゃしゃ）な花を小振りに挿ける。船中の板より水が上がってしまえば船は沈んでしまうことから、中にある板銅より上に水を足してはならないとされている。

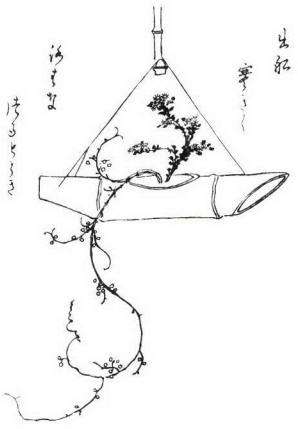
以上の船花器は、釣って用いるものである。この釣り方としては、船首である「舳先」を明り口の方へ向けて釣る。このとき、床の真中に釣ってしまうと行き交う船の動きを感じることができない。よって床を三分割して、床柱の方から三分の一あたりの位置に釣る。

この船花器の使い方としては、「出船（でぶね）」「入船（いりふね）」「置船（おきふね）」「停船（とまりぶね）」の四つと、そしてまた「舟の三景」として「沖往来（おきおうらい）の船」「渚往来（なぎさおうらい）の船」「掛（かか）り船」の三つの方法がある。以下にそれぞれ説明するものとする。

◎「出船」

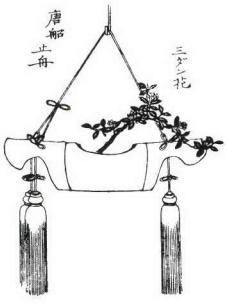
床の明り口が左（向かって右）にくる、陽の床に釣った船のことを「出船」という。船の帆を現す花である「帆花（ほばな）」を立姿にして客位の姿で挿け、そして船を漕ぐ櫓を現す「艫花（ともばな）」を横姿にして主位の姿で挿ける。この「出船」は、港を出て行く船を現したものである。よって横姿にする「艫花」は船底より下げて挿け、一方、立姿の「帆花」は高く伸び上がるように挿ける。この高く挿けた「帆花」と、長い「艫花」から、力強く航行する船の姿を見てとることができる。

陰陽で捉えたとき、左（向かって右）は「陽」であり、一方、右（向かって左）は「陰」であ



『四方の薫り』 出船

『四方の薫り』 入船



『伝書四方之薫』 停船

る。なお「沖」は「陽」であり、「渚」は「陰」を示すものである。よって陽の床に釣った船は、向かって右つまり陽である「沖」のほうに向かっている船の姿であるので、これを「出船」という。

◎「入船」

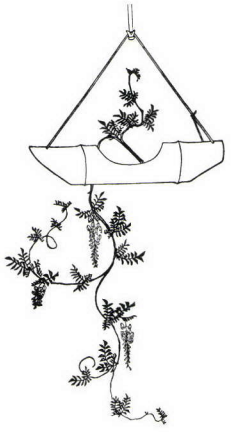
床の明り口が右（向かって左）にくる、陰の床に釣った船のことを「入船」という。船の帆を現す花である「帆花」を立姿にして主位の姿で挿け、そして船を漕ぐ櫓を現す「艫花」を横姿にして客位の姿で挿ける。向かって左つまり陰は「渚」を現すので、この「入船」は、港へ帰ってくる船を現したものである。

◎「置船」

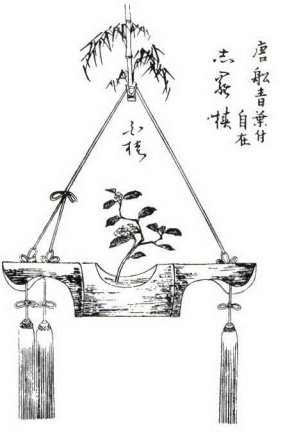
陸に引き上げられた船を現す「置船」は、碇（いかり）・鎖・花台・敷板を使って据え置くものである。「渚」の陰に対して「沖」は陽であり、また「床柱」の陰に対して「明り口」は陽である。そのため、船首である舳先を「沖」である「明り口」の方に向けて置く。この「置船」に挿ける花としては、船の帆を現す「帆花」を立姿にして一株挿ける。また、半横姿の花をもう一株挿けて、船上に引き上げられた櫓を現しても構わない。

◎「停船」

船が港近くで停船している姿を現すのが「停船」である。このときの船は、帆は下ろして、船

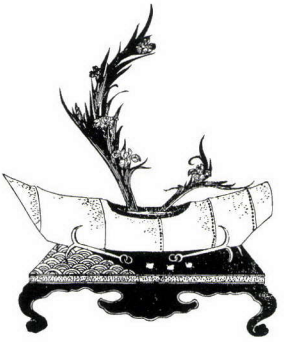


『挿花さくらの香』 掛り船



『献備千歳花』 唐船

『挿花蓮の香』 銅船



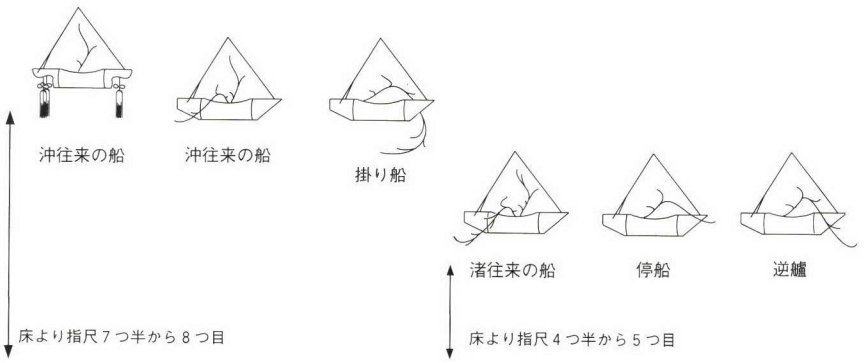
『挿花明之色』 置船

を漕ぐ櫓も上げているので、よって「帆花」「艫花」としての花は挿けない。その代わりに、船首である舳先の方へ横姿を一株挿けて、櫓を上げて船が停っている姿を現す。

この「停船」は停船してはいるものの、碇は下ろしていない姿である。なお、この「停船」の横姿に挿けた花の用が流しになって船底より下ると、それは窮地の際に逆向きへと進む「逆艫（さかろ）」となる。この「逆艫」は、戦場などにおいて急に後退を余儀なくされたとき、船首を後ろにしたままで、逆の方向に櫓を漕いだ船の姿を現したものである。

◎**「沖往来の船」（舟の三景）**

遥か沖合を航行する船の姿を現すのが「沖往来の船」である。沖を往来する船は、帆を大きく張って風力によって航行するので、船を漕ぐ櫓は使われることなく海上よりも上にある。そのた



め、船を漕ぐ櫓を現す「艫花」である横姿の花は、船花器より下がり過ぎないようにする。そして、「帆花」を立姿にして一株挿ける。

この「沖往来の船」は、沖合を航行する遠景の様を移しとったものであるので、これに挿ける花も霞花（かすみばな）の風情とする。かすんで見えるように、はっきりしないような花材を用いて小振りに挿ける。艫花には、天門冬の蔓、糸杉、エニシダ等を用いるとよい。

また、これは遠景を現したものであるので、釣る高さも床から指尺七つ半から八つ目（百十～百二十センチ）程度と高く釣って使う。

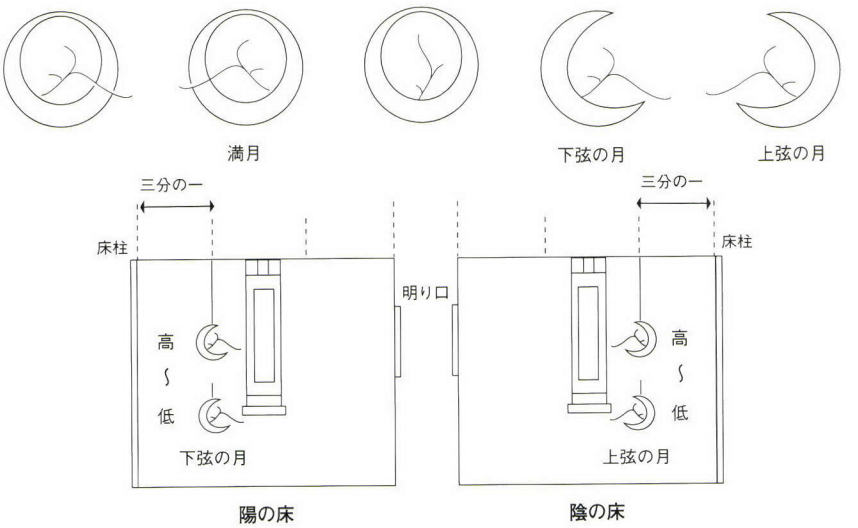
◎**「渚往来の船」（舟の三景）**

陸近くを航行する船の姿を現すのが「渚往来の船」である。船の帆を現す花である「帆花」を立姿に、そして船を漕ぐ櫓を現す「艫花」を横姿にと、この「帆花」「艫花」ともに形・法格をしっかりと守り、挿ける花の数も明確にはっきりと分かるようにして挿ける。風の力で航行する「沖往来の船」に対して、「渚往来の船」は櫓を漕いで進む。よって、船を漕ぐ櫓を現す「艫花」は、船底よりも下げて挿ける。艫花には、猿猴杉、柳、糸桜等を用いるとよい。

この「渚往来の船」は、陸の近くの近景の様を移しとったものであるので、釣る高さも床から指尺四つ半から五つ目（六十八～七十五センチ）程度と低く釣って使う。

◎**「掛り船」（舟の三景）**

沖合に船の碇を下ろして、停まっている姿を現すのが「掛り船」である。このとき、船の帆は



下ろし、また櫓も船中に上げてあるので、よって「帆花」「艫花」ともに挿けることはない。碇を下ろしている姿を現すものの、水中にある碇は見えることはない。また、船が魚を捕るために下ろしている綱も、水中にあるので見えない。

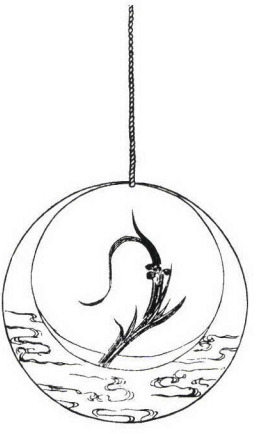
ただ、これらの姿を心眼でもって見てとり、「網花（あみばな）」という花を挿けるのである。停まっている船は流されていって、渚の方に打ち寄せられていくので、碇も綱も船の向う側、つまり渚とは逆の沖の方より下ろすものである。そのため、この「網花」の花は、船花器の後ろ向こう側より、船底を潜らせて手前へ振り出して挿ける。

11月

月花器には「上弦（じょうげん）の月」「下弦（かげん）の月」「満月」と三通りのものがある。「上弦の月」は、新月から満月に至る間、旧暦である太陰太陽暦で捉えた月の上旬七日・八日頃に出る月をいう。そして、月の中旬十五日頃に「満月」となる。また、この満月より新月に至る間を「下弦の月」といい、この「下弦の月」は月の下旬二十二日・二十三日頃に出る。

なお旧暦（太陰太陽暦）では月の満ち欠けの周期がおよそ二十九日半であり、これを一年に割りあてると三五四日あまりとなって十一日不足する。よって約三年に一度の割合で、一年を十三カ月とした。これが旧暦の閏年（うるう）である。

この月花器の用い方としては、以下の通りである。明り口が向かって左にくる陰の床には、床を三分割して床柱の方から三分の一あたりの位置に「上弦の月」を釣る。そしてこの「上弦の月」



『挿花明之色』 満月

には主位の花を挿ける。一方、明り口が向かって右にくる陽の床には、床を三分割して床柱の方から三分の一あたりの位置に「下弦の月」を釣る。この「下弦の月」には客位の花を挿ける。「満月」は陰の床と陽の床のどちらに用いても構わない。ただし、花は陰の床には主位の花を、一方、陽の床には客位の花を挿けるものである。

この月を釣る高さとしては、「上弦の月」「下弦の月」「満月」ともに、その時節の月の動きをしっかりと捉えて、高・低と変化させて釣るものとする。

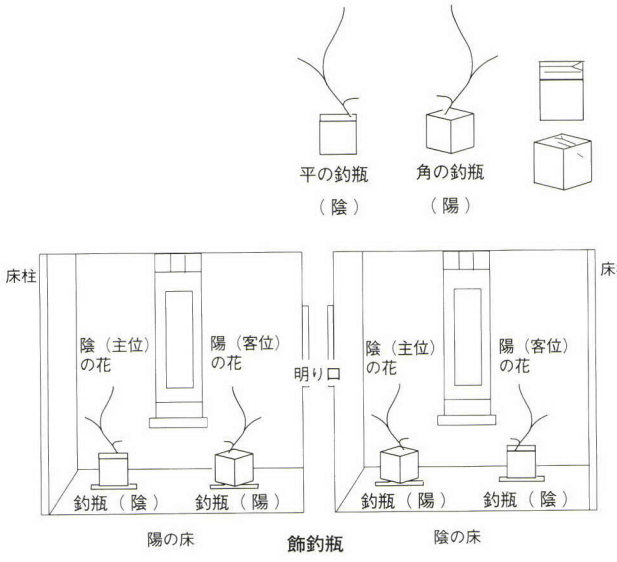
12 卓

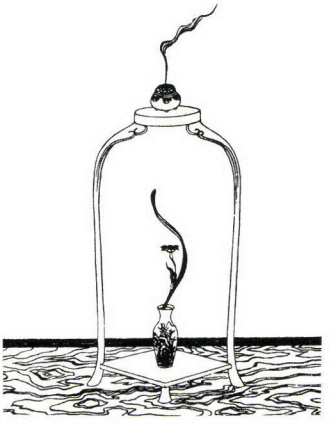
『献備千歳花』 卓

「卓（しょく）」は万物の根源である一なる「太極」から、天地・陰陽という「両儀」へと開いた状態を現すものである。「太極」から「両儀」へと変化したとき、「暖」の気は昇って天となり、一方「寒」の気は降りて地となった。よって、天には陽性である火を置き、地には陰性である水を置く。つまり、「卓」の天板には火を用いる香炉を飾り、一方の地板には水がはいった花瓶を置いて花を挿けるのである。この卓の正式な真の卓は四つの柱をもつもので、この柱でもって東西南北の四方を現す。二つの柱の卓も、略式でもって用いても構わない。

この卓には、宇宙の間にはじめて一物が生じた姿にして花を挿ける。理念である体を性といい、働きである用を情という。この性情という、根本的な成り立ちとその働きに想いを傾け、四方（よも）に障りがないように、陰陽和合・虚実等分・天地自然の理を感じて花を挿ける。

正式な卓である四柱卓で真の飾りをするときは、四季通じて芦を用いる。まず芦を三才格にし





『挿花蓮の香』　卓　一花一葉

て主株に挿け、芦の芽出しを株分けにして挿ける。二本足の二柱卓で略飾りをするときは、芦以外の草木を挿けてもよい。冬から春の頃にかけては、白玉椿の茎・開の花二輪と葉五枚を使って挿け、また夏から秋の頃にかけては、白や黄色の菊を中輪の茎・開の花二輪と葉五枚を使って挿ける。このとき陰陽和合した半開一輪に、葉を三葉と備えて挿けてもよい。この他、蘭・杜若・水仙など上品で尊い草木を、花一本に三葉の割合で使って「一花三葉」のこころで挿ける。

「一花一葉」を挿けるときは、この卓を用いるものとされている。一花一葉は、陰でもなく陽でもない、静でもなく動でもない、死でもなく活でもない。すなわち「空性」である。空性は、実体より形、音、味、触覚、匂いといったすべての「属性」を取り除いたものである。詮ずるに、これは「未生」と捉えることができる。

またこのときの花は、香を焚いて気を浄めてから挿ける。なお、この卓には香を焚くので、強い匂いのある花を挿けるのは避ける。もし匂いのある花を挿けるときには、香を焚くのを控える。赤色の花も時には用いてもよいが、新宅に移る新宅席開きの時は、赤色の朱卓を用いてはならない。このときは焚き物をすることなく、強い香りのある白色の花を選んで挿ける。

13 釣瓶

釣瓶は井戸で水を汲むのに使うものであり、よって常に二個で一組のものとして用いる。この釣瓶を使って花を挿けるには、「飾釣瓶」「置釣瓶」「井筒附の釣瓶」の三通りの使い方がある。

「飾釣瓶」は、花器としての釣瓶を床に二つ置き並べて使う。まず、床の明り口の方に置く釣瓶

『四方の薫り』 飾釣瓶

『四方の薫り』 飾釣瓶

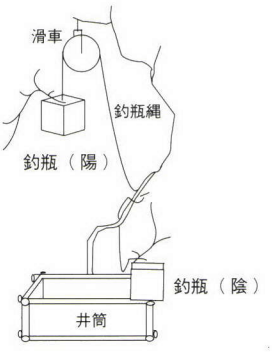
は、「陽」として「角」を見せて置く。釣瓶を「角」に使って置けば、正面から見て三つの角が見えるので、すなわち奇数（陽数）の角をもつ陽性のものとなる。したがって、陽性を現す床の明り口には、陽性の「角」の釣瓶を置くのである。

一方、床柱の方に置く釣瓶は、「陰」として「平」に置く。釣瓶を平らに使って置けば、正面からみて二つの端が見えるので、すなわち偶数（陰数）の端をもつ陰性のものとなる。したがって、陰性を現す床の床柱の方には、陰性の「平」の釣瓶を置く。

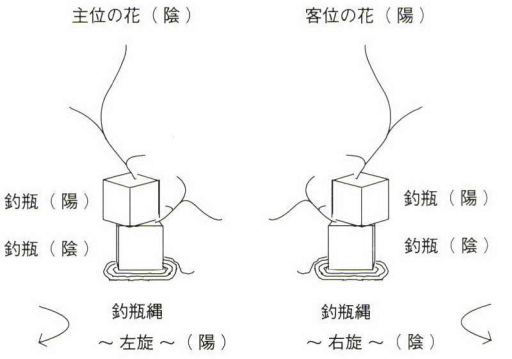
このように床の明り口の方には陽性の「角」の釣瓶を、そして床柱の方には陰性の「平」の釣瓶をそれぞれ置き合わせて花を挿ける。このときの花は釣瓶の向こうの角より挿ける。明り口が左（向かって右）にくる陽の床では、陽の釣瓶には陽（客位）の花を、そして陰の釣瓶には陰（主位）の花を挿ける。明り口が右（向かって左）にくる陰の床では、陽の釣瓶には陰（主位）の花を、そして陰の釣瓶には陽（客位）の花を挿ける。この飾釣瓶でもって花を挿けるときは、花台もしくは敷板を用いる必要がある。ただし、陰陽和合に反するため、板床に敷板を使ってはならない。

なお、陽性の「角」の釣瓶を床の中央に据え置き、陰性の「平」の釣瓶を台目に下げて置き合わせることもある。台目とは違棚の下を指す。この置き方は、床を陽性、違棚を陰性と捉えてのものである。

「置釣瓶」は、釣瓶を二つ重ね置いて使う。上の釣瓶は「陽」として「角」を見せ、下の釣瓶は「陰」として「平」に置く。天をはじめ物質の上方は陽性であり、一方、地をはじめ物質の下方は陰性であることによる。



井筒附の釣瓶



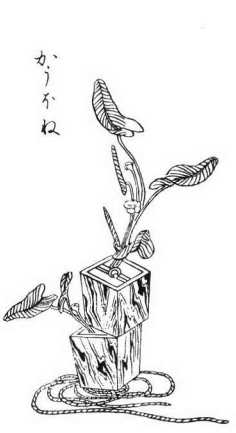
置釣瓶

上（陽）の釣瓶には向こうの角より花を立姿にして挿け、下（陰）の釣瓶には手前の角より花を横姿にして挿ける。この置釣瓶は床に置いて用いてはならない。台目、つまり違棚の下に下げて据え置く。置釣瓶の敷物としては、井戸に使う滑車や釣瓶縄を用いる。陽性である天円は左旋し、陰性である地方は右旋する。この釣瓶縄を時計回りに左旋（陽性）に用いたときには、上の釣瓶に挿ける立姿の花は主位（陰性）の花とする。一方、釣瓶縄を反時計回りの右旋（陰性）に用いたときには、上の釣瓶に挿ける立姿の花は客位（陽性）の花とする。下の花は主従関係で捉えると従であるので、この場合の主位・客位は上に挿ける花でもって考える。このように陽性の釣瓶縄には陰性の花を、そして陰性の釣瓶縄には陽性の花を挿けてこそ、陰陽和合である。

「井筒附の釣瓶」とは、井筒の後方の木に取りつけた滑車に釣瓶縄をかけて、釣瓶を上から吊るし、そしてもう一つの釣瓶を井筒の上に置いて使ったものである。このとき、二つの釣瓶を釣瓶縄で互いに結び、途中で後方の木にも絡みつかせることで上の釣瓶を安定させる。この井筒には寄井筒や、風流なしゃれ木、朽ち木の丸木井筒がある。

「角」をみせた「陽」の釣瓶は上に吊り、ここには垂物の花を横姿にして挿ける。そして「平」にした「陰」の釣瓶は井筒の上に置き、ここには立姿の花を挿ける。実際の井戸では、井戸より上に上げられた方の釣瓶は水が入っておらず、空の状態になっている。したがって、井筒附の釣瓶として用いるときにも、上の釣瓶の水が見えないように注意する。一方、下の釣瓶の水は四季に応じて足し水をする。さらに、挿けた花・葉・枝が釣瓶縄に掛からないように気をつける。なお、この井筒附の釣瓶は会席において用いるものである。

最後に、寸法に関して述べるものとする。三通りある釣瓶の寸法として、まず大のものは、高



『四方の薫り』　置釣瓶

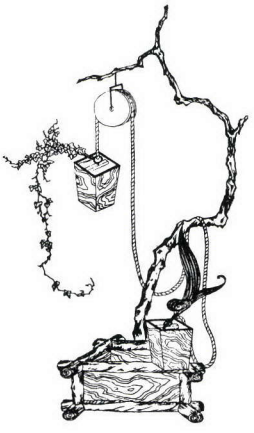
『伝書四方之薫』　置釣瓶

さ七寸二分、板厚さ六分四厘、上辺六寸二分、底辺五寸二分、手一寸角にして上より一寸下ってつけ、外に出ないように定める。次に中のものは高さ六寸四分、板厚さ六分四厘、上辺五寸六分、底辺四寸四分、そして小のものは高さ六寸、板厚さ四分八厘、上辺五寸二分、底辺四寸二分に定める。また、井筒の寸法は、四方を一尺六寸、高さを九寸、木枠は直径二寸くらいに定める。なお、井筒附の釣瓶に用いる柱は、自然の木で風流なものを用いる。程よい木がないときは、真っ直ぐの丸木で用いても構わない。この柱の高さは六尺四寸、車径五寸、厚さ一寸八分と定める。

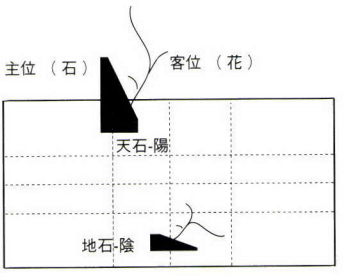
14 飾り石

広口や水盤などに飾り石をするとき、石が主位であれば花は客位にして挿け、石が客位であれ

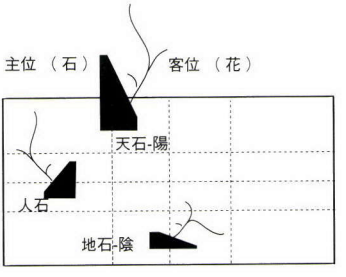
『挿花蓮の香』　井筒附の釣瓶（寄井筒）



『高野之玉川』　井筒附の釣瓶（丸木井筒）



陰陽二石（主位）



天地人三石（主位）

ば花は主位にして挿ける。このように石と花で陰陽和合とする。この主位と客位は、天石と天石に挿ける花でもって考える。なお、天石・地石・人石を用いたときには、各々の石に必ず花を挿けなければならない。ただし天・地・人の石以外を用いるときは、そこに必ず花を挿ける必要はなく、ただ石飾りとしてのみ用いても構わない。

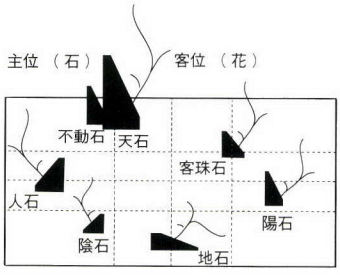
石と石との間は、「活の寸法」にして、バランスよく空けることが大切である。天・地という陰陽二石、そして天・地・人の三石、またこれに陰石と陽石を加えた五石、さらに不動石と客珠石を加えた七石と、器の大きさや挿ける花に応じて石の数を決めるが、煩わしくないように石は少なめの方がいい。大広口に石飾りをするときには、九石・十一石と使うこともある。

なお景色挿けにおいて、黒石と白石とでもって川をとる場合は、天石と人石の間を川上として、地石と陽石の間を川下として捉える。さらに、一寸・六分・一寸・六分と小石の間隔を空けて、「天一地六」の割合で白の小石を配して、飛び石の景色を移しとることもある。このとき、黒の石は踏み返しの捨て石として用いる。

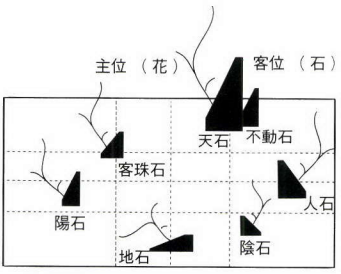
この飾り石に用いる石については、以下に詳しく述べるものとする。まず「天石」は天の位にして陽であり、万物を守護するという意味でもって「守護石（しゅごせき）」ともいう。この天石には、天に向かって堂々と屹立した形の石を選んで用いる。次に「地石」は地の位にして陰であり、天石を拝することから「礼拝石」ともいう。この地石には、平たい形をもった石を選んで用いる。そして「人石」は、天と地の和合によって生じた和合石であり、人の位にして陰陽和合である。「人石」は天と地の下で安らかに住するという意味でもって「安居石（あんきょせき）」ともいう。この人石には、大きくも小さくもない中庸の、不立不臥の姿をもつ石を選んで用いる。これは人の在るべき姿、そして天

地和合の姿を現したものである。

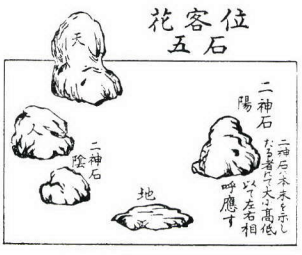
天地人の三石に、二石を加えて五石飾りとするとき、あとの二つの石は、本末を示す「陰石」と「陽石」である。この陰陽の二石は左右対称する石であり、日本という国土創造の二つの神を現すことから「二神石」ともいう。大小・高低、そして左右対称する姿をもつ石を、陰石・陽石



主位の石の置き方（天石が主位）

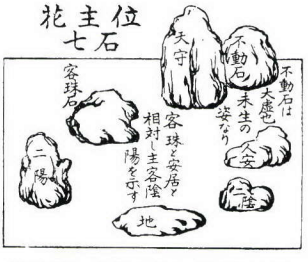


客位の石の置き方（天石が客位）



『華術原一旋転之巻』 飾り石五石

『華術原一旋転之巻』 飾り石三石



『華術原一旋転之巻』 飾り石七石

『献備千歳花』 天地人石飾り

としてそれぞれ用いる。なお、水草のみを挿けるときに使う石として、水嵩が低いときには目に見えるが、水嵩が上がれば見えなくなるような石を水面ほどの高さにして用いるが、この陰陽の二石を「水おう石」ともいう。

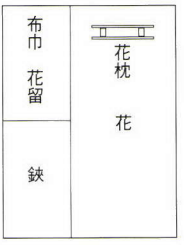
以上の五石に、さらに二石を加えて七石飾りとするとき、加える二つの石は「不動石（ふどうせき）」と「客珠石（きゃくじゅせき）」である。「不動石」は不動として、天石である守護石の後ろ盾となる石である。この不動石は、天という真理の内奥にある「未生」の姿であると捉えることができる。すなわち視覚に現すことのできないものを、形として示す「大虚」である。また、「客珠石」は人石である安居石と相対する石であり、安居石の客座として定まったものである。

15 その他道具

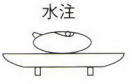
掛花器を使うのに用いる垂撥（すいばち）は、その寸法が三通りある。丈四尺八寸・板厚二分八厘・天の幅二寸四分・地の幅六寸の大きなもの。そして丈陽の目二尺八寸・厚さ二分四厘・天の幅一寸六分・地の幅四寸八分の中のもの。また丈三尺六寸・厚さ二分四厘・天の幅一寸二分・地の幅三寸六分の小さなものの三通りである。この垂撥は、板の中央に厚さ一分二厘の長い切れ目があり、掛釘を上下自在に据えることができるようにしたものである。

花盆は、その寸法を、長さ陽の目一尺二寸・幅一尺二寸・高さ一寸二分・縁板厚さ四分八厘・中隔厚さ三分とする。向って左上には布巾と花留を置き、そして左下には鋏を置く。右には、高さ二寸四分の花枕を使って、花を風流に置き合わせるものとする。水次盆の寸法は、角に切った

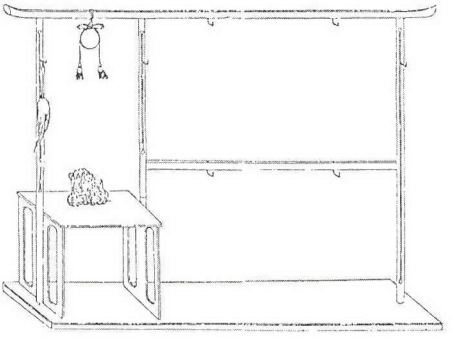
『生花玉かつら』 垂撥



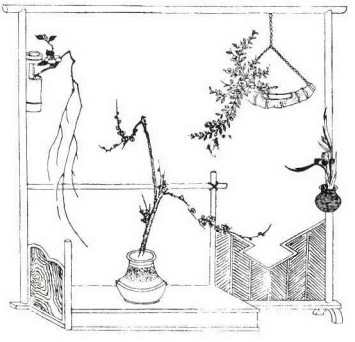
花盆



水注盆



『本朝挿花百練』　花衣桁



『生花早満奈飛』　花衣桁

ものは、四方が七寸と定められている。

花を指南するのに用いる指竿は、師範代以外の者は用いてはならないとされている。准会頭は黒房の指竿、会頭は萠黄、総会頭以上は紫、そして家元は白房と定められている。四つの節目をもつ指竿の全体の丈は、二尺八寸（約八五センチ）であり、房は三寸（約九センチ）である。

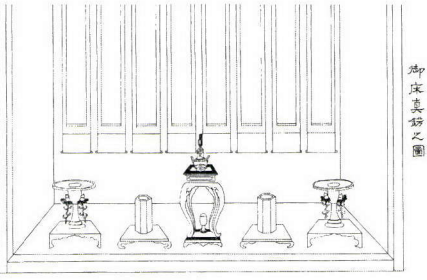
花名札の寸法には五種類ある。初級中級の花名札は、長さ九寸・幅二寸四分・厚さ四分八厘。奥伝以上会頭までは、長さ一尺・幅二寸八分・厚さ六分四厘。准総会頭は、長さ一尺二寸・幅三寸六分・厚さ八分。総会頭以上は、長さ一尺・幅陽の目二寸八分・厚さ一寸。家元用は、長さ一尺六寸・幅四寸八分・厚さ一寸二分と定められている。

16 花衣桁

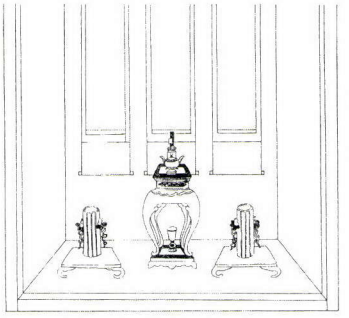
花衣桁（はないこう）は、御所方の御装束を掛けていた衣桁を、挿花として用いたものである。花衣桁に挿ける花は、五種また七種と取り合わせ、錦の衣装を掛けたような美しさをもつように挿ける。

この飾り付けは真行草の草でもって行ない、また花器は船や月といった釣花器、掛花器、置花器と用いる。卓の下には花を挿け、神鏡や払子（ほっす）などの道具類を正則に取り合わせる。このとき、花と道具（花器等）は陰陽和合でもって扱う。すなわち、花が奇数（陽）であれば、道具は偶数（陰）とし、花が偶数（陰）であれば、道具は奇数（陽）とする。

未生流の伝書は『本朝挿花百練』を第一として、華術『三才之巻』『草木養之巻』『体用相応之巻』『規矩之巻』『原一旋転之巻』『明空紫雲之巻』『未生自然匂之巻』の七軸が存在する。この



『華術妙空紫雲之巻』　真の床飾り



『華術妙空紫雲之巻』　真の床飾り

「七軸」の伝書は、神鏡に向うが如しという。花衣桁に掛ける神鏡、この姿の中に、観念に捕われることのない真に通じる道を観じることができるだろうか。

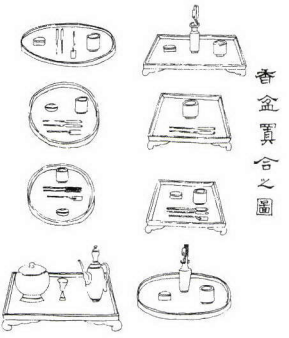
17 飾付

花の道を古に辿ると、月の国（現在のインド・ネパール）の無量寿仏（阿弥陀仏）の時代にまで遡ることができる。唐の国では、天皇氏・地皇氏・人皇氏の三人の君の頃に起こり、日本では御神の御代に桜の花を花瓶に移してよりはじまったものといわれている。したがって花の法格をしっかりと守って神仏に供えることが第一であり、そしてまた貴人のもてなしとしても行なわれるものである。

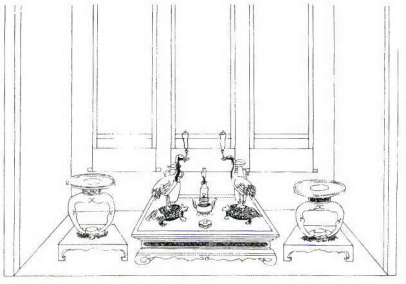
上下の位に関係なく、人が草木を愛でるということは天地自然の道理である。草木出生のことを深く知り、天地人という三才の法格を守って花瓶に移し、花の道というものを極める。そうして、すべては道に添って在るべきところへ還っていく。

この項で述べる飾り付けに関しては、『明空紫雲之巻』に記されている。「太陽」「太陰」の和合する時、すなわち太陽と月の両気が相応するとき、紫の雲がたなびくという。「太陽」である火の赤と、「太陰」である水の黒が和合して、その結果として紫が生じる。よって、紫は最上の色とされている。

以下の飾り付けは、東山の銀閣寺における書院造りのものを基本として、時節・場所に応じて風流に置き合わせるものとする。



『華術妙空紫雲之巻』 香盆置合の図



『華術妙空紫雲之巻』 真の諸飾り

a 床 真行草飾付

床の飾り付けには、真・行・草と三種類のものがある。「真の床飾り」は掛物三幅対のものを用いて、真ん中は帝王・聖人・賢人もしくは神仏の像の掛物とする。そして床の中央には卓を置き、この卓の上に香炉を置いて香を焚く。また香炉の後には火道具建（灰押・火箸）を、火箸で灰押をはさんで前後に立てて置き、香炉の手前には香をいれた香合を置く。香炉は襷形か鼎の類いのものが好ましい。卓の下には、細口の器を使って花を挿ける。そしてこの卓の左右にも、真の花台で八角の花器（真の銅器）を用いて花を挿けるものである。さらに、大きい床に掛物を四幅以上用いる時には、花器をさらに二瓶増やして花を挿ける。このとき加える花器としては、薄端、広口、もしくは一重二重の竹花器などである。なお、薄端は草の飾り付けの場合には用いず、真と行のときにおいてのみ使用する。花器は、その時々の都合によって代用させることもあるが、本意に背くことがあってはならない。

「行の床飾り」は、大きくは真の床飾りと同様である。掛物の真ん中は仙人・僧・賢君・丞相・大夫の掛物とする。中央の卓の上には香炉だけを置き、火道具建（灰押・火箸）や香合は略する。また卓の下に花を略して、代わりに火道具建（灰押・火箸）と香合の二種、または羽箒と香合の二種を置き合わせることもある。なお、この行の床飾りのときには、卓も形の変化したものを用いて構わない。そして卓の左右には、行の花台を用いて、その上に花器を置いて花を挿ける。丈の高い花瓶であれば、花台を使わずに行の敷板を使ってもよい。しかし、板床の場合は敷板を使ってはならないので、草の低い花台を用いる。

「草の床飾り」は正式な卓を使わず、平卓に香炉を真ん中に置いて、その左右に火道具建（灰

『華術妙空紫雲之巻』　行の諸飾り

『華術妙空紫雲之巻』　草の諸飾り

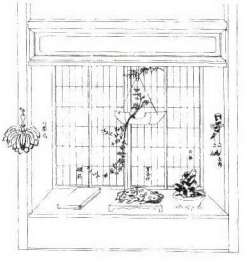
押・火箸）と香合を置き合わせて飾り付けを行なう。また、平卓ではなく、香盆や冠台を用いても構わない。このときの盆は、円形・四角形・長方形・小判形といずれを用いてもよい。また真・行の床飾りと同じように、左右には対の花器で花を挿ける。この草の床飾りのときは、草の花台か草の敷板を用いる。なお、竹花器を用いる時は対でなくとも構わない。

b　押板　真行草諸飾

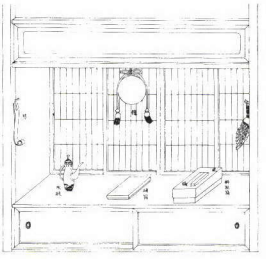
人を中心とする人間賞玩のものである「床飾り」に対して、「諸飾り」は仏前荘厳の追善法要のときの飾り方である。したがって、掛物の真ん中は仏像、仏語、祖師の像や先祖の像のものを、一幅・二幅・三幅と掛ける。そして、このときの仏具は、押板の上に置いて飾り付ける。

「真の諸飾り」は、押板の上に、中央には香炉を置き、その向こうには香匙を、香炉の前には香合を置く。そして、その左右には（鶴亀）燭台二基一対を前に、花瓶二基一対を後に据えて飾り付ける。鶴亀燭台は天（陽）に陽の象徴である鶴、そして地（陰）に陰の象徴である亀を配した燭台である。このとき、鶴の口が開いた阿の燭台は向かって右（そのものの左）に、鶴の口が閉じた吽の燭台は向かって左（そのものの右）に据え置く。「阿吽」の阿は「陽」、そして吽は「陰」であることによる。なお、亀の尻尾は常に前にくるように飾り置く。この五つの仏具で飾る諸飾りを「五具足飾り」という。さらに、掛物を三幅掛けるときには、左右に卓や花瓶を置き合わせる。

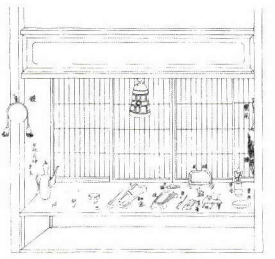
「行の諸飾り」は、押板の上に、中央には香炉を置き、その向こうには花瓶一基を、香炉の前には香合を置く。そして、その左右に（鶴亀）燭台二基一対を飾り付ける。



『華術妙空紫雲之巻』
書院　草の飾付



『華術妙空紫雲之巻』
書院　行の飾付



『華術妙空紫雲之巻』
書院　真の飾付

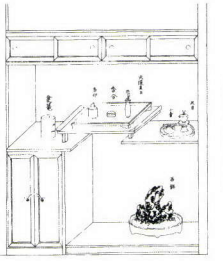
「草の諸飾り」は、押板の上に、中央には香炉を、その向こうには香匙を、香炉の前には香合を置く。そして、その左右に（鶴亀）燭台一基と花瓶一基を、それぞれ一基ずつ飾る。このとき、向かって右（そのものの左）には（鶴亀）燭台一基、向かって左（そのものの右）には花瓶一基を置き合わせるものとする。なお、万事大略のときは、押板でなく平卓を用いても構わない。このときには中央に香炉を置いて、その左右に（鶴亀）燭台一基と花瓶一基を、それぞれ一基ずつ飾り付ける。この三つの仏具のみで飾り付けることを「三具足飾り」という。掛物四幅以上掛けるときは、万事略して行なうものとされている。

c　書院　真行草飾付

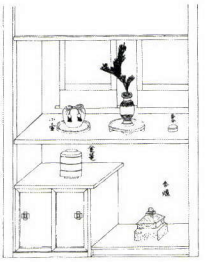
書院とは、床の間の脇にあって、窓つきの張り出しのあるもので、古く書斎として使われていたものである。

書院の真の飾り付けとしては、合図にならす鐘である喚鐘を天井中央に釣る。そして床に近い方の上手の柱には丸鏡を掛け、一方、下手の柱にはシュビ・鐘木を釣る。シュビは鹿の尾の毛でつくった払子で、主に従う意を寓する。また鐘木は鐘をならすための棒である。

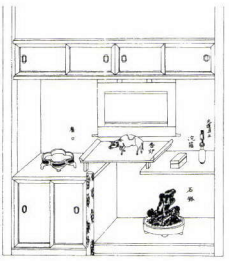
地板の上には、水瓶・圧尺・印池・軸盆・硯・硯屏風・文鎮・唐刀・墨・水滴・筆架・筆筒・筆洗と、文房具類を置き合わせる。圧尺は文鎮の類い、印池は印肉を入れる器、軸盆は軸を置く盆、筆架は筆置のことである。このとき、水瓶には花を挿けて構わない。なお喚鐘がない時には、天井中央に三鏡（丸鏡など）を釣り、シュビ・鐘木を外して、その代わりに如意・笏を掛け、また三鏡のあったところには牛の一角などを掛ける。如意は説法のときなどに用いる具で、



『華術妙空紫雲之巻』
違棚　真の飾付



『華術妙空紫雲之巻』
違棚　行の飾付



『華術妙空紫雲之巻』
違棚　草の飾付

笏は文武通じて束帯着用のおり右手に持って威厳を整えたものである。

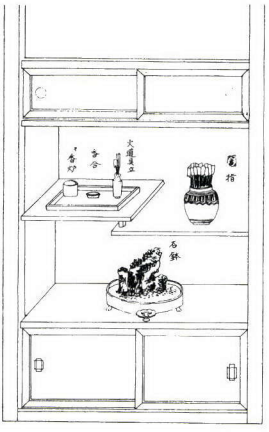
書院の行の飾り付けとしては、天井中央に三鏡（丸鏡など）を釣る。上手の柱には如意を掛け、一方下手の柱には羽箒を掛ける。そして地板の上には、水瓶・硯箱・料紙箱を置く。料紙箱は、文書や経典を入れておく箱である。またさらに、軸盆・香盆・置香炉などを変化させて置き合わせて構わない。ただし、柱の掛具に至るまで、しっかりと心を配して飾り付けしなければならない。

書院の草の飾り付けとしては、天井中央に釣舟、釣香炉もしくは釣香を釣る。また、秋の末より春の末までは、天井中央などに風鈴・風声を掛ける。春の末から秋の末までは、広縁の上など、座敷の外にも風鈴を掛けたりする。そして地板の上には、石で飾った鉢である石鉢などを置く。石鉢は、自然の山野の景色を室内に取り入れたものである。また、小広口を置いて花を挿けたりしても構わない。しかしこのとき轡を用いてはならない。書院は床に準じるものであることによる。さらに、食籠・馬上杯・湯瓶の三種を盆に据え置いて飾り付けたりする。柱には、花器・丸鏡・金袋・歌袋・掛香・帯物・南鐐鎖・鎖類・唐刀・楊枝筒などを掛ける。これらは、床、押板、書院、違棚などの柱に掛けて飾り付けるものである。

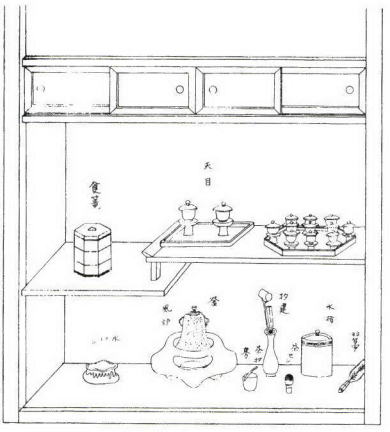
d　違棚　真行草飾付

床柱を座敷の中心と考え、庭に近い方に床と書院があり、そして床柱より奥の襖の方に違棚がある。この違棚は書院造りが盛んとなった室町時代にできたもので、その構造は多種多様である。

違棚の真の飾り付けは、茶道具や香道具を飾る。このとき、天目茶碗と茶壷を同じ棚に置いて



『華術妙空紫雲之巻』
納戸　飾付



『華術妙空紫雲之巻』
茶の湯棚　飾付

はならない。茶を点てるときの段階が違うことによる。しかし、香木を入れる箱である沉箱は、天目茶碗とともに飾り付けても構わない。二重棚のときは、上の棚に香盆、下の棚に沉箱、また上に天目茶碗、下に茶壷などと置き合わせる。また、地板には石鉢を飾ったりと、格式をもって飾り付ける。

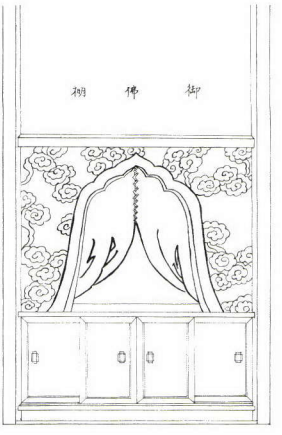
違棚の行の飾り付けは、真の飾り付けよりもくだけて置き合わせてよい。上の棚に軸盆、次の棚に香合や料紙箱を飾る。地袋のないときは、地板に石鉢を置くこともある。地袋とは、中に道具を入れるために据えられた、戸の付いた棚である。中央に花を挿けて、左右に石鉢を置いたり、また中央に石鉢、左右に食籠や骨吐、そしてまた中央に食籠、左右に唐瓶や楊枝筒を置いたりと、食に関するものを飾り付けたりする。

違棚の草の飾り付けはさらにくだけて、上の棚に料紙箱や硯箱、そして地板に漢書や草紙本を飾る。なお、『古今集』を置くときは、他の歌書を置くことは見合わせる。これら文具に関するものや、さらに楽器をはじめ諸芸に用いる道具などを飾ってよい。来客の状況に応じて、趣きよく取り合わすことである。

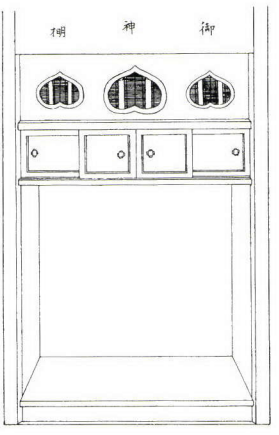
新宅移徙の折には、火の気を避けるためにも、違棚に香盆を用いてはならない。このようなときには、火を剋する水鳥の置香炉などを置くとよい。また香合も水の色である黒のものや、陶器のものを用いる。いずれにしても、火の色である赤色のものを避けるべきである。

e　茶の湯棚　飾付

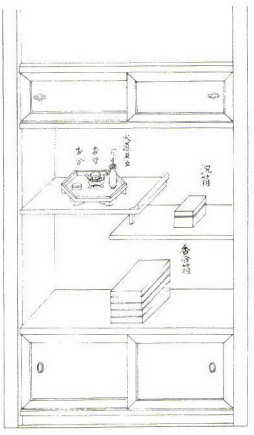
茶の湯棚の飾り付けは一例として、上の棚に天目茶碗を盆に載せ、次の棚に食籠を置き、そし



『華術妙空紫雲之巻』
御仏棚



『華術妙空紫雲之巻』
神棚



『華術妙空紫雲之巻』
常之御座処棚　飾付

て地板に建水、風呂、釜、柄杓、杓建、茶杓、棗、茶筅、水指を置き合わせる。

また、上の棚に天目茶碗、茶筅、香合を盆に載せ、次の棚に棗と茶杓、地袋の上に食籠、そして地板に風呂、釜、柄杓、杓建、水指を置き合わせる。

この他に必要な諸道具をいくつでも取り合わせて、趣よく飾り付けて構わない。ただし、茶を点てるときの段階と真意を勘考して置き合わせなければならない。

f　納戸　飾付

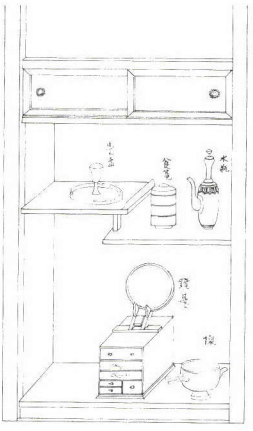
衣服や調度類を納めておく部屋である納戸には、中央に冠を飾り、そしてその前に扇の末広や笏などを台に載せて飾る。笏とは、束帯着用の際に右手に持って威儀を整えたものである。

また、装束を官位の軽重に応じて飾り付け、簾や、紋織物の緞子の帳を掛ける。東山の銀閣寺の納戸には、中央に具足、左に長刀、右に太刀などの武具が置き合せられ、さらに屏風が飾られ、半ば巻き上げられた簾が掛けられていた。

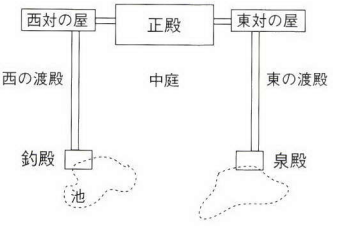
以上の他にも、武具などを趣よく飾り付けるものである。

g　常之御座処の棚　飾付

天皇や貴人が常に居るところの御座処には、まず御仏棚・神棚がある。そしてそこにある違棚には、主人の好みで茶器類をはじめ、煎茶道具、酒器、菓子器、御楽器、諸芸に用いる道具などが、趣よく置き合わせられていた。



『華術妙空紫雲之巻』　泉殿の棚　飾付



寝殿造り

h　広縁　飾付

広縁は、部屋の外側にある広い縁側のことである。この広縁には、毛氈、豹や虎の皮などを敷いておく。そして花器は、掛花器・置花器と、花台と共に種々に取り合わて用いる。また、水注を水注盆に、鋏・布巾・花留を花盆に載せて置き合わせる。

さらに、庭に咲く麗しい花を、花溜桶に養っておいたりする。この他には、竹の椅子、法式で用いる椅子である曲ロクや、畳床机、沓、上草履などを置き合わせる。掛具としては、羽箒、団扇、羽扇、杖、竿、絵掛竿なども掛けておく。風鈴・風声・釣香炉・釣香・釣燈篭などを釣っても構わない。

i　泉殿の棚　飾付

泉殿は寝殿造りに設けられた、庭の池・泉水の上につき出した建物である。室町時代に確立した書院造りに対して、寝殿造りは平安時代のものである。

この泉殿にある棚の飾り付けとしては、馬上盃、食籠、水瓶などの食具類のものや、衣服を整えるための鏡台、洗顔の道具などを置き合わせる。馬上盃は馬上で酒を飲む盃のことで、馬上は七分に、船中は八分に、座敷は十分に注ぐものとされている。

また、地板には風呂を据え、釜を掛け置き、上板には天目茶碗などの薄茶道具、煎茶道具を置き合わせてもよい。

泉殿における花としては、小さい器に花を挿けたり、また植木鉢を置いたりする。花は草木の位や時節を考えて、来客の状況に応じて、趣よく取り合わせるとよい。

和田髙甫　(Koho Wada)

1971年大阪生れ　明治大学商学部卒
社団法人華道未生流 未生流総家　家元

http://www.ikebana.co.jp/

未生（みしょう）　—花（はな）の哲理（てつり）

2004年9月30日　第1版第1刷発行

著　者　和田髙甫（わだこうほ）
発行者　矢部敬一

発行所　株式会社 創元社

（本社）
〒541-0047 大阪市中央区淡路町 4-3-6
TEL: 06-6231-9010（代）　FAX: 06-6233-3111

（東京支店）
〒162-0825 新宿区神楽坂4-3 煉瓦塔ビル
TEL: 03-3269-1051（代）

http://www.sogensha.co.jp/

印刷・製本　図書印刷株式会社
©2004 Koho Wada　Printed in Japan
ISBN4-422-70035-9
本書の全部または一部を無断で複写・複製することを禁じます。
落丁・乱丁の際はお取り換えいたします。